

フレンドシップ事業報告書(その3)

平成11年度

第六期「信大YOU遊サタデー」の実践

—体験的学習の指導による実践的力量の形成—

Shin-dai You Yu Saturday: Saturday Fun Sharing Program at Shinshu University
—Training for Practical Teaching Skills and Qualities—



信州大学附属図書館



0770660728

信州大学教育学部
附属教育実践総合センター



フレンドシップ事業報告書(その3)

平成11年度

第六期「信大YOU遊サタデー」の実践

—体験的学習の指導による実践的力量的形成—

Shin-dai You Yu Saturday: Saturday Fun Sharing Program at Shinshu University

—Training for Practical Teaching Skills and Qualities—

信州大学教育学部
附属教育実践総合センター

まえがき

信州大学教育学部長 藤沢謙一郎

第6期「信大YOU遊サタデー」の実践記録が刊行されることになりました。心からお祝いを申し上げます。

過日、教員の資質向上東日本地区連絡協議会が文部省と開催都市の札幌市教育委員会の共催で開かれ、出席する機会を得ました。この会は、教員の養成・採用・研修に係わる諸問題について、教員養成大学、教育委員会、学校等の関係者が協議を行い、相互の連携、協力をより緊密なものとするにより、教員の資質能力の向上を図ることを目的にしているものです。今回の会議で教員に求められる資質として、採用側である教育委員会から上げられた中の一つに、「人とどのくらい係わっていけるか（対人能力）」が話題になりました。「最近、保護者が直接話を学校に持ち込んでくる場合が多くなっているため、子どもだけでなく、大人ともきちんと対応していける人を望んでいる」「教師間の対人関係がとれないために、学校運営に支障がでる場合が多々ある」等の教育現場の実態を具体的に上げて、その理由が述べられていました。教職という仕事に、最も基本的に必要なとされる「対人能力」が若い現職教師に欠如していると指摘されたことに驚く一方で、私なりに最近の若者世代に感じていた点への指摘でもあると思ったりしました。しかし、この問題は「若い世代に共通に欠如するもの」として、納得したではすまされるものではありません。対人能力の欠如が日本の若者に共通しているのであれば、その原因は何によるのか、それをどのようにして培うのか。まして、教職を志す学生に不可欠なこの能力が乏しいのなら、養成段階でどのようなことが出来るのかと考えました。

そんな折り、門脇厚司先生（筑波大学教育学系教授）から自著『子どもの社会力』（岩波新書、1999年12月20日初版）をお送りいただきました。先生は、「人と人がつながる力」「社会をつくっていく力」としての「社会力」の意味と重要性を示され、最近の子ども・若者に見られる異変は、「社会力」の欠如にあり、それは成長過程における多様な他者との相互行為不足にあるとし、それへの対応について具体的に指摘されています。本書を何度も読み返し、その意を心に深く刻み込むとともに、本学部における「対人能力」（社会力の一つと考えられる）を培う実践の場を想いました。

「YOU遊サタデー」は、まさにそれにふさわしい実践の場です。子どもを理解するには、子どもの発する言葉とその意味を共有しなければなりません。子どもに伝えるためには、自らの働きかけのあり方がつねに問われてきます。こうした子どもと触れあう中で、共有を求めての試行錯誤の相互行為の繰り返しのなかから、対人能力が培われていくと思われるからです。この報告書からは、生き生きとした活動の姿が浮かび上がってきます。改めて「生きた場で学びあうこと」の大切さを痛感し、このような学びの場がいつまでも続いてほしいと願うものです。

最後に、「YOU遊サタデー」にご理解を賜り、ご支援をいただいております関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。

目次

まえがき	藤沢 謙一郎 信州大学教育学部長	Page 1
目次		2
シンボルマークと腕章		4
第6期YOU遊サタデーへの寄稿		
学生にとっての「信大YOU遊サタデー」とは	白井 敬 第6期YOU遊サタデー実行委員長	7
信大YOU遊サタデーの活動に見られる		
学生の情報活用の実戦力	東原 義訓 附属教育実践総合センター助教授	9
YOU遊サタデーの輪を地域社会の中へ	三宅 文雄 長野県社会部青少年家庭課長	11
信州大学「YOU遊サタデー」の実践によせて	金子 初男 国立信州高遠少年自然の家専門職員	12
子どもフェスタ IN OKAYA を体験して	立道 一嘉 岡谷市教育委員会生涯学習課青少年主幹	13
「経験」からの「学び」	森山 潤 信州大学教育学部助教授	14
世代間交流とYOU遊サタデー	角尾 篤子 信州大学教育学部助教授	15
不思議な出逢いを大切に	西澤 久恵 岡谷市立小井川小学校児童クラブ指導員	16
YOUサタと学校現場との接点を作る試み	正村 寿満子 長野市立南部小学校教諭	17
6年間、YOU遊サタデーに参加して		
ー保護者の立場からー	窪田 さえみ 主婦	18
YOU遊サタデーに参加して	島田 嘉一 長野市立東部中学校教諭	19
「また、でたい」YOU遊サタデー	村松 直昭 飯山市立常盤小学校教諭	20
ホモ・ファベルになった子供	熊谷 陽一 信州大学教育学部助教授	21
教師の実践的指導力を培うYOU遊サタデーの実践		22
ー第6期信大YOU遊サタデーに見る学生の成長ー	山崎 保寿 信州大学教育学部助教授	
学生の集いから生まれる偉力	土井 進 附属教育実践総合センター教授	23
第6期概要		
年間活動計画		27
年間講座一覧		28
一回のYOUサタができるまで		29
係紹介		34
新聞記事		35
会計報告		42
		45
実践記録		
物づくり講座		
のぞけば不思議!! ～万華鏡づくり～	井戸 陽子 (家4)	49
ペットボトルの車で遊ぼう	山王 隆晃 (工学4)	53
切り絵をつくろう!	佐藤 宏樹 (社4)	57
昔の楽器「うなり木」	高橋 歩 (技3)	61
電流イライラ輪を作ろう	高井 久 (技院1)	65
パラシュート部隊 出動!	押澤 由記 (家4)	69
ペットボトルのレコードに自分の声をいれよう	山王 隆晃 (工学4)	73
君だけのミラクルスープを作ろう!	本山 貴雅 (社4)	77
めざせ工作名人! ～親子で下駄作り～	町田 豊文・佐野 友和 (技4)	81
みんなで作ろう! ダンボール家具	小池 悠介 (国2)	85
色砂で2000年ミレニアムカレンダーを作ろう	増沢 るみ (国4)	89

交流体験講座	
カンカンアイスクリーム	池田 裕美・押澤 由記 (家4) 93
みんなで作ろう探偵物語	田中 崇 (社4)・笹崎 典子 (数2) 97
ほら見てきたよ！自分だけのおべんとう	笹崎 典子 (数2) 101
キミもコスモポリタン	
～世界の人とあそび・歌・おどりをたんのうしよう～	小池 祐介 (実4) 105
春にきれいな花を咲かせよう	109
～1からのチューリップ農園づくり～	井戸 陽子 (家4)
ころころもちもち	井戸 陽子 (家4)・小池 悠介 (国2) 113
科学講座	
本日わたあめやさん	中澤 典子 (国2) 117
帰ってきたスライム	中村 祐介・加藤 豊司 (理3) 121
家族でトライ～薫製屋さんになっちゃおう～	森下 房枝 (家院1) 125
はじめてのインターネット	
～ホームページで自己紹介～	佐藤 正志・河西 祐司 (技4) 129
パソコン大分解！！	田中 崇 (社4) 133
伝承文化講座	
できるかな～ハト笛～	武末 裕子 (美4) 137
趣味YOU悠～一杯の紅茶から広がる世界～	
紅茶時間(ティータイム)	伊藤 慶 (社4) 141
おかしな和菓子な、	
クリスマスのイモスマスケーキを作ろう	池田 朋美・千野加世子 (家2) 147
運動講座	
フリスビろう！？	杉山 雅幸 (野3) 151
親子でスマッシュバドミントン！	増野 隆 (社4) 155
ゴルフ	高橋 歩 (技3) 159
リサイクル講座	
野菜で紙をつくろう	池田 裕美 (家4) 163
2000年のお正月～いぐさでリースづくり～	池田 裕美 (家4) 167
表現講座	
君もマジシャン～めざせマジックマスター～	両角 孝之 (数2) 171
牛乳パック、大変身？？	笹崎 典子 (数2) 175
出張YOU遊サタデー	
伊那チャレン児プラザ21	181
こどもフェスタ in OKAYA	183
高遠フェスティバル	185
統計とアンケートと反省の記録	
参加者数とアンケート集計結果	189
反省会にて	193
キャプテン・スタッフ名簿	
キャプテン・スタッフ名簿	197
あとがき	東原 義訓・土井 進 (附属教育実践総合センター) 200

YOU遊サタデーシンボルマークの由来

1994年から始まった信大YOU遊サタデー。この独自のシンボルとなる印鑑を作りたいと考え、YOU遊サタデーの参加証印としても使えるデザインを考ええた。

石膏版に版画のデザインを彫り、ロウで版面原型を取り、前もって作っておいた土台と合わせロウ型原型を作った後石膏で埋没して鋳型をとり、銅を流し込んで本作品を作った。

印鑑の版面には、子どもを肩車する学生と楽しいな子どもたちをイメージしてマーク化した人物と信大の校章にも用いられている高山植物のこまくさを配し、その中に1994年から始まったことを意味する「SINCE 1994」、そしてその周りに「信州大学教育学部 YOU遊サタデー」の文字を配した。印鑑の土台には悠々と尾ひれを跳ね上げ泳ぐ魚をイメージした彫刻を取り入れた。

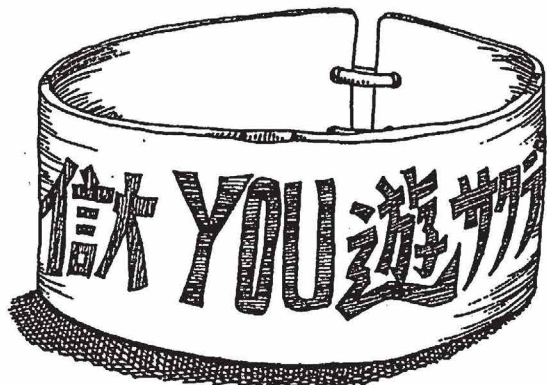
YOU遊サタデーの発展を末永く見つめていって欲しいと思う。

印鑑製作者

木村 仁 教授

山崎 重幸 (H.7年度 美術科卒)

今年でもう6年目、YOU遊サタデーも第6期が無事終了しました。このシンボルマークは、YOU遊サタデーが続く限り、私たちの心の中に深く刻まれ続けることでしょう。



「黄色い腕章は信頼の印」

私達がYOU遊サタデーで活動している時は、必ず腕に黄色い腕章を身に付けています。YOU遊サタデーの開会式で、実行委員長は参加者の皆さんに向けてこう言います。

「もし何かわからないことがあったら、黄色い腕章を付けたお兄さんお姉さんに聞いて下さい。」

私達がこの腕章を付けている限り、誰であろうとYOU遊サタデーのスタッフの一員であり、参加者の方々にはYOUサタのお兄さんお姉さんとして見られているのです。そして実行委員長の言葉は、「この腕章を付けた人間を信頼して良いですよ。」という意味を込めた言葉を、子供達やその親御さん達に発しているのです。

この腕章の持つ重さの意味、「信頼」に恥じることの無い活動をすることが、YOU遊サタデーに求められている事のひとつでもあると思います。

絵：武末 裕子 (美4)

第6期YOU遊サタデーへの寄稿



学生にとっての「信大Y O U遊サタデー」とは

第6期「信大Y O U遊サタデー」実行委員長 白井 敬（国語専攻4年）

1. はじめに

「信大Y O U遊サタデー」に参加することは、学生にとっていったいどのような意味を持っているのだろうか。

よく人から「Y O Uサタに参加して、なんかいいことあるの?」と尋ねられる。「勉強になるし、子どもとふれあえるし、友達もふえるし、いいこといっぱいだよ。」と答えるのだが、具体的に何の意味があるのかうまくいえなかった。

学生が「信大Y O U遊サタデー」に参加する意味、「信大Y O U遊サタデー」でしか得られないものとは何かということを考えてみたい。

2. 「信大Y O U遊サタデー」とは何か?

学生にとっての「信大Y O U遊サタデー」とは何かを考える前に、そもそも「信大Y O U遊サタデー」とは何かを考えなければならないだろう。そのために、成り立ちと活動の目的を説明しておきたい。

まず、「信大Y O U遊サタデー」の成り立ちについては以下のとおりである。6年前の平成6年、学校週五日制の試験的導入がされ、その過ごし方について、地域社会や家庭は、まだ試行錯誤の状態だった。そこで、教育学部が率先して過ごし方のモデルを提示する必要があった。また同時に、3年次実習を終えてから現場に出るまで一年半にわたり、子どもと接する機会が少ないことに疑問を持っていた学生が中心になって、子どもとふれあう機会を作ろうという動きが起こり、そして、信州大学附属教育実践研究指導センターの協力を得て、平成6年6月6日実行委員会が結成され、同年9月に第1回「信大Y O U遊サタデー」が開催された。

次に、活動の目的である。活動は今期で六年目を迎え、これまでの活動内容から「信大Y O U遊サタデー」の活動の目的として次の4点が挙げられている。

- ①学生生活の活性化を図ること。
- ②大学の持つ、すぐれた教育力を地域社会に開き、貢献することによって地域社会とのつながりを深めること。
- ③学校週五日制の完全導入に備え、教育学部が率先してモデルを提示し、地域社会に貢献すること。
- ④学生が子どもと関わることによって、教師となるための実践的指導力の基礎を身につけること。

つまり、「信大Y O U遊サタデー」とは、子どもとふれあう機会を求めている学生が、学校が休みになる第2、第4土曜日を利用して、ボランティアで年に何回か自主的にイベントを開催し、自分たちが企画した講座で子どもとふれあう活動なのである。

では、次に学生にとっての「信大Y O U遊サタデー」とは何か、ということを考えてみたい。

3. 学生にとって「信大YOU遊サタデー」とは

学生はなぜ「信大YOU遊サタデー」に参加するのだろうか?参加学生のアンケートでは、「教師になってからの力をつけたいから。」「子どもと楽しく遊べるから。」という意見がほとんどである。「YOUサタに参加してあなたが得たものは何か。」という質問からも、参加目的を反映するように次のような結果が出ている。「学生主体の活動により企画力・運営力がついた。」「専攻を越えて協力できる仲間が増えた。」「実際に子どもにふれあうことで、子どもの前に立つ自身がついた。」そして、「様々な講座に参加することで自分の引出しが増えた。」などである。

しかし、今、自分が全ての活動を終えてからこの結果を見ると、別に「信大YOU遊サタデー」に参加しなくても同じ結果を得られる活動はあるのではないかと疑問を抱いてしまう。もちろん、この活動目的が間違っているというのではない。活動の目的に加えるべきものがあるといいたいのである。それは、「学生が、学習者が体験的な活動の中で自ら課題を見つけ解決していくという学びの活動を作る力をつけること」という目的である。

「信大YOU遊サタデー」は、講座によって成り立っている。「信大YOU遊サタデー」に参加した学生は、ほぼ全員が講座をつくっていく。講座の原型を考えるのはキャプテンだが、スタッフも様々なアイディアを出して講座を完成させていく。一つの講座をつくることを料理にたとえると、自分が伝えたいこと(講座のねらい)は、料理の栄養。そして、その栄養を取るためにはどの材料(体験的な活動)が必要か考え、その材料からどのような料理(講座)が作れるのか、さらに参加者が一番喜んでくれる料理は何かということを考え、実際に料理をする。参加者はおいしいおいしいと食べていくうちに、栄養をつけている、ということになる。まさに、学習者が体験的な活動の中で自ら課題を見つけ解決していくという学びの活動を作る活動だといえる。

しかし、今期はそういった目的が設定されていなかったために、「信大YOU遊サタデー」の活動の中に「ただ楽しければよい」という雰囲気生まれてしまった。

「信大YOU遊サタデー」は、参加者のみなさんにわざわざキャンパスまで来ていただいている活動である。来ていただいたからには、何かを得て帰って頂かなければならない。つまり、自分たちが、ただ楽しく子どもとふれあえればよいというのではなく、「講座に参加者して下さった方には、〇〇ということを感じてもらいたい。」「〇〇という問題意識をもってもらいたい。」というように、明確な「講座のねらい」が必要なのである。

4. 終わりに

「信大YOU遊サタデー」では、「教えているつもりが、逆に参加者に教えられている。」ということはよくあることだ。「信大YOU遊サタデー」は、学生と参加者が共に行動し、共に学び、共に成長する場である。

一年間無事に、この活動を続けてこられたのは、私たちを見守り、支えてくださったみなさんのおかげです。本当にありがとうございました。

信大YOU遊サタデーの活動に見られる

学生の情報活用の実践力

附属教育実践総合センター助教授 東原 義訓

1. 情報活用の実践力

現在教育学部に在籍する学生は、その 100%がコンピュータを活用することができる。全員が電子メールで情報交換できるし、全員が指導案などのWebページを作成できる。今の4年生が入学したときから「コンピュータ利用教育」が必修科目として課せられた成果といえる。

この報告書も、全員が自分でコンピュータに向かって作成し、サーバ上の編集用フォルダーに指定されたファイル名で提出したものから作成された。授業で基礎を学んだ学生は、情報を共有するための環境としてネットワークをあたりまえのように利用している。ネットワークは彼らにとって協同作業の道具である。

この報告書の書式なども、作成者が迷わぬよう、また、編集者の労力を軽減できるよう、細かなところまで示されている。たとえば、天地の余白の大きさや、「,.」ではなく「.、」の約束事や、どのような場合に半角文字を使用するのかなども例示されている。

学校内の文書管理が情報化されている小・中学校はまだまだ少ない。校内のいわゆる文書は現在ではほぼ 100%がワープロ等で作成されるようになっているが、そのファイルのありかを探すのは大変である。どの先生が所有されているのかすら、わからないのが一般的である。

YOUサタを経験した学生は、教育的な実践力を向上させただけでなく、結果的に校内文書の共有化についてもリーダーとなって活躍できる実践力を備えたことを私は嬉しく感じるし、自慢に思っている。コンピュータについて知っているだけでなく、また、自分のためにだけコンピュータを利用するのではなく、集団の協同作業にコンピュータとネットワークを利用することを知っている彼らは、小・中学校の情報化に大いに貢献してくれるであろう。

「信大YOU遊サタデー」のWebページに今年度のコンピュータ系の長田雅子さんが「この係はこれまで、コンピュータを扱える学生が担当し、コンピュータを使わなくてはできない仕事をする、というあいまいな内容の係でした。しかし今ではほとんどの学生がコンピュータを扱え、また事務的な仕事にはコンピュータが欠かせません。もっと仕事内容を具体化した係を再検討すべき時ではないかと思います。」と述べているところにも、信州大学教育学部生の情報活用の実践力の高さが表れていると言える。

2. 今年度の「信大YOU遊サタデー」の情報化の成果

これまでの「信大YOU遊サタデー」のWebページは、その年度に担当した人の個性が強く表れたものであった。今年度は、このことが大きく変化した。今年度は個人の個性だけではなく、受け手を意識した集団の個性が表れたと言ってよかろう。

これまではWebページ担当者が一人で作っているのに近かった。講座の一覧表とその

講座の様子を表す写真が中心で、係が作成していた。しかし、今年度のページは皆で分担して作成していること、見てくれる人に役立つ情報が何かについて考えて発信されていることに大きな進歩が見られる。コンピュータ係の林一真君は「全国学生シンポジウム（信州大学で11月13日開催）で他大学からの意見をもとに、他大学のフレンドシップ事業の参考になるもの、つまりYOUサタが、一目見てその活動が分かるものが、今、ホームページに求められるものだと分かりました」とWebページ上で述べている。具体的には、他大学にも役立つように、各講座のキャプテンによる紹介、具体的なイメージや勘所がわかる豊富な写真、さらには、参加して下さった児童や保護者の方の感想も見られるようになっていく。

受け手を意識した情報発信の重要性を、自らの体験と他大学との交流から学んだことは、将来、小・中学校で、どのような授業を設計したらよいかに大きな示唆を与えてくれるだろう。


彼らは、本当の意味での情報活用の実践力を、YOUサタの活動を通して向上させたと見えよう。第6期と言えども、マンネリ化どころか、明らかに進歩を続けている。この事実が、彼らを頼もしく感じ、尊敬する理由になっている。

第6期信大YOU遊サタデー

第6期信大YOU遊サタデーは無事終了いたしました。

最終更新日 1999年12月22日

ここでは第6期信大YOU遊サタデーで行われた
3回の信大YOU遊サタデーの結果報告を掲載しています。
今年一年間行われてきた信大YOU遊サタデーを御覧下さい。

	<p>第17回信大YOU遊サタデー 1999.5.22. in 松本キャンパス</p>
	<p>第18回信大YOU遊サタデー 1999.11.7. in 長野キャンパス</p>
	<p>第19回信大YOU遊サタデー 1999.12.11. in 長野キャンパス</p>

お問い合わせ先
〒380-8544 長野市西長野6-10
信州大学教育学部附属教育実践総合センター YOU遊サタデー係

Copyright (C) 1999 第6期信大YOU遊サタデー. ALL RIGHTS RESERVED.
本ページに関するご意見・ご感想・ご要望等がありましたら、お気軽にyou@st.shinshu-u.ac.jpまでどうぞ。

ホームページ

<http://cert.shinshu-u.ac.jp/st/you/index.html>

Y O U遊サタデーの輪を地域社会の中へ

長野県社会部青少年家庭課長 三宅 文雄

例年、信大Y O U遊サタデー実行委員会の皆様方に主催者の一員として参画いただいております「ちゃれん児プラザ 21」も今年度で4回目を迎え、平成11年8月11日（水）に長野県伊那文化会館及び春日公園一帯で開催いたしました。

当日は朝から小雨がぱらつき、天候が心配されましたが、開場前には雨も上がり、多くの子どもたちが友だち同士で、あるいは親御さんと一緒に会場にやってきました。中でも、Y O U遊サタデーテントの前には子どもたちの長蛇の列ができ、毎年大人気のスライム作りなどの各講座が始まると、子どもたちが学生の皆さんの指導の下、「発見する喜び」、「できる喜び」を体験しておりました。会場では目を輝かせながら、元気一杯に駆け回る子どもたちの姿がいたるところに見られ、来場された保護者の皆さんなどからも、「子どもと一緒に楽しむことができて本当に良かった」といった声が多数聞かれるなど、大成功を収めることができました。皆様方の御協力に心から感謝申し上げます。

さて、青少年が日常生活における様々な問題を解決する方法や、自分の考え、感情を理性的に表現する方法を修得し、自立していくためには、地域社会等において、多様な人間関係や様々な実体験を通じ、自分を周囲とかかわらせる活動を積み重ねていくことが必要であります。こうした中、Y O U遊サタデーにおいては、最近はなかなか経験する機会のない農作業を、子どもたちと一緒に体験する活動を計画されていると聞いております。土を耕す、作物を育てる、そして収穫するといった体験は、学生の皆さんや子どもたちが、「生命のすばらしさ」や「自分で作物を作る喜び」を実感する貴重な場となることでしょう。こうした経験や喜びが他者への「思いやり」や「やさしさ」を育むとともに、「命の大切さ」を理解し、そして「生きる力」を身につけることにつながっていくものと大いに期待しています。

今後とも、Y O U遊サタデー実行委員会の皆様におかれましては、キャンパス内での活動をより一層充実されるとともに、地域の中にも積極的に飛び込んでいき、Y O Uサタデーの輪を社会全体に広げていっていただきたいと思います。また、社会に出られた後も、Y O U遊サタデーで得られた貴重な経験を生かして、進まれた各方面において活躍されると同時に、地域における青少年の育成の担い手として活躍されることを期待しております。

末筆ではありますが、土井進教授を始めとしまして、「ちゃれん児プラザ 21」の開催に当たって御協力いただきました皆様に改めて感謝申し上げますとともに、Y O U遊サタデー実行委員会の更なる御発展をお祈り申し上げます。

信州大学「YOU遊サタデー」の実践によせて

国立信州高遠少年自然の家専門職員 金子 初男

今年度、10月9日(土)～10日(日)の両日にわたって、恒例の「信州高遠フェスティバル」が開催され、1都6県より1200名の参加者が集い、さまざまな催し物を通して相互の交流を深め、少年自然の家を理解していただくよい機会となりました。

今年は、野外活動やクラフト等の体験活動に加え、「音楽祭」や「郷土芸能の体験」により、合唱や器楽、踊りの発表など、主体的な参加を促すことができました。また、「環境学習コーナー」では、来年度の「環境未来センター」の開設を前に、これまでの取り組みの成果を紹介しました。

今年で3年目になる信州大学教育学部との連携による「YOU遊サタデー」の開設講座も、特色ある催しとして挙げられ、楽しみにしている多くの子どもたちでにぎわいました。

講座開設にあたっての「YOU遊サタデー」実行委員会との打合せも、以下の点を確認しながら、これまでの蓄積により順調に進められました。

1. 自然の家周辺の自然環境を活かしたプログラム
2. 楽しみながら科学的なことも学べる制作活動を含めたプログラム
3. 環境学習とも関連付けられたプログラム
4. 子どもたちの興味や関心により選択できるプログラム

これらをふまえ、自然の中で数人のグループを作り、ウォークラリーをしながら周辺の自然を楽しむ「ネイチャーアドベンチャー in 高遠」・焚き火でパンやバームクーヘンを作る「チャレンジ・ザ・クッキング」・割りばし鉄砲を作って遊ぶ「めざせ割りばしマスター」の合計3講座が開設されました。

参加した子どもたちは、それぞれの活動を通して自然と親しんだり、制作活動に興味や関心をよせたりしながら、子どもたち同士や学生の皆さんとのふれ合いを楽しんでいました。学校現場の枠の中だけでは見えない一面を見せてくれていました。

教育現場では、「総合的な学習の時間」の実施を目の前にして、その取り組みがしきりに話題となっています。自然体験やさまざまな交流を通して、子どもたちの「生きる力」を育み、より広い視野で子どもたちをとらえていくことは、その主旨に沿うものであると考えます。

各講座とも、企画や準備、当日の運営から片付けまで、担当された皆さんは大変だったと思いますが、このような事業の企画や運営の経験は、これからの教育現場において必ず生きてくるものと信じます。

体験活動を大切に、社会教育という広い視野にも立った「YOU遊サタデー」の実践は、これからの教育の流れを見据えた貴重なものであると、フェスティバルに訪れた先輩たちが皆さんを見守る温かい眼差しからも感じ取ることができました。

子どもフェスタ IN OKAYA を体験して

岡谷市教育委員会生涯学習課青少年主幹 立道 一嘉

平成11年9月5日(日)に岡谷市民総合体育館周辺で実施された「子どもフェスタ IN OKAYA」は、約2000人の親子が参加して「遊び・仲間・未来」をテーマに開催されました。

日頃から青少年健全育成活動に取り組んでいる岡谷市子ども会育成連絡協議会では、結成30周年を迎えるにあたり、大勢の親子を集めて記念事業を計画しておりましたが、子どもたちが自らいろいろなことにチャレンジし、仲間づくりを進める中で21世紀に向かってたくましく育つことを願い、子どものための祭りのような催物を考えていました。

岡谷市では初めての試みであり、どのように進めて行ったら良いか検討を重ねた結果、以前から信州大学教育学部においてY・O・U遊サタデー活動でこうしたことに取り組まれており、素晴らしい成果を上げておられることをお聞きし、是非岡谷市でもY・O・U遊サタデーに習ってをやろうということで決定をしました。

なにもふんにも大きな事業になるため、岡谷市で青少年の健全育成を進めている団体の皆様にもお手伝いをお願いし、最終的には講座数20、13団体、スタッフ数200名の参加の大きな催物となりました。

講座名	担当団体	参加数	講座名	担当団体	参加数
オリジナルカレンダー	Y・O・Uサタ	20	ウォークラリー	高校生リーダー	20
ミラクルボール	Y・O・Uサタ	20	わら細工	老人クラブ	20
電流イライラ輪	Y・O・Uサタ	20	手作りクラフト	ガールスカウト	40
カーネーションクラフト	子ども会	50	お団子あれこれ	更正保護婦人会	70
チャレンジコーナー	子ども会	200	遊びの広場	民生児童委員協	80
ケーキづくり	子ども会	40	おお縄跳びほか	民生児童委員協	70
小鳥の巣箱	壮年会	40	グライダー飛行機	教育委員会	70
お手玉綾取り	婦人会	20	白バイ・パトカー	警察署	300
抹茶・割り箸鉄砲	婦人会	20	消防車・はしご車	消防署	300
スライム他	教員有志	100	中畑選手講演会	子ども会	500

Y・O・U遊サタデーの皆様にも3つの講座の担当をお願いし、それぞれ子どもたちにたいへん喜ばれました。今回フリー(網掛け)の講座以外は、事前に受け付けをさせてもらいましたが、すぐに埋まってしまったのが、ケーキやお団子づくりなどの幼児と親とで参加する講座でした。反対に小学校高学年以上の申込みは少なかったです。

フリーの講座は当日自由参加となりましたが、1つの講座に出してしまうとフリーの講座には、時間的に参加できないという難点がありました。今後このような行事を計画する場合、不特定の参加(フリー)を優先とするフェスティバル等の場合は、事前に募集するのは、少ないほうが好ましいと思いました。いずれにしても、初めての試みとしては、盛会のうちにおわることができましたことに感謝申し上げますとともに、こうした機会が継続していくことが望ましいと考えております。

「経験」からの「学び」

信州大学教育学部助教授 森山 潤

本年度、私のゼミ「技術教育研究室」では、4 回生・院生を中心に「YOU遊サタデー」に参加させて頂いた。その内容は、「電流イライラ輪を作ろう」「めざせ工作名人～親子でゲタ作り～」「はじめてのインターネット！～ホームページで自己紹介～」の各講座である。

1. 取り組み

各講座の開設にあたっては、教材研究、展開計画の作成、教材・教具の準備、T.T.の打ち合わせ等の作業が必要となる。各学生達は、講義や教育実習の経験を基礎にこれらの活動を展開していく。しかし、技術科教育に関わる教材の場合、文献に紹介されている多くの教材は、中学生向きに作成されている。学生達は、教材を設定する際、異学年で構成される小学生を対象とするという点で、いかに「子どもの立場に立ち」、「個に応じた対応」を展開すべきかに心を砕かなければならなかった。すなわち、子ども達が成就感や達成感を得られるように、がんばれば乗り越えることのできる課題の設定、協力・共同して取り組める課題の設定、興味・関心を引くための導入、つまづきをカバーしうるスタッフの支援態勢など、極めて具体的なレベルでの吟味が展開されたのである。

さらに、教材研究のプロセスでは、スタッフ同士だけでなく、新たな相互作用も生じた。「電流イライラ輪」では、「カメラの加工方法」を検討する中で、内地留学で派遣されている現職教員の大学院生とのやりとりが頻繁に生じた。また、「ゲタ作り」では、「鼻緒の結び方」を学ぶために、地域のゲタ職人の工房に出向き、専門家からの手ほどきを受けるといった「地域人材との交流」も派生した。「ホームページ作り」では、講義で学んだHTMLや情報モラルの知識が現実的な力量として問われ、他の研究室の学生との「学び合い」が生じた。

作られた大量の試作品がこれらの「試行錯誤」のプロセスを如実に物語っている。そして、このプロセスで考えられたことは、当日配布された「簡易テキスト」にすべてが盛り込まれていったのである。教科指導の実践力とは、まさにこれらの活動に集約されているとあって良い。

2. 機会、経験そして学び

「YOU遊サタデー」は、学生の臨床的経験の場として極めて有効であり、重要である。それは、単に「子どもと触れる」機会を提供しているだけではない。講義や実習で学習した知識をリアルな活動の中で反芻し、仲間と共にその意味を再構築する貴重な「学びの場」になっている。遭遇した機会を密度の濃い経験に昇華させたり、自らの経験から「学び」を再構築するためには、学生の熱意と意欲が重要である。その熱意と意欲は、何より参加してくれた「子ども達の笑顔」との出会いによって育まれていったといえる。

これからも、技術科教育の視点を中心に、研究室の学生と共に、「YOU遊サタデー」での活動をさらに充実させていきたいと考えている。できれば、毎回、違う教材を開発していければと願っている。

最後になりましたが、このような貴重な場を提供して下さった土井進教授に、心より御礼申し上げます。

世代間交流とY O U遊サタデー

信州大学教育学部助教授 角尾 篤子

国際化の進む長野市周辺地域でも、世代間の交流や結びつきが都市化、核家族化、一人暮らし化、少子・高齢化の影響を受けて、年々希薄になってきている。大学人を核として新たなコミュニティ作りのきっかけとなればと、今年も昨年の「世界の歌を堪能しよう」に引き続いて「キミもコスモポリタンー世界の歌と踊りと遊びを堪能しよう・老いも若きも子どもも」を小池祐介君（実4）を中心とした学生諸氏、センターのプロジェクト「世代間交流ー老いも若きも子どもも」に参集している中高年若年諸氏が協力して企画、実施した。

昨年10月24日に開かれた信大Y O U遊サタデーで初めて、世界各国の歌をみんなで歌いながら、世界各国から来日している外国人を含めて、世代間交流を深める講座を開いた時に、長野市内外の親子連れや中高年、信大の日本語教室に通う外国人など、約50人から60人の子供から高年の方々が参集して、とても楽しい音楽会を経験した。この企画は、信大教育実践総合センターのプロジェクト「世代間交流ー老いも若きも子どもも」（代表角尾篤子）が土井進先生の熱心なお勧めと、信大学生諸氏、卒業生諸氏、Beckey先生を初めとした先生方、外国人研究員など皆様のご努力と、情熱によって実現した。

「信大Y O U遊サタデー」は、元々、信大生が工作や理科、家庭科などを通じて子供達と触れあうと言ったイメージが強かったが、これらの企画を通じて、地域のありとあらゆる人々が、国籍の差、性差、年齢差等を乗り越えて、お互いの立場や考えを理解できる機会を提供する場をも企画するといった、更に一段と大きな連帯や連携を繰り広げていくきっかけになって欲しいと思う。

私達の基本的なスタンスとして、1人の子供を育てるには家族は勿論、子供や老人、障害者を大切にする地域社会や学校、職場、文化、社会、マスコミ、経済システム、国、平和な世界といった「村」が必要であり、子供達の目線に合わせた「村」は、私たち大人にとっても居心地の良い、平和で心の落ち着く居場所に相違ないであろうという考えを抱いている。そのためには、唯一増大する豊潤な人材である中高年ヴォランティアが、学校や地域でもっともっと活躍することが望まれる。子供達や学校にとっては勿論、中高年世代もヴォランティアをすることによって、知恵や英知や経験を若い世代に分け与えることによって、自らの頭脳を活性化するばかりでなく、生活のはりや日々の生き甲斐、リズムを得、その結果「生活の質」(QOL)さえ向上させることができ、心身共に健康な日々を送ることが出来る。

教育実践総合センターのプロジェクト「世代間交流ー老いも若きも子どもも」は、世界に情報を発信する「日本世代間交流ネットワーク (JIN: Japan Intergenerational Network)」を結成するまでに活動を広げており、ホームページを開いている。(http:cert.shinshu-u.ac.jp/project/jigen/index-j.html)

この中で最近の活動を紹介しているので、是非ご覧下さい。

不思議な出逢いを大切に

岡谷市立小井川小学校学童クラブ指導員 西澤 久恵

1998年5月、新聞に「信大YOU遊サタデー」の参加者募集の記事が載っていました。学童クラブに来ている子どもの理解を深めるために少しでも役立てば、と願って初めて参加させて頂きました。そして、松本キャンパスへちょっぴり不安な気持ちを抱きながら出掛けました。ところが驚いたことに、入口には担当の学生の方が待っていて、親しく話掛けながら親切に会場を案内してくださいました。私は「先生、おとうさん、おかあさんもリフレッシュ!」という講座に参加し、キャプテンを務められた先生方と懇談することができ、「人間は人間によってのみ人間となることができる」などの素晴らしいお話を聴かせて頂きました。また、スライムなど今まで知らなかった遊びもいくつか教えて頂きました。YOU遊サタデーに行く前と行った後では、気持ちが大きく変わっていることに気がついたのは家に帰ってきてからのことでした。

早速、学童クラブの子ども達にスライムを教えたのですが、予想以上のすごい人気でした。また不登校ぎみの子どもが元気になったりもしました。私はYOU遊サタデーに思い切って出かけて行ったことが本当によかったなあとしみじみ思いました。そして、YOU遊サタデーの大ファンになりました。

1998年11月には清水麻紀子さんと一緒に「リサイクルクリスマスリース」という講座を、1999年12月には池田裕美さんと一緒に「いぐさでリース作り」という講座を開かせて頂きました。それぞれに印象深く、大変良い勉強になりました。研究室で打合せなどをさせて頂いたのですが、いつも気持ち良く迎えて頂き、学生さんの出身地の話や教育論に花を咲かせ、楽しい一時を過ごすことが出来ました。学生さんたちが真剣に子ども達のこと、教育のことを考えている姿を見たとき、「さすが」と頼もしく思いました。2つの講座とも前日準備から参加致しましたが、学生時代に戻ったみたいに、どの場面も新鮮に見え、とても楽しかったです。

学生さんたちは単位になるわけでもない、バイト代をもらえるわけでもない、全くのボランティア。子どもの喜ぶ顔を見るために、良い教師になるために一生懸命活動している姿は本当に素晴らしいと思いました。また、とても嬉しかったことはスタッフの皆さんが私にいつも優しく親切に接して下さったことです。学生の皆さんにとって私のような年代とつき合うのは苦手なはずなのに、「なぜ?」そして、「今の若い人は…」なんて思っていたことが、とても恥ずかしくなりました。世代が異なっても目標が同じなら、理解しあい協力しあえるということを学ばせて頂きました。この体験から私の心に明るい光がパツと射したように、希望が湧いてきたのです。それは、いじめや不登校などで悩んでいる子ども達ばかりでなく全ての子ども達にYOU遊サタデーで学んだことをもとに、生きる力を触発していく実践に取り組んでいこうという意欲が湧いてきたことです。学童クラブの子どもたちの中にキラッと光る瞳を見るために、明るい笑顔を見るために、これからも頑張っていきたいと思っています。

最後に、YOU遊サタデーに出会えたことは私にとって不思議な出逢いのような気がしてなりません。今年度は岡谷市で出張YOU遊サタデーを開催して頂き感謝申し上げます。

Y O U サタと学校現場との接点を作る試み

長野市立南部小学校教諭 正村 寿満子

1. 学生時代から抱いていた疑問とY O U サタ

私は母校の更なる発展を願う卒業生の一人として、後輩の皆さんが全国的にもユニークなY O U 遊サタデーを6年も継続し、着実に成果をあげていることを大変嬉しく思っている。私が大学受験をした頃は、長野県の教師を目指す高校生の多くは、教育学部へ行くなら長野師範の流れを汲む地元の信大へと進んだ時代であった。しかし、入ってみると大学と附属学校園や教育現場との関係は、私たち学生の目にも稀薄に映ったことを覚えている。当時、大学には児童文化研究会というサークルはあったが、間口を広げて多くの学生が進んで子ども達と関わろうというY O U サタのような取り組みはなく、個人的にスイミングスクールや家庭教師のバイトで子ども達と接するくらいしか、児童理解や指導実践の機会はなかった。そんな訳で、Y O U サタの活動は、とても画期的かつユニークで「私の学生時代にもあったら……」と羨ましく思う。

学生の皆さんには附属学校園での教育実習に精一杯頑張ってもらいたいと思う。と同時に自発的・自主的な教育実習とも言えるこのY O U サタで、教育実習をしてみて疑問に思った点や、もっとやってみたい事などを自由な発想でテーマ化し、子ども達への指導を試みてほしいと思う。そのような体験を通して学んだことは、学校現場に出てからもきっと大きな力になることと思う。

2. 国際理解教育の場としてのY O U サタ

1998年の冬季オリンピックを控えた前年、私は体育科主任の傍ら国際理解教育の仕事を担当することになった。この時に運良く1997年秋のY O U 遊サタデーにおいて、「世界の言葉と世界の遊びを楽しもう」という講座が開かれ、クラスの子どもたちや父母有志と一緒に参加させて頂いた。世界地図や世界の挨拶言葉を利用したゲームなどの教材を綿密に準備し、学生が仲良く協力しあっている温かい雰囲気の中で、参加した子ども達や父母と共に楽しい一時を過ごさせて頂いた。何よりも良かったことは、本校在籍のホンジュラス国籍の児童が母親と共に参加し、ホンジュラスについて紹介してくれたことによって、それを聞くことができた子ども達の国際理解が深まったことである。普段学校では接することの少ない高学年のMさんが発表する姿に接した子ども達が、後に児童会活動として実施したホンジュラスのハリケーンへの支援活動に高い関心をもって自ら参加することができた。

2回目の参加は1998年秋に開講された「世界の歌を堪能しよう」という講座で、クラスの子ども達や父母とともに参加した。この時子ども達は信州の生んだ作曲家久石譲の「さんぽ」「もののけ姫」を披露した。子ども達は自分から進んで外国人と握手をし、片言の英語で挨拶する者も現れた。特にこの講座は世代間交流を目指すものであったため、老若男女も国籍も問わずに広く交流できる場となり、子どもたちが学生や参加している一般市民や外国の方と物怖じせずに接している姿を見たとき、学校内だけでは味わえないY O U サタの良さを感じた。3回目は1999年秋の「キミもコスモポリタン」の講座で、この時はスタッフの学生さんが南部小学校に来てくださり、子どもたちとの交流も一層深まった。Y O U サタと学校現場との交流の可能性は大きく広がってきているといえよう。

6年間、YOU遊サタデーに参加して一保護者の立場から一

主婦 窪田 さえみ

1. 学生さんの元気な声

「こんにちは！！」毎回、とびきり明るい笑顔と、元気の良いたくさんの声に出迎えられて、子ども達以上に一番嬉しいのは私かもしれません。YOU遊サタデーという企画を初めて知ったのは、今6年生の長男が1年生の時でした。NHKのニュースで、YOU遊サタデーの様子を放送しているのを、何気なく見ていた長男が「僕もやって見たい」と言ったのがきっかけで、ニュースの前半を聞き逃してしまった私はNHKに問い合わせ、何処で取材したのかを調べてもらって信州大学教育学部にお電話したのがスタートでした。そして、普段やったことのない事を、お兄さんやお姉さん達と一緒に遊びながらやるというフレーズは、親の私にとっても興味のある事でした。

私：「今度のYOU遊サタデーどうする？」 子供達：「行く！」 毎回、この二言で決まります。「どうして行きたいの？」と聞くと、「楽しいから！」という簡潔明瞭な答えが返ってきます。子どもなりに知らない人達ばかりの中に、ましてや未知の世界の大学の構内へ入って行くという不安はあるようですが、その不安をがっちり受け止めて和らげてくれるのが、学生さん達の元気な笑顔なのです。

2. 子どもの最高の笑顔

息子が6年間、YOU遊サタデーに参加して最も夢中になったのが、スライムでした。毎回毎回スライムづくり。娘はシャボン玉の講座を受けてから、もっと大きくて、こわれにくいシャボン玉を自分で作ってみたいと言い出して、夏休みの宿題の自由研究として取り組んだことがありました。スタッフの方々に教わった事がきっかけとなりヒントとなって、それこそ泡まみれになって、グリセリンや蜂蜜でべとべとになりながら、なかなかこわれにくいシャボン玉が出来ずに何日もかかって苦労していましたが、やっと出来あがった物は、とても大きくて、いつまでも風に浮かんでいて、本当にきれいでした。あんなに夢中になって取り組んで、満足いくものが出来あがった瞬間の楽しそうな最高の笑顔は、見ている私まで嬉しくなりました。遊びでも何でも夢中になってがんばれるって、本当に素敵なことですね。きっかけを作ってくれた、スタッフの方々に感謝です。

3. お兄さん、お姉さんを手本として

長時間駐車場を担当してくれていた学生さんは、途中出かける私に長野市内の道案内まで丁寧にして下さいました。また、参加していた家族の小さな子どもさんが、道路の方へ向かってヨチヨチと歩いて行った時、急いで駆けて行ってその子連れ帰っていた学生さんがいました。学生さんのそんな一生懸命な姿に頭の下がる思いがしました。一人ひとりにまなざしを向けてくれるお兄さん、お姉さんの温かさを子ども達も感じているんでしょうね。だから、「次は何の講座があるの？」とプリントを覗き込んでくるのでしょう。

第19回のYOU遊サタデーの帰りの車中で、お兄さんやお姉さん達にお見送りをしてもらったことが、息子には特に心に残ったらしく、「あいさつが良いね」などと生意気な口調で言っていましたが、のんびり屋さんのあの子が、そういうことにやっと気がつけるようになったという、息子の成長を感じるとともに、そうやって感じた素敵なことを、他の人にもできる人になってくれたら、と願うのです。

YOU遊サタデーに参加して

長野市立東部中学校教諭 島田 嘉一

YOU遊サタデーの講座案内のパンフレットが届くと、我が家は大騒ぎになる。パンフレットが届くのを心待ちにしていた子供達は、届いたパンフレットを取りあい、どの講座に申し込もうかと頭を悩ませる。親の都合で半日しか参加できないときは大変だ。それぞれの希望が午前と午後にわかれてしまうと、誰かが折れて、相手に合わせなければならない。「この講座も面白そうだよ」と誘ったり、説得したり、自分自身を納得させたり。真剣なやりとりを見るだけでも、子供達にとってYOU遊サタデーがいかに魅力的な企画であるのかが分かる。長男が3年生の時、PTAの学級会長を引き受けた。担任の先生と学級行事をどうしようかと相談し、『本箱・クリスマスリース作り』を企画した。そして、その行事に、ぜひYOU遊サタデーのスタッフの皆さんを講師にお招きしたい、と考えた。ぶしつけなお願ひにもかかわらず、土井先生はじめスタッフの皆さんが快諾してくださり、準備万端整えて参加していただいた。子供達はもちろん、参加した保護者の皆さんからも好評で、思い出に残る催しとなった。改めてこの場を借りて感謝申し上げたい。いわば出張YOU遊サタデーをお願いしたのだが、なぜそんな企画を立てたかという、実はその前の年に、「親子で本箱作り講座」に参加させてもらっており、そのとき味わった物作りの楽しさを、学級の子供達にも経験させたい、と思ったのである。加えて、普段なかなか来ることのない父親達を何とか学校に引っ張り出そう、という意図もあったし、YOU遊サタデーのスタッフの皆さんと子供達がふれあう姿を親たちに見てもらいたい、とも考えたからだ。YOU遊サタデーのスタッフの皆さんは、子供達にとって、普段なかなか接することのできない「ちょっと年の離れたお兄さんやお姉さん」であり、尊敬すべき「遊びの先輩」である。自分が分からないことをとてもよく知っていて、聞きたいことにすぐに答えてくれる。親でもなく先生でもない、でも本当に身近な「遊びの先輩」との出会いこそが、YOU遊サタデーの魅力なのだと思う。改めて言うまでもなく、地域における「子供自身による文化の伝承の場」が失われて久しい。年上の子が遊び方を教え、夢中になって遊ぶ中でルールを作り出していく子供達の世界がなくなり、かわって大人達が、「これなら遊べるんじゃないの？」と買い与えるおもちゃやゲーム、あるいは、勝ち負けにこだわりすぎてしまうスポーツなど、大人の価値観や論理が幅をきかせている。また、自分の手でものを作ったり、全身で遊ぶこともめっきり少なくなってしまった。

実をいうと私は、中学校で教員をしている。その中で最近特に強く感じることもある。生徒の間で遊びや生活についてのルールが曖昧になり、「お互いに快適に生活するためにはルールが必要だ」という感覚が薄らいできている。また、気持ちをお互いに伝え合おうとしないし、伝える力もない。人が人とかかわって成り立っている社会の根幹が危うくなっていると考えるのは大げさにすぎるだろうか。しかしこの問題に、「キャプテン!」「大将!」とスタッフの皆さんを慕い、作品を完成させて目を輝かせている子供達の姿が、ひとつの解答を示してくれているように思う。小学1年生の時に、初めて「けん玉名人」に参加させてもらった長男は、6年生になった今でも、友達への年賀状に「また、けん玉で勝負しよう!」と書いていた。YOU遊サタデーで得たものが、子供の中に確実に根付いている。親として、感謝に堪えない。

「また、でたい」YOU遊サタデー

飯山市立常盤小学校教諭 村松 直昭

私が、一人の父親として我が子に望むことは、いろいろな人と一緒に遊べるようになってほしいということです。このような願いは、親であれば誰もが持っていると思います。ところが、子どもの数が少なくなり、地域でもかつてのように近くの子ども同士で、体を動かして遊ぶ機会が少なくなってきました。もっと、知らない人の中でもいろいろな遊び体験をさせたいと考えていたとき、新聞でYOU遊サタデーがあることを知り、小1の息子と「君もマジシャン」という講座に初めて参加しました。

息子にとって初めての場所、初めて会う人初めてやるマジックなどすべてが初めてであり、緊張しているのがわかりました。しかし、講座を担当してくださった学生の皆さんが、やさしく教えてくださり、一年生の息子も、何とかマジックのやり方がわかった様子でした。ところが、今度はグループを変え、数えてもらったことを違うグループの人に教えなければならぬ場面になりました。この小グループでの発表は、1年生なのでうまくできないだろうと思っていました。しかし、私の予想に反してうまくやっていますのです。もちろん、そこにいた学生さんの支援があつてのことです。例えば、「なかなか上手だね。もう一回やってくれる？」という言葉をかけてもらっていました。これが自信になったのでしょうか、帰宅後、自分から進んで家族の前でもやって見せていました。閉会式で次回の内容が紹介されたときに「次もあるようだけど、どうする？」と聞くと、「また、でたい」とすぐに答えました。この「また、出たい」が、YOU遊サタデーのすべてを物語っていると思います。息子にとってみれば、自己表出しなければならないことがたくさんありましたが、そういう場面に立たせていただいたことが、何よりも有り難かったです。このような場面があったからこそ、単なるおもしろさを超えた楽しさにつながっていったと思います。息子の話を聞いた小3の娘も楽しそうだと感じたのでしょう。二回目には一緒に参加させていただきました。また、YOU遊サタデー全体の進行も工夫されていると感じました。開会式が始まるまでの待っている時間を楽しめるものにしたり、講座紹介も大変ユーモラスで、これから参加するのが楽しみに思えるものでした。黄色の腕章は子どもたちに安心感を与えてくれました。最後に、再び全員が集まり、成果を発表し合う場もありました。参加しなかった講座でも「楽しそうなことをしたんだな」とわかりました。全員で一緒にがんばったことを認め合う場を設定することのよさを感じました。

一方、現場の教師という立場から感じたことは、学生の皆さんは、子どもとの関わりかたが上手だということです。子どもが一人だけにならないように、さりげなく言葉をかけたり、うまくいったときは自分のことのように喜んだりしている姿が随所に見られました。また、準備がしっかりできていること、学生のみなさんが親切に子どもたちに接していること等にも関心しました。それに、名札を用意し、名前と呼んでくださることに暖かさを感じました。そんな細かいことに配慮することも、教師にとっては大切なことだと改めて気付かされました。このように「子どもを大切にする教師」、土井先生のお話にあった「子どもの気持ちわかる教師」を現場では望んでいます。YOU遊サタデーでの経験は、きっとこのような教師になれると信じています。

ホモ・ファベルになった子供

信州大学教育学部助教授 熊谷 陽一

当日の朝に思いついて、親子3人が参加したYOU遊サタデー。ダンボールを利用して家具を作るグループに空きがあったので、そこに加わることになった。小学4年生の息子は何とかこなすだろうが、小学1年生の娘には少し無理かなという思いをもちながら会場に出向くと、参加している家族は、高学年の小学生兄弟とそのお父さんの3人からなる一組だけ。ほかは、学生さんばかり。こりゃしまった、というのが最初の感想。というのも、子供が期待していたのはおそらく、多くのお友達と一緒に何かしながら楽しむことであって、自分の力で何かを作ることではないはずだったから。

ダンボールとはいえ柔らかな紙でも、うまく組み合わせれば丈夫な棚や椅子のような家具が出来上がる。このことに驚きを感じ、製作に挑戦してみようかな、などという気になる年齢にまだうちの子供は二人とも達していない。だから、手渡された絵入りの製作マニュアルも、自分からは見もしない。お父さんが目の前で実際に作ってみせて、その過程のなかで興味がでてくれば、まあいい線を行っているということになるのかなあ、と思いながら、まず本棚を二つ作ることにした。一つをお父さんが、もう一つをお兄ちゃんが、それぞれ中心になって、作ろうというわけである。ゆっくり丁寧にひとつひとつの工程をこなしていくなら、きっと子供は二人とも飽きがかかるだろうから、ダンボールを切り取るのもいい加減なら、切り取った部品を接着剤でくっつけるのもいい加減、スピードだけが取り柄の家具製造。1時間あまりで組み上げた棚はいずれも、案の定、グラグラ揺れる仕上がり。それでも、ダンボールを切り取ったり、ボンドで張り付けたりすることを手伝った娘は、一定の充実感をもつことができたのだろう。昼食後、もうひとつ何か作ってみるかときいてみると、答えは、「もう帰る」ではなくて、「やってみる」だった。女子学生のお姉さんにほとんどを助けてもらったが、お父さんなしで、小物入れを作り上げた。家に帰ってから、小さく切った色々な紙を張りつけて綺麗な箱に仕上げ、自慢顔だった。

息子は息子で、ダンボールから丸椅子を作るという難しい製作に挑んだ。この日の終わりには、子供は2人とも、製品の利用価値ではなくて、製作することそのものの価値を知る「ホモ・ファベル（作る人間）」になっていた。こう言ったら、少し大げさかなあ。



教師の実践的指導力の基礎を培うYOU遊サタデーの実践

－第6期信大YOU遊サタデーに見る学生の成長－

信州大学教育学部助教授 山崎 保寿

教育職員養成審議会第三次答申(1999. 12. 10)は、次のような資質能力を基盤とする力が、いつの時代にも求められる教師の実践的指導力であると述べている。すなわち、「教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養」などである。ここに述べられた実践的指導力の基礎となる資質は、教科等に関する専門的知識だけでなく、子どもに対する興味や関心が第一の基本であり、子どもへの思いやりの心、広く社会へ貢献する態度と責任感、ボランティア精神、さらに、子どもを思いやり感情移入できることなど、精神的および態度的な側面が基盤となっていることは疑問の余地がないであろう。

こうした基礎的な資質を培うためには、子どもとの触れ合いの体験、特に、YOU遊サタデーのような体験的な事業の企画・運営を通して得られた経験が極めて重要である。それは、子どもと実際に触れ合う様々な体験の中から、実感として得られた感覚やセンスが根幹となり、そうした数多くの体験を通して、子どもの状況に対応して行動できる力が培われていくからである。教師は社会的な責任と使命を持った職業であるから、こうした基礎的な資質は、教師になってから養えばよいものではなく、当然、教師になる前に身に付けておくことが要求されるものである。

このように考えるとき、今回12月に行われたYOU遊サタデーに関しては、運営に携わる学生達が教師として必要とされる基礎的な資質の面で、確実に進歩、成長しているという印象を非常に強く受けた。というのは、私が朝、駐車場に来たときから、学生達の動きが特に良いと思われる点が多々見られ、最初から学生達の成長の姿が感じられたからである。受付の付近でも、保護者や子どもの状況を察知して、学生達が適切に案内したり誘導したりしており、来場者の子どもや保護者の置かれた状況に即して考え行動していることが、学生達の動きや行動の流れに表れていたからである。また、来場者への対応についても笑顔で迎え入れる雰囲気があったからである。

もちろん、これは、単に駐車場や受付の一場面だけについて感じた印象ではなく、今回のYOU遊サタデー全体の運営に溢れる雰囲気から強く感じ取られたものである。さらに、私の約20年間の教師経験、とりわけ幾つかの分掌主任として教師集団をまとめてきた経験、また、総合教育センターで現職教員の研修を担当してきた経験に基づく印象といってもよい。

このような雰囲気が事業の運営ににじみ出てくるのは、私の経験からしてもそれほど容易なことではない。企画に対する事前の周到な打ち合わせと準備、目的に対する共通理解、過去の経験とその積み重ね、そして、何といたっても来場者や子どものために働くという深い考えと強い意志が基本になれば、一朝一夕にはできないものであり、そこに、今回は学生達の大きな成長が見られたのである。

最後に、一市民の立場から見て、子どもが大学生と一緒に体験できる場が信州大学の学生達によって運営されていることは、社会の在り方としても大変重要な意義があると思う。

学生の集いから生まれる偉力

附属教育実践総合センター教授 土井 進

1. 第6期「信大YOU遊サタデー」の特色

今期の特色は何といっても、信州大学創立50周年記念式典が行われた平成11年11月13日（土）に、全国13大学の学生・教官百余名が教育学部第一会議室に集まって、フレンドシップ事業全国学生シンポジウムを開催することができ、信大生が他大学の学生と親しく情報交換し、友情（フレンドシップ）を深めることができたことにあると思う。このシンポジウムが機縁となって、学生同士の交流の輪が着実に広がってきた。

12月11日（土）の第19回「信大YOU遊サタデー」には、上越教育大学から4名の学生が参観に訪れた。また、12月18日（土）に上越教育大学で行われたシンポジウムには信州大学から白井敬君（国語4年）を団長とする9名の学生が訪問し、6つの分科会に分かれて討議に参加した。さらに、平成12年3月4日（土）の鳴門教育大学のシンポジウムに増野隆君（社会4年）が、3月6日（月）の熊本大学のシンポジウムに長田雅子さん（教育実践科学4年）と小池悠介君（国語2年）が招かれて、それぞれ体験報告と学生によるパネル討論に討論者として参加することになっている。

若さと情熱にあふれた学生同士が、集まって、語り合うことによる触発は、計り知れない影響力をもつ。全国シンポジウムに参加した熊本大学の学生は、「全国各地から集まった大学の仲間たちとの出会いや、得ることができた喜びは、どれもが私にとってかけがえのないものとなりました。学生が集う時に生まれる力が、いかに大きく広いものであるかを身をもって感じることができました。」と述べている。

第6期は大学キャンパスで3回、YOU遊サタデーが実施された。そのスタッフマニュアルに書いて学生に呼びかけたことを次にまとめておこうと思う。

2. 一人をたいせつに（第17回）

まだ寒さが残っていた3月3日に第6期の実行委員会が発足しました。その日以来、執行部を担当することになった学生の皆さんが一人またひとりと語りあうことによって、これまでに110名もの学生スタッフが集まりました。これは過去最大の人数です。

また、参加者を募集するために執行部の方々はキャプテンの皆さんの協力を得てチラシをつくり、新聞社を訪ねて記事掲載の依頼をし、さらに松本地区の小学校へチラシ配布に出向きました。こうした地道な努力の積み重ねによって、子どもたちの手で書かれた申込はがきが毎日届いています。

「信大YOU遊サタデー」は、学生の熱意を唯一の原動力として運営されています。キャプテンとスタッフの皆さんは勇気を出して講座を開こうと決め、子どもたちのために尽くしていこうと日夜準備に汗を流しています。この「行動」によって、私たちはもっと強い自分になっていくことができる。人間としての器をもっと大きくしていくことができるのだと私は思います。

第17回目のYOU遊サタデーに参加されたすべての皆さんにとって、5月22日が楽しく、有意義な一日となり、その後の学生生活の全てに勝利していく突破口となることをめざし

て、「一人をたいせつに」を合い言葉にがんばりましょう。

3. 地域貢献と国際貢献—21世紀の大航海への船出—（第18回）

第18回目の信大YOU遊サタデーが、教育学部創立50周年記念行事の一環として実施されることになりました。共に喜び合いたいと思います。キャプテン、スタッフの皆さんお一人おひとりのYOUサタへの取り組みが、そのまま50周年を寿ぐ行動となっていくわけです。当日は盛大に祝い、楽しみましょう。

第6期の皆さんによって、YOUサタは2000年を迎えます。新しい世紀、そして、新しい千年紀の開幕とともに、日本も世界も新たな秩序を求めて激動の時代に突入していくといわれています。教員養成学部がこの荒波に船出して、大航海を続けていくためには、「地域貢献」と「国際貢献」という2つの櫓をしっかりと握って、ひたすら前へ向かって漕いでいくことであると私は考えています。

10月30日に上信越道が全通しますが、信州の地は、中国、朝鮮、ロシア、モンゴルを結ぶ環日本海文化圏において重要な役割を果たしていく位置にあると見る人もいます。今回の講座には世代間交流、国際交流を図るプログラムも含まれています。私たちは視野を大きく広げ、目標を高く掲げて、思いっきり情熱をぶつけていきたいと思います。

11月13日の50周年記念学部祭には、第6期の皆さんが主催する「フрендシップ事業全国学生シンポジウム」が、13の教員養成大学・学部の学生代表を招いて開催されます。学生同士思う存分語り合ってください。

なお、長野県教員採用試験の最終合格者は、現役生40名、過年度生30名という厳しさでした。この70名のうち、YOUサタに参加している学生と早朝の「現代教師学演習」に出ている学生を合わせると43名でした。

4. 21世紀の教育改革は「信大YOU遊サタデー」から（第19回）

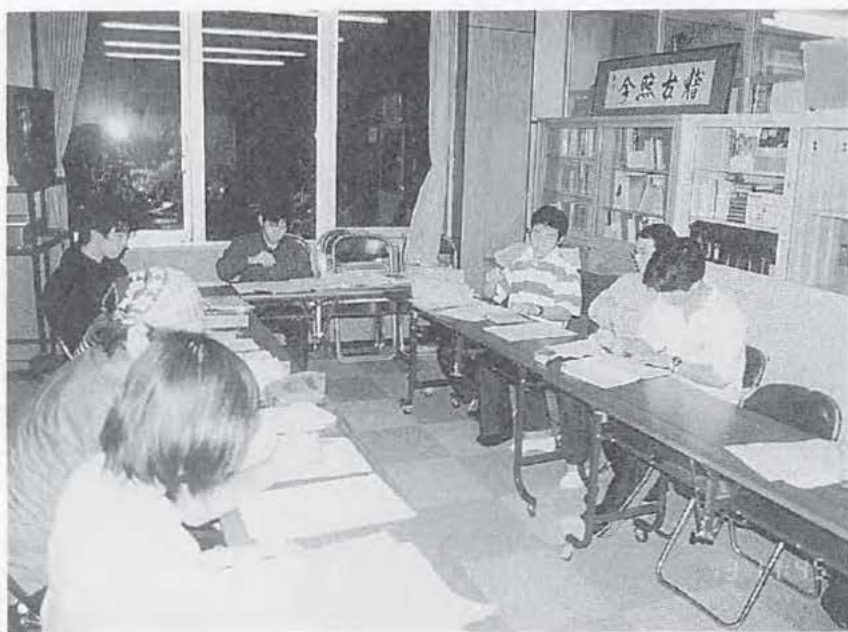
第6期の皆さん、いよいよ最終コーナーを回って直線コースに入りましたね。全力投球で有終の美を飾ってください。キャプテンとスタッフがしっかりと連携して、参加した子どもたちが秘めている素晴らしい宝を引き出し、共に喜びあえるYOU遊サタデーを創造していきましょう。

終わったらすぐに実践記録の執筆に取り組んで欲しいと思います。みなさんが先駆的に取り組んでいるこの実践は、全国の大学から、そして、教育委員会、学校から、大きな期待をもって待たれています。3月中に完成して配布できるようにお互いに頑張りましょう。

間もなく、新しい第3の千年が開幕します。21世紀の教育もまた、信州から狼煙が上がったと、後世の歴史家からいわれるような、時代を画する創造的な教育実践を担って立ちあげましょう。

YOUサタの取り組みは、今はまだ濡れた藁の中に入れられた微々たる炭火に過ぎないかもしれません。しかし、そこから必ずや「教員養成カリキュラムの改善」という火が点き、やがて「新しい教員養成システムの確立」という炎となって燃え上る日の来ることを確信して、学生同士、学生と子ども、学生と地域社会の人々とのフрендシップ（友情）を大事に育てながら、地道に前進していきましょう。

第6期概要



実行委員長

白井 敬 (国4)

副実行委員長

武末 裕子 (美3)

山田 理恵 (実3)

事務局長

田中 崇 (社4)



年間活動計画

1999年4月～2000年3月

	日 月 火 水 木 金 土	実施事項		日 月 火 水 木 金 土	実施事項
4月	<div>1 2 3</div> <div>4 5 6 7 8 9 10</div> <div>11 12 13 14 15 16 17</div> <div>18 19 20 21 22 23 24</div> <div>25 26 27 28 29 30</div>	第6期YOU遊 サタデー執行部発足	10月	<div>1</div> <div>2 3 4 5 6 7 8</div> <div>9 10 11 12 13 14 15</div> <div>16 17 18 19 20 21 22</div> <div>23 24 25 26 27 28 29</div> <div>30 31</div>	9日 出張 YOU 遊サタデー (信州高速 フェスティバル)
5月	<div>1</div> <div>2 3 4 5 6 7 8</div> <div>9 10 11 12 13 14 15</div> <div>16 17 18 19 20 21 22</div> <div>23 24 25 26 27 28 29</div> <div>30 31</div>	22日 第17回信大YOU 遊サタデー (松本)	11月	<div>1 2 3 4 5 6</div> <div>7 8 9 10 11 12 13</div> <div>14 15 16 17 18 19 20</div> <div>21 22 23 24 25 26 27</div> <div>28 29 30</div>	7日 第18回信大YOU 遊サタデー (長野) 13日 フレンドシップ事業 全国学生シンポジウム
6月	<div>1 2 3 4 5</div> <div>6 7 8 9 10 11 12</div> <div>13 14 15 16 17 18 19</div> <div>20 21 22 23 24 25 26</div> <div>27 28 29 30</div>		12月	<div>1 2 3 4</div> <div>5 6 7 8 9 10 11</div> <div>12 13 14 15 16 17 18</div> <div>19 20 21 22 23 24 25</div> <div>26 27 28 29 30 31</div>	11日 第19回信大YOU 遊サタデー (長野)
7月	<div>1 2 3</div> <div>4 5 6 7 8 9 10</div> <div>11 12 13 14 15 16 17</div> <div>18 19 20 21 22 23 24</div> <div>25 26 27 28 29 30 31</div>		1月	<div>1 2 3 4 5 6 7</div> <div>8 9 10 11 12 13 14</div> <div>15 16 17 18 19 20 21</div> <div>22 23 24 25 26 27 28</div> <div>29 30 31</div>	
8月	<div>1 2 3 4 5 6 7</div> <div>8 9 10 11 12 13 14</div> <div>15 16 17 18 19 20 21</div> <div>22 23 24 25 26 27 28</div> <div>29 30 31</div>	11日 出張 YOU 遊サタデー (伊那チャレン兒 プラザ21)	2月	<div>1 2 3 4 5</div> <div>6 7 8 9 10 11 12</div> <div>13 14 15 16 17 18 19</div> <div>20 21 22 23 24 25 26</div> <div>27 28 29</div>	実践記録製作
9月	<div>1 2 3 4</div> <div>5 6 7 8 9 10 11</div> <div>12 13 14 15 16 17 18</div> <div>19 20 21 22 23 24 25</div> <div>26 27 28 29 30</div>	5日 出張 YOU 遊サタデー (こどもフェスタ in OKAYA)	3月	<div>1 2 3 4</div> <div>5 6 7 8 9 10 11</div> <div>12 13 14 15 16 17 18</div> <div>19 20 21 22 23 24 25</div> <div>26 27 28 29 30 31</div>	

<年間講座一覧>

第17回信大Y O U遊サタデー

できるかな～ハト笛～
のぞけば不思議!!～万華鏡づくり～
フリスビろう!?
趣味Y O U悠～一杯の紅茶から広がる世界～
カンカンアイスクリーム
親子でスマッシュパドミントン!
みんなで作ろう探偵物語
ペットボトルの車で遊ぼう
切り絵をつくろう!
昔の楽器「うなり木」
電流イライラ輪を作ろう

第18回信大Y O U遊サタデー

パラシュート部隊 出動!
野菜で紙をつくろう
ほら見てできたよ!自分だけのおべんとう
君もマジシャン～めざせマジックマスター～
ペットボトルのレコードに自分の声をいれよう
キミもコスモポリタン
～世界の人とあそび・歌・おどりをたんのうしよう～
君だけのミラクルスープを作ろう!
紅茶時間(ティータイム)
本日わたあめやさん
めざせ工作名人!～親子で下駄作り～
ゴルフ
みんなで作ろう!ダンボール家具
春にきれいな花を咲かせよう
1からのチューリップ農園づくり

第19回信大Y O U遊サタデー

牛乳パック、大変身???
おかしな和菓子な、
クリスマスのイモスマスケーキを作ろう
帰ってきたスライム
色砂で2000年ミレニアムカレンダーを作ろう
2000年のお正月～いぐさでリースづくり～
家族でトライ～薫製屋さんになっちゃおう～
はじめてのインターネット～ホームページで自己紹介～
パソコン大分解!!
ころころもちもち

伊那チャレン児プラザ21

スライム
こま?コマ?独楽?
アルケマリ

こどもフェスタ in OKAYA

スーパー弾ける!ミラクルボール
電流いらいら輪を作ろう
ずっと使える!自分だけのオリジナルカレンダー

高遠フェスティバル

目指せ!割り箸マスター
チャレンジ・ザ・クッキング
ネイチャーアドベンチャー in 高遠

キャプテン

武末 裕子(美4)
井戸 陽子(家4)
杉山 雅幸(野3)
伊藤 慶(社4)
池田 裕美・押澤 由記(家4)
増野 隆(社4)
田中 崇(社4)・笹崎 典子(数2)
山王 隆晃(工学4)
佐藤 宏樹(社4)
高橋 歩(技3)
高井 久(技院1)

押澤 由記(家4)
池田 裕美(家4)
笹崎 典子(数2)
両角 孝之(数2)
山王 隆晃(工学4)

小池 祐介(実4)
伊藤 慶(社4)
本山 貴雅(社4)
中澤 典子(国2)
町田 豊文・佐野 友和(技4)
高橋 歩(技3)
小池 悠介(国2)

井戸 陽子(家4)

笹崎 典子(数2)

池田 朋美・千野加世子(家2)
中村 祐介・加藤 豊司(理3)
増沢 るみ(国4)
池田 裕美(家4)
森下 房枝(家院1)
佐藤 正志・河西 祐司(技4)
田中 崇(社4)
井戸 陽子(家4)・小池 悠介(国2)

白井 敬(国4)・長田 雅子(実4)
田中 崇(社4)
尾沼 直也(幼4)

笹崎 典子(数4)
高井 久(技院1)
小池 悠介(国1)

田中 崇(社4)・井戸 陽子(家4)
杉山 雅幸(野3)・山田 理恵(実3)
小池 祐介(実4)・那須 良寛(実3)

＜一回のYOU遊サタデーができるまで＞

これは第六期の集大成であった第19回YOU遊サタデーが作られるまでの過程を、仕事内容と資料を含めてまとめたものである。来期のYOU遊サタデーを作っていく中で何かの参考になれば良いと思う。＜月間カレンダー＞にはYOUサタ全体の流れが書いてあり、さらに詳しい仕事内容は、＜仕事内容＞に書かれている。

＜月間カレンダー＞

日	月	火	水	木	金	土
10/17	18 講座募集〆切	19	20	21 定例会	22	23
24	25	26	27 第1回キャプテン会議 遊学プラン〆切	28 定例会	29	30
31	11/1	2 定例会	3	4 定例会	5	6
7 (第18回 YOU遊 サタデー)	8	9	10	11 講座スタッフ募集 係募集(当日) 定例会	12	13
14	15	16	17	18	19	20
		定例会		定例会		
21	22	23	24 第2回キャプテン会議 参加者受付開始	25 定例会	26	27
28	29 みんなでやろう DAY	30	12/1	2	3	4
				HowTOサタデー〆切 係打ち合わせ		
		定例会		定例会		
5	6	7	8	9	10 前日準備	11 第19回 YOU遊 サタデー
		定例会		定例会		
12	13	14	15	16 定例会	17 反省会	18

<仕事内容>

月/日	仕事の内容(全体)	執行部の仕事
10/18	講座募集 …当日の講座の募集。YOUサタが行われるおおよそ二ヶ月前に開始。キャプテン希望者が講座名、スタッフ数などを決めて執行部に申し出る。	・講座募集の状況を見ながら、キャプテンをやる気のあるスタッフに声をかけたりしていく。
/21	定例会 …毎週木曜日、お昼休みに執行部が中心になり、スタッフ・係等が集まり、連絡や話し合いをする場。通常はほとんどの活動の中心になっている。YOUサタ通信が配られる。	・YOUサタ通信作り(試料1)…YOUサタ通信とは定例会ごとに出される通信。定例会に来れなかった人にもわかるように連絡事項が書かれている。定例会前に執行部が作成している
/27	第一回キャプテン会議 …講座募集で集まった講座のキャプテンが、細かい講座内容を決め 遊学プラン に書き、それを持ち合わせて話し合う。執行部、キャプテンだけでなく自由に参加している。	・全講座の遊学プランを人数分コピーしておく。
/28	遊学プラン(試料2) …講座についての細かい内容を書いたもの。講座のねらい、スタッフの人数や参加者人数、講座の流れ、備品などが書かれている。	・キャプテン会議で決定した事項からマスコミ・小学校周りやダイレクトメールの試料を作り始める。
11/8	備品 …準備から当日まで使っていく備品のこと。基本的に個人負担はない。	ダイレクトメール(試料3) …前回のYOUサタに参加した際、次回のYOUサタの試料配布を希望した人に送る。(講座内容、受付の仕方の説明)
/11	定例会 …19回方針、スタッフ募集、当日の係募集 19回の方針 …執行部でまとめた体制の改革や方針を伝える。(今回では、一人一講座制) スタッフ募集 …各講座に配属されるスタッフの希望調査。個人の自由で好きな講座を選んでいき、執行部で調節する。 当日の係 …当日の運営で、必要になる係。19回では本部係、案内係(誘導、駐車場)、写真記録係、Cooking隊、広報係	マスコミ・学校周り開始 …講座名、募集人数、対象年齢、参加費、持ち物などを試料としてまとめた、新聞社やラジオ局などに掲載や出演のお願いに行く。学校は、直接学校に行き、校長先生に試料配布のお願いをする。
/16	定例会 …これからの予定、スタッフ長の決定、キャプテンの一言	・スタッフ募集のアンケートをまとめる。 ・係募集の中から係長を決め、お願いする。
/18	定例会 …スタッフ決定、係の仕事説明	スタッフ長 …募集人数と希望を照らし合わせ、人数の調整をしていく人。
/24	第二回キャプテン会議 …一回目よりかなり詳しい話し合いをする。 参加者受付開始 …参加者名簿から返信用はがきで申し込みが来る。キャプテンはそのはがきにゆうゆうカードを印刷し、送り返す。名札、領収書、修了証を書き、講座ごとの封筒に入れる。 ゆうゆうカード(試料3) …返信用はがきに印刷し、	・備品会計係の打ち合わせ ・当日の場所(教室など)を決定して、学部に申し出る。 ・各講座の封筒(名札、領収書、修了証を入れる)、受付名簿を作る。 受付名簿 …申し込み状況が分かるように、名前、住所、学年などを書きこむもの。はがきを返信したか、領収書、

	<p>子どもへの連絡やメッセージを書き込むもの。これで講座に参加の証明になる。当日持参する。</p> <p>名札、領収書・・・当日つける名札と参加費・教材費の領収証。名札は講座ごと異なる。当日受付で渡す。</p> <p>修了賞（資料4）・・・講座が終わった時に渡す賞状。各講座でオリジナルなものを作っている。</p> <p>定例会・・・講座ごと、係ごとの打ち合わせ</p> <p>みんなでやろうDays・・・講座ごと集まって、教材研究や当日の準備していく週間。</p> <p>教材研究・・・子どもたちが当日楽しく安全に遊べるように準備、実験をしていくこと。</p> <p>定例会・・・講座・係の打ち合わせ、反省会アンケート、スタッフマニュアル配布</p> <p>12/2 定例会・・・係ごとの打ち合わせ</p> <p>HOW TOサタデー切・・・子供達が家に帰ってからも遊べるように、講座の内容（作り方、遊び方など）を書いてまとめたもの。講座終了後子供達に渡す。</p> <p>/3</p> <p>/6 定例会・・・講座ごとの打ち合わせ</p> <p>/7</p> <p>/9 定例会・・・前日の日程確認、講座・係の打ち合わせ</p> <p>/10 前日準備・・・会場の準備、日程の確認、教材研究など最終の準備をする。</p> <p>Cooking 隊・・・お昼ぐらいからお米の準備をする。手伝える人は基本的に全員参加して、放課後までにおにぎりなどの準備を済ませる。</p> <p>/11 第19回YOU遊サタデー</p> <p>/13</p> <p>/16 定例会・・・諸連絡、これからの仕事</p> <p>/17 反省会・・・スタッフ、執行部が揃って反省、感想、今後の課題を話し合っていく。</p>	<p>名札を書いたかチェック欄もある。</p> <p>・はがきが来た順に受付名簿に書き込み、講座ごとはがきを分けていく。</p> <p>スタッフマニュアル作成（資料5）・・・当日の日程や諸注意、各講座の日程などがかかれたマニュアル。これを見てスタッフは活動する。</p> <p>・定例会、教材研究など場所は事前にとって置く。</p> <p>・反省会アンケートをもとに、夕食のお弁当を注文する。</p> <p>・各講座の備品を用意する。</p> <p>・HOW TOサタデーの製本をする。</p> <p>・大学の教職員の方々へのお知らせを配る。</p> <p>・学務係との話し合い。当日のマイク、駐車場のカード、ストーブなどの貸し出し。</p> <p>・受付の封筒用意（HOW TOサタデー、アンケートを入れておく）</p> <p>・救急箱の準備・手配</p> <p>・会場全体の準備や</p> <p>・マスコミまわり、お礼状・・・各社にお礼回りをする。お礼状は大学などYOUサタに関して頂いた先生方などにお礼状を渡す。</p> <p>・備品整理・・・備品庫の整理と備品の最終チェック</p> <p>・会計決算・・・今回の支出・収入の決算報告を作る。</p>
--	---	---

YOUサタ通信

第27号
1999.11.25

「伝えよう！」

第19回YOUサタまで、あと16日！いそがしくなってきました。

○係の仕事って、どんなことするの？

・受付係：各講座から1名(スライムは2名)やっています。当日の参加者の受付をします。

・案内係：受付係以外の人は、みんな案内係です。当日の参加者の案内をします。

参加者数 午前約100人 午後約70人

○開閉会式次第が決まりました。

19日の18回反省会で、19回の開閉会式の式次第が決まりました。以下の通りです。

- | | |
|--------------------|---------------|
| ・開会式 | ・閉会式 |
| 1. 始めの言葉 | 1. 始めの言葉 |
| 2. 実行委員長あいさつ | 2. 成果発表(1分ほど) |
| 3. 土井先生あいさつ | 3. 実行委員長あいさつ |
| 4. キャプテン紹介 | 4. 諸連絡 |
| (講座の導入のような感じで1分ほど) | 5. 見送り |

○YOUサタニュース

・参加申し込みハガキ続々到着!!

24日から受付が開始され、土井先生のお部屋に申し込みハガキが溜まり始めました。来たハガキは、まず「受付係」ボックスに入られます。そして、全体受付状況の紙にチェックをしたあとで、各講座のボックスに振り分けられるのです。いっぱい来てくれるといいですね。

・キャプテン会議終わる

22日、24日とキャプテン会議が行われました。「教材研究をもっとしてください!」となった所を、これからまた各講座で検討してください。スタッフはキャプテンに「キャプテン会議でどうなったの?」と突っ込んでください。そして一緒に講座作りをしていってね。みんなで講座を作っていく!

○集めています!!

・スタッフマニユアルの表紙絵を書いてくれる人1人・牛乳パック 500ml (切り開いてないもの) 10コ・牛乳パック1本 (切り開いてないもの) 50コ・ヨーグルトカップ10コ・カップラーメンの器 (赤いきつねのような形) 10コ・トイレットペーパーの芯 20コ・ドライパー各4コ・ニッパー3コ・金ノコ2コ・紙箱、いっぱい・まつぼっくり、いっぱい・リボン、ひも (ケーキについているようなもの) いっぱい・料理用ボール10コ

戸谷さんありがとね。みんなで感謝感謝です。ありがたく使わせていただきます。

次回の定例会は30日(火)12:30から、図2Fです。文責いんちょ

YOUサタ通信

第29号
1999.12.2

「伝えよう！」

第19回YOUサタまで、あと9日!もう、来週だよ!

○これからの日程

月	日	行事	係関係	講座関係
12月	7日(火)	定例会		講座打ち合わせ
	9日(木)	定例会		前日準備の打ち合わせ
	10日(金)	前日準備		前日準備
	11日(土)	第19回信大YOUサタサタデー当日		

いそがしいけど、みんなでがんばろう!

○集めています!!!

・牛乳パック 500ml (切り開いてないもの) 50コ・牛乳パック1本 (切り開いてないもの) 50コ・ヨーグルトカップ10コ・カップラーメンの器 (赤いきつねのような形) 10コ・トイレットペーパーの芯 20コ・ドライパー各4コ・ニッパー3コ・金ノコ2コ・はんだごて3コ・紙箱、いっぱい・まつぼっくり、いっぱい・リボン、飾りひも、いっぱい・料理用ボール2~3コ

・僕も昨日、牛乳パックやまつぼっくりを持ってきました。センター1Fの備品庫(トイレの左のドア)に入れておいたので使ってください。(いんちょ)

○Cooking隊活動のお知らせ

Cooking隊は、今回10日13:00~センター事務室にて活動します。くわしい活動内容は、Cooking隊の皆さんにお任せします。前回の隊長は、イモスマスのキャップの千野さんと池田さんです。分からないことがあったら聞いてください。

○諸連絡です。

・反省会の出欠アンケートをまだ出してない人は、両角君に連絡してください。今締め切りです。

・スタッフマニユアルを手に入れている人は、土井先生のお部屋に取りにきてください。スタマニ無しでYOUサタに参加するなんて、ダメ、ダメ。

文責いんちょ

信大YOUサタサタデー実行委員会からのお願い

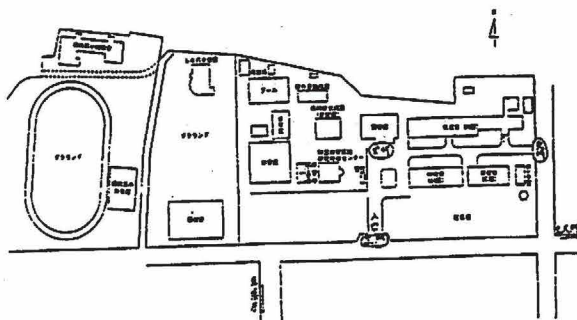
- (1) 第19回信大YOUサタサタデーは、12月11日(土)に信州大学長野キャンパスで行います。
- (2) 大学校内には駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください。長野駅からバスでお越しの際は「岩間田地蔵山町停留所行き」「西条、岩間町所行き」「学木行き」のいずれかに乗車頂き「信大入口」で下車してください。下車した後は、大門交差点で西へまがり約500mほどです。送迎は大人150円、小人80円です。
- (3) 当日は大学周辺及び大学構内に「黄色い旗」を付けた学生を配置し、誘導致します。お困りの点がございましたら、遠慮なく学生にお尋ね下さい。
- (4) YOUサタサタデーは、雨天決行です。ただし雨天の場合、一部の講座で使用教室(場所)が変更になりますのでご注意ください。
- (5) 欠席の場合には、前日までに、必ず信州大学教育学部附属教育実践総合センター 026-238-4245 (留守電あり)まで、ご連絡下さい。
- (6) 保護者の方も、参加・見学して頂いても結構です。また、送り迎えだけでも構いません。安全には十分配慮いたしますので、安心してお預け下さい。
- (7) 講座申し込みに関しては、往復が各1枚につきお1人となります。返信はがきが入場券となりますので、お手数ですが、ご家族・ご兄弟一組の場合でも1人1枚でお預けします。親子参加の講座には、親、子それぞれ1枚づつが必要です。
- (8) 講座によっては、定員になり次第締め切らせて頂きますので、講座は3希望までお書き下さい。
- (9) YOUサタサタデーホームページもございます。是非ご覧ください。
<http://ccer.shinshu-u.ac.jp/you/index.html>

お申し込み方法

- (1) 参加費：100円(損害保険料と教材費)。講座によっては別途教材費が必要になるものがあります。
- (2) 申し込み期間：11月24日(木)~12月3日(金)
- (3) 往復はがきに郵便番号、住所、氏名(ふりがな)、電話番号、学年、参加を希望する講座名(第3希望まで)を明記し、下記の宛先までお送りください。送付の記入例参照。
- (4) 宛先：〒380-8544 長野市西長野6-0
信州大学教育学部附属教育実践総合センター
信大YOUサタサタデー 係

Tel/Fax 026-238-4245

信州大学教育学部附属教育実践総合センター



(はがきの記入例)

50 返信	ゆうびんづえんご	① なまえ(小りがな) ② ゆうびんばんごう じゅうしよ ③ めんわばんごう ④ びくねん ⑤ さんかしたいこうぎ だいいきぼう だいいきぼう だいいきぼう
じぶんのなまえ	じぶんのじゅうしよ	

ゆうゆうカード (入場券)

YOU遊サタデーへのお申し込みありがとうございます。あなたが参加する講座は次のとおりです。当日は忘れ物をしないように気をつけてお越しください。

それでは、会場で会えるのを楽しみに待っています。

講座名

キャプテン ()

持ち物

ゆうゆうカード (入場券)このカードです
100 円 (傷害保険料、参加費) 靴を入れるビニール袋

開催日時 11 月 7 日 (日) (雨天決行)

午後の部 受付 13:00~13:30

終了 16:10 (予定)

※欠席の場合は、必ず前日までにご連絡ください。

当日は遅れないようお越しください。なお、教材費などにつきましては釣り銭のないようお願い致します。

＜連絡先＞

〒380-8544 長野市西長野 6-1 口

信州大学教育学部附属教育実践総合センター

信州大学 YOU 遊サタデー係

TEL/FAX 026-238-4245

修 了 証

さん

あなたは

講座において

自分の力を発揮して立派に
やりぬきました。

今後も今日のことを忘れず
がんばってください。

平成 年 月 日

信大 YOU 遊サタデー

キャプテン



スタッフマニュアル



第 19 回信大 YOU 遊サタデー全体日程表

12 月 10 日	時間	主な動き	場所	午前講座	午後講座
	13:00	Cooking 贈答券開始			
	16:30	全体ミーティング	図 2F		
	16:40	係長総打ち合わせ	図 2F		
	17:00	講座準備		講座準備※	会場準備
	21:00	前日準備終了		準備終了	準備終了
12 月 11 日	7:30	全体ミーティング	図 2F		
	8:15	係配置		図 2F(除受付※)	係の場所
	8:30	受付開始			
	8:45	受付終了			
	8:50	開会式	図 2F		
	9:05	開会式終了、移動	図 2F		係終了
	9:10	講座開始		講座開始※	講座準備
	11:10	講座終了		講座終了	見守りなど
	11:15	閉会式	図 2F		係配置
	11:30	閉会式終了		見守り、報告	
	11:45	お昼タイム			
	12:45	お昼タイム終了		係配置	図 2F(除受付)
	13:00	受付開始			
	13:15	受付終了			
	13:20	開会式開始			
	13:35	開会式終了、移動		係終了	
	13:40	講座開始		講座片付け	講座開始
	15:45	講座終了		反省会など	
	15:55	閉会式		係配置	
	16:10	閉会式終了			見守り、報告※
	16:30	全体集合	図 2F		
	16:40	後片付け		会場片付け	教員片付け※
	17:30	最終点検			
	18:00	全体反省会	生協		
	19:30	解散			

※は終日講座

☆キャプテン・スタッフへの注意事項☆

《安全第1》

絶対けが人の出ないようにしてください。万一、けが人が出た場合には、非常事態マニュアルに従い、迅速かつ冷静に対応してください。その際は、他の子どもが動揺しないように配慮して講座を運営してください。また、どのような状況が起こるか分からないので、その時々に応じ、臨機応変に対応してください。

《一問一会！》

参加者（子どもだけでなく、保護者の方も）には、笑顔で気持ちよく接しましょう。最後に参加者が笑顔で帰れるように、そして、今日の出会いが次の出会いにひろがるように、素敵な一日にしましょう。

《備えあれば憂いなし！》

キャプテンとスタッフの打ち合わせ（遊学プラン・備品・時間配分 etc）をしっかりとっておいてください。特に、1年生スタッフとの連絡は、しっかりと！

《時間厳守！》

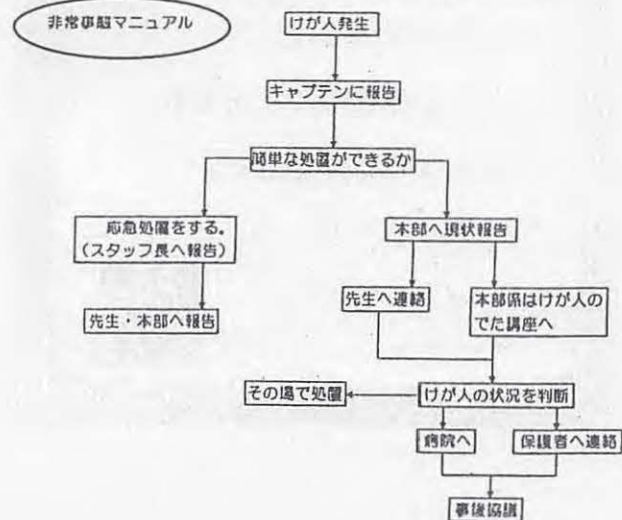
時間は、しっかり守りましょう。朝の集合時間に遅れた場合は、おいていきます！

当日の予定は、しっかりと把握しておきましょう。特に、講座終了時間（午前 11:15、午後 15:30）を厳守し、閉会式が時間通り行なえるよう配慮してください。

《環境クリーン大作戦》

合い言葉は、「来た時よりも美しく！」です。

講座が始まる前に、参加者を迎えられるよう環境を整備・美化しましょう。また、後片付けに時間のかかる講座は、終了時間に間に合うように十分配慮してください。

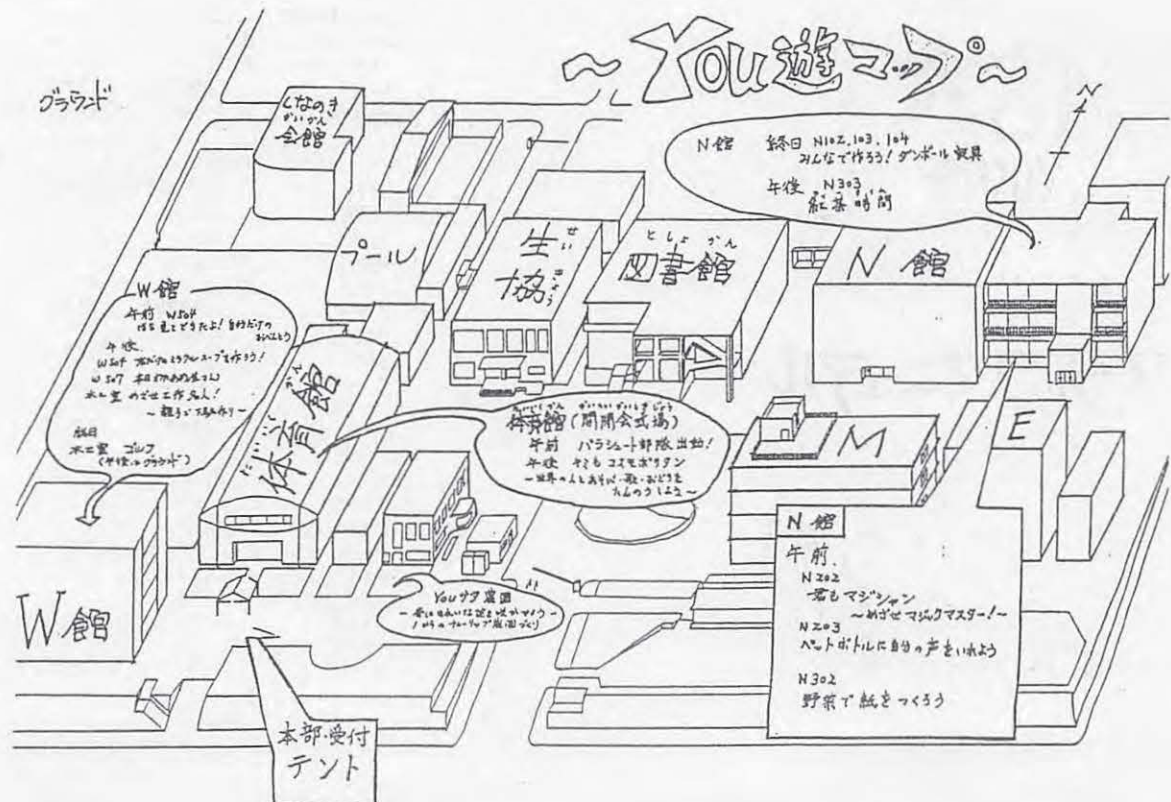


<各講座日程表>

講座名 パソコン大分解！！

スタッフ名 田中 崇（社 4）長田 雅子（実 4）
山王 隆晃（工 4）大場 浩幸（数 2）

時	分	スケジュール（場所）
7	30	全体ミーティング
8	15	案内係配置（各配置場所）
9	50	係終了
	00	講座準備（W505）
10	00	他講座参観 閉会式参観 見送り（案内係）
11	30	お昼（自由）
12	45	係配置（長田「受付」他「図2F」）
	45	講座開始（W505）
13	40	
14		
15	45	講座終了
	55	閉会式（図2F）
16	10	見送り
	30	全体集合（図2F）
17	40	片付け（W505）
	30	終了
18	00	反省会（生協）



〈係紹介〉

執行部

白井 敬（国語専攻 4年）

1. 執行部の目的

執行部（実行委員長、副実行委員長、事務局長）の仕事は、「信大YOU遊サタデー」の裏方の仕事です。それは、各キャプテンの伝えたいことを、一番参加者に伝えやすい環境を作る手伝いをするということです。そのための具体的な仕事を以下に述べます。

2. 年間活動計画を立てる

まず年間活動計画を立てます。「信大YOU遊サタデー」は授業ではありません。そのため、学校の行事や地域の行事と重ならないように（特に教育実習、教員採用試験、学校のテスト、夏休みとは重ならないように！）しながら、慎重に日程を決めます。今年は、5月の松本キャンパスでの第17回と、11月の第18回という年2回の予定でした。しかし、3年生に引継ぎをするために12月も行うことにし、年3回行うことにしました。

3. 講座の募集

活動計画が決まると、次に講座の募集をします。「信大YOU遊サタデー」は講座で成り立っているものなので、講座を開きたいという人がいないと「信大YOU遊サタデー」は開催できないのです。講座募集は、「信大YOU遊サタデー」を開催する日からだいたい2ヶ月前に行わなければなりません。講座が集まるとキャプテン会議を開き、講座の内容やスタッフの人数、講座を行う場所、備品について検討します。このキャプテン会議で、中止になってしまう講座もあります。

4. スタッフの募集

次に、スタッフの募集という仕事があります。キャプテンの講座はキャプテン一人でできるものもありますが、ほとんどはスタッフを必要とします。執行部は、スタッフを募集するために、学内にポスターを掲示して、学生に「信大YOU遊サタデー」への参加を呼びかけます。そして、毎週木曜日の昼休み 12:30～13:00 の間に定例会を開き、スタッフ募集のアンケートをします。それをもとにスタッフを講座に割り振ります。キャプテンには講座スタッフの名簿を、スタッフには次の定例会でスタッフ一覧を配布し、人数の調整をします。

5. 場所の確保

普段の仕事として、場所の確保という仕事があります。講座を開く際に使用する教室はもちろん、講座の準備に使用する教室や定例会の教室を、大学からお借りしなければなりません。この仕事は予定が決まったらすぐにしなければならない仕事です。第18回の「信大YOU遊サタデー」では、この仕事が遅くなったために、いつも開閉会式場として使わせて頂いている図書館の2階が使用できずに、寒い体育館で開閉会式を行うことになってしまいました。体育館がお借りできただけで本当にありがたかったのですが、参加者のみなさんに寒

い思いをさせてしまったことは悔やまれます。

6. 当日の準備

開催当日のために、会場の準備はもちろん、参加スタッフの動きまですべて決めなければなりません。会場の準備は参加者のことを第一に考えて行います。参加者がストレスを感じずに講座に参加できる環境を作ることが目標です。参加スタッフの動きも同様です。計画を立てるときはいつでも、自分が何をしたいかわからないという状態が存在しないようにしたいと考えていました。

「信大YOU遊サタデー」はすべて学生の手によって運営しているので、係の仕事も重要です。その割り振りも大切な仕事です。スタッフには「スタッフマニュアル」というものを作成し、配布しているのですが、その内容もできるだけ細かいタイムスケジュールを載せるようにしていきました。

当日、本部係は本部テントで非常事態に備えて待機しています。参加者の案内やマスコミへの対応も行います。本部係は講座には参加しません。

7. アンケートの作成

「信大YOU遊サタデー」は私たちの勉強の場所です。自分たちの活動が参加者の皆さんにとってどのような意味を持っていたのか、自分たちにとってはどのような意味があったのか、それを確認するためにアンケートを配布しています。その結果を反省会にいかし、次の「信大YOU遊サタデー」に生かしていきます。

8. 渉外活動

このほかに、渉外活動も行っています。出張「信大YOU遊サタデー」というものもあり、これは県の教育委員会などから依頼がくるのですが、依頼を受けるかどうかは自分たちで決定しています。

マスコミ回りも行います。講座とスタッフそして、場所が確保できたとしても参加者がいなければ「信大YOU遊サタデー」は開催できません。そのために、マスコミを通じて市民のみなさんに「信大YOU遊サタデー」開催のお知らせをします。この仕事はマスコミ各社に飛び込みでお願いにいくので、なかなか度胸のいるものでした。マスコミを通じての募集だけでは講座ができないというときは、大学の近くの小学校にパンフレットを持ち込んで、配布をお願いしました。

地域のみなさんから「信大YOU遊サタデー」にお問い合わせを頂いたときの対応も本部係が行います。

9. まとめ

実行委員長であった私は、講座に参加しません。ですから、「子どもとふれあえないのに面白いの？」とよく聞かれます。しかし、参加者が学ぶための環境を作るというのは、本当に楽しい仕事だし、やりがいがあります。たとえ子どもとふれあうことができなくても、参加者に何かを伝えるということは「信大YOU遊サタデー」全体を通してできるのです。こんな楽しい仕事ができる本当によかったと思います。ありがとうございました。

会計係

池田 裕美（家庭専攻 4年）

両角 孝之（数学専攻 2年）

私たち会計係の仕事は主に二つある。一つ目は、講座を開くにあたってかかる教材費の見積もりである。キャプテンが講座に必要なもの・買って欲しいものを書いた紙を提出した後、備品係と共に、金銭面についてや、何か他のもので代用できるかを検討し、キャプテン会議に臨む。キャプテン会議では、キャプテンに提案をしたり、センター備品として買うのか、自分でお店に行行って調達するのかを聞き、再び教材研究に取り掛かってもらう。そして、第2回目のキャプテン会議で最終決定する。

二つ目の仕事は、当日集めた参加費を確認し、お金を立て替えてもらったキャプテンに返金することである。これはYOUサタが終わり次第すぐにやらなければならない。その後、会計報告を作成し、一回の仕事が終わる。

今期良かった点として挙げられる事は、今まで曖昧だった会計の規範を文章にまとめ、皆に伝えることができた事である。また、反省点としては、会計報告を作るのが遅くなってしまい、定例会でみなさんに報告できなかった事である。

会計係はYOUサタの全金銭の出納をする立場となるので、YOUサタの中でも大変責任の重い係である。ゆえに来期は今年以上に正確で迅速な会計というものを行ってほしいと思う。

出張担当係

増野 隆（社会専攻 4年）

1. 発足の経緯と仕事内容

この係は今期から新設されたものであり、キャンパス以外において他機関と連携して行う「出張YOU遊サタデー（以下「出張」）」の全般について担当する係である。今期は、出張が3回、しかも3ヶ月連続してあった為、執行部の負担を軽減するという狙いから中途に新設されたものである。具体的な仕事内容は、渉外活動（他機関〔今期は岡谷市教育委員会等〕との連絡・打ち合わせ）、参加スタッフの募集、各講座への割り振り、現地までの交通手段の確保、当日の全体のまとめ等である。

2. 反省・改善点

一番の反省点は、執行部の負担軽減を狙って新設したこの係にあって、私1人で3回の出張を全て担当した為、私自身、負担が大きくなってしまい、本末転倒な結果になってしまった感は否めない。来期にもしこの係があるのであれば、1つの出張に対して1人が担当した方が良いかも知れない。

良かった点としては、渉外活動等を通して他機関の方とお話できたことは、本当に良い勉強になった。皆さんの協力のおかげで3回の出張とも成功できたことには、とても感謝しています。ありがとうございました。

コンピュータ係

長田 雅子（教育実践科学専攻 4年）

林 一真（家庭専攻 2年）

この係の今期の活動は大きく2つありました。1つ目はホームページの管理・運営です。第17回YOUサタホームページから製作を始め、3回のホームページ製作を重ねることで、YOUサタにおけるホームページのあり方について考えてきました。YOUサタで開かれる講座を多くの人たちに見てもらうために、活動の様子の写真や、キャプテンの声を載せたりし、最後の第19回YOUサタのホームページでは参加者の意見をも載せることができました。他大学のフレンドシップ事業の参考になるもの、つまりYOUサタが一目見てその活動が分かるものを意識したページにより近くなったと思います。

2つ目にはスタッフの名簿の管理です。スタッフの登録をし、必要な時にデータを取り出すことが主な内容であります。これは11月からはスタッフ長の仕事になりました。

この係はこれまで、コンピュータを比較的良好に扱える学生が担当し、コンピュータを使わなくてはできない仕事をする、というあいまいな内容の係でした。しかし今ではほとんどの学生がコンピュータを扱え、また事務的な仕事にはこれが欠かせなくなっています。もっと仕事内容を具体化した係を再検討すべき時ではないでしょうか。

ところで情報という面で、今期はYOUサタにとって世界がひとまわり広がった年でもあります。フレンドシップ事業のシンポジウムが信州大学で開催され、全国の学生と共に活動についての意見を交換させる機会があったからです。今後もそれぞれの活動のよさを分かち合えるように、他大学とも情報交換できるシステムを作ることが課題だと思います。

備品係

加藤 豊司（理科専攻 3年）

中澤 典子（国語専攻 2年）

備品係の主な仕事は、講座で使用する備品の検討、確認、発注、用意と管理である。キャプテンに備品一覧表（備品庫にある備品のリスト）と、備品購入表（購入が必要な備品のリスト）を提出してもらい、会計係と金銭面についてや、他のもので代用できるかを検討する。そして、第二回キャプテン会議で用意する備品、購入する備品を決定する。そして、みんなでやろうDAYSに間に合うように発注し、用意する。それからYOUサタが終わると、備品の片づけ、整理をする。今期は、そのような仕事を徹底して行なった。

私は、キャプテンが必要な備品を明確にして講座に臨んでほしいという願いを持っていた。気がついたら備品を購入すれば良いという考えでは、当日トラブルが発生する可能性が大きい。また、備品を把握出来ずに必要以上購入してしまうと、無駄が発生する。本当に何が必要なのか、余分なものはないか、代用はできないのかを常に考え、節約という心を持ってほしい。そして、使用する備品を明確にしたり、節約したりするのはなぜか、ということを考えてほしい。

本部係

杉山 雅幸（野外活動専攻 3年）

1. 本部係の役割

本部係はYOU遊サタデー当日の運営を、よりスムーズかつ安全に進行する役割を担っている。仕事内容は、①講座進行におけるタイムキーパー②変更への対応（当日参加など）③緊急連絡所 ④マスコミへの対応 ⑤会場の案内 ⑥アンケートなどの参加者への配布物の管理・分布 ⑦参加費の管理 などである。

本部係を担当する人は、各講座に参加することはなく、その時間本部テントにて非常時に備えて待機する。

2. YOUサタ戦線異常無し

信大YOU遊サタデーが始まって以来、救急車を呼ぶような大きな事故やけがが起きたことはまだない。小さな擦り傷や切り傷は、遊びにはつきものだ。しかし今後、大事故が起らないという保証はない。もしもそのような事態が起きてしまった場合、その後のYOUサタの存続が危うい。

本部係は、大変でもなければ忙しい係でもない。だがなくてはYOUサタが始まらない。そして言うまでもなくテントから必要以上に動かない方が望ましい係と言えよう。

受付係

島崎 真由美（英語専攻 4年）

桑山 知美（家庭専攻 2年）

「受付」それはYOU遊サタデーに来てくれる子供達が、一番初めに通過する機関である。何事にも第一印象は大切だ。同じことでも第一印象が良ければ良く感じるし、悪ければ悪く感じてしまう。つまり、第一印象によってこれから始まることへの感じ方が大きく変わってくるのである。組織としてのYOU遊サタデーの第一印象を与えるのが、「受付」であると考え。受付の仕事は以下のようなものであった。

- ・参加希望はがきの整理
- ・講座メンバーへの登録
- ・名札の確認
- ・当日の受付
- ・参加費受け取り

受付の仕事は責任重大である。先に述べたように、第一印象を与えるからである。また、頂いた参加費を扱う責任もある。受付で大切なのは、戸惑いを見せないことだと思う。戸惑いを見せてしまつては、子供達だけでなく、これから自分の子を預けようとする保護者の方にまで不安な気持ちを抱かせてしまうからである。保護者の方が、安心して預けられるようにしなければならない。それがYOU遊サタデースタッフの責任でもある。そしてそんな受付係の命は「スマイル」だ。

写真記録係

末久 友貴（国語専攻 4年）

写真記録係の仕事は、YOU遊サタデーの活動の全てをカメラ・ビデオ・デジタルカメラで記録する事である。記録写真係は、子どもと直接触れる機会が少なく、裏方的側面が強いが、YOU遊サタデーにおいて果たすべき役割は非常に重要なものである。

私が実際に写真記録係をする上で、どのような事を心掛けていたかという点、まず、器材の中には壊れやすいものが多いので日頃の点検をしっかりとしておくということである。そして、極力子どもとスタッフの邪魔にならないように記録をとるということである。さらに、YOU遊サタデーの雰囲気や空気の伝わるような記録をとっていくということである。そのため、活動以外（例えば、昼ご飯の様子など）の記録でもいいなと思えば積極的にとるようにした。

第19回のYOU遊サタデーからは、新たな試みとして、各講座のタイムスケジュールを出してもらい、その講座のポイントとなる所をあらかじめ確認し、その部分を重点的に記録として残すという事や、各講座の記念写真を撮るという事を行ってみた。

写真記録係だから器材を片手に、各講座を回って記録をとっていくというだけでなく、より良い記録の形にはどのようなものがあるのだろうか、どうすればみんなに喜んでもらえる記録をとることが出来るのかということを考え、試行錯誤していく事も写真記録係として重要な事と言えるだろう。

駐車場・誘導係

中村 祐介（理科専攻 3年）

○駐車場係の仕事内容：路上での駐停車は、参加者にとって危険を伴い、また、交通の妨げにもなるので、車の乗り降りや駐停車を安全かつスムーズに行うために、参加者の車を駐車場に誘導し、車から降りた参加者を誘導係に引き渡す。

○誘導係の仕事内容：参加者が迷わないように、受付まで案内し、受付を済ませ、開会式会場にいる参加講座のキャプテンの所まで案内する。

駐車場・誘導係は、参加者が安全にYOUサタに参加できるようにすることが一番の仕事なのですが、仕事とは別にもう一つ重要なことがあります。それは、「笑顔で、元気良くあいさつ」をするということです。なぜならば、参加者がYOUサタに来て一番最初に会おうのが、駐車場・誘導係であり、YOUサタを楽しんでもらうためには、最初に出会った時の「笑顔で、元気良くあいさつ」ということが、とても重要なことだと思うからです。このことを常に心掛け、駐車場・誘導係を行っています。

開閉会式係

山田 理恵（教育実践科学専攻 3年）

1. 仕事内容

- ①開閉会式の司会進行・・・（開会式）始めの言葉、先生の話、講座発表、諸注意（閉会式）委員長の話、成果発表、終わりの言葉
- ②受け付け時間中のパフォーマンス
 - ・・・受付開始から開会式の始まるまでの間、子ども達の不安や緊張を解き、楽しい雰囲気を作る為のもの。
 - 内容は係長と係りで決める為毎回異なり、個性的なものが見られる。（手遊び、歌、ゲーム、ダンス）
- ③事前の内容決め・・・講座発表、成果発表のやり方また、それらを行うかなど、前回の反省を生かしながら話し合っていく。

2. 存在意義

仕事の内容からもキャプテンが掛け持つことは非常に大変である。19回ではこの係りを廃止し、各講座で受付時間中は話をし、ゲームをやるなど子どもの相手をし、開閉会式はキャプテンが分担して司会進行をした。誘導との関連で、スタッフが少ない講座の対応などに問題点があげられた。来期でも十分話し合い、子どもの立場にたって必要なのか必要ではないのか、この係りの存在意義を考えてもらいたい。

Cooking 隊

武井 恵美（家庭専攻 4年）

1. Cooking 隊の役割

子どもたちと1日楽しく、元気に、安全に過ごすためにも、1日の活力の源である朝食を欠かすことはできません。しかし、YOU遊サタデー当日は朝も早く、各自で朝食を摂ることはなかなか大変です。そこで、Cooking 隊は、スタッフの皆さんに1日の元気を充電してもらうため、朝食を準備します。また、スタッフ全員で食べることによって、『皆さん、今日も1日ががんばりましょう！』という気持ちをお互いに持ってもらうことにもつながると思います。

2. 仕事内容

活動は前日の午後がメインです。それまでに材料の買い出しを行っておきます。朝食として用意するものは、おにぎりとお味噌汁（即席のもの）と漬物です。前日の午後にご飯を炊き、都合のつくスタッフとにぎります。後はお味噌汁用のお湯などを用意し、当日の朝に出します。以上が主な仕事内容です。

会計報告

1. 収入の部

講座名	人数	保険料	教材費	収入合計
<17回>				
できるかな～ハト笛～	7	100×7	400×6	3,100
のぞけば不思議！！～万華鏡づくり～	30	100×30	200×30	9,000
フリスビろう！？	10	100×10	0	1,000
趣味YOU悠～一杯の紅茶から広がる世界～	8	100×8	400×8	4,000
カンカンアイスクリーム	45	100×45	150×45	11,250
親子でスマッシュバドミントン	18	100×18	50×18	2,700
みんなで作ろう探偵物語	12	100×12	0	1,200
ペットボトルの車であそぼう	18	100×18	100×18	3,600
切り絵をつくろう！	15	100×15	100×15	3,000
昔の楽器「うなり木」	3	100×3	0	300
電流イライラ輪を作ろう	9	100×9	200×9	2,700
<18回>				
パラシュート部隊 出動！	17	100×17	100×17	3,400
野菜で紙をつくろう	12	100×12	200×12	3,600
ほら見てできたよ！自分だけのおべんとう	21	100×21	300×21	8,400
君もマジシャン～めざせマジック・マスター～	30	100×30	150×30	7,500
ペットボトルのレコードに自分の声を入れよう	9	100×9	400×9	4,500
キミもコスモポリタン～世界の人とあそび・歌・おどりをたんのうしよう～	30	100×30	0	3,000
君だけのミラクルスープを作ろう！	11	100×11	200×11	3,300
紅茶時間（ティータイム）	10	100×10	400×10	5,000
本日わたあめ屋さん	10	100×10	300×10	4,000
めざせ工作名人！～親子で下駄作り～	9	100×18	1000×9	10,800
ゴルフ	3	100×3	400×3	1,500
みんなで作ろう！ダンボール家具	6	100×6	100×6	1,200
一春にきれいな花を咲かせようー1からのチューリップ農園づくり	1	100×1	0	100
<19回>				
牛乳パック、大変身???	5	100×5	0	500
おかしな和菓子な、クリスマスのイモスマスケーキを作ろう。	11	100×11	200×11	3,300
かえってきたスライム・午前	29	100×29	200×29	8,700
色砂で2000年ミレニアムカレンダーを作ろう！	15	100×15	200×15	4,500
2000年のお正月～いぐさでリースづくり～	20	100×20	50×20	3,000
家族でトライ！～燻製屋さんになっちゃおう～	5家族	100×17	2100×5	12,200
はじめてのインターネット～ホームページで自己紹介～	3	100×3	200×3	900
かえってきたスライム・午後	28	100×28	200×28	8,400
パソコン大分解!!	7	100×7	100×7	1,400
ころころもちもち	3家族	100×11	1600×3	5,900
総計：17回(41,850)18回(56,300)19回(48,800)				146,950

2. 支出の部

講座名	購入品名	価格	講座名	購入品名	価格
<17回>			マジシャン	ひも	*
ハト笛	テラコッタ粘土	*	レコード	ヒノキ	1,039
	郵送料	660		ファルカタ工作材	1,354
万華鏡	透明下敷き	*	ミラクルス ープ	材料費	2,313
	ビーズ	1,770		ハガキ代	50
趣味YOU悠	クリアコップ	*	紅茶時間	果物・菓子等	1,768
	紙皿	*		ハーブ代	630
	スティックシュガー	*	わたあめ	虫ゴム	*
	紅茶・菓子等	4,081		モーター	*
カンカンアイス クリーム	塩	*		ざらめ	*
	砂糖	*	下駄	はなお	5,400
	布テープ	*		木材	3,885
	卵・牛乳等	4,050	ダンボール	ボンド	*
	お皿レンタル代	250	家具	カッターの刃	*
バドミントン	ビニルテープ(太・赤)	*	本部	傷害保険料	4,000
	飲み物代	697		製本テープ	*
ペットボトルの車	ビーズ	650	<19回>		
切り絵	黒八つ切り画用紙	*	イモスマス	さつまいも	992
	厚紙	*		上新粉	207
	トッシングペーパー	*		クッキングペーパー	312
うなり木	たこ糸	312	スライム	磁石	3,780
イライラ輪	プラスチック画鋏	*	カレンダー	フィルム・台紙など	5,750
	みの虫クリップ等	2,125	いぐさリース	スプレー	504
本部	傷害保険料	4,000	燻製屋	羊腸・豚肉など	11,884
	切手	240	ホームページ	フロッピー・インク	600
	領収証	283	パソコン	キーホルダーリング	315
	お茶(バスの中での)	5,628	ころもち	あずき	500
	ビニルひも(白)	*		炭代・ガス代	1,000
	2HDフロッピー	*		もち米	1,750
<18回>				まめ	856
パラシュート	棒・ビニル袋・糸等	1,207	本部	傷害保険料	4,000
野菜で紙	くぎ・ちょうつがい	525		ゴミ袋	*
	障子のり・スポンジ	525		領収証	*
おべんとう	材料費	6,960			
支出合計: 17回(24,746) 18回(29,656) 19回(32,450)					86,852

(注) *は実践センター経費より

実践記録



第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《のぞけば不思議！！～万華鏡づくり～》

第17回 5月 22日（午後） 参加者数 30名

キャプテン	井戸 陽子（家庭専攻4年）	指導教官	角尾 篤子
スタッフ	島崎真由美（英4）、矢沢恵美子（国際4）、目崎友子（家4） 桑山知美（家2）、宮崎恭恵（家2）、中澤典子（国2）、居澤結美（社1） 平賀倫子（障1）、安藤由美子（言1）、夏井一智（野1） 青木貴子（生1）		

・ 講座のねらい

万華鏡の構造を知り、自分の身の回りにあるのもで作れる喜びを実感してほしい。
また、友達と関わりながら自分なりの工夫をして自分だけの万華鏡を作ってほしい。

・ 講座の展開

活動内容	支援、注意点、その他
1. 教室に移り自己紹介をする	<ul style="list-style-type: none"> ・キャプテンの紹介をする。 ・参加者、スタッフはグループごとに紹介しあう。 <p>※グループは学年の近い者同士を基本とする。（兄弟は一緒）</p>
2. プラスチック板を3枚に切る	<ul style="list-style-type: none"> ・材料の紹介をし、プラスチック板を切る。（ハサミや刃物の扱いに注意させる。） <p>※高学年ほど作業が多い。（線を書くなど）</p>
3. 万華鏡の構造、作り方を説明する	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者を集め、大きな万華鏡でプラスチック板が互いに反射しあっていることを確認する。 ・ビーズが入る所のつくりを確認する。
4. 万華鏡づくりをする	<ul style="list-style-type: none"> ・プラスチック板で3角形を作る。 ・ラップの芯を切る。（のこぎりの扱いに気をつけさせる。） ・4.2cmの円（ラップの円周）をプラスチック板で2つ切り取り、1つだけ紙ヤスリで不透明にする。 ・ラップの芯にビーズを入れる場所をつくり、ビーズを入れる。 ・のぞき窓を作り万華鏡を完成させる。 ・外装を工夫する。 <p>※高学年ほど作業が多い。（のこぎりの使用など） ※互いに協力し、楽しみながら作ることが出来るよう配慮する。</p>
5. 発表会をする	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の作った万華鏡を見合う。
6. 片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・全員で片付けをする。
7. 修了書を渡す	<ul style="list-style-type: none"> ・グループごとにスタッフからコメントを書いて修了書を渡す。
8. 会場に戻る	

のけば不思議！！～万華鏡づくり～

井戸 陽子（家庭専攻 4年）

1. 講座誕生の秘話

私自身の「万華鏡を作ってみたい」という思いからこの講座は出発をした。以前の第三期実践記録にガラスから万華鏡を作ったという前例が載っており、そのときのキャプテン（OBの今井健文さん）に電話で連絡を取り、当時の講座の様子をお聞きした。（万華鏡をガラスで作った場合、材料費が高くなるとのことであった。）そこで安く、身近なもので、簡単に出来る万華鏡の教材研究を行い、YOUサタで講座として開くことが可能であるかを検討した。その結果、下敷きに使っているプラスチック板で万華鏡を小さな子どもでも作れる事がわかり、講座を開くことにした。

2. 教材研究

- ・ガラスの代わりにプラスチック板を用いた。
- ・15.5センチのラップの芯を万華鏡の筒の部分に使い、ビーズをいれる部分の工夫した。
- ・半透明な板を作るためプラスチック板をやすりでこするようにした。

3. 当日までの準備

見本づくりや教材づくりを主にした。幼稚園の年長や小学校低学年の参加が比較的多かった。小学2年生以下の参加者には難しいと思われる作業（定規で線をまっすぐに引くこと、プラスチックを線どおりに切ること、のこぎり・カッターの使用など）を省いた材料を用意した。また、どの参加者にも自分で作った万華鏡を持ち帰ってもらう事が出来るよう、失敗したときの予備の材料を多く用意した。そして、当日参加者が困惑しないよう、グループ分けをし、名前を画用紙に書き込んだ。

4. 当日の様子

当日開会式会場で、YOUサタが始まるのを待つ万華鏡づくり参加者の名前と顔を一致させようと、私は1人ひとりに声をかけていった。友達同士で参加してくれた子ども達、自分一人だけで参加してくれた子ども達、お母さんが付き添って参加してくれた子ども達、兄弟で参加してくれた子ども達、家族で参加してくれた人達とさまざまであった。元気にスタッフと遊んでいる子どもも居れば、不安そうな顔、心配そうな顔の子どもも居た。私が声を一人づつかけるのは名前を一致させるだけではなく、参加者と保護者の不安を少しでも和らげる目的や、「私がキャプテンですよ。」と紹介の意味も含んでいる。

講座会場では参加者がスムーズに自分名前がある席についてくれ、「万華鏡を早く作りたい!!」といき込んでいた。そして、万華鏡がうまく作れるか心配していた小学2年生以下の参加者も用意した教材でうまく万華鏡が作れ、なおかつ予想以上に早く万華鏡が作れてしまい、活動内容が物足りなかったようであった。そのため、のこぎりを使う経験の少ない小さい子ども達に、スタッフとともにラップの芯をのこぎりで切る活動を急遽とり入れた。もっと小学2年生以下でできる活動を増やす必要を感じた。例えば、ビーズなど中身を自分で工

夫できるようにするなどである。

講座の時間内に参加者全員が万華鏡を作る事ができ、紙を張ったり絵を描くなどをして万華鏡の外装を自分で工夫し、世界に1つしかない自分のだけの万華鏡を手にしていった。また、友達の万華鏡と交換してのぞきあい交流する姿が見られた。「もう1つ家で作りたいから材料が欲しいな」と言う子どもや、出来あがった万華鏡を家族の人にのぞかせている子ども達の姿を見てスタッフ一同とてもうれしい気持ちになった。

5. 考察

参加者が大勢であったこと、低学年の参加者が多かったことなどから、万華鏡を完成できない参加者がでないようにと考えて、材料の準備をしすぎてしまった。確かに、普段から小学生との接触がないため、どの活動がどの年齢で出来るのかということを見極め、講座で設定するのは難しいことであった。したがって私は保育園に勤めている知り合いから話を聞き講座の準備を進めた。参加者がみな万華鏡が作れた事は大変良かったが、参加者の創意工夫がもっと引き出せるような支援の在り方、教材準備の仕方を考えていく必要があると感じた。また、作業をする中で難しく感じた事は、小学2年生以下の作業とそれ以上の学年の作業が多少異なっていたにもかかわらず、いっせいに作業を進めていった事である。年齢ごとに構成したグループをつくりスタッフがついていたので、グループごとに進められるような活動にする事でもっと円滑な講座に出来たのではないかと思う。

講座中に万華鏡の構造について触れる実験で、スタッフが協力して作った大きな万華鏡は子ども達の心を奪うものとなった。この万華鏡は分解する事ができ、万華鏡の構造が分かる仕組みになっている。まだ万華鏡をのぞいていない子どもは大きな万華鏡をのぞいている子どもの顔をじっと見つめ、大きな万華鏡をのぞく順番を待っていた。多くの子どもは万華鏡が反射の構造であることを製作の段階から気づいており、実験のときには「三角になっているんだよ」という元気な声が聞かれ盛り上がった。しかし、構造と作り方の説明がうまくつながらなかったようで、さらなる教材の改良と説明の仕方を工夫する必要がある。

後日届いたアンケートには「万華鏡が簡単に出来てびっくりした。」「まわりの人たちもきれいな万華鏡を作っていた。」「ラップの芯をのこぎりで切ったのがおもしろかった。」などが書かれており、万華鏡づくりの講座の時間を楽しく過ごしていたことがうかがえる。また、「HOW TO」を見て家で万華鏡を作ったという保護者からのアンケートがあった。「身近なもので簡単に出来る」感動を、講座に参加した人だけでなく、その友達、その家族、「HOW TO」を見た人にも感じてもらえる講座に出来たと感じる。今後の改善点はいくつかあったが、ともに講座をがんばってくれたスタッフの皆さんありがとう！

6. スタッフの言葉

- ・子ども達はどこまでやれて、どこから私達が助けてあげなければいけないのか。それを考えるのは本当に大変な事であると感じた。 安藤 由美子（言1）
- ・子ども達が「なぜこうなるんだろう？」と考える事がすごく大事で、それに答えてあげる大人がいることが大事なのだと思う。この講座はただ単に工作をするだけでなく、そういう意味でもとても意味のあるものだと思う。 平賀 倫子（障1）

- ・同じ学年でもカッターの使い方、はさみの使い方に差があったので、材料を多目に用意しておいて良かった。また、子ども達が一生懸命につくって「すごい、オー」と喜んでいる姿を見て私も楽しかった。作る喜び、出来あがった喜び、それを見せ合う喜びを味わえ、反射の不思議さをも体験できていい題材だったと思う。 目崎 友子(家4)
- ・私が一番うれしかった事ははじめ照れ隠しのためか、ふてくされていた男の子が、だんだん私に近づいてきて、わからない事を聞いてくれたり、自分の作った万華鏡をうれしそうに私のところへ持ってきてくれた事です。 桑山 知美(家2)
- ・キャプテン手伝いで万華鏡の仕組みを説明するときに、自分ではこうするんだと分かっている、いざ説明をするのは難しく「知っている事と教える事は違う」と言う事をつくづく感じました。 島崎 真由美(英4)
- ・はじめに自分達で万華鏡を作ったときはとても感動しました。 矢澤 恵美子(国際4)



身近なもので作る 万華鏡

＊つくり方＊

～材料～(10分)

- ・とうめいのしし紙(55)
- ・ラップのしん
- ・ビーズ(それ以外の紙、リボン)
- ・セロハンテープ
- ・あつ紙

～使う道具～

- ・はさみ
- ・カッター
- ・のこぎり
- ・油性マジック(赤)
- ・サンドペーパー(紙やすり)

- ① 1) しし紙に
(たて……3cm
よこ……15cm)
の長方形を3つ、
油性マジックで書く。
(じやがざを使い、正確にねえ。)
- 2) 切は 3つの長方形を横
の通りに、はさみで切ろう。
- 3) あまった部分に、ラップのしん
を使って2つマルを、マジック
で書く。
(きれいなマルになるかな。)
- 4) 次は、さき書いたマルを
はさみで切ろう。

- ② 1) ①で切った長方形の3まい
を、はさみで、その上を
セロハンテープで貼ろう。
- 2) 三かくにくみあわせ、
セロハンテープでめよう。



- ③ 1) ラップのしんの1はしから
15.5cm(1cmを測る)で
切る。
- 2) 切ったラップのしんを、
糸でくくりにのこぎり
で切る。
- 3) 15.5cmのラップのしんの
うち0.5cm(かたはら0.5cm)に、
はしからの5cmはしと
1.5cmはしと、線を
かく。
- 4) うらがわの線をカッターで
きざつ。0.5cmの部分
をのこぎり。
- 5) 1) マルをはさみで切った
ほうに、ビーズや紙、リボン
などを入れる。
- 2) ビーズなどを入れたら、自由な
マルをかいて、セロハンテープで
めよう。
(はさみでセロハンテープに
はさみで切ると、きれいに
なる。)
- 6) 1) ⑤で切ったマルのほうに、
②で切った
三角を入れる。
- 2) あつ紙をラップのしんの
大きさに切り、まんが
かにかき、セロハン
テープで貼ろう。
- 3) ビーズの入っていないほうに⑤で
切ったマルをセロハンテープ
で貼ろう。

～できあがり～



中はどんなふうに見えるかな?

次は、ラップのしんのせわりに折り紙などを貼ろう。

絵をかくたりして、はさみで切ろう。



第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《ペットボトルの車であそぼう》

第17回 5月 22日（午後） 参加者数 12名

キャプテン	山王 隆晃（工学部4年）	指導教官	河邊 淳
スタッフ	岸本香里（家4）、坂口明実（家4）、常田和宏（理3） 中村祐介（理3）、楠本満穂（芸1）、鈴木智哉（理1） 三浦詩帆（理1）、渡辺寛教（理1）		

・ 講座のねらい

ボディ・タイヤがペットボトルの車を作り、これを走らせて遊んでもらうことによって、リサイクル工作の楽しさを知ってもらいたい。

・ 講座の展開

講座の流れ	内容	時間
1. 班分け・自己紹介	・ 3人×4つの班に分ける。 ・ スタッフそして子供の順に自己紹介する。	10
2. 作り方の説明	・ キャプテンが子供たちに、ペットボトルの車の作り方を説明する。	5
3. 車の作成	・ 実際に子供たちに、ペットボトルの車を作ってもらう。 ・ スタッフは、子供たちがうまく作れるように、適宜手伝ってあげる。	50
4. 試験走行 & コンテスト	・ 出来あがったペットボトルの車を走らせて、完成品の感触を味わってもらう。 ・ ペットボトルの車を使った、さまざまなゲーム（コンテスト）を行う。	40 5
5. 片付け	・ スタッフと子供たちが一緒に後片付けをする。	10
6. 終了証配布	・ 子供に終了証を渡し、コンテストの勝者には賞状をプラスする。	

ペットボトルの車であそぼう

山王 隆晃（工学部生産システム工学科 4年）

1. 講座開設までのいきさつ

私は工学部生である。従って、本来ならば信大YOU遊サタデーの存在を知るのはおろか名前さえ一度も聞くことなしに大学を卒業していったはずである。しかし、きっかけは運命的にやってくる。私は、たまたまある用事で第14回YOU遊サタデー（第五期）の日に、YOU遊サタデーが行われていた松本キャンパスを訪れていた。このとき、屋外で行われていた講座の光景が私の目に入った。最初は、誰が何をしているのか全くわからなかったが、ふと見ると私が所属しているサークル「やまびこ」（子どもと遊ぶことを主な活動内容としているサークル）のメンバーが、この中に数人いた。そこで後で聞き、これが教育学部の信大YOU遊サタデーだと知った。私は、YOU遊サタデーに興味をもったが、工学部生の自分には縁のないことだと思っていた。しかし、「やまびこ」のメンバーの竹下雅道さんに強く勧められたこともあって、第15回YOU遊サタデーにスタッフとして飛び入り参加した。工学部の私にとっては、何もかもが初めてで驚きの連続だった。次のYOU遊サタデーにも参加したいと思った。だが、YOU遊サタデーのしくみを知らない私が気付いたときには、すでにスタッフの募集を締め切っていた。しかし、このときは同じく「やまびこ」のメンバーである平林徹さんのはからいのおかげで、第16回YOU遊サタデーにもスタッフとして参加することができた。この二度のYOU遊サタデーは、私にとって衝撃的だった。「教育学部がこのような活動をしているなんて！私も第6期YOU遊サタデーには、積極的にかかわりたい。」このように感じたのであった。だが、「工学部の私はどうすればいいのだろうか？」「そうだ、とりあえずは毎週の定例会には出るぞ！」私は決心した。このようないきさつがあって、YOU遊サタデーにかかわるようになったのである。そして、第17回YOU遊サタデーでは講座を開きたいと頭の中はそのことでいっぱいになっていた。

2. 講座設定の理由とねらい

「ペットボトルの車であそぼう」の講座であるが、とにかく工作の講座を開きたいという気持ちから始まった。なぜ工作の講座にこだわったかといえば、自分が工学部で機械について学んでいることもあってか、頭でイメージしやすかったからだ。しかし、実際にどのような工作をすればいいのだろうか？工学部の自分の学科で習っている知識を生かせないだろうか？しかし、複雑になってしまう。教材費に問題があるかもしれない。とても2時間ではできそうもない。でも、子どもって動く物は好きだから、簡単な仕組みで動くものが作れないかなあ？そこで思い浮かんだのが車だ。しかしなにを材料にすればいいんだろう？と考えていた矢先、図書館でリサイクル工作の本を見つけた。その中にはペットボトルのリサイクル工作の本もあった。これだ！ということで、ペットボトルの車を作ることにした。ボディもタイヤもペットボトル。動く原理には輪ゴムを引っばって戻る反発力を利用することにした。そして、教材研究をして実際に製作してみたところ、予想以上に走ったので小学生であれば喜んでくれるであろうという感触は得ることが出来た。しか

し、ボディーやタイヤにきりで穴をあける過程があり、精度のよい穴をあけないとタイヤの軸がぶれてしまいまっすぐ進まないという問題が残った。しかもタイヤの部分となるペットボトルの底に穴をあけるには、私たち大学生でもかなりの力が必要だ。ということで、タイヤの製作だけは前もってスタッフがすることにした。

3. 当日の様子

「ペットボトルの車であそぼう」の講座は、参加者18名スタッフ8名で行ったのであるが、参加者が多いこともあって4つの班に分け、4～5名の子どもの工作进行をスタッフ2名で手伝うという形をとった。参加者の中に、年中の子どもが2名・年長が1名・小学校1年生が8名いたこともあって、工作に手間取り時間が足りなくなるのではと懸念をしていたのだが、当日は時間的には順調にペットボトルの車の工作が進んだように思う。スタッフが本当によくがんばってくれたのと、小さい子どもの参加者には親が同伴しており、親がところどころで子どもの工作を手伝ってくれたことが大きかった。しかし、教材研究をしてみている程度予測できていたことなのだが、きりでボディーに穴をあける部分はやはりスタッフが手伝わないといけなかったし、小さな子どもにはスタッフが付きっきりで、はさみや両面テープを使う時に手伝ってあげなければならなかった。この部分では、スタッフに負担をかけすぎたように思う。しかし、講座の中でうれしい誤算もあった。遊学プランでは、出来あがった車にマジックで色をつけたり色画用紙を貼る課程を、あまり重視していなかったが、当日の子どもたちは実に個性的でオリジナリティー豊かな車に仕上げたのだ。また、実際に廊下で車を走らせるとき、私が考えていた以上に子どもたちはに夢中になっていた。このため、終了時間を少し遅らしてしまい閉会式場に入ったのは一番最後だった。

4. 講座を終えての反省

「ペットボトルの車であそぼう」の講座を終えての反省であるが、まず言えることは、スタッフ1名当たりの子どもの数が多すぎたことだ。今回の形で講座を開くなら、スタッフの数をもっと増やすか、子どもの対象年齢を上げるなりしてスタッフの負担を軽くすべきだと思った。あと閉会式が終わって帰る子どもの姿をみると、車と発射台のダンボールを持ち帰るのに大きすぎて大変そうだった。もっと考慮すべきだった。なお遊学プランでは車を走らせるコンテストを行う予定だったが、当日はやらなかった。車のタイヤには、出来不出来があるが、これはスタッフが作ったものだからだ。最後に、講座にかかわってくれたスタッフ、150本のペットボトル集めに協力してくれたすべての人に感謝します。

5. スタッフの声

- ・子どもと共に遊ぶことで、自分の手で作るおもちゃの楽しさを発見できました。ありがとうございました。 岸本 香里 (家4)
- ・子どもたちの想像力の豊かさに感心しました。 楠本 満穂 (芸1)
- ・ペットボトルで車を作るなんてとっても簡単と思っていましたが、なかなか難しく子どもと一緒に試行錯誤しながら作りました。子どもたちが大変楽しそうに車をはしらせている姿を見ているとやってよかったかなと感じました。 坂口 明実 (家4)

・最初は子供達のパワーに圧倒されていて、子供達との会話もあまりはずまなかったけれど、やっているうちに子供達がよってくれて「先生とやって楽しかった」といつてくれたときには、とてもうれしくて感激した。
鈴木 智哉 (理1)

・小学生中学年くらいの子供は作業を自分で出来るので楽だったが、1年生や幼稚園の子供たちは自分ではなかなかできなくてスタッフが大変苦労した。
常田 和宏 (理3)

・細かい作業がけっこうあったので、説明や作業を手伝ったりするのが大変だった。車を走らせてみると「すげー」などの声があったのでよかった。
中村 祐介 (理3)

・たくさんの子供たちと一緒に講座に参加できて楽しかったし、わからないことを子供たちがいろいろ聞いてくれたのがうれしかった。
三浦 詩帆 (理1)

・疲れました。子供の相手がここまで体力を削るものだと。でもものすごくやりがいがあり、久しぶりに充実感を味わいました。
渡辺 寛教 (理1)



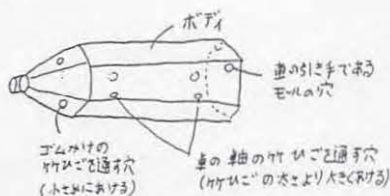
ペットボトルの車の作り方

材料

- ・ペットボトル (角型2ℓ ボディ用) --- 1個
- ・ペットボトル (丸型1.5ℓ タイヤ用) --- 4個
- ・竹ひご (3mm×20cm) --- 3本
- ・アルミケースのふた --- 8個
- ・アクリルのビーズ (竹ひごが通るほどの穴のあるもの) --- 4個
- ・モール --- 1本
- ・厚いダンボール (40cm×90cm) --- 1個
- ・輪ゴム
- ・ビニルテープ

[作り方]

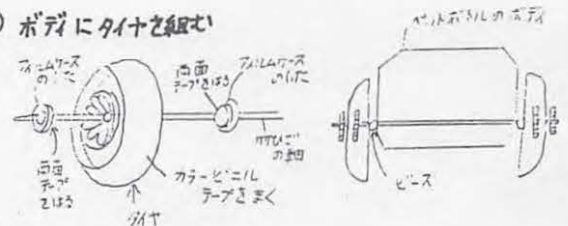
① ボディを作る



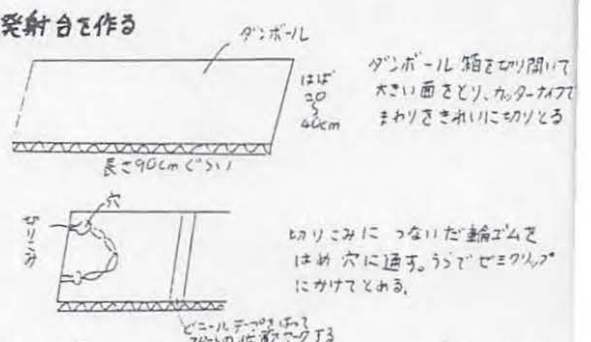
② タイヤを作る



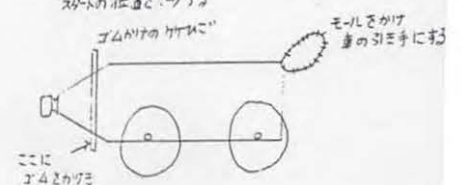
③ ボディにタイヤを組む



④ 発射台を作る



[遊び方]



つなげた車輪ゴムを、車のゴムかけの竹ひごにひかけ、引き手をもってうしろに引く。はなすとまは、勢いよく這くまでほしる。

第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《切り絵をつくろう！》

第17回 5月 22日（午後） 参加者数 15名

キャプテン	佐藤 宏樹（社会専攻4年）	指導教官	駒村 哲
スタッフ	赤穂瑞江（家4）、安田亜琴子（家4）、吉永和代（家4） 寺島友香里（理2）、嵐雄亮（技1）、工藤佳代（芸1） 土屋文弥（芸1）、花岡望（国1）		

・ 講座のねらい

切り絵を通してカッターの扱い方という技術や、一定の製作時間に集中できる集中力や、ものを作り上げる喜び、達成感といった感覚を養ってほしい。

・ 講座の展開

講座の流れ	支援・注意	時間
1. 自己紹介	・ 全体として行うのではなく、子どもと担当するスタッフの間で自己紹介をする。	5
2. 切り絵の説明	・ 全体の説明は簡単に済ませ、詳しいことは担当のスタッフに聞くようにいう。	5
3. 製作 1) 原画を選ぶ 2) 原画を写す 3) 線にそって切る 4) 厚紙に貼る	・ 原画は基本的には自由だが、「ドナルドダック」「ピカチュウとひとかげ」は難しいので、経験者だけにする。 ・ 画用紙がとても柔らかいので、力を入れなくても切れるが、すぐちぎれてしまうので線を太く残すようにいう ・ ちぎれてしまった子どもには「のりで貼れば大丈夫」とはげます。 ・ 切り取った部品はなくさないように注意。 ・ 早く終わってしまった子どもには残り時間によって、もう一枚、名前入れ、色付け等をさせる。 ・ 遅い子どもは無理に急がせない。あせりはケガのもと ・ 周りに落ちている大きなごみを拾う	100
4. 片付け	・ キャプテンからではなく、担当したスタッフから直接	5
5. 修了証をわたす	・ 受け渡す。	5

切り絵をつくろう！

佐藤 宏樹（社会専攻 4年）

1. 講座設定の理由

YOU遊サタデー（以下YOUサタ）に講座を出すと決めて、何をしようか考えたうちのひとつが、この「切り絵」だった。

私はまず最初に高学年を対象にしようと決めた。理由としては私が教育実習で4年生の配属になり4年生の雰囲気がつかめたことがある。そして私が高学年のときに行った活動で遊サタでできそうなものをいくつかあげた。その中で「切り絵」が一番時間、予算の点でふさわしいように思えたのでこれに決めた。

2. 前日までの活動

切り絵で用意しなければならないものにはそれほど変わったものはない。原画とスプレーのりぐらいである。しかしその二つがネックとなった。YOUサタの活動時間から考えると、切り絵イラスト集に載っているような作品は時間的に不可能だった。そして、予算的な問題からスプレーのりは使えなくなりそうだった。しかし、この点も備品係その他の協力により解決することができた。

この講座は、他の講座よりもスタッフに大きく依存するので、早めに集まって切り絵を覚えてもらった。切り絵は簡単なことなのですぐに私より上達した。実際、子ども用の名札を切り絵で作ったのだが、ほとんどスタッフが製作したものだった。これらの優秀なスタッフのおかげで、この講座が成り立っていたことは言うまでもない。一年生スタッフとの打ち合わせは前日だけとなってしまったが、一年生も飲みこみが速く即戦力として役立ってくれた。しかし、私の連絡先を教えていない、というような実際の活動以外のミスがあったことを忘れることはできない。

3. 当日の様子

当日、修了証と名札に誤字があることがわかり、少しバタバタしたがそれ以外は予定通りであった。講座自体は順調に進んだ。そんな講座のことよりも、私がうれしかったことが二つある。

一つはそれまで話せなかった二人の男の子が、講座終了後には仲良くなっていたことだ。講座中もこの二人は楽しそうにいろいろ話していた。製作系の講座、特に切り絵は個人製作なので、スタッフやほかの子どもとの会話は無いだろうと思っていた。ただこの二人のように、仲良くなれるということがわかったのは大きい。

もう一つは、カッターの扱いが目に見えてうまくなるのがわかったことだ。カッターは歯の部分を手前に引かなければ切れないが、その子は最初ペンを扱うように横に動かしていた。それだと、表面を傷つけるだけで画用紙がうまく切れることはない。ゆえに、最初の作品は、線がちぎれて汚い仕上がりだった。しかし、二枚目はカッターの扱いに慣れ、線が美しく切れるようになっていた。本人もそれがわかったらしくとても楽しげだった。「切り絵」ということにこだわらず達成感、いわゆる完成する喜びを味わうことができたのは、この講座を

のは、この講座をやってよかったと思えた瞬間だった。

反省

一番の反省は、画用紙の確認をしなかったため、実際に使ったものは教材研究したものと違い、それを前々日に気付いたのに、研究していた方を持っていかなかったという柔軟性に欠けた判断をしたことである。これによって、画用紙がやぶれ（ちぎれ）やすくなってしまった。線を残すような原画を多く用意したため切る部分が多く、しかも子どもに人気が出そうな絵（ミッフィーやポケモン）は線が細かったので切り絵がちぎれることが多かった。

これに対しては、やはり当日に使う備品を前日準備までに確かめ、そして場合によっては実際に使用してみることも大切だと感じた。さらに、用意した原画も子どもに人気が出そうな絵を選ぼうと思い、塗り絵から選択した。それによって先にも述べたとおり、線が細くなってしまった。スタッフはそれに気付いて原画の線とは違った線を引いて切りやすくしてくれた。とても感謝している。

最後に、私は原画を子どもに渡すつもりであったが忘れてしまい、できなかった。スタッフから出た案で最初に原画を子どもに全て渡し、そこから選ばせればよかった。（私は机を前にならべそこに原画を置いていた。）スタッフと協力して、意見を取り入れていければよいと感じた。

5. スタッフの声

- ・時間が足りないとか難しすぎるとかいろいろ考えましたが私が思っていたより子どもは覚えがはやく、なによりもその集中力におどろかされた。

赤穂 瑞恵（家4）

- ・自分が実際にやってみてはじめて見た目よりも困難な点などが理解でき、指導に生かすことができた。

吉永 和代（家4）

- ・カッターナイフを使用するということでどれだけ使いこなせるかまったく予想できず時間はかかるけれどある程度私たちと同じだけできると思っていたが意外に使い方も良く分からない状態だったので驚いた。できあがったとき「よくがんばったね」と声をかけたら喜んだ顔をした。

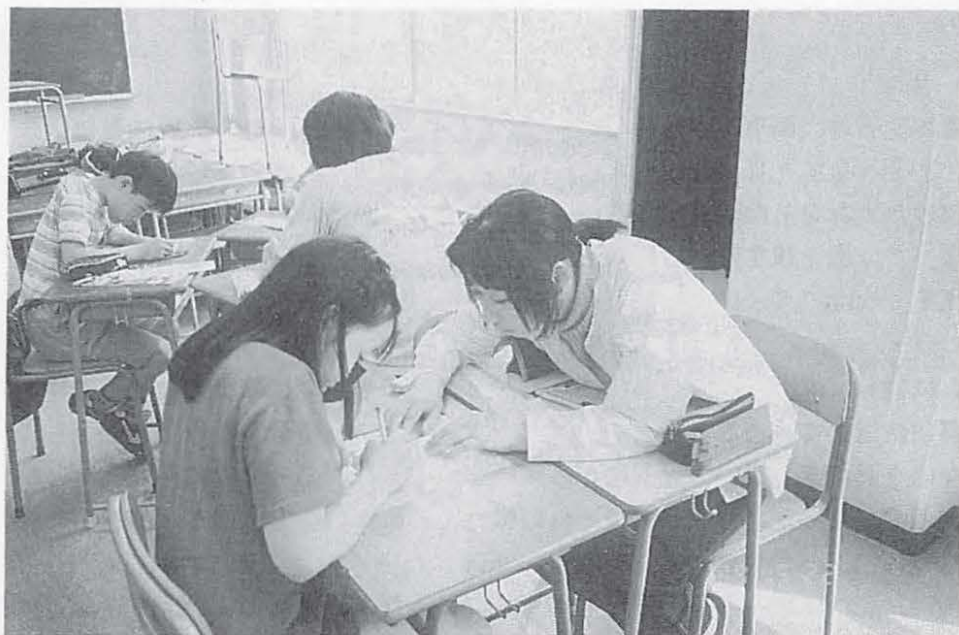
安田 亜琴子（家4）

- ・2回目で前回よりも子どもとの接し方にも慣れ会話が弾むようになった。講座では2人を受け持って緊張した。

寺島 友香里（理2）

- ・子どものペースで進めることができとても楽しかった。絵が完成してからは字をつくったり楽しそうだった。

嵐 雄亮（生1）



切り絵をつくろう！

① 原画を用意する。



※ 部品の小さな絵
切りはなれている絵は
切り絵に向きません。

② カッターで画用紙を切る。

・切り絵では切りとた
部分が白く、残した
部分が黒くなります。



③ カーボン紙で黒画用紙に写す。

・えんぴつでなぞる

先が丸いと
線が細くなくて
切りやすい。



重ねてテープで固定

赤いカーボン紙
※ 黒い画用紙でも見える
ように赤にする。

黒い画用紙

④ 厚紙にはって完成!! (実際は左右が反対)

切りはなれている部品
(目、鼻、口など)
は原画を見ながら
残す。



第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《昔の楽器「うなり木」》

第17回 5月 22日（午後） 参加者数 3名

キャプテン	高橋 歩（技術専攻3年）	指導教官	杵渕 恭宏
スタッフ	尾沼直也（幼4）、根岸昭博（技3）、細江真吾（技3） 尾川正峰（技3）、林祐介（技3）、宮坂有紀（家2） 中田理恵（家2）、古澤万喜美（家2）		

・講座のねらい

刃物に慣れ親しむ。

・講座の展開

講座の流れ	活動内容	時間
1. 自己紹介	・自己紹介をする。	
2. うなり木製作を開始する	・各自に配った材料（ブナ）をナイフで削る。 ・色を絵の具で塗る。 ・糸を通す穴を電動ドリルで開ける。 ・糸をつける。	
3. うなり木を回して遊ぶ	・周りに人がいない事を確認して回す。	
4. 片付けをして修了書を渡す	・片付けをして修了書を渡す。	

昔の楽器「うなり木」

高橋 歩（技術専攻 3年）

1. 動機とねらい

最近、刃物がどうこう言われていますが、「そりゃちがうでしょ」と思ったからです。少し昔までは、主婦が不倫して、包丁で相手を刺したりする事件が起きたって、誰も主婦から、包丁を取り上げろなんてことは、言わなかったと思います。

色々な場所で、刃物について語られますが、（使わせなきゃ駄目なんだみたいな論調のもの）実際、親や教師のせいだけではなくて、社会情勢が大きいと考えています。つまり、子どもの周りには、刃物を必要とする場面はなくて、もっと面白いゲームやその他のことがあることが一番の原因であると考えます。まあ、そういった時代にあっては、仕方の無い事かとも思いますが寂しい気もします。

僕は木材加工研究室に所属していますが、その関係上、刃物に興味を持ち、今年は、兵庫県三木市まで、三木金物祭りに行ってきました。日本の鋼と軟鉄を鍛接する独特の刃物は、他の国には見られないもので、日本の刃物の文化は世界に誇るものです。まあ、長くなるのでやめますが、寂しい事です。

もう一つの直接的な動機としては、製作のときにでる捨てられる端材が、どうにも勿体なくて、（現在、木材の価格が上がっています。）何かできないかなと考えていたところ、オーストラリアの御土産で売られていたのを思い出して決定しました。作ってみると、思いの他大きな音がでて、深夜にもかかわらず、技術科の友人の部屋の前へ回しに行ってしまうました。5分くらい回していましたが、結局顔を出してはもらえずに帰りました。（次の日にきいてみたら、変な音が聞こえたけど、怖いから見なかったと言われ、皆で笑いました。）

2. 当日の様子

参加者3人と少なかったものの、和気あいあいと、怪我もなく、スタッフも楽しそうでした。印象的だったのは、ほぼ、製作が終わった頃、子どもから、全員で一緒にまわそうと提案があったことです。最後の成果発表でも、子どもが、自分でマイクを持ちたいといひだして、嬉しいやら悔しいやらでした。勿論、子どもに役を譲りました。

3. 反省

今回はスタッフ同士の連携ということを考えて準備をしました。子どもは空気を読むので、まず、僕らが楽しくやれるというのは、大事だと思ったからです。それは、当日にもよく現れていたようにおもいます。怪我がなかったのも、僕らスタッフが怪我をしながら、教材を研究した結果だとおもいます。ただ、左利き用の切りだしを用意しておけばと思いました。

4. スタッフの声

今回は初キャプテンということもあり、スタッフの皆に助けられた講座でした。

- ・「怪我が無くて良かった。」 尾沼 直也 (幼4)

個人的には、怪我をして覚えるといった感もありますが、大きな怪我と解釈して、怪我がなくて良かったと僕も本当にそう思います。

- ・「スタッフに対する子どもの割合が3対1で子どもにふれあう時間が短かった。とても残念だった。」 根岸 昭博 (技3)

- ・「子どもの人数は3人と少なかったが、その分、かなり良い感じでふれあえたのでよかった。」 林 祐介 (技3)

とのことですが、どちらも本当だと思います。次回はもっと子どもの人気を捉えるような、講座を考えたいです。

- ・「日頃、ナイフなんて使わないにもかかわらず、みんな手つきがよくてびっくりした。」

尾川 正峰 (技3)

- ・「野外でのんびりとした雰囲気の中、木を削って作品を作るというものが、心の栄養になったような感じがした。」 亀川 朝子 (横国1)

急きょ、外でやろうと皆が言い出し、そうになりましたが、良かったです。

- ・「思ったよりも大きい音が、意外で、子どももビックリしたようだった。」

宮坂 有紀 (家2)

僕も初めての時はびっくりしました。

- ・「とても楽しい一日だったので、また次回も是非参加したいです。」 細江 真吾 (技3)

そうしてもらえると、嬉しいです。

- ・「今回は準備段階から参加できて、とても楽しかった。子どもがやっていた危ない事は自分もやったので分かったし、準備から参加できて良かったと思った。」

中田 理恵 (家2)

毎回、問題になる1年生スタッフについてですが、今回はお断りしました。理由は、中田さんの感じてくれたことです。

- ・「とにかく楽しかったです。」

古澤 万喜美 (家2)

そう言って頂けて嬉しいです。前にも書きましたが、やはり、地域での活動、続けていくためには僕達自身が楽しいということも、とても大切なのではと思います。

5. 終わりに

とにかく、刃物は文化です。



第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《電流イライラ輪を作ろう》

第17回 5月 22日（午後） 参加者数 9名

キャプテン	高井 久（教育学研究科技術専修1年）	指導教官	森山 潤
スタッフ	河西祐司（技4）、佐藤正志（技4）、町田豊文（技4）、佐野友和（技4） 品川憲一（技4）、井上将宏（生1）、関あゆみ（言1）		

・ 講座のねらい

コンデンサの簡単な構造を知り、その特徴を生かしたおもちゃを作ることができる。

・ 講座の展開

活動	内容	時間
1. 自己紹介	・ キャプテン、スタッフ、参加者の自己紹介をする。	5
2. 実演	・ 特別仕様の実演をする。	5
3. 使い捨てカメラの構造を知る	・ なぜ、使い捨てカメラのシャッターを切るとフラッシュがつくのかを、解体した実物と模造紙を使って説明する。 ・ 実際にコンデンサをショートさせる実験をして、直接手で触ると危険であることを示す。	10
4. 電流イライラ輪を作ってみる	・ 基本的な手順は模造紙で貼りだして、説明する。 ・ 材料は先に渡しておく。 a) 使い捨てカメラにアクリルカッターで穴をあける。（印は付けておく） b) 切った穴から短い端子を切らないように、針金の先からラジオペンチを使って引っ張り出す。 c) 電池ボックスの一極にもう一方の端子を取り付ける。 d) 土台を釘で接合して組み立てる。（針金を通す穴と釘の下穴は事前に空けておく：計6ヶ所） e) 針金を通す。（片側はホッチキスで固定） f) フック（画鋸）を取り付ける。 g) 内端に絶縁テープを巻く。 h) 土台と使い捨てカメラを両面テープで固定。 i) 輪の部分を作り、線をつなげる。	70 abc= 25 def= 30 ghi= 15
5. みんなで遊んでみる	・ 自分の作品や友達作品で遊んでみる。 ・ コースや輪の形を工夫してみる。	20
6. 後かたづけ	・ みんなで協力してゴミを片づける。	10
7. 反省	・ 修了証を渡す。感想を聞く。	

電流イライラ輪を作ろう！！

高井 久（教育学研究科技術専修 1年）

1. 講座開講の理由

私は今春、本学小学校教員養成課程技術科から大学院に進学した。学部時代にずっと疑問に思っていたことがある。それは「小学校における技術教育とはなにか？」ということである。現在、小学校において技術科は教科としては行なわれていない。しかし、小学校において技術教育を行なうことは、材料に直接触れる経験を増やしたり、道具を用いて手作業を充実させたりと、現代の子ども達に不足している実践的な経験を補う上で、意義のあることではないかと考えた。そこで今回は、「小学生のための技術教室」という位置付けでYOU遊サタデーに参加させて頂くことにした。

2. 教材について

今回の教材は、山形県高島町立第二中学校の金俊次先生が中学生向きに考案され、「技術おもしろ教材集」 (<http://www.gijyutu.com/kyouzai/>) のホームページに掲載されていたものを、小学生でも作れるように改良したものである。

「電流イライラ輪」は、使い捨てカメラのフラッシュに使われているコンデンサの働きを応用したゲームである。TV番組でやっていた「電流イライラ棒」のようグニャグニャに曲がった針金に接触しないように「ワッカ」を通していく。もし針金に「ワッカ」が接触すると即座にフラッシュが「パッ」と光るというしくみである。使い捨てカメラは小さな子どもでも、一度は触ったことがある身近なものだと思う。この題材には、自分で作ったおもちゃで遊ぶ楽しさ、コースに触れてフラッシュがパッと光るおもしろさ、そして難易度を考えながらコースや「ワッカ」の形を自分で改良できる楽しさがある。

3. 事前準備

元々中学生向けにつくられた教材であったということもあって、今回の講座で取り上げるためにいくつか工夫しなければならない点があった。まず第一に安全面である。使い捨てカメラを分解していて火傷などのけがをした事例は、時々ニュースで報じられている。そこでコンデンサの充電と放電の仕組みを十分に理解させることで、作業の意味づけや安全に配慮させられるように、展開計画を考えた。次に限られた時間内で作品が完成し、しかも、できるだけ多くの工具に触れられるように、加工の難しい部分のみ、下準備をしておいた。具体的には、使い捨てカメラにアクリルカッターで穴を空けるところ、釘の下穴をキリで空けるところを省略し、活動内容をしぼりこんだ。さらに、家に帰ってから友達や保護者の方々に「電流イライラ輪」のしくみや作り方が伝わるように数頁のテキストを自作し、配布できるようにした。

これらの準備には、私の所属する技術教育研究室の4回生の皆さんに多大なる協力を頂いた。また、教材の改良に関わっては、技術専修の大学院生である現職の先生方の懇切なるご助言を頂いた。

4. 当日の様子

まず最初に、安全についての指導を十分に行なった。そのために実際に使い捨てカメラの中のコンデンサをショートさせて、火花と荒ましい音がすることを確認させた。その後の作業は、班ごとに分かれ各スタッフと共に作業が進められた。

ラジオペンチ、ニッパを始め、ゲンノウ等の工具を使いながら、子ども達は熱心に作品に取り組んでくれた。特に針金の形や「ワッカ」の形は、私が予想したよりもはるかにオリジナリティのあるものが子ども達から出てきた。みんなの作品が仕上がると順番に他の友達が作った「電流イライラ輪」を体験してまわった。

子ども達の感想は「またやってみたい」、「おもしろかった」など好評であった。また、使い慣れない工具に少し難しかったという感想を持つ子どももいたが、それぞれに自分なりにうまく使えるようになったと感想を述べていた。

他に印象に残ったことは、コンデンサの役割を知っている子どもがいたり、釘を打つときにげんのうの面をしっかりと意識して打っていた子どもがいたりしていたことである。聞いてみると、本を読んで知ったり、祖父に教えてもらったりしていたそうだ。私は、今の子ども達が今回のような技術的な活動に対して、大変興味と関心を持っているのだと感じた。

5. まとめ

私はまだ教師として現場に出てはいない。しかし、今回の活動を通して小学生を対象とした技術教育にもある程度の見通しを持てたように思う。そして、子どもに何らかの活動をさせる場合、周到な教材研究と教材の準備が何よりも大切であることを痛感した。この体験は私が教師になった時にも必ず役立つと思う。

反省点としては、第一に、事前準備の時間が不足していたことである。前日まで教材の準備がかかってしまったために、スタッフの心にゆとりがもてなかったように思える。特に一年生のスタッフについては、前日にしか会うことができず、当日は非常に苦労したと思う。今後は連絡を密にし早め早めの行動を心がけたい。

第二に、実際にコンデンサをショートさせる場面で、危険なことを強調させ過ぎて、子どものひとりが必要以上に怖れを抱いてしまった。その場はスタッフがうまくフォローを入れたので良かったが、安全の指導において「怖さ」を必要以上に強調することは、時として逆効果になるのだということを学んだ。

なお、今回の講座の様子は、私の所属する技術教育研究室のホームページにもその様子を掲載しています。URLは、<http://gikyoku08.shinshu-u.ac.jp/>です。「教育実践」のページの「外部講師・出前講座」のメニューにリンクしていますので、宜しければアクセスしてみてください。

6. スタッフの声

- ・みんなが積極的に取り組んでいたのが計画通り、楽しみながらコンデンサの仕組みを学ぶことができたと思われる。 河西 裕司(技4)
- ・子供たちの姿に「ものを作る」ということを改めて感じました。あの真剣な目など教育実習以来の発見です。 佐藤 正志(技4)

・とても楽しい一日になりました。今日までの準備が子ども達の笑顔を見ると、その苦労が忘れられます。

町田 豊文 (技4)

・「家に帰ってもやってみたい!」と言いながら帰っていたのを見ると、やってよかったなという思いがある。

佐野 友和 (技4)

・充実した一日でした。このような活動が、さらに広まればよいと思いました。

品川 憲一 (技4)

・安全面での配慮を一番に考えて行いました。子供たちは、自分たちのことしか考えずに行動することが多かったので、いろいろと大変でした。

井上 将宏 (生1)



—— 電流 イライラ輪を作ろう! ——

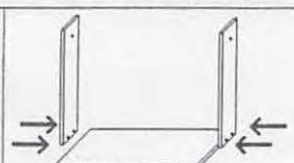


保護者の方へ

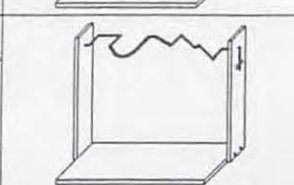
使い捨てカメラを分解するときに熱線するおそれがあります。
十分注意して、お手さまで一緒に作業してあげてください。

1. 使い捨てカメラにアクリルカッターで穴をあけよう。 レンズとファインダーの間(シマシマの部分)をきれいに切り取ろう。 切るときに、力を入れすぎてけがをしないように注意しよう。	
2. 長い線と短い線をくっつけて、ショートさせよう。 1. であけた穴から、長い線と短い線をくっつけよう。 ショートさせるときは手で直接さわらないで、ドライバーでくっつけてあげよう。	
3. 短い線をラジオペンチで引っ張り出そう。 ※場合によっては長い方の線を使うときもあるよ。	
4. 電池ボックスの一端に金具を取り付けよう。 電池ボックスのところに線をつなげるための、金具を取り付けます。	
5. 土台のための木材を切ろう。 土台を作るために、ノコギリで必要な大きさを切ろう。	
6. 針金を通す穴と釘の下穴を全部で6つあけよう。 ノコギリを使うときは下に木を置いて、しっかり固定させてからあげよう。	

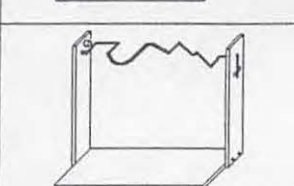
7. 土台を釘でくっつけよう。
下の4カ所を20mmぐらいの釘で、けんのうを使って打ちつけよう。
はじめに1枚だけを平らなところで釘を打ち込んでから、2枚をあわせて打ちこむと、うまくいくよ。



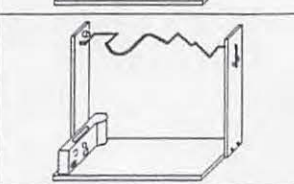
8. 針金を穴に通そう。
上の穴に針金を通そう。自分の好きなコースを考えて作ろう。少し長めに針金をとっておくと、後でコースが自由にえられるよ。



9. 土台の片側をホッチキスで固定しよう。
柔らかい木ならば、ホッチキスで簡単にとめられるよ。

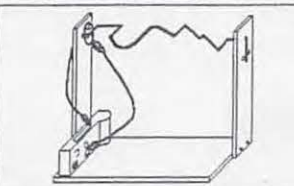


10. フック(画びょう)を取りつけよう。
輪を引っかけるための、左右2カ所フックを取り付けよう。フックにはプラスチックでできた画びょうを使う。



11. 絶縁テープを針金の端に巻きつけよう。
絶縁テープを両方のフックの下に巻きつけよう。

12. 土台と使い捨てカメラを両面テープで固定しよう。
はなれないように両面テープでしっかり固定しよう。電池が見える向きに固定しよう。



13. 輪を作ろう。
だいたい大きさを20mmぐらいの大きさの輪を作り、上で作った針金に通そう。

14. 線をつなげよう。
輪の端と3. で引っ張り出した短い線をみぞクリップでくっつける。それからホッチキスで固定していない端と4. の金具をくっつけよう。

第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《パラシュート部隊 出動！》

第18回 11月 7日（午前） 参加者数 17名

キャプテン	押澤 由記（家庭専攻4年）	指導教官	松岡 英子
スタッフ	武井恵美（家4）、尾沼直也（幼4）、森藤香奈子（幼4） 佐田公子（美3）、宮下真弓（国2）、戸谷裕美子（英2）		

・ 講座のねらい

実際に自分の“手”を動かし身近にあるものを使って遊ぶものを作り、“からだ”を動かして遊ぶという体験を通して、市販されているおもちゃばかりでなく、自分の力で作ったおもちゃで遊ぶ面白さに気付くことができるようにする。

・ 講座の展開

活動内容	支援・注意事項など	時間
1. 自己紹介	・ 全体ではキャプテン、スタッフのみ行い、各グループ毎スタッフ、参加者の間で紹介し合う。	10
2. 作り方の説明	・ あらかじめ黒板に作り方を書いておき、だいたいの流れが分かるようにする。（作り方のプリントを一人一枚ずつ机の上で見られるようにする。）	10
3. パラシュート作成	・ スタッフは参加者ができないところを中心に支援する。 ・ 刃物を使う場面が多いので、怪我をしないように注意する。	45
4. 体育館へ移動	・ 体育館へ速やかに移動できるよう、引率する。 ・ 出来上がるのに個人差があるので、スタッフは教室と体育館に随時分かれて、指導する。	5
5. パラシュートを飛ばす練習	・ 飛ばすコツをつかむまで、各自練習する。 ・ 上手く飛ばない場合は、輪ゴムを取りかえる、輪ゴムを引っ掛ける溝を深くするなどの改良をする。	
6. パラシュートで遊ぶ	・ あらかじめ用意しておいた、得点板やつる下げた風船を使って、みんなで遊ぶ。 ・ スタッフは、自分のパラシュートで参加者と一緒に遊んでも良い。	35
7. 閉会式に向けての練習	・ 閉会式の成果発表でみんなでいっせいに飛ばすための練習をする。	5
8. 終了証を渡す	・ 各グループ毎、スタッフから参加者に渡す。 ・ スタッフは、一言添えて渡す。	5

パラシュート部隊 出動！

押澤 由記（家庭専攻 4年）

1. 講座開講のねらい

「おもちゃ」と聞いて、どのようなものを連想するだろうか。

最近、既製品や少し手を加えれば出来てしまうおもちゃが簡単に入手でき、自分で材料を集めておもちゃを作ろう…などという子どもはほとんどいなくなってしまったように思う。カッターナイフやはさみなど、日常的に使われるはずである道具を、うまく使えない子どもが増えてきている。時代的背景も影響しているためであろうが、そのような体験が失われつつある現代に、危機感を抱く。

過去に「体験」を重視した講座はいくつか開かれているが、この講座も「作る楽しさ」を伝え、「刃物を使うこと」を体験させたいと考え、開いた講座である。材料はできるだけ簡単に入手できるものを…と思っていたところへ、『割り箸であそぶ』という本に出会い、今回の講座を開くに至った。この本は『ゆびあそびシリーズ』と題されており、ゆびを使うことの重要さを訴えている。子どもだけでなく、大人にとってもゆびを使うことは脳の働きを活発にすることに関係するため、参加者は小学生に限定することはしなかった。

2. 開講までの準備

“パラシュート”という題材に、参加者がどの程度魅力を感じるのかが、私にとって一番の疑問であった。物を作る講座にとって、題材は重要な意味を持つ。講座が始まって「早く作って遊びたい」という思いを掻き立てるほどの力を題材が持っていなければ、いくら準備を重ねても講座は成り立たないのではないかと思うからである。

<教材研究>

実際にパラシュートを作ってみて、具体的にいくつかの点に気が付いた。

- ① 作るときは、2人で協力した方が作業しやすい。
- ② トイレットペーパーの芯では、柔らかすぎるのではないか。
- ③ 普通の割り箸では長さが短く、上手く飛ばせない。
- ④ パラシュートの飛ばし方にコツがあり、少し練習する必要がある。

材料に関しては、トイレットペーパーの芯からラップの芯に変え、割り箸ではなく木工用の棒を用いることにした。また、作業効率の面からグループを構成し、1班にスタッフ1名ずつ付けてもらうことにした。パラシュート完成後は、上手く飛ばせるようになるため、練習時間を設けることにした。

さらに、スタッフとの教材研究を通して、

- ⑤ もっと高く飛ばすことは出来ないか。
- ⑥ うまく傘が開くにはどうしたら良いか。

という問題点を指摘された。輪ゴムの威力を強くすれば高く飛ぶということが分かったが、高く飛ばすことを競う時間的余裕があるとは思えず、そのまま普通の輪ゴムを用いることにした。

<講座準備>

パラシュートを作る作業用の教室には、参加者の作業のし易さや時間配分を考えて、あらかじめ糸を決められた長さに切っておくこと、必要な道具類を机の上に揃えておくことなどの準備をした。過去にこの講座は開かれていないため、時間が足りなくなることだけは避けたいと考え、本来準備することは望ましくないと思われることまで準備せざるを得なかった。

パラシュートは、天気の手配がいらぬ体育館で飛ばすことにした。始めから高い位置から飛ばせばパラシュートが落ちていく距離は必然的に長くなるので、体育館のギャラリー(2階)から飛ばし、床に得点板を作って置くことにした。また、風船を吊り下げておき、その風船を標的にしてパラシュートをうつという遊具も用意した。

3. 当日の様子

参加者は、親子参加であった1組以外は、小学校2年生～5年生であり、参加者を限定しなかったが小学生が大半であった。

講座では、説明の時間はあえて短くし作業の時間を多く取った。参加者は、目の前にある材料を確認することで、「これから作るんだ」という意欲を高めたのではないかと思う。「早く作ろうよ!」という声が聞こえてきた。

グループ毎の作業では、スタッフと参加者の関わり合いがみられた。参加者は、見本に示したパラシュートを見ながら、次の工程へと、予想より手際良く作業を進めていった。中には、ラップの芯に色紙を貼る工程やパラシュートのビニール袋に絵を描く工程にこだわったり、ラップの芯になかなか穴が開けられなかったりする参加者も見られたが、スタッフは個々に応じて的確な支援をしていた。

パラシュートを作るということに夢中になっている参加者の目。そして、何よりも出来上がったパラシュートを飛ばしている時の参加者の表情が、この講座を通して一番印象深い。スタッフに「見ていてね!」と呼びかけてから、2階から飛ばす姿。得点板の最高点のエリアにパラシュートを着地させて、誇らしげな姿。パラシュートを片手に、体育館中を走り回る姿……。どの参加者からも「自分の手で作ったパラシュートを飛ばしたんだ」という満足感に満ちた表情がうかがえた。

4. 講座を通しての反省・感想

パラシュートを作る作業の段階では、カッターナイフやはさみ、ラップの芯に穴を開けるためのキリが1班に一つずつしかなく、順番を待たなければ作業が進められなかったという、準備の甘さがあった。ビニール袋を折りたたんで八角形に切る工程では、説明がうまく行き届かなかったため、失敗する参加者がいた。

パラシュートを飛ばす段階では、時間的余裕がありすぎてしまい飽きてしまった参加者がいた。遊具をもっと工夫する必要があったのではないかと思う。より高く飛ばすためにはどうすれば良いのか、もっと教材研究を重ね、高く飛ばすことを競うようなコーナーも設けるべきであったのではないかと思う。

様々な問題点や課題が残ったが、講座開設のねらいを達成することが出来た。今後もこのような体験を大切にしていって欲しい。

5. スタッフの声

- ・パラシュートを作る時や体育館で遊ぶ時、自分のグループのメンバーを十分見ることができなかった。
武井 恵美 (家4)
- ・どの学年の子どもにも作ることができ、適した題材であった。時間的余裕がありすぎたので、もっとゲームを考えれば良かったと思う。
尾沼 直也 (幼4)
- ・初めて参加したが、子ども達が生き生きしている姿を見ることが出来た。グループごと活動したので、子どもと直接親しく出来て良かった。
佐田 公子 (美3)
- ・パラシュートが完成する速さに個人差があったが、スタッフが分かれて体育館へ連れていくことが出来て良かった。道具類の数が足りなかったように思う。
宮下 真弓 (国2)
- ・子ども達に喜んでもらうためにはどうすれば良いのか、いかに子ども達の気持ちを考えることができるかなど、苦労や真剣さを先輩達から学んだ。
戸谷 裕美子 (英2)

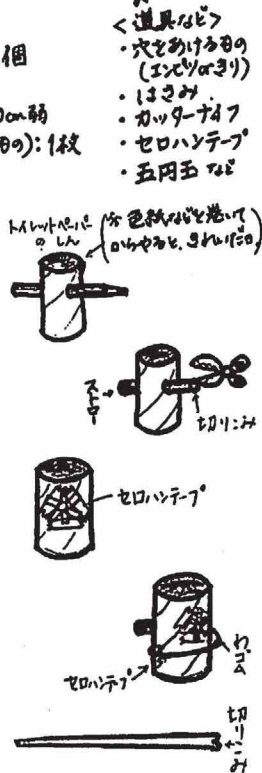
パラシュート部隊 出動!

用意するもの (11個分)

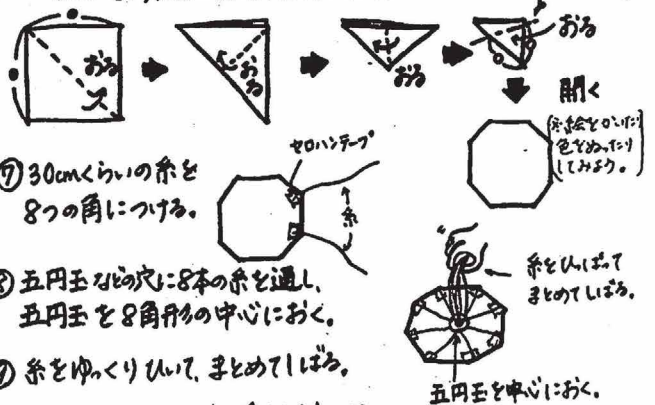
- ・トイレットペーパーのしん (ラップのしんでもよい) : 1個
- ・細くて丸めの長い棒 (30cmくらい) : 1本
- ・太めのストロー (棒が入る太さの棒、1/2程度) : 10cm弱
- ・うすいビニール袋 (切り開いて 30cm×30cmくらい) : 1枚
- ・わゴム : 1本
- ・糸 : 30cm×8本

作り方

- ① トイレットペーパーのしんに穴をあける。
- ② ストローを穴に入れ、一方にはさみで切り込みを入れる。
- ③ 切り込みを入れたストローをなげるように、セロハンテープで貼る。
穴をふさがないように!
- ④ トイレットペーパーのしんに、わゴムをかき、セロハンテープで貼る。
- ⑤ 棒のうしろに、切り込みを入れる。



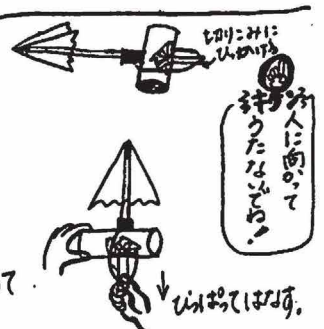
- ⑥ ビニール袋を切り広げてパラシュートを作る。
※1. おおよそ 34cm×34cm の正方形に切る。
※2. おりたにんで、8角形に切る。



- ⑦ 30cmくらいの糸を8つの角につける。
- ⑧ 五円玉の穴に8本の糸を通し、五円玉を8角形の中心におく。
- ⑨ 糸をゆっくりひいて、まとめてはさむ。
- ⑩ 棒の先にパラシュートの糸をとりつける。

あそび方

- ① パラシュートをおりたにんで中心に棒をさしこむ。
- ② ストローにさしこんでトイレットペーパーのしんから出すときにわゴムにひかける。
- ③ 片手でトイレットペーパーのしんをもち、片手で棒をひきあげ、空へ向かってうつ。



第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《ペットボトルのレコードに自分の声をいれよう》

第18回 11月 7日 (午前) 参加者数 9名

キャプテン	山王 隆晃 (工学部4年)	指導教官	河邊 淳
スタッフ	武末裕子 (美4)、中村祐介 (理3)、仲井真梨 (技2) 中谷弥哲 (数2)、野口亮一 (理1)、西川美幸 (言1)		

・ 講座のねらい

ペットボトルのレコードを作ることによって、音になるということを身近に感じてもらい、これを機会にさまざまな音の世界に興味をもってもらいたい。

・ 講座の展開

講座の流れ	内容	時間
1. 自己紹介	・ 参加者とスタッフが、自己紹介をする。 ・ 3人×3つの班に分かれる。	10
2. 作り方の説明	・ キャプテンが作り方を簡単に説明する。	5
3. 製作&録音・再生	・ レコードの製作に入る。 ・ スタッフは、子供がうまく作れないとき手伝う。特に小さな子供がカッターナイフを扱うときや、針金を曲げるときは、適宜助ける。 ・ 作り終えた子供から、実際に声を録音・再生してレコードを楽しむ。このときキャプテンは、音になる原理について説明する。	90
4. 片付け	・ スタッフと参加者が、一緒に片付けをする。	10
5. 終了証を渡す	・ 終了証を、キャプテンが子供一人一人に渡す。	5

ペットボトルのレコードに自分の声をいれよう

山王 隆晃（工学部生産システム工学科 4年）

1. 講座設定にいたるまで

第17回信大YOU遊サタデーで、「ペットボトルの車であそぼう」の講座のキャプテンをやらせていただき、自分としては大変大きなものを得ることができた。そこで、次の第18回信大YOU遊サタデーでも講座を出したいと考えていたのだが、自分としては講座を出す際にこだわりたい点があった。前回と同様工作をする講座を出して、もの作りの楽しさを伝えたいという点である。その理由として、子どもたちに限らず現在の若い世代は、科学技術に興味がなくなっているといわれている。また、実体験と創造力に乏しい世代だといわれている。特に工学部の私としてはこれを強く実感しているし、そういう自分にもこの傾向があるように思う。そこで、「ペットボトルのレコードに自分の声をいれよう」の講座を設定したのだが、理由があった。私は、以前NHKのテレビでペットボトルのレコードをつくりこれを鳴らす番組を見たことがあり、大変感激したことがあった。そこで、自分としてはこの感激を子どもに伝えたかったということがある。また講座を通じて、子どもたちにももの作りの楽しさを伝えることができると考えていた。

2. 講座のねらい

講座のねらいは、レコード作りを通じて子ども達に音の世界について興味をもってもらいたいということである。ところで今現在、アナログのレコードプレーヤーはデジタルのCDプレーヤーに完全に取って代わられている。ここで、レコードプレーヤーとCDプレーヤーを比べた場合、CDプレーヤーの方に多くの点でメリットがあり世代交代がおこったのは明らかであるが、音が入っているのを実感しやすいのはどちらだろうかと考えると、レコードのほうに軍配があがると考える。レコードプレーヤーでは、はりがレコードの溝に沿って振動して音を読み取っているのを見ることができるのに対して、CDプレーヤーではレーザーによって反射光を読み取るため目に見えない。従って、この講座では、このレコードプレーヤーの長所を満喫できると考えたわけである。ここで、ペットボトルレコードの原理を説明することにする。声を出すと、声帯をふるわせることで空気に振動をあたえる。そういうわけで、紙コップに向かって声を出すとコップの底がふるえて、カッターナイフの刃を振動させペットボトルに波の形の溝を刻む。これが、録音である。逆にこの溝に刃を乗せてやると、溝に沿って刃が振動し、紙コップの底をふるわせる。そして、このとき生じる空気の振動を耳の中の鼓膜が感じ取ることで、音を聞くことが出来る。これが再生である。この講座では、ペットボトルのレコードを作ることによって、音を記録するとはどういうことなのか理解し、それが音の世界の理解につながると考えたわけである。

3. 当日の様子

当日の講座は、事情があって遊学プランになかった要素を加えて講座を行った。まず最初に、本物のレコードプレーヤーを聞いてもらった。参加者の子どもは年中から小学校4年生までの9名いたのだが、全員がレコードプレーヤーを見たのが初めてらしく興味深く観

察していた。何も知らないこともあってか、針を手で触ろうとした子どももいたほどだ。次に、簡単に作れるストロー笛を作って鳴らしてもらった。ストロー笛はストローとはさみがあれば簡単に作れる笛であり、はさみで切ることによって作られるリードの部分が振動することによって音が鳴る笛であり、吹きかたによっては音程が変わる笛である。このストロー笛は、ほとんどの子どもが簡単に鳴らすことができた。そうして、本題のペットボトルレコードの製作に入ったわけだが、事前に予想していたことなのだが、製作時間に時間がかかりすぎ講座の時間が足りなくなってしまった。また、工作の難易度が非常に高かったため、結局レコードを鳴らすことができた子どもが一人もいなかった。こうなることは前もってわかっていたのだが、私が遊学プランで考えていたことができず、また子どもに伝えなかった肝心の部分が全く伝えられない非常に厳しい講座の終わり方になってしまった。ただ、ペットボトルレコードの工作の過程では、ほとんどの子どもが集中して作ってくれていたのは、せめてもの救いだった。

4. 反省点

この講座では、「ペットボトルのレコードに自分の声をいれよう」という講座のタイトルを全く実行できなかった。このため、講座のありかた自体から考え直さないといけないと痛切に感じた一番の問題点は、キャプテンの私自身うまくペットボトルレコードを作れなかった点にあった。これは、私自身教材研究の時間をあまりとれなかったことも関係している。スタッフとの教材研究も一週間前から始めたわけだが、この講座の題材からするとスタッフが決まった時点からすぐに始めるべきだったと思う。また、講座の難易度が高すぎた。この内容だったらやはり時間の十分取れる終日の講座にするべきであった。参加する子どもの対象も、小学校の高学年からに設定すべきだったように感じている。しかし、後からわかったことだが、ペットボトルのレコードを考え実験して成功したのは現職の小学校の先生である。おそらく、現場の小学校ではペットボトルのレコードを授業の教材に使っているに違いない。私にとってこの講座は、教材研究の重要性をひしひしと感じさせる講座だった。現実に可能であるはずのことができなかったことが、一番心残りであった。他にも、反省点は多くあった。事前に松本の一年生スタッフに連絡をきちんとしていなかったのも、当日参加してもらえなかった。松本でも教材研究をするべきだった。最後に、直前になってストロー笛のことを教えてくれた井戸陽子さん、レコードを貸してくれた加藤豊司さんをはじめ多くの人に感謝する。

5. スタッフの声

- ・ 難しい題材でしたが、親子で組み立て終えた参加者の顔が満足げでうれしかったです。教材研究のときに、スタッフがもっと意見を出し合うことが大切だと思いました。キャプテンが一人で作っていくのではなく、みんなで作っていくYOUサタにしていきたいです。
武末 裕子 (美4)
- ・ 「ものをつくる」という点でとても有意義だったと思います。教材研究の時期と期間については問題があると思います。午前と午後2つの講座の教材研究が同時進行だったので、どちらか一方にしか出れず打ち合わせが不十分になってしまいました。もう少し早めに始めてほしかった。
仲井 真梨 (技2)

- ・教材研究というものがとても大切だと感じました。自分自身教材研究の時にうまくできたという実感がなかったので、子供達に楽しんでもらえるか不安でした。結果として子供達は楽しんでいたように思いますが、自分の中での充実感や達成感というものがありませんでした。中村 祐介 (理3)
- ・講座の対象年齢は大切だと思います。時間のことなどがあり、どれだけ助けをだしていいのか、本人にやらせてあげるべきか迷いました。特に小さい子供には親が手伝ってくれていましたが、スタッフ数も重要だと思います。中谷 弥哲 (数2)



第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《君だけのミラクルスープを作ろう！》

第18回 11月 7日（午後） 参加者数 12名

キャプテン	本山 貴雅（社会専攻4年）	指導教官	洪澤 文隆
スタッフ	森下房枝（家院1）、坂口明美（家4）、大同由美子（家4） 加藤豊司（理3）		

・講座のねらい

講座において、スープづくりの楽しさと手軽さとおいしさを知ることにより、家庭において参加者が主体的にスープづくりをはじめとする調理活動に参加すること、またはその中で親子の絆を深めることができるようになる。

・講座の展開

講座の流れ・時間	活動内容・備考
1. 自己紹介（5分）	1. 参加者は2人とスタッフ1名で1グループを作り、親子は親子だけで1グループとする。
2. 内容の説明・注意点（10分）	2. 紙芝居を用いて安全、衛生に注意することと呼び掛ける。
3. くじ引きで材料決め（15分）	3. 家庭にあるありあわせの材料で、というシチュエーションを再現するため、くじ引きで材料を決める。1グループ4種類、野菜や肉のいずれかに偏らないようにする。
4. サンプルスープ配布（2分）	・用意する材料 キャベツ6分の1・3つ 玉ねぎ2分の1・3つ もやし3分の1袋・3つ 長ねぎ4分の1・3つ かまぼこ2分の1袋・2つ ハム3枚・3つ 冷凍コーン8分の1袋・2つ ベーコン3枚・2つ ポテトチップス4分の1袋・1つ 卵2個・2つ パイナップル2きれ・1つ
5. サンプルスープ・調味料の説明及び「ミラクルレシピ」配布（8分）	4. 前日にスープをつくり、冷蔵保存する。キャプテンが紙芝居などを行なっている間に、別のスタッフがスープを温め、配布する準備をする。スープは塩味、みそ味、しょうゆ味、クリーム味、ビーフシチュー味の5種類を用意する。
6. 調理（35分）	5. 説明終了後、各参加者とスタッフ毎に、どんなスープを作りたいか考え、味を決定する。
7. スープの内容紹介・試食（30分）	6. 各グループは全グループ分のスープを作る。 「ミラクルレシピ」に自分の作ったスープ、他のグループが作ったスープのレシピを書き込む。
8. 感想・後片付け（10分）	・調味料 塩・こしょう・しょうゆ・みそ・ホワイシチューの素・鳥ガラスープの素・コンソメスープの素・ビーフシチューの素・ごま油・和風だし・トマトピューレ・ミートソース・牛乳
9. 修了証発行・修了（5分）	

君だけのミラクルスープを作ろう！

本山 貴雅（社会専攻 4年）

1. 講座設定の理由

料理をする。料理の本を調べて、作りたいものを選び、それに見合った材料を買ってくる。料理して、食事して、後片づけ…そして残ったものといえば、これからどうやって使えばいいのかわからない材料の数々である。料理の本で調べても、これらをうまく使いきる料理など、なかなかあるものではない。かといって同じ物をもう一度作るのもいやである。さあどうしようか？

料理をする。しかし、買い物に行くのは面倒である(または、諸事情により買い物に行くことができない)。とりあえずあるもので何とかしなくてはならない。かといって、何でもいいというわけではない。やはり料理するからには、そこそこのものを食べたい。さあどうしようか？

本講座は、私の以上のような生活の実体験から生まれたものである。スープは、家庭にあるほとんどの材料に対応し、材料費も安価で野菜を使えば火を通すことにより大量の野菜を摂取することができる。そして何よりも、手間をそれほどかけることなく、おいしいものを誰でも作ることができる。したがって、「ミラクルスープ」と命名することにした。

本講座の目的は、講座でスープづくりの楽しさと手軽さとおいしさを知ることにより、家庭において親子が主体的にスープづくりをはじめとする調理活動に参加することにある。

2. 本講座の内容と特徴

本講座の内容は、スープを作ることであるが、大きな特徴が2つある。

前者は各受講者が料理する材料が、直前まで決まっておらず、講座の中でくじを引くことによって決定されるということである。なぜそのようなシステムをとったかという、材料が余ってしまった、もしくはこの材料で何とかしなくてはならないという、冒頭で述べたような状態を再現するためである。そして受講者はその有り合わせの材料をもとに、配付されたサンプルのスープの味と、調味料の調合の仕方が書いてある「ミラクルレシピ」をたよりに、用意された約10種類の調味料を駆使して、受講者オリジナルのスープを作るのである。また講座中にくじ引きを行うことにより、講座にゲーム性を持たせ、最初から材料が決まっているという状態よりも講座を盛り上げることもできるとも考えた。

後者は、「ミラクルレシピ」には調味料の調合の仕方は載せてあるが、何を何グラムと何を何グラム、という分量はあえて載せていない。まず、量るのが面倒臭いからである。料理って面倒臭い、と受講者に思わせてしまったら本講座の目的を果たし得ないのである。また、スープの場合、お菓子等と違い、多少の調味料の誤差は別の調味料を入れたり量を増やすなどでごまかせるので、それほど調味料の量にナーバスになる必要もない。そして、このくらいかな…と、勘を頼りに味をつけていった方が、作る方としては絶対に楽しいはずである。調味料の分量を載せてしまうと、味付けが機械的になる恐れすらある。

この内容を踏まえ、教材研究において、子どもの感覚に頼るだけでは味付けに失敗する可能性が高いという指摘がスタッフから出された。そこで、調味料の組み合わせを無難なもの

ものに限定し、味付けは必ず味見をしながら少しずつ行うことを参加者とスタッフに留意させるという配慮をすることにした。またスープを作る前に味付けの方向性を決めるサンプルのスープを配付し、自分が作ろうとするスープのイメージを持ちやすくさせることにした。

3. 当日の参加者の様子

講座開始から、材料を選ぶまでの、あいさつと安全と衛生上の諸注意を、参加者はよく聞いてくれた。これは諸注意の際に、午前中に行われた講座「ほら見てできたよ!～自分だけのおべんとう～」において使われたユニークな紙芝居を、この講座でも使わせていただいたことが大きいと思われる。

くじ引きで材料を選ぶときには、予想通り大いに盛り上がった。これは、くじ引きシステムの持つゲーム性に加え、ポテトチップスやパイナップルを選んだらどうしよう、というスリル感覚が大きかったように思われる。

サンプルスープを配付した際には、参加者はもうスープを作りたくて仕方がない様子であった。なんとか作る前に注意事項を確認してから、調理活動に入った。

調理活動は極めて順調であった。スタッフや親の支援により、調理器具のしように関して支障のある子どもはおらず、また心配されたケガもなかった。材料の切り方も様々で、大きめに刻むグループもあれば、この材料嫌いだから、細かくしてわからなくするんだ、といって特定の材料を細かくするグループもいた。

味付けが最大の難関であったのだが、参加者はそんなわれわれの心配を気持ち良いくらいにかっ飛ばしてくれた。『ミラクルレシピ』を参照して、各グループとも慎重に味付けをしていて、ある調味料が入りすぎた、といったことはなかった。あるグループではスタッフの知らない間に参加者が味付けに工夫を加えて、最初のものよりいっそうおいしいスープを作った。ある親子参加のグループは材料をきるときから、親は一切手も口も出さず、ただ見守るだけであった。それでも参加者はすばらしいスープを作った。大きな自信になったことであろう。早くスープができてしまった参加者には、『ミラクルレシピ』の書きこみスペースに自分たちのレシピを作るよう促した。参加者は一生懸命書いていた。

試食は大好評であった。一つのグループのところに参加者が全員集まり、スープの説明を聞いてから、そのスープをみんなで食べる、食べ終わったら次へ、という形で試食を行った。しかし、後半に行くにつれ、試食のスピードに大きな差があったため、時間の都合上後半のグループは参加者全員に説明を行うことができなかった。ここは反省点である。最初に全グループが説明をしてから、試食に入った方が良かったかもしれない。試食の中では、特にパイナップルを使ったスープにみんな興味津々であった。みそ味に仕立て上げられていて、あまりみそとはあわないかな、と最初作り始めたときに私は思ったが、そのスープの鍋が一番初めに空になった。おいしくなかったら、そうはならないはずである。残りのグループの鍋も、余ってしまってもしょうがないかな、と思っていたが、最終的にすべての鍋が空になった。

最後に、今日のスープ、どうだった?と発問したところ、「はい!」と元気のいい挙手があり、おいしかった!と答えてくれた。時間が無くて、その成果を家でも生かせるよう促せなかったこと、閉会式に遅れてしまったことは失敗であった。

大な迷惑をかけてしまったこと、講座中のスタッフの役割分担がはっきりしていなかったこと、活動終了後の評価活動をしっかり行えなかったことが反省点である。準備段階において、本番と全く同じ事を一度シミュレーションしておく必要があった。しかし、この講座をやった良かったと参加者に感じていただけたと、私は信じている。それは『ミラクルレシピ』に書きこむ参加者の熱心な姿、空になった鍋、最後の「はい！」という元気な挙手が証明している。これも、参加者や、スタッフをはじめとするYOUサタの皆様のおかげである。深くお礼を申し上げたい。

4. スタッフの感想

- ・私が担当した班は子供一人であった。“家族参加”が原則だったため、やむをえないが、班構成を再考する必要があったのではないかと。また、食材の選定が、「栄養を考えたおいしい料理を作る」という調理の根本的概念にはずれていたのではないかと。しかし、子供がケガをすることもなく、食べられるスープができたことは喜ばしいことである。

森下 房枝(家院1)

- ・いろいろな材料をスープにすることでこんなものができるんだ、という驚きが得られたと思います。子供たちは自分の手で作る楽しさを感じられたのではないかと思います。

坂口 明美(家4)

- ・子供たちが自分達の味をいろいろな調味料を使ってさがしていく姿や、味について他の子供たちと相談したりする姿が印象的でした。

大同 由美子(家4)

- ・子供たちはキャベツとベーコンとパイナップルの缶詰のくじを引いたので、それを使ってどのような味が材料にあうか、スープベースを何回も飲んで真剣な姿を見て、これが学んでいく姿だと思いました。また、自分達のスープが一番おいしいと満足していたことと、ありがとうと言われたときはとてもうれしかったです。

加藤 豊司(理3)



第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《めざせ工作名人！～親子で下駄作り～》

第18回 11月 7日（午後） 参加者数 9組の親子

キャプテン	町田 豊文（技術専攻4年） 佐野 友和（技術専攻4年）	指導教官	森山 潤
スタッフ	高井久（技院1）、品川憲一（技4）、佐藤正志（技4）、河西祐二（技4） 島崎真由美（英4）、尾沼直也（幼4）、仲井真梨（技2）		

・ 講座のねらい

親子の協同作業で下駄作りに取り組もうとする子どもたちが、木材の性質を考えながら、簡単な木工具を使うことを経験し、もの作りの楽しさを味わうことができる。

・ 講座の展開

活動内容	展開	時間
1. 自己紹介 2. 製作物の提示	・ キャプテン、スタッフ、参加者の自己紹介をする。 ・ 材料と完成品を見せ、どんな材料から、どのようなものをつくるか知らせる。	15
3. 道具の使い方を知る	・ どんな道具が必要か考える。（のこぎり、やすり等） ・ 道具を示し、模造紙を使って、使い方を説明する。	
4. 各グループに分かれ、製作する	・ 安全指導を十分に行う。 「道具を使う約束」として子ども達に安全に対する意識付けをする。 （スタッフはおもに子どもを中心に支援する。） ・ 子どもと親が協力して作業ができるように促す。 （製作手順） ○子ども向けのこぎり練習教材 ・ けがき線にしたがって、のこぎりを使って切断する。 ○大人向けノミ練習教材 ・ ノミを使って、削り取る。 ○両教材とも ・ やすりを使って表面を仕上げる。 ・ 鼻緒をすげる。	90
5. 「手作り下駄」をはいてみる 6. 後片付け 7. 修了証	・ 作ってみての感想、履いてみての感想を聞いてみる。 ・ 「履き心地はどうか？」 ・ 「昔の人は、下駄やぞうりをはいていたんだよ。」 ・ 自分の使った道具、机の上を片付けるように促す。	15

めざせ工作名人！親子で下駄作り

町田 豊文（技術専攻 4年）

佐野 友和（技術専攻 4年）

1. 講座設定の理由

最近の子どもたちは、ナイフで鉛筆すら削れないとよく耳にする。おそらく、それは子どもたちが成長する過程で、「道具」を使ってなにかを作り出すという経験が極端に減少しているからだと考えられる。

そこで、子どもたちに簡単な木工具を使う経験をし、もの作りの楽しさを味わってほしいという願いを込めて、「めざせ工作名人！ 親子で下駄づくり」の講座を計画した。この講座では、親子の共同作業で一つのものを作り上げる感動を味わってもらいたいということも強く願っている。

2. 教材について

木を切る、削る、磨くという要素作業が含まれた下駄作りを教材化した。下駄作りでは、薄い板を加工するのに比べ、厚い板を加工することにより基礎的な木工具の使い方をふんだんに経験することができる。また、この教材では日常生活では経験することはないであろう「鼻緒すげ」という作業を経験することができる。

3. 事前準備（教材研究）

下駄を作るのがはじめてで、まずは作り方を学ぶことから始まった。用いた資料は『たのしい手づくり教室15 手づくり下駄』（坂 明著 民衆社）である。下駄づくりのノウハウはここから得て、材料、道具の準備に取りかかった。材料のうち木材は、技術科でお世話になっている材木屋さんに相談し、桐の集成材を用いることにした。鼻緒は、善光寺近くの履物屋さんに相談し、安価で譲ってもらい、その上、鼻緒のすげ方をお教えいただいた。突然訪れたにもかかわらず、とても親切にしてくださった。

教材研究では、子ども達にどこの作業を経験してもらうか選び出すことにいちばん苦労した。さらに2時間という時間制限のなかで下駄を完成させなければならないという問題にも悩まされた。もちろんスタッフが事前に下ごしらえするわけだが、どこまで準備し、どの作業を残すか皆で悩んだ。結局、大人向けのノミで加工するもの、子ども向けの、のこぎりで加工するものを一組として1足とすることにした。つまり、親の方々はのみを、子ども達はのこぎりを使って作業することにしたのだ。安全面を考えて低学年の子どもにノミを使わせるのは避けたほうが良いと判断した。さまざまな子ども達の実態を予想し、教材化していった。同様に鼻緒においても、実際にすげる前の下準備はスタッフでしておくことにした。「子ども達が、中心となる作業を楽しみながら経験し、2時間で仕上げることができる」この目標を達成できるように教材研究を行った。

4. 当日の様子

講座のなかで子どもたちは、普段使い慣れない道具をスタッフに手を添えてもらいながら一生懸命に使い、下駄を作っていた。「すごいね、うまく切れたね」と誉めると本当にうれしそうな表情を浮かべた。そして、父親、母親のする作業を見て、「すごいね、さっきまであんなにあったのに、もう削れたよ。」と嬉しそうに話した。ノミで加工する親の姿が子どもにとって偉大に見えたに違いない。

おもにスタッフは子どもとマンツーマンで作業し、安全面、子どもとのかかわり方に配慮できたと思う。そして、親子の協力を促したりと、親子とスタッフが協力しながら一足の下駄を作り上げることができた。

「普段は、子どもは子どもで遊んでいるので親子で取り組めてよかったです。」と、参加くださったある母親がこんな感想をくださった。道具を使わせる上での約束のし方も参考になったとの声も聞こえた。講座のなかで子どもたちは、「ノミで削るところが楽しかった。」と語り、初めて使う道具ながら、親子またスタッフと一緒に楽しみながら作業できたようだ。この講座では、一見危険そうに見える道具を、約束して使うことを学び、安全に気を付けながら使うことができた。そして、世界で1足しかない手作り下駄を作り上げることができた。

5. まとめ

今回この講座を開くにあたって、材料の手配、準備に相当の時間がかかった。初めての講座ということもあったが、手間取りながら計画性のない準備期間になってしまった。綿密な計画を立て、教材研究に十分な時間を取ることができなかったことが反省点である。

子どもの製作に打ちこむ真剣な姿、成就感に満ちた笑顔が見られて本当に嬉しい。そして、何よりも親子の協同作業で1つのものを作り上げる感動を味わってもらえた様子に、これ以上の喜びはない。

6. スタッフの声

- ・今回は親子での参加のため、能力の違いに対する柔軟な対応が必要であった。

高井 久 (技院1)

- ・グループにわかれて自分自身が小リーダーになってグループの進行をしていく形だったので、責任を持って講座準備に取り組むことができたように思います。子ども達との接し方、言葉の使い方等、うまくいかなかったことも多いですが、色々と勉強になりました。

島崎 真由美 (英4)

第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

みんなで作ろう！ダンボール家具

第18回 11月 7日（終日） 参加者数 2家族6名

キャプテン	小池 悠介（国語専攻2年）	指導教官	堀井 謙一
スタッフ	岸田修一（社2）、大木美那子（技2）、池田朋美（家2） 千野加世子（家2）、宮崎恭恵（家2）、平賀倫子（障1）		

・ 講座のねらい

身近にあるダンボールを使い楽しく家具類を作ることを通し、その過程で得られる技能や知識、創造性といったものを身につけてほしい。また親子で共同作業することで、家族で楽しむことの大切さを感得してほしい。

・ 講座の展開

活動内容	支援・留意点など
1. 自己紹介	・ 参加者と打ち解けられるように、スタッフは上手く参加者の中に溶け込むようにする。
2. 導入	・ 基本的な作り方や注意する点などを、HOW TO サタデー等を利用しながら説明する。 ・ ダンボール製の家具類などを紹介し、参加者の製作意欲を喚起し、何を作るのかを決めてもらう。
3. 作業開始	・ スタッフは要点のみを指導し、後は参加者の作りたいものを把握しつつ、助言や参加者への補助・手伝いにまわる。
4. 昼食	・ 講座の内容に関わらず、参加者とコミュニケーションを取るようにする。 ・ 午後の作業で参加者がだれてしまわないように配慮する。
5. 作業再開	・ 3. と同様に。 ・ 完成してしまった参加者には、次の作品に進んでもらう。
6. 完成作品の発表	・ それぞれの参加者に、自分の作った家具と、作るときの工夫などを発表してもらう。 ・ 完成作品だけでなく、作り上げたこともしっかり誉める。
7. 片付け	・ 切屑の掃除、用具の返却等を全員で行う。
8. 終了証授与	・ うちに帰ってからも挑戦してもらえるように声をかける。
9. その他全体を通しての留意点	・ 持ち帰りのことを考え、家具の大きさに注意。 コミュニケーションには十分注意する。

みんなで作ろう！ダンボール家具

小池 悠介（国語専攻 2年）

1. 講座を開くにあたり

何かを作り出すという作業はとても楽しいことだ。作るという作業をしようと思った時に、簡単に手に入り、加工するのも簡単で様々なものに応用がきくものといったら、やっぱりダンボールだろう。そのうえ、ゴミとして捨ててしまうようなダンボールを使って、実用的なものを作ることができたら、これほどすばらしいことはないのではないだろうか。それも、作りようによっては、とても洒落たものが作れるとしたらなおさらだ。そう思って考えたのが、ダンボールで家具を作ることだった。ゴミになるものを使えるものというリサイクルの考え方、しかも家族ぐるみで楽しめたら最高ではないだろうか。そんな思いから、この講座を開くことにした。

2. ダンボールという素材と家具作り

ダンボールという素材は非常に優れた素材で、強度、加工の容易さ、手軽さ等、そういう優れたポテンシャルを秘めている。切る、貼り付ける、組み上げる等々、そういった創作的活動を行うにはうってつけな素材といえる。そして、そこに「家具作り」という要素を加えることによって一つの柱が立つ。今回の講座ということに関わらず、私は子供達にとって、というよりも人にとって「独創性・創作性」といった要素が大切なのではないかなと思う。そういった力を育てようとするとき、まず今回の講座のような「家具作り」という様な柱を据えることで、作り出すということに入りやすくなると思う。家具という目標はあるけれど、その家具をどのようなものにしていくのか、ある程度的が絞られていることで、子供達も創造しやすくなるだろう。

今回の講座の中で注目したのは、ダンボールという素材そのものが持つ特性だ。HOW TOサタデーにも書いてあるが、ダンボールの構造上の特性というのがある。真中に挟まれている波状の部分が、ダンボールを優れた素材にしているといえるだろう。この波状の部分の使い方で、講座の中でちょっとだけ紹介したものがある。紙を一枚水で湿らせてはがすことで、中の波状の部分があらわになるのだけれど、その波状の部分が非常に面白い。折り曲げたりすることが容易になるし、見た目も面白い。ダンボールという素材を加工して、また違った素材を作る。そういった使い方ができるということ、そういった使い方するにはどうしたらいいのか考えられること、どのように使うか思いつくことができるということ。そんなことが学べるのが、ダンボールという素材だと思う。それに、ダンボールそのものも、素朴感とでもいうのだろうか、よい質感を持っている。完成した作品にもいい味がある。そういった、ちょっとしたヒントを教えるだけで、参加者は自分なりに工夫していろいろなものに仕上げていた。波の部分を利用してハート型にしてみたり、作るのには難しいと思っていた箱をどんどん作っていったりしており、子どもの持っている力というのは、なんとすごいのだろうと感心した。そして、こういった事こそが、本来子どもが伸ばすべき力なのではないかと私は思う。

3. 参加者との関わり方

ダンボールで何かを作るということは、あまり興味を引くことではないのか、参加希望はわずかに一組だけだった。当日のもう一組と合わせて、二組6人だった。私自身が工作等を好きなので、それなりにうける講座になるかと思っていたのだが、あまり人気が無く、少々寂しい思いをした。それでも、参加者が少ないというのも、それはそれでよかったかもしれないと思う。それは、参加者と接していただける時間が長くとれるということだ。まだ場数を踏んでいないというのも理由なのかもしれないが、私は欲張りなので、参加してくれた人達全てと関わろうと思ってしまうところがある。キャプテンだからというのもあるだろうけど、そういうところで無理が出るよりは、今回のように、参加者があまり多くなくて良かったのかもしれない。

私は、会話のあり方というのが非常に大事だと考えている。相手の話に耳を傾ける姿勢、相手に伝えようとする姿勢、人と関わるということは、相手の事を知ること、知ってもらうことだと考えている。参加者とどう関わるのかということは、どのような会話を交わすかということ、即ちどのようなコミュニケーションを取るかだと思う。他人との関わり合いの中で人は、自分というものを深めていくのだと思う。今回の講座で十分にそれができていたかという点、そんなことは無い。でも、少しでもそんな関わり合い方ができたらと思う。

4. スタッフの声

- ・みんな本当に楽しそうにやっていた良かった。
- ・終日講座だったので、スタッフと参加者の間に仲間意識が生まれて良かった。
- ・子供達が自分で考えて作っていて感心した。
- ・ヒントだけ出して気付かせるというやり方が良かったと思う。
- ・親子参加ということで、親子間の交流がより深まったのではないかなと思う。
- ・いっしょに作ることで、子供と同じ目線に立つことができ良かった。
- ・ダンボール家具の作り方をもっとしっかりマスターしておくべきだった。
- ・参加者との交流があまりできなかった。
- ・参加者に対して何が出来るかを、探し考えてやってみるべきだった。



ダンボール家具職人への道

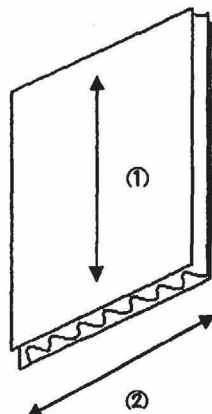
かぐしよくにん

にゅうもん へん

入門編

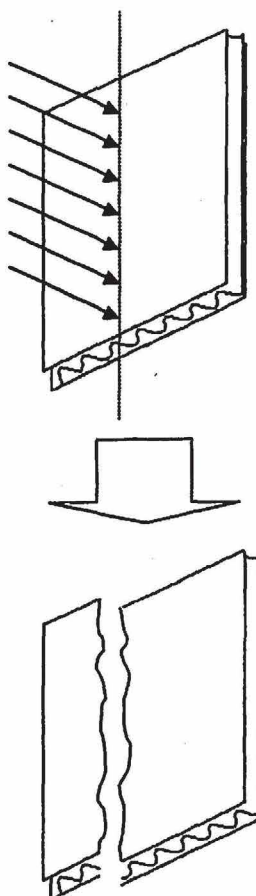
其の巻

ダンボールがどの方向の力に強いかわかるべし。
左の図を見ればわかるが、矢印①の方向の力には強く、
横からの矢印②の力には弱い。
その事を考えながら部品を作るべし。



其の式

ダンボールの面の特性を知るべし。
左の図と見ての通り、面には折れ易い向きと折れ難い向きがある。
その事を考えながら部品を作るべし。



其の参

自分の作りたい物に必要な強さを知るべし。
どの部分は強くなくてはならないか、どの部分は弱くてもいいのか、
そのことをしっかりと考えて家具を作るべし。



ダンボール家具職人への道

かぐしよくにん

とら まき

虎の巻

虎の巻

強い棚段を作る法

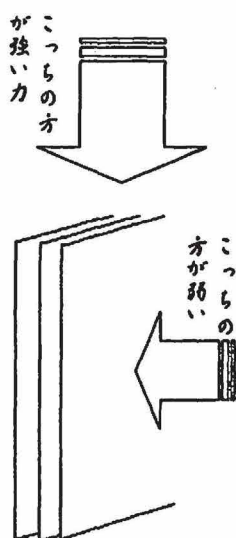
強い棚段を作るには、まずその特徴を知るべし。
棚段は物とのせる部分であるから、面にかかる力を考えるべし。
入門編と見て考えれば分かるであろう。
使うダンボールは一枚とは限らない。

この図の様に
力がかかる。

虎の式

強い側板を作る法

強い側板を作るには、まずその特徴を知るべし。
側板は、棚段にかかる重さを支えなければならない部分であるから、
そのことを考えるべし。
入門編其の巻が役に立つであろう。
時には二枚以上のダンボールが必要になるだろう。



第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《色砂で2000年ミレニアムカレンダーを作ろう》

第19回 12月 11日（午前） 参加者数 15名

キャプテン	増沢 るみ（国語専攻4年）	指導教官	市澤 要三
スタッフ	中澤博子（国4）、巢山有美子（国4）、貴船良子（国3） 岩本幸恵（国3）、杉山雅幸（野3）、宮坂有紀（家2） 桑山知美（家2）、北原理江（家2）		

・ 講座のねらい

筆を使うことに慣れ親しんでほしい、また自分だけの作品を作る喜び、楽しさを感じてほしいと考える。

・ 講座の展開

講座の流れ	支援	留意点	時間
1. 自己紹介		スタッフ→子どもの順	10
2. 作り方の説明		模造紙や実物を用意 注意事項の説明、質問をとる。 ☆砂を口に入れないこと ☆別紙（作り方）参照	10
3. 練習 ・ 筆の使い方に慣れる ・ 描きたいもののイメージを広げる	筆の使い方を支援する	あくまでも自由な作品作りなので、リラックスして筆を扱えるように言葉掛けをする 一応の時間は設定するが、子どものペースを見て臨機応変に次の段階へ進める	15
4. 制作 ①糊で描く→色砂 ②カバーフィルムをかける	注意事項を参考に上手いかわからない子どもにアドバイスをする できあがった子どもの作品を黒板にはる	何枚描いても良いが、フィルムをかける物（台紙に貼るもの）は一枚とし、子ども自身に選ばせる	40
③台紙に貼る ④紐を通す			10
5. 完成品の発表	頑張った点をほめる		10
6. 片づけ	筆の洗い方を指導する	糊の付いた筆だけを洗う 筆の洗い方を指導することで筆を大切に扱おうという意識を持って欲しい	15

色砂で2000年ミレニアムカレンダーを作ろう！

増沢 るみ（国語専攻 4年）

1. 講座を開くにあたって

この講座を開いた動機は、書道研究会が中心となって何か書道のよさを伝えられないかと考えたことだった。色々と悩んだ末、昨年に引き続き“色砂カレンダー”に決定した。普段子どもたちが筆を手にする時、そこには言い知れぬ緊張感が漂うように思う。その緊張感が集中力にかわり、それこそが書道の魅力だとも言えよう。しかし、お手本のように書かなければいけないという重圧から子どもたちを解放し、自由に作品作りをすることで、もっと筆を使うことに親しみを持ってもらえるのではないかと考えた。

筆に糊を付けて絵や字をかく。そこに色砂をかけて紙をはらうと、かいたものがふわっときれいな色を付けて現れる。ちょっと変わった、しかしとてもわくわくする書道の世界を楽しんでもらいたいと考えた。また、2000年という記念すべき年を迎えるにあたり、自分だけのカレンダーを作るという体験を、良き思い出として心に残してもらえたらと思い、この講座を開くことにした。

2. 教材研究

今回一番の課題は色砂がはがれ落ちないようにするにはどうしたら良いかということだった。透明なシートが必要だと考えて探した結果、図書館の本などにかけられている粘着性のあるフィルムがよいのではないかということになった。早速試してみると、フィルムの柔らかさと粘着性が、糊と色砂によって生まれる凸凹に密着し、色砂のはがれ落ちを防ぐことが出来そうだった。しかし空気が入ってしまったたり糊の水分によって画用紙にしわが出来ており、その部分にはきれいに密着せず、仕上がり具合はいまいちであった。

この解決方法としてまず画用紙を厚めのものに変えた。糊の水分にはこれで対応することが出来た。さらにきれいに密着させるにはどうしたらよいか。本などにこのフィルムをかける場合、物差しを使って均等に、一気に空気を押し出すのだが今回は色砂による凸凹がネックになった。そこで、指で密着させながら均等に押し出すことをイメージしながらあるものを作った。文鎮にタオルをまき、端を輪ゴムで止めた“特製密着棒”である。これによって何とか課題を乗り越えることが出来た。当初、このフィルム掛けは難しいからスタッフがやるという予定だったが、実際には子どもたち中心で成功させることが出来よかったと思う。

3. 当日の様子

全体的にみて、参加者15人に対しスタッフが11名いたので、子どもたちが安心して作品作りに取り組めたように思う。しかしマンツーマンになったことで席が近い子どもやスタッフとはたくさんふれあうことが出来たが参加者全体として親睦を深めるということができなかったように思い、残念である。そして大きな反省点である。

まず筆づかいに慣れることと、かくものをイメージすることを目的に墨で練習した。予想はしていたがやはり個人差があり、どんどんかく子どももいれば、かけずにいる子もい

た。なかなかアイデアが浮かばない子どもに対しての援助としてスタッフの作品を見せたり一緒に考えたりすることだけで良いと思っていた。キャラクターの絵などが載っているものなどを用意するべきか悩んだが、自由な発想を引き出そうと考え、やめることにした。しかしその辺りはもう少し配慮が必要だったと反省している。子どもによっては自分の持ち物の中にキャラクターグッズをたくさん持っている子もいて、その子どもたちはそれを参考にスムーズに練習を進められていた。かきたいものをあらかじめ考えてきてもらったり、参考になりそうなものを家から持ってきて良いということにしておけばよかったかと思う。

実際に色砂を使い始めると、子どもたちは皆思い思いの作品を作り始めた。練習では戸惑っていた子どもも、色砂を使ってみたらかきたいものが浮かんできたという様子であった。「こんな風に筆を使ったのは初めて」という声も聞かれ、新鮮な楽しみを感じているようであった。作品作りは皆夢中になって取り組み、最終的にそれぞれの作品を仕上げる事が出来た。しかし、時間がおしてしまったことや、仕上げの作業をするスペースが狭かったことなどにより最後にあわただしい雰囲気になってしまった。これもまた反省点である。

4. この講座を通しての反省点・改善点

良かった点

- ・スタッフの人数が多かったので子どもたちに目が行き届いた。
- ・道具や材料を近くの席の子どもたちが協力して使うことが出来ていた
- ・皆楽しそうに作品作りを進められていた。筆を楽しく使えていた。

反省点

- ・かきたいもののイメージを広げるときの支援にもっと工夫が必要だった。
- ・子どもたち個人のスピードを大切に時間配分するべきであった。
- ・最後に時間が足りなくなってしまう、作品を鑑賞し合うことが出来なかった。また、作品作りの途中でも、出来た子どもの作品を随時紹介する予定だったが出来ずに終わってしまった。大変残念であるし、申し訳ないことをしてしまった。
- ・教室の広さから考えてもう少し人数を減らすべきだった。

5. スタッフの声

- ・子どもとじっくりふれあうことが出来て良かった。子どもたちもいろいろな工夫をしながら楽しそうに作品を作っていて良かったと思う。 宮坂 有紀 (家2)
- ・スタッフの人数が十分だったので子ども一人一人にアドバイスが行き届いたと思う。子供たちも満足そうな表情だったと思う。 中澤 博子 (国4)
- ・最後に一人一人の子どもの作品を誉めてあげたかった 岩本 幸恵 (国4)
- ・子供たちが楽しんでやっていたのでよかったと思う。楽しかった。 北原 理江 (家2)
- ・喜んでいたのが印象的だった。 貴船 良子 (国3)
- ・満足そうな顔で帰ってもらえたのでよかったと思う。 杉山 雅幸 (野3)
- ・自分も楽しく取り組めたので良かった。 桑山 知美 (家2)

・真剣に取り組む表情が印象的だった。楽しくできてよかった。 巢山 有美子 (国4)



つくり方

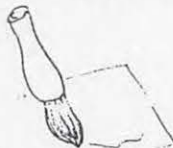
① デザインを考えよう。



色砂で
2000年

ミレニアムカレンダーを
つくろう!

② ふでにのりをつけ、好きな色の画用紙に描こう。



③



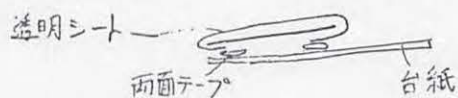
すなをふりかけて……



流すと……?—それは
楽しみ。

④ できたものに ^{透明}なシートをかける。

⑤ 両面テープで作品を台紙にはりつける。



第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《カンカンアイスクリーム》

第17回 5月 22日(午後) 参加者数 45名

キャプテン	池田 裕美 (家庭専攻4年) 押澤 由記 (家庭専攻4年)	指導教官	大村 道雄 松岡 英子
スタッフ	森藤香奈子 (幼4)、長田雅子 (実4)、橋本祥子 (技3)、林一真 (家2) 両角孝之 (数2)、岡部桂子 (実1)、角直子 (実1)、松本美弥子 (社1) 佐藤麻美 (言1)、西川美幸 (言1)、田中佐知 (言1)、北条牧絵 (理1) 小黒あかり (実1)、小林久美子 (社1)、藤原剛 (横国3)		

・講座のねらい

冷凍庫を使わずに、氷と塩を混ぜることによって、冷凍庫のように冷たくなってアイスクリームが固まる不思議さを実感して欲しい。

・講座の展開

活動内容	支援、注意事項、その他	時間
1. 自己紹介	○キャプテン・スタッフ (全体の前で) ・参加者の緊張をほぐすように笑顔で、明るい雰囲気を作る。	10
2. 作り方の説明	○参加者 (決められたグループ毎に) ○あらかじめ模造紙などに書いて貼っておく。 ・材料を入れるところまで子どもたちの前で実演する。 →子どもたちが良く見えるように前へ集合。	10
3. アイスクリーム作り① ～材料を缶に入れる～	○手洗いをする。 ○スタッフは缶の蓋をして包容するなど子どもたちの出来ないところを支援する。 *缶に氷を入れる時、氷+塩、氷だけのものの対照実験を行う。(小さい缶の中は水) →子どもたちに結果を予測させる。	25
4. アイスクリーム作り② ～缶を転がして遊ぶ～	○なるべく沢山の遊具を用意する。 (板の滑り台、ペットボトルのボーリング、リレー競争、段ボールのトンネル) ○自由に遊べるような環境を整える。 ○子ども同士の交流を大切にする。 ○怪我の無いように注意する。 ○子どもたちが遊びに飽きてしまわないようにローテーションをしたり、新しい遊びを提案したりする。	30
5. アイスクリームを食べる	○手洗いを徹底する。	20
6. 実験結果	○結果の違いを触ったり見たりして実感する。	10
7. 後片付け 終了証を渡す	○各自、スプーンとお皿を洗う。 ○今日頑張ったことをグループ毎に一人ひとり言葉がけをする。	15

カンカンアイスクリーム

池田 裕美（家庭専攻 4年）

押澤 由記（家庭専攻 4年）

1. 講座を開くにあたって

私がこの講座を開こうと思った理由は二つある。

まず一つ目は、今まで2回講座を開いてきたのだが、どちらも「ものづくり講座」で、個人作業の場面が多かった。今度講座を開くなら、『交流』ということに重点を置いた講座を開きたいとずっと考えていた。初めて会ったお友達と仲良く遊べるということは大切なことだと思うからである。そこで、毎年人気講座である「カンカンアイスクリーム」の缶を転がして遊ぶ場面で『交流』を図りたいと思ったからである。

そして二つ目は、私自身この講座に大変興味があったからである。冷凍庫を使わずに缶を転がすだけで、どんなアイスクリームが作れるのだろうかとずっと不思議に思っていた。子どもたちもきっと不思議に感じるであろうし、アイスが出来た時の感動も大きいのではないかと思い、この講座を開く事にした。

2. 教材研究

① 衛生面

今回特に気を使ったのが「衛生面」である。最初缶に直接材料を入れ、教材研究をしていたのだが、このころ「環境ホルモン」や「サルモネラ菌」が話題になっており、先生方に「大丈夫なの？」と聞かれ心配になり、ビニールに材料を入れてしっかりと結び、それを缶に入れて転がしてみた。しかし、固まるのに時間がかかり、その上柔らかいアイスになってしまった。何度かやってみたが、うまくいかなかったため、厚生省に電話をして聞いてみた。すると、「使用している缶が食品用ならば大丈夫です。」という答えが返ってきた。また、卵に関しても「売られている卵はきちんと確認済みですので、大丈夫です。」ということだった。結局私達は前日に缶を全て煮沸殺菌し、直接缶に入れる方針でいくことにした。また、材料はなるべく新鮮なものをということで、講座開始1時間前に買い出しに出掛けた。

② 凝固点降下

氷に塩を混ぜることで凝固点降下が起こり、結果的にアイスクリームの缶を冷やすことで固まるという不思議な現象をなんとか伝えようと、比較実験を考えた。材料を入れる代わりに水を入れ、それを氷だけで冷やしたもの、氷と塩で冷やしたもの二つを比べてみた。はっきりとした違いが生じるのか不安だったが、転がさなくてもただ放置しておくだけで、氷と塩で冷やした水には氷ができるという違いが見事に現れたため、当日取り入れることにした。

③ 遊具

ただ転がすだけではおもしろくないし、飽きてしまうと思い、遊具を考えた。今回はペットボトルのボーリングとリレー競争とトンネルと滑り台を考えた。当日はいろいろな遊びができるように、ローテーションで回ることにした。

3. 当日の様子

当日は参加者45人と多くなってしまったため、教室を二つに分けて行った。子どもたちは、とにかく早くアイスクリームを作って食べたいという様子だった。材料を入れる場面では、3人で協力して順番にやる姿が見られた。缶を転がす場面でも、私達の用意した遊具を工夫して、思いつかないような遊びを考えたり、ちゃんと順番を守って遊んだりする姿が見られた。出来上がって缶のふたを開ける瞬間の輝いた目が忘れられない。みんな満足そうにアイスクリームを食べ、また「こんなにおいしく作れたよ。」とスタッフに分けてくれた。また、最後に見せた実験の結果にとっても興味を示していた。氷と塩で冷やした水に氷が出来ていたのを発見すると、取り合いになるくらいだった。

4. 考察

今回、参加者数が多かったため、3人で缶1つの割合になった。そのため、一人占めしてしまう子がいたり、暇になってしまう子がいたりとうまく遊べないグループがあった。また、いろいろな遊びをローテーションでやる予定だったが、一つの遊びに固定してしまう傾向がみられた。もっと広い場所を確保することと、遊具を充実させることの課題が残った。そして、床に水がこぼれていることに気付かずに転んでしまった子、ホワイトボードに頭をぶつけてしまった子がいた。もっと子どもの目線に立って考えなければならないと感じた。アイスクリームに関しては、教材研究でチョコ味を作ったらおいしかったので、今回は取り入れなかったが、いろいろな味のアイスを作ってもおもしろいと思う。

最後に、缶集めに協力して下さったみなさん、氷作りをしてくれた一年生スタッフ、クーラーボックスや滑り台用の板を貸して下さったスタッフの方々、本当にありがとうございました。みなさんの協力があったからこそ、子どもたちの楽しそうな顔、嬉しそうな顔を見ることができました。そして、何度も私達と一緒に頭を悩ませてくれたスタッフのみなさんには深く感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

5. スタッフの声

- ・カチカチでおいしいアイスクリームができ、子どもたちが「おいしい、おいしい」と喜んでくれ、「明日もまた作りたいな」と言ってくれる子がいてすごく嬉しかったです。やってよかったと思える瞬間でした。森藤 香奈子 (幼4)
- ・途中でふたが開いてしまい、水がこぼれてしまうというハプニングもありましたが、アイスクリームは見事に成功し、とってもおいしかったです。橋本 祥子 (技3)
- ・子どもたちのアイスクリームができたかどうか、好奇心にあふれた目を、皆で協力したことにより、見れたような気がします。林 一真 (家2)
- ・小さな子を小学生の子と同じように接してしまい、失敗してしまいました。小さな子と私は目線が違うことに気付きました。小黒 あかり (実1)
- ・子どもたちは元気に飛び回るので、ついていく方の私はすごくつかれました。でも、嬉しそうに食べてくれるのが一番嬉しかったです。角 直子 (実1)
- ・子どもたちと楽しく遊べて、おいしいアイスクリームが作れて、とても楽しかったです。また参加したいです。北条 牧絵 (理1)

- ・子ども達が「おいしい」と言って食べてくれたのが一番だった。みんなで遊ぶ習慣をつける機会になれば良かったと思う。 長田 雅子(実4)
- ・当日まで不安なところも沢山あったが、前日までの様々な準備があったからこそ当日の成功に結び付いたのだと思う。 両角 孝之(数2)
- ・勉強になることが多く、参加して良かった。 岡部 桂子(実1)
- ・準備や後片づけは大変だったが、楽しかった。 小林 久美子(社1)
- ・子ども達の楽しそうな姿を見て、やって良かったと思った。 佐藤 麻美(言1)
- ・1つの講座をやり遂げるのは大変なことだと実感した。 西川 美幸(言1)



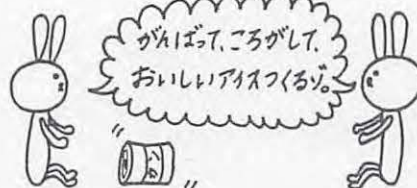
カンカンアイスクリーム

〈つくりかた〉

1. 小さいカンに砂糖とアイスクリームのもとを入れ、よくまぜる。
2. さらに牛乳と生クリームを入れ、よくまぜる。
3. アイスクリームのもとがこぼれないよう、ラップをはさんでフタをする。
4. 大きいカンの中に小さいカンを入れて、大きいカンと小さいカンのあいだに氷と塩を入れる。
5. 大きいカンにふたをして、ガムテープでめたあと、カンのまわりには断熱材まく。
6. 5のカンを20~30分間ころがす。
7. できあがり



注意事項
食品用の缶なら、直接食品を入れますが衛生的には問題はありません。ただ、もれたり、何度も使うとさびやくることがあるので、注意して下さい。(厚生省より)



第6期 信大YOU遊サタデー游学プラン

《みんなで作ろう探偵物語》

第17回 5月 22日(午後) 参加者数 11名

キャプテン	田中 崇 (社会専攻4年) 笹崎 典子 (数学専攻2年)	指導教官	鵜飼 照喜 松岡 樂
スタッフ	白井敬(国4)、本山貴雅(社4)、山田理恵(実3)、加藤豊司(理3) 小林真紀(障3)、中谷弥哲(数2)、木下恵(言1)、泊宗之(社1)		

・講座のねらい

犯人からの問題の解決の為に他の人とコミュニケーションをとれるようになってほしい。また、地図や問題を通して自分で考える力を養ってほしい。

・講座の展開

講座の流れ	活動内容、留意点、その他	時間
1. 依頼	・教室で丸く座った後、依頼者は宝箱を守ってもらうように頼む。	5
2. 自己紹介、班分け	・自己紹介をした後、班分けをする。 ・スタッフは自分の班の子の名前を必ず覚える。 ・班ごとで探偵手帳に貼る写真を撮る。	10
3. 探偵認定テスト	・認定テストの為に班(1班5人)を作り、外に出て大きな輪で星を作る。	15
4. 事件発生	・認定テストが終わる頃、犯人は宝箱を盗み、暗号と挑戦状を残して逃げていく。 ・犯人は参加者の間を通過して逃げる。 ・依頼者は演技をして状況を伝える。	5
5. 探偵手帳配布	・手帳に自分の名前を書いてもらう。	5
6. 探偵出動	・犯人の置いていった地図を手がかりに各班2つのチェックポイントを周り、教室に戻る。チェックポイントにはそれぞれ犯人からの謎と地図が置いてあり、それにより暗号を解くキーワードがわかる。 ・周る順番は各班で変える。 ・地図はウォークラリー形式を取り入れる。	65
7. 暗号解決	・各班のキーワードを組み合わせて暗号を解く。 ・暗号がわかったら犯人のところへ向かう。	10
8. 犯人逮捕	・犯人を捕まえ、宝箱を取り返し、教室に連れて行く。 ・依頼者は宝箱の中身を見せ、お礼を言う。	5
9. 修了証を渡す	・修了証と一緒に宝物を渡す。	10

みんなで作ろう探偵物語

田中 崇 (社会専攻 4年)

笹崎 典子 (数学専攻 2年)

1. 開講の動機とねらい

この講座を開くきっかけは、昨年度、平林徹さんの開いた講座「気分はめいたんてい」にスタッフとして参加したことにさかのぼります。その講座に参加していた子の「またやりたい」と言った時の笑顔、そして何より、私自身もすごく楽しめた事で「私もこんな講座を開きたい」と思ったのです。そこで、田中さんに相談したところ、同じように《協力・団結》をねらいとする講座を開こうとしており、ねがいが一致したため、共同キャプテンとしてこの講座が実現しました。協力・団結をねらいとしたため、当日の参加者の班分けは知らない者同士にして、みんなで協力してもらおうと考えました。

2. 教材研究・準備

準備段階には多くの課題が残りました。キャプテンの中で講座のイメージができていたにも関わらず、講座スタッフにそれをうまく伝えなかったことで、前日準備終了の直前まで、みんなに迷惑をかけてしまった事です。特にこの講座は、ウォークラリー方式のため、地図が必要でしたが、事前調査が遅れ、コース地図の製作が当日までかかってしまいました。また、問題として出す予定の暗号が1つ足りず、最終的には前日、スタッフだけで決めてもらうなど、みんなでそろっての準備が出来ていなかったように思います。この時感じたのは「スタッフあつてのキャプテン」という事です。スタッフの皆さんありがとう！

3. 講座の様子

流れについては游学プランの通りですが、参加者の行動の偶然性に講座が助けられた点が多かったように思います。私は「協力」を第一に考えていたので、その一点にばかり目を奪われていましたが、反省会では多くのよいところが出されました。

まずはビニールテープの輪を使って星を作るゲームの時のことです。すごく難しいので、参加者が飽きてしまうのではないかと不安がありましたが、これが大好評！出来ない班はとことん悩み、出来た時には「やった！」と歓声を上げて喜んでいましたし、すぐ出来た班も繰り返し挑戦していました。私は数学をやるとき、難しい問題でさんざん悩んで答えが出た時の喜びを多く味わってきたので、その時の気持ちがよく分かります。参加者も「完成したときの喜び」を感じてくれたのではないのでしょうか。また、上級生がリードしている姿も見られて、よかったと思います。しかし何よりも、探偵手帳に名前を書くという事がよかったと思います。最初は自分の名前を書き入れられなかった幼稚園生が、一番早く謎が解けて戻ってきたため、その余った時間を使い、スタッフと一緒に、住所と名前を書き入れることが出来ました。彼女は、謎を解く時も大変活躍したそうです。謎の中に計算を使ったものがあつたのですが、簡単な足し算の答えを、指を折りながら出したようです。上級生にそれを見守る姿が見られた事も、良かった点でしょう。大学というのが、近くに住んでいる人でもわからない空間であるだけに、キャンパス内を歩くというだけで

も、大学を身近に感じてくれたのではないのでしょうか。

しかし、地図には問題がありました。子ども達は、抽象的に描かれた地図が分からず、どちらへ行ったらよいかわからずにウロウロする姿が見られました。大人の自分たちが「これなら読めるだろう」と思っている、子どもには分からないのです。「大人の視点」で見て失敗するという事を思い知らされた気がします。また、大学構内をめいっぱい使おうと欲張って、コースを長くしすぎたことも反省点です。当日とても天気がよく、5月にしては汗ばむくらいの日でした。帽子をかぶっていない参加者は、炎天下の中、1時間歩きつづける事になってしまったのです。もっと子どもの体力を配慮していればと悔やまれます。各チェックポイントに用意していた謎についてですが、班分けを同じ学年で行う予定でしたので、謎も学年ごとに考えていました。しかし、参加者の関係でそれを変更し、異学年で班を編成したのに、謎を替える時間はなく、結局謎をそのまま使いました。その結果、低学年の子が解けなかったり、高学年の子には簡単すぎたりしてつまらなかったという事が起きました。全学年が楽しめるようなパズルを検討すべきだったかもしれません。ただのパズルにして楽しませてあげれば良かったのか、それとも今回のように子どもが知識を試せる部分のある問題にした方が良かったのか。どちらにせよ、謎は時間をかけてじっくり考えるべきだと感じました。

4. 改善のために

今回、参加者に用意してもらったのは、鉛筆だけです。しかし、屋外講座だった事を考えると、帽子は必要だったと思います。予想以上に暑かったわけですが、講座名が屋外講座だという連想をしにくいだけに、あらかじめ連絡しておくべきでした。実際、絵本を作る講座だと思って来ている参加者もありました。参加者の事を考えると、もっとわかりやすい講座案内をしなくてはいいと思います。講座の中では、事件が起こったとき、ゲームに集中していた参加者が、何があったか気がつきませんでした。犯人が逃げた方向が、ゲームをしている場所と反対側だったためです。注意をひきつけるには、もっと大胆に盗んだという事をアピールしてもよかったと思います。また、先ほど書いた地図についても、絵地図を使ったり方角を書き入れる等、もっと検討すれば良かったと思います。

5. 終了後思ったこと

今の学校では「いじめ、学級崩壊、校内暴力…」というさまざまな問題が起こっていて、「キレる」年齢がどんどん低年齢化しています。そんな中、教師も「子どもの気持ちが分からない」と言っているようです。私たちは学生なので、子どもに直接関わる機会が少ないけれど、そんな私たちが出来ること・協力できることがあったら積極的に関わっていきたいと思います。それを今回のYOUサタで少しは実現できたのではないかと思います。

この講座は《協力・団結》がねらいでした。これに参加して、協力することの素晴らしさを感じて、一人一人の個性を認める大切さを考える機会になったと言ってくれたら嬉しいです。そしてこの事が、学校を場面とした問題の解決に、少しでも手助け出来る結果になってほしいと思います。

最後に、自由に活動する機会を与えてくださった、土井先生・上條先生をはじめ多くの方々に感謝します。

6. 参加スタッフの感想

- ・おとなと子どもの思考の違いを実感した。
- ・どこまで手がかりを与えたらいいか考えさせられました。
- ・子どもと接するのにはハプニングはつきものだと実感した。
- ・協力の大切さを感じました。
- ・準備が遅れてしまい反省です。
- ・子ども全員の意見を尊重するのは大変だった。
- ・子どもとなかよくできるという自信がついた。
- ・もっと打ち合わせをしっかりとっておけばよかった。

本山 貴雅(社 4)
 小林 真紀(障 3)
 山田 理恵(実 3)
 加藤 豊司(理 3)
 中谷 弥哲(数 2)
 木下 恵(言 1)
 泊 宗之(社 1)

<講座の中で出した問題の一部>

- ①ほしさんうかぶそらへうたいひびけ (キーワード:2字おき)
- ②くつののろいつぼのうし (キーワード:のっとり)
- ③下のあんごうをとりて、A～Dの中から正しいキーワードをえらべ。

1	8	12	
4	3	4	6+5、6-5、
1	10	6	9-1、9+1、
15	7	8	9-5、9+9+5
11	23	9	

- ④下のあんごうをとりて、A～Dの中から正しいキーワードをえらべ。

→山→松→月→北→竹→A
 ↓ ↓ ↓ ↓ ↓
 町→中→学→小→赤→B
 ↓ ↓ ↓ ↓ ↓
 力→楽→校→川→田→C
 ↓ ↓
 青→立→D

<答>

- ①ほしさんうかぶそらへうたいひびけ
 →本部へ行け。
- ②くつののろいつぼのうし
 →「の」と「つ」を取って読む→黒い帽子
- ③足し算・引き算の答になる数字のマスを塗りつぶすと
 →B
- ④漢字の訓読みをしりとりしていくと
 →やま→まつ→つき→きた→たけ→A

第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《ほらみてできたよ！自分だけのおべんとう》

第18回 11月 7日（午前） 参加者数 21名

キャプテン	笹崎 典子(数学専攻2年)	指導教官	松岡 樂
スタッフ	増野隆(社4)、赤穂瑞恵(家4)、坂口明美(家4) 吉永和代(家4)、大久保瑞恵(国2)、近藤綾乃(生1)		

・講座のねらい

出かけるときによく持っていく「おべんとう」を自分で作ってみる事により調理の楽しさを知ってもらい、まわりの人たちと協力する事により親子間の交流を深める。

・講座の展開

講座の流れ	支援、予想される子どもの動き、留意点	時間
1. 自己紹介	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフは班の人の名前を必ず覚える。 ・どんな人がいるんだろう。 ・どのスタッフの人に教えてもらえるのかな？ ・みんなと仲良くできるかな。 	5
2. 料理をする前に	<ul style="list-style-type: none"> ・料理をする時に気をつけてほしいことを紙芝居を使って伝える。 (手洗いの励行、包丁によるけがについて。) ・手早くおもしろくする。 ・どのようなことに気をつければいいのかな。 	5
3. 料理開始	<ul style="list-style-type: none"> ・火でやけどをする、包丁で指を切る等の予想されるけがを起こさないようスタッフ、キャプテンともに気を配る。 ・ハンバーグをはじめに作る。 ・ポテトサラダを作る。 ・タコウインナーを作る。 ・スクランブルエッグを作る。 ・おにぎりを作る。 ・米を炊く、ジャガイモをゆでるという時間のかかる作業は前もって準備しておく。 ・うまくできるかな。 	90
4. 各班で試食	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のお料理、おいしくできたかな？ 	10
5. 片づけ	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで協力して手早く終わるようにする。 	5
6. 修了証	<ul style="list-style-type: none"> ・みなさん、よくできました。 	5

ほらみてできたよ！自分だけのおべんとう

笹崎 典子(数学専攻 2年)

1. 「おべんとうを作ること」とは

おべんとうには、手作りのお弁当、コンビニ弁当、弁当屋さんでつくられるお弁当という種類があります。大変忙しく時間がない人が多い今の時代、買えばすぐに食べられるコンビニ弁当や弁当屋さんのお弁当は大変重宝しています。しかし、「手作りのおべんとう」を幼稚園の頃いつも持って登園していた私にとっては、その現象を悲しく思います。

「おべんとうをつくること」は「愛情をしめすこと」につながっていると私は考えています。この1つの行為がどんなに大切かわかってほしい、それが講座のねらいの1つです。

2. 当日までの準備

この講座を開くにあたって、まず考えなくてはいけないのはメニューでした。栄養の面や子どもの好きなものから考えた結果、豆腐ハンバーグ、ポテトサラダ、卵焼き、タコウインナー、おにぎりという考えをはじめに出しました。しかし、自己紹介の時間や諸注意の時間等を考えたら作る時間は実質1時間強しかなく、これだけのメニューを全部作るには時間が足りません。そこでみんなの意見や教材研究をもとにメニューや工夫について検討しました。結果、豆腐ハンバーグは時間がかかりすぎるので普通のハンバーグになり、卵焼きは卵焼き用のフライパンが無いし、巻くのも難しいということでスクランブルエッグに決めました。そして当日の朝は米を炊いておむすび山を混ぜる、ジャガイモをゆでて皮をむくという準備をすることにしました。

ここから講座の当日の組み立てができて来ました。参加者同士の交流の時間ともなる「他の班のも試食しよう」という時間を設けたり、紙芝居で気をつけてほしいことを伝えることを考えました。前に岡谷子どもフェスタで「ミラクルボール」の講座を開いた時にも紙芝居をやったのですが、これを見た子は作り方をすぐ覚え、進んで自分1人で作っていたというよい効果があったため、この講座でも利用することにしました。

教材研究はとても大切です。当日は何が起こるかわかりません。でも教材研究をしている時に何について気をつけるべきか知ることができます。教材研究は自分だけでやったのを含め、6回ほどやりました。おかげでスタッフも自分自身も、講座中は教材研究でわかったことをおおいに利用できていたので良かったと思います。「教材研究の大切さ」このことについて今回は思い知らされました。

3. 当日の様子

当日は参加者親子10組21名、スタッフ6名、キャプテン1人の計28名でした。この全員の中で男の人はスタッフの人1人しかいませんでした。1人でも多く男の人に「料理」を楽しんでほしかったので、少し残念です。

自己紹介を終え、諸注意を込めた紙芝居をやりました。内容は「手をよく洗おう、包丁で手を切らないようにしましょう」というものです。スタッフの熱演も空しく白けてしまったのがっかりしましたが、効果はあったのでやはり紙芝居は有効であると知りました。その効

果については下に述べます。

本題のおべんとうの調理時間には、みんな楽しそうにジャガイモをつぶしたり、野菜を切ったりしていました。そして、紙芝居で注意したようにちゃんと手洗いをし、野菜を切る時はゆっくり切るようにしていたので良かったです。ただ気がかりだったのは、親同士の話し合いの結果で仕事が分担され、与えられた仕事を子どもが受け持つという受動的な姿が多く見られたこと。そのことにより、子どもの意見が反映されないということと、親同士の交流は深まったが、子ども同志は交流が少なかったという問題点がありました。

順調におかず類を作り終え、各班おにぎりにさしかかった時、意外な展開になりました。子どもたちがおにぎりに顔をつけたりにすることに予想以上に熱中し、予定時刻をオーバーしてしまっただけです。このことにより、試食の時間は「各班ごと」という形になってしまいました。子どもたちががんばって作っているのを見て、『そのままがんばって作って欲しい』と思ったので、あえてせかすことはできませんでした。

料理を終え、考えたことは『自分の計画よりも子どもの気持ち』を優先するべきだということでした。子ども同士交流する機会が無く、『クッキング教室』という形で終わったのにはとても悔やまれますが、やはり子どもが喜んでくれたならそれはそれで良かったと思っています。

おべんとうができ、参加者から多く聞いた話は、「このおべんとうはお昼には食べずに夜家族のみんなに見せて食べてもらおう」ということでした。自分で作った喜びを堪能してもらい、とてもうれしく思います。

4. 親子講座に対する課題

親子講座に対する課題は以下のことです。

- ・親主導よりも子ども主導に持ち込めるような形を考える。
 - ・全員平等に交流できるようにする。
 - ・子どもがスタッフよりも親を頼ってしまうので、スタッフを頼るようにする形を考える。
- これは簡単なようで難しいものです。でもこれを解決しないと『親子講座』ではなく、『親講座』になってしまいます。だから今度私がこのような講座を開く時は、あくまで子ども主導になる『子親講座』という形になるよう、よく考えて講座を作りたいと思います。

5. スタッフの声

- ・一緒に班になった幼稚園児の子が「家に帰ったらまた作ってみたい」と言ってくれたことが本当に嬉しかった。保護者の協力もありがたかったです。 増野 隆 (社4)
- ・おべんとうという「お母さんが作るもの」と思っている子どもたちも多いと思います。自分で作ることでお母さんの苦労や、料理をすることの楽しさ、おもしろさを感じることでできたのではないのでしょうか。 坂口 明美 (家4)
- ・みんな一生懸命できたと思うし、嬉しかったので良かったです。お母さんと話す機会があり、たくさん話しましたが、非常に楽しみにしているのが伝わってきました。 赤穂 瑞恵 (家4)

・共働き家庭が増加していて、時間に追われることが多く、親子で料理をする機会が少なくなっているそうです。今回の講座で、ゆっくりと親子で楽しみながら料理する機会を作ることができて良かったと思います。 吉永 和代(家4)

・お母さんが一緒だったので、とても手際良く進めることができたと思います。料理も、つめるのも、みんな上手にできて良かったです。 大久保 瑞恵(国2)



ほら見て! How to お弁当 Let's Cooking!

・ハンバーグ(4人分)

材料
合い挽き肉...150g
たまねぎ...1/2コ
パン粉...大さじ3
牛乳...大さじ1
卵...M 1/2コ
塩、こしょう...少々
ナツメグ...適量
サラダ油...少々

④ボールに②③
ひき肉、卵、塩、こしょう、
ナツメグを加え、よく練る。

Gyu! Gyu!

⑥フライパンを煙が出るまで熱し
火を止める。

①たまねぎをみじん切りする。

②①をフライパンで
あめ色になるまで
炒める。

③パン粉を牛乳で
ふやかす。

⑤肉を両手でキャッチボールをするように
投げ、空気を抜きながら
形づくり、
中央をへこませる。
これをしないと
変な形になるぞー。

⑦油をひいたらこんろの火をつける。
フライパンの手前を少し持ち上げ、ハン
バーグをすべらすように入れると
油がはわらないよ。これをよくや
り、出来あがり。

・ポテトサラダ(4人分)

材料
じゃがいも...中2コ
ミックスベジタブル...適量
好みできゅうり、トマト
マヨネーズ...適量
好みでマスタード

①じゃがいもをよくゆで、皮をむく。冷めたら
つぶす。
②これに解凍したミックスベジタブル、マヨネ
ーズをカク混ぜる。
盛りつけて出来あがり!

・スクランブルEgg(4人分)

材料
卵...M 2コ
ミックスベジタブル...適量
マーガリン...少々

①卵を割り、1まぐす。
②フライパンでミックスベジタブルをいため、
マーガリン、卵を入れ混ぜる。
固くなったら出来あがり!

・ウインナー(4人分)

材料
ウインナー...8本

①ウインナーを左図のように切る。
②お湯でゆで、上げる。

・オニギリ(たべたいだけつくろう!)

材料
ごはん
のり

①ラップにごはんを
包み、にぎる。
②のりまぐすで
出来あがり!
(かおをつくってみて
いーよ。)

第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《キミもコスモポリタン》

第18回 11月 7日(午後) 参加者数 約80名

キャプテン	小池 祐介 (教育実践科学専攻4年)	指導教官	越智康詞
スタッフ	山王隆晃 (工学4)、田中崇 (社4)、矢澤恵美子 (国際4) 森藤香奈子 (幼4)、赤穂瑞恵 (家4)、池田裕美 (家4) 井戸陽子 (家4)、押澤由記 (家4)、山田理恵 (実3) 佐田公子 (美3)、静居芳 (美3)、戸谷祐美子 (英2) 笹崎典子 (数2)、小松慎 (技2)、宮原新 (技2)		

・ 講座のねらい

多世代・多国籍の人やその文化・考え方を体験・交流することによって、互いを認め合い理解しようとする態度、共生の心情を養成する。

・ 講座の展開

活動内容	参加者の様子	時間
じゃんけん ・日本語 ・英語	これから何が始まるのだろう、と緊張ぎみ。 小さな「コスモポリタン」たちは、すでにフライング じゃんけんは万国共通らしく、老いも若きも子どもも 外国人も知っているようだ。	15
ベッキーズタイム ・じゃんけん ・〇×クイズ	ベッキーと通訳のファンキーなアドリブに、いっきに 緊張がとけた。 小さい子たちが、何やらベッキーと会話。 「ハーイ、ベッキー」の挨拶を参加者に伝え、ベッ キー嵐のごとく退場。	20
世界のうた ・ハレルヤ ・ドレミ ・ハッピーソング	子どもは思いっきり声を出して、身振り手振りしてく れるが、大人はいまいちノリが悪い。 このころから椅子に座って休憩するおとな、やたらと 走りまわる子どもがふえる。	20
ミキシングゲーム ・じゃんけん列車 ・オクラホマミキサー	また再び参加者の動きが活発になる。 キーボードの軽快なリズムにあわせ、ひたすらじゃん けんしまくる。 どんな人とも分け隔てなく踊る。	20
日本のうた ・あんたがさどこさ ・おさるのかごや	ここでグループ分け。 小人数で丸くなり、歌のリズムに合わせてひざをたた きあう。 「おさるのかごや」は外国人にとって難しいようだ	15
ラストダンス ・WAになっておどろう ・ヒューマンチェアー	みんなが手をつないでひたすら踊る。 ラストにふさわしい盛り上がりだ。 最後はみんながひとつの円になって、みんなのひざの 上に座り終了。	15
ザ・ティーパーティー	コンサート・オークション・伝承遊び。 ここではじめて個人的な交流タイムに入る。	45

キミもコスモポリタン

小池 祐介（教育実践科学専攻 4年）

1. 命名!コスモポリタン

昨年度の「世界の歌を堪能しよう」で、恥ずかしながら自分の隠れた才能？に酔っ払ってしまった（実際は段取りの問題など、かなり大雑把なところがあったのだが???）私は、実は極秘にこれ以上の講座をしでかしてやろうと企んでいた。去年はプロ歌手（金髪美女、実はアルベルトのフィアンセ）なんか呼んじゃって、かなり派手にかましたつもりでいて、フィナーレもみんな自然発生的に「ふるさと」なんか歌っちゃって盛り上がったけれど、私の中では90点止まりであった。完璧主義の私は残りの10点を捜し求めている。私の理想とする「ユートピア」を完成させるには、あと10点分、「心身の交流」を創りあげなくてはいけなかった。確かに「世界の歌」では、「歌」というバイリンガルのコミュニケーションが可能な「楽譜」を通じて、「国籍」も「世代」も「立場」も違った「地球人」同士がシンフォニーを奏でるといった現象が出現した。それ自体は感動的な出来事だったけれども、各人同士が体をふれあい、心を通わす「真の交流」のためには何かが足りなかった。そこで、自他共に認める類希のイベント屋である私が、みなさんのファシリテーター（橋渡し）役となり、体がふれあったり一体感を味わうことができる遊びを通して、いろんな人と分け隔てなく交流ができるコスモポリタン（世界人）を多数養成してゆこうじゃないか、という戦略を練った。子ども受けがいいように、講座名を「キミもコスモポリタン～世界のうたとおどりとあそびをたんのうしよう・老いも若きも子どもも～」ということにした。一人では心もとないので昨年同様、世代間交流プロジェクト（角尾先生、北沢先生）による企画ということにし、夏前には企画の骨子を決定し、執行部にプランを提出した。

2. コスモポリタンになるために

コスモポリタンとはおよそ世界人や国際人という意味で使われることが多いが、厳密に言えば世界を飛び回って自分の居場所がはっきりしない人、すなわち「ジプシー」に近い意味があるという。私がこの講座で養成するつもり「コスモポリタン」とは、世界人という意味を超えて、「文化・世代・立場というさまざまな障壁を乗り越え、それらとの関わりの中で前向きに生きてゆくことのできる人間」という造語（小池語）である。現代のさまざまな社会問題の元凶は、例えば地域の教育力の低下であったり、地域に多様な人間が集まる居場所がなかったり、そのために支えてくれる人がいなかったり、立場の違う人が交わるきっかけがなかったり、そういったさまざまな「交流の不足」にあるような気がするのだ。交流がなければ理解が生まれるわけがない。ならばと交流の場所ときっかけが少ないのなら、自分で創ったらいいい…。参加人数3桁ちかく、参加年齢3歳～80歳の、史上稀にみる「ふれあい講座」は、こんな私の「浅はかな考え」によって誕生したのであった。

3. We are the Cosmopolitans!

あの…メトロ…じゃなかった、コスモポリタン手伝いたいんだけど…。とあるとぼけた女性スタッフの一言である。このスタッフに代表されるように、どんな風の吹き回しか

知らないが「コスモポリタン」したいスタッフがなんと12名も集まってくれた。「自分の講座があるのでできないけれど…」と意思表示をしてくれたのもあわせると20人近くになっただろうか。企画段階がいい加減で、当日のアドリブが必要以上に重視される私の講座は、毎年執行部からひんしゅくを買っている。そんな中、こんなにも大勢が趣旨に賛同してくれたことに対して、私は「コスモポリタン」を創る前から感動してしまった。「これはこいつらを欺くわけにはいかないな」このプレッシャーは、当日まで私の心の半分くらいを占領することになった。というわけで今回は今までになく教材研究を早くからスタートすることにした。他の講座が黙々とやっている中、チーム「コスモポリタン」は「えーっさえーっさえさほいっさっさ」「トイレおにっ」Mさんを中心にわけのわからないことを叫びながらドタバタやってたのは記憶に新しい。ちなみにこのMさん、うちの講座のスタッフでないはずなのだが…。

当日は11月とは信じられないくらいの晴天に恵まれた。本来は体育館で行なう予定だったが、急きょ外でやることにした。結果、開放感を味わいすぎて「管理」の難しさにプチ当ることになったのだが…。しかしいざ始めるとなると、あまりの世代・国籍の多様性にどうしたらよいかかわからず、私が一番びびってしまったようである。「こりゃまいったな」と「ストーン・シザーズ・ペーパー」（日本語で言うじゃんけんの英語版）で誤魔化していると、レベッカ・マーク先生が「私にやらせろ」と乱入を要求してくるではないか。「そんなことはできない、まずはこの場をしのいでからだ」と思い「プリーズ・アフター」と答えると、なんとベッキー先生はあからさまに「ぶいっ」と気分を損ねるではないか。さすがは本場のアドリブだ。負けを認めた私は即座に場をつなぐと、みんなにベッキー先生を紹介した。ベッキー先生はたくさんの新聞紙を用意してきたらしく、みんなに配りまくった。ベッキー先生にジャンケンで負けたら、どんどん新聞紙を2つ折りにし、しかもその上に立ってなければならないといったゲームだった。小さな子どもたちはきゃーきゃー言いながら、必死で面積の小さくなった紙の上で踏ん張っていた。このあとベッキー先生オリジナルの〇×クイズも登場し、子どもたちの豊富な英単語の知識に驚かされた。だいたい雰囲気もでき上がってきたので、英語の歌に入ろうと思い、アシスタント2人に元気に歌ってもらった。“If you’re happy and you know it, clap your hands” “Doe a deer female deer” 日本語に直すと「幸せなら手をたたこう」「ドはドーナツのド」なのだ。このイングリッシュヴァージョンに「お約束」の振り付けをした。（Rちゃん、ちょっと歌詞の順番間違えちゃったね、でも許しちゃう）このあとは専門用語で言う「ミキシング」に入り、なるべく同じ立場でない人たちが体をつないでコミュニケーションできるゲームが続いた。具体的に言うと、まずはじゃんけん列車。これはよく幼稚園や小学校のレクリエーションで行われるみたく、どんどんいろんな人とじゃんけんをしていって、負けた人が勝った人の後ろにつながってゆく遊びである。つぎはオクラホマミキサーにあわせて、2人組になり、どんどん人を替えてダンスをしていった。ちょっとおじいちゃんにはきつかったかな…。そして最後は「WAになっておどろう」。オリンピックでも大ブレイクしたこの踊り、なるべく多くの人と体がふれあえるようリメイクし、最後にはみんなが一つの円になった。本当はもっとグルーブを作って競争できるようなゲームをする予定だったのだが、何せあつという間に時間が過ぎ去ってしまった。それほど「交流」に夢中になっていたのだろう。このあとはお待ちかねのティーパーティーだった。フラメンコやフォルクローレ

のコンサートを聞きながら、お茶とお菓子でワイワイと歓談した。中国人の男性が、子どもたちに日本の伝承遊び（コマや剣玉）を教える姿が印象的だった。なにせ小さな子どもたちが中心で、外国人はアジア系ばかりで欧米人が少なかったけれど、「ミラクル・グループダイナミックス」の形成という目的は達成されたな、とケーナの音色を聞きながらこの時感じたのであった。

ちなみにこの講座、「長野市ボランティアセンター」における「市民活動プロジェクト養成塾」にエントリーしたところ、12組中6位入賞で、「仲間がふえたで賞」という賞をいただいた。どうやら市民活動としても認められてしまったようである。当然私1人ではできるはずがなく、角尾先生や北沢先生、ベッキー先生や通訳のお姉さん、世代間交流プロジェクトの面々、そしてスタッフのみんながいたからこそできたんだけどね。この場を借りてお礼を言います。どうもありがとう。

4. コスモポリタンたちの野望

文部省統計数理研究所の調査によると、半分以上の高校生が、「お年寄りと交流したくない」と答えているそうだ。また、半分以上のお年寄りは、今の子どもたちに対して「甘やかされている」「常識知らず」「言葉遣いが悪い」と感じているそうだ。そして相変わらず子どもたちのココロの中はモノ・カネが螺旋状に交錯し、大人社会は欺瞞や虚構に懲りていない。これらの事実は、何を意味するか……。どうすればよいのか……。今更言う間でもあるまい。立派に成長した「コスモポリタン」たちが、きっと私たちと協力しながら解決してくれるだろう。いや、解決してくれないといけないのだ。この講座で夢を垣間見たごとく、全ての人が交流可能な「超（スーパー）・バリアフリー」の未来社会の実現を目指して。

この講座を開催するにあたって、参加者はもちろんのこと、スタッフや私自身までもがコスモポリタンとして生きてゆくきっかけが生まれたと思う。そういう意味では「ともに学び・ともに生きる」という、教育関係の理想的な形であったような気がする。そう、全ての教育は、「共育」でなければならない……。

私については女性、子ども、老人、外国人、障害者など社会から虐げられがちな人たちの味方となるべく、全ての年代、全ての立場の人々と交流可能な「カリスマコスモポリタン」として、長野県内の小中学校に君臨しているであろう。何年先になるかはわからないが、ふたたび「ふれあいユートピア」を創りあげる日が、楽しみで仕方ない。



第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《春にきれいな花を咲かせよう！1からのチューリップ農園づくり》

第18回 11月 7日（午前） 参加者数 7名

キャプテン	井戸 陽子（家庭専攻4年）	指導教官	角尾 篤子
スタッフ	重田くり子（校内職員）、山田理恵（実3）、武田由香利（幼2） 中澤典子（国2）、林一真（家2）、友利沙矢香（言1）、清水雅子（障1） 寺本沙織（社1）		

・講座のねらい

チューリップの特徴や性質を知り、春にきれいな花が咲くように思いを込めながら、参加者・スタッフがともに楽しくチューリップを植えてほしい。

・講座の展開

活動の流れ	活動内容・支援・その他
1. 自己紹介	・参加者、スタッフの順に自己紹介をする。
2. チューリップ探しゲーム	・スタッフの携帯電話に怪盗Xからの「チューリップを盗み隠した」との連絡がかかってくる。 ・怪盗Xに盗まれたチューリップの球根を全員で探す。
3. チューリップ博士クイズ	・チューリップの原産国 ・チューリップの赤ちゃんの形 ・チューリップの開花時期など
4. 農園の区画図づくり	・スタッフが考えた農園區画図に何色のチューリップを植えたいかを参加者中心に相談し決定し、農園區画図に色を塗る。
5. 農園の土づくり	・肥料をまいたり、土を耕す。 （鍬等の道具の使用時に、けががないように注意する。）
6. チューリップを植える	・農園の中心付近からチューリップを植える。（球根が健康に育つように植え方のコツを学ぶ。）
7. 道具の片付け	・使用した道具を全員で協力し片付ける。 ・手洗いをする。
8. 茶話会	・お茶を飲みながら労働の疲れをともに癒す。 ・農園の看板を作り、日付を入れ、参加者・スタッフ全員が各自で名前を書き込む。 ・修了書を1人ひとりに感想を言い渡す。

春にきれいな花を咲かせよう!1からのチューリップ農園づくり

井戸 陽子 (家庭専攻 4年)

1. 講座誕生の秘話

長い夏休みも終わり近づいた9月下旬のことであった。10時ごろ実践総合センターに来た私(井戸陽子)は刈った草がぎっしり詰まった大きな袋を2つ目にした。なんとなく実践センターの南側に回ると土井先生がひとり鎌を持ち、夏の間に成長した草をタオルで汗をふきながら刈っておられた。土井先生に「ご苦労様です。」と声をかけると、「ずいぶん伸びちゃってね」と労働の苦労の顔ではなく、労働の喜びのまぶしいとてもいい笑顔であった。急ぐ用事もなかった私は鎌を持ち草刈をお手伝いした。鎌を持つのは8年ぐらいぶりであった私にとって草刈りは難しかった。しかし土井先生はもう2袋も…。お昼になり、草刈を終えるときに「ここにチューリップをY O Uサタで植えようと思うんだけど、誰かキャプテンやってくれる人はいないかな。」と土井先生はキャプテンをやってくれる人を探していた。私は18回で講座を開く予定にはしておらず、教師になったときに農園づくりをやりたいと思っていたことからその場でキャプテンを「是非やらせてください。」と申し出た。このちょっとしたきっかけでこの講座が決まり、大勢の人を巻き込む事になっていった。

2. 講座を開くまでの準備

チューリップを植える場所は草が茂り、大きな石がごろごろし荒れ放題であった。美しい花壇を作るために、私達は花壇づくり、土づくりから始めた。草を刈り、大きな石を取り、ブロックを並べる、なんと大変で、時間がかかり、疲れる作業であろうか。「Y O Uサタ当日1週間前までには何とか終わらせたい。」そんな思いから、講座スタッフと作業をする打ち合わせをしていない日であっても、都合のつく限り私は農園で作業をした。しかし、実際は私ひとりではなかった。それは、私が作業をする姿を見たY O Uサタスタッフやそうでない人も「手伝うよ」と言ってくれ、日が沈み真っ暗になるまで一生懸命に土にまみれともに汗を流してくれた。なんとありがたいうれしい事であろう。そして、「土を触る事は楽しいね。」「こういうの(土づくり)昔から好きだったんだ。」という感想を聞かせてくれた。土づくりでのアリやミミズとの出会い、徐々に美しく作られていく農園、それとともに汗を流してくれる仲間。体は疲労しているが達成感と充実感。これらの思いをそれぞれが胸に描き、暗闇の中で道具を片付けた。

作業をする中で今までに見る事の出来なかったスタッフの一面を見た。それは、家が農家で農作業を小さいころからやっていたというスタッフの道具の持ち方、使い方や、男性スタッフの力強くたくましい姿、女性スタッフの美しい花壇を作るためのアイデア、センス。スタッフから道具の使い方を習い、アドバイスを受け多くのことを学んだ。

当日はチューリップを植える事がメインとなる。300個のチューリップを飽きずに植えるためにはどうしたら良いのか、時間はどのくらいかかるのであろうか。私達には見当もつかなかった。この講座で一番大切にしたいのは「チューリップ植えが楽しくできること」である。そして自分達が出来ることは“考えられる最大限の準備”をしておく事である。

何が起こっても対処できるように。無駄になってしまうかもしれない。しかし、あらゆる準備をしておく事は参加者を満足させるだけでなく、講座を開く私達にとっても安心材料となるし、自信を持って講座に望むことができる。そして、講座は参加者が活躍できる場をつくることと、スタッフ一人ひとりが活躍できる場をつくることでみんなで作り上げる講座にしたいと考えた。スタッフには「〇〇博士」として登場してもらうよう役割分担をし、内容を練ってもらい、皆で講座を盛り上げていった。

3. 当日の様子

雨が心配されたが、当日は晴天でかつ暖かい陽気となりチューリップを植えるのに最適な天候となった。参加希望者は2名（1家族）であったが、当日参加でもう1家族増え計7名となった。参加者は怪盗Xが隠したチューリップの球根を見事探し当て、それぞれの「博士」の話を真剣に聞き、スタッフと会話をしながらチューリップの球根を用意し、共同で飽きることなく、むしろ精力的に植える姿が印象的であった。また、どのスタッフも本当に良く自分から動いてくれ参加者に気を配り、あるスタッフは小学4年生の女の子の鍬を上手に使う姿を皆に紹介するなど講座を盛り上げてくれた。労働のあとの茶話会のときには看板に楽しく書き込みをし、小学1年生のK君は私が自分の失敗で言った「うっかり博士」と言葉を書き込み、皆を笑わせた。看板が完成し、参加者から「春が楽しみだね。」「春になったら見に来ようね。」と言う言葉が聞かれ、たくさんの人の思いが詰まった農園が出来上がった。講座が終了し反省会のときに「チューリップを植える子どもの顔がとても生き生きしていた」と言ってくださった方がおり、私達は大変救われた思いがし、今までやってきた苦勞を忘れるほどうれしかった。

4. 土づくりから学んだ事

ほぼ毎日、農園に出ていると天気が気になってくる。「明日は雨が降るようだから今日のうちにやっておこう」「今日は暖かいから昼間の明るいうちにやっしまおう」というように。農作業は天気とにらめっこしながら進めなければ、時期を逃してしまい失敗する。自分の思うようにはいかない。このような事は農業に携わる方にはごく当たり前のことであろう。しかし、私達にとっては初めて自分で経験し実感することとなった。経験や体験を自分ですることは、農業や林業、畜産などの第一次産業に関わる方のご苦勞を自分の肌で味わう事となり、第一次産業に関わっている方への尊敬の念や感謝の念を抱くことにつながる。経験や体験からの思いを私達自身大切にし、他の人にも伝えていきたいと思う。

思いを込めて作った農園は見てくれは悪くても農園に関わった人にとってはかわいくて仕方がない。時折、「農園の風車が回っていたよ」というように農園を気にかけ、声をかけてくれる人もいる。ある時、「土づくりは、人づくりである」というお話をJA長野の方がして下さり、「自分が作ったものならば虫がついていても食べる」とおっしゃっていたことが身にしみるわたくしに思いがした。農園も人間も愛情をかけるほど、かわいくいとおしくなる。農園が花でいっぱいになったとき、人が無事成長をしたときの喜びはどちらも比べようのないものとなろう。土づくりから学んだ思いは、教師になるひとだけでなくどの人にも必要なことであると感じた。

5. 謝辞

この講座を開くにあたって、大勢の方に大変お世話になりありがとうございました。杵渕先生（技術科）、和田先生（生活科）は土づくり、チューリップの球根のことについて快く相談に応じてくださりアドバイスをしてくださるだけでなく、土づくりまでも手伝ってくださいました。また、学校をいつもきれいにしてくださる清掃の方々と一緒に作業をしてくださるだけでなく自分の家から球根を持ってきてYOUサタ農園を一層にぎやかにしてくださいました。技術科の方はYOUサタ農園の看板木材の提供だけでなく、看板づくりを作ってくださいました。そして、実践総合センターの方々は活動を温かく見守ってくださり、暖かい言葉をいつもかけてくださいました。みなさんありがとうございました。

この講座は本当に多くの人を巻き込み、多くの方の協力で作られた講座です。協力してくださったみなさんに講座が無事終了できたことを報告できました。そして参加者にはYOUサタが終わってから、スタッフとともに手紙を書き、2000年春のチューリップ開花予想図の看板づくりをするなどの活動を続けました。他の講座よりも活動が長期間に渡ったのですが、どのスタッフも労を惜しまず最後までともに作業を続けてくれました。本当にスタッフに恵まれ、スタッフに支えられた講座です。みなさんこれからもYOUサタ農園を見守っていてください。最後になりましたがこのように素晴らしい経験の場を与えてくださった土井先生、本当にありがとうございました。

6. スタッフの声

- ・こちらがやることに対して子どもが素直に反応してくれたことに対してとてもやりがいを感じ、今後もフレンドシップ事業（YOUサタ以外）にも参加したいと思う。きれいなチューリップが咲くと良いなー！ 林 一真（家2）
- ・小学生の時の農作業を思い出し、懐かしい気持ちになりました。 中澤 典子（国2）



第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《ころころもちもち》

第19回 12月 11日（終日） 参加者数 3家族11名

キャプテン	小池 悠介（国語専攻2年） 井戸 陽子（家庭専攻4年）	指導教官	堀井 謙一 角尾 篤子
スタッフ	山崎美佐子（家3）、内田亜矢子（家3）、濱中菜穂（幼4） 目崎友子（家4）、武井恵美（家4）、原淳子（心4）		

・講座のねらい

親子で一緒に食べ物を作る楽しさを知ってもらいたい。また、“手”で直接もち米に触れ、直に感じることで、生活の基本でもある食べ物についてもっと関心を持ってもらいたい。また、鶯餡（ずんだ餅）や、白餡などの普段触れることのない食材に触れることで、食に対しての興味・関心が喚起できれば良い。

・講座の展開

活動内容	支援・留意点・その他
1. 自己紹介・グループ分け 導入	・参加者と打ち解けられるように、スタッフはうまく参加者の中に入り込むようがんばる。 ・基本的な作り方や注意する点などを、模造紙などを利用しながら簡単に説明する。
2. 作業開始 昼食	○ かまど作り・薪拾い・火起こし ○ 豆を煮る&実験 煮ている間に実験をする。 ・要素溶液実験 ・豆の吸水実験 ・うるち米ともち米の粘り比較実験 模造紙などを使い説明。 ○ 豆の煮こぼし ○ ここでお昼 ○ もち米をもちにしよう ☆ここが見所!! 臼でつく&手でつぶす（ゲーム感覚で） ○ ころころもち完成 室内に移動し、座談会の様な感じで輪になって食べる。 いろいろな餡やぜんざいのお餅を食べてみる。 一日の反省、お餅の感想を一人一人に発表してもらう。 ※作業の進み具合によって時間修正をする。
3. 片付け 4. 終了証授与	使った用具や会場をみんなで片付ける。 これからは家族でお餅を作ってくれるよう声をかける。 みんなで記念写真を撮ろう。
5. その他留意点など	スタッフは要点のみ指導し、助言や参加者の補助・手伝いに徹するようにする。 火傷、怪我に注意する。 親子一緒に作業できるように配慮する。

ころころもちもち

小池 悠介（国語専攻 2年）

井戸 陽子（家庭専攻 4年）

1. 口福を考える

僕が勝手に考え出した言葉に、『口福（こうふく）』というのがある。「おいしいものを食べていればおのずと幸せになるぞ」というような意味になる言葉だと思ってください。そんなある日、同じ言葉を使った漫画を店頭で見つけ、驚いて手にとって読んでみた。すると、そこには『口福』は『幸福』の素」という言葉が記されていた。この本は「口福の人」というタイトルの本で、21世紀に向け、安全な食糧をどのようにして安定した確保・供給をするか、自給率の向上ということをテーマに描かれている。僕自身は、「口福」という言葉を単に、おいしいものを食べることができて幸せ、程度の意味で使っていたのだけれど、真の「口福」とは一体何だろうかと考えさせられる出会いだった。今の時代、レトルト食品、コンビニ食、ファーストフードなどが巷に氾濫している。そういったことから生じる過度の偏食や栄養の片より、塾通いなどによる生活リズムの狂いなどの問題。また、農薬問題や環境ホルモンなどといった問題もある。このような問題を抱えている今の現状を考えたときに、僕達が子供達に教えられることは一体何だろうか。それは、食べるという人の営みの持つすばらしい意義とその感動、そして何よりその楽しさと大切さなのではないだろうかと思う。何を食べるにしてもいい、自分の食べているものに対して少しでも注意を向けること。ただ空腹を満たすためだとか、食べることが当たり前だとか、そんなことではない、生きる実感としての食べるという行為の大切さ。そういったことを考えなければならぬのではないかと思う。そこで、12月でお正月も間近に迫っていることや、ちょっとしたイベント的なものをもと考え、お餅をつくということを思いついた。実際にもち米に触れ、小豆などの豆に触り、実際に自分達で調理する。そして、「口福」を感じてほしいと思い、ずんだ餅や白餡などに挑戦しようと考え、そして、食べるという行為は、家族という共同体の中でその役割の多くを果たすと考え、家族参加という形にした。「口福」になり、「幸福」になってほしいと想い、今回の講座を開くことにした。

2. 餅つきが教えてくれるもの

餅つきといえばちょっとしたイベントだった。家族総出でもち米を蒸かし、つき、丸めて餅に仕上げる。今、このような経験をしたことのある子供はどれくらいいるのだろうか。そう多くはないだろう。餅つきという行事は、ちょっとした交流、または学習の場の一形態なのだろう。そしてこれは、今、生きる力と呼ばれることを学ぶことのできる場所だったのだと思う。餅つきだけがそうだったのかというと、そういう訳でもない。地域から各家庭までの様々な場面に、学習の場、言い換えるならば人間としての成長の場があったのではないだろうか。その大切な場が、今いたる所で崩壊を見せはじめている。すたれ、消えてしまったもの、形式化、形骸化してしまったもの、現代という社会の波に押され、多くの場が忘れ去られているのではないだろうか。今回の餅つきという経験を通し、人と人とのつながりやその暖かみ、そういった、人として知らなければいけないことを学

んで欲しい。家族関係や、友人とのあり方、地域との接し方など、見つめなければいけないものは沢山ある。大人でも子供でも、おじいちゃんでもおばあちゃんでも、親でも子でも兄弟姉妹でも、近所の人でも、友達でも初めて会った人でも、それはきっと変わらないことであり、大切なことには変わりが無い。少しでもそういったことを感じ取ってもらえたらと思う。

3. 考察とその先への想い

反省すべき点、工夫した点などをスタッフの声を交え、以下に書き出していこうと思う。

○反省すべき点

- ・時間の配分が甘く、講座の後半部分で時間が余ってしまった。
- ・もっと衛生面を徹底すべきだった。
- ・安全面への配慮が足らなかった
- ・スタッフが自信を持てるように、準備や教材研究をもっと頑張るべきだった。
- ・伝えようとする内容を十分考えてやってみることがあったらどうか。
- ・参加者への配慮は十分なものだったらどうか。
- ・参加者としてしっかり関わりを持つことができたらどうか。
- ・親御さん達への配慮は十分なものだったらどうか。

○工夫した点、良かった点など

- ・かまど博士、豆博士、もち博士、実験博士、餅つき博士などといったパートを作ることで、スタッフ全員がキャプテンのように動くことができるようにした点。
- ・子ども用の臼を用意することで、子供達が体験しやすいようにした。
- ・より食べ物というものを身近に感じてもらえるように、蒸しあがったもち米を自分達の手で直接もちに変えてみるようにしてみた。
- ・ずんだや白餡といった、あまり接することはないだろうものを用意したこと。

全体を通して見てみると、成功したともいえるし、失敗だったといえる部分もあると思う。これからの大きな課題となること、できていなければいけない基本的なこと。そういった、考えていかなければならないことは沢山あった。そんな中で、講座後半の余った時間は、確かに私たちの落ち度であり、失敗だった。しかし、この時間を利用して、子供達と共に様々な遊びをし、仲良くなることができた。ここで得たものは、本当に大きなものだと思う。子供達と友達になれた。そのことが本当に嬉しかった。学び取って欲しかったことは、既に子供達の中にあっただように思う。その日始めて会った同士でも仲良く遊ぶことができること、それができるということは、すばらしいことだと思う。しかし、今回はこのように上手くまとまってくれはしたけれど、いつもこうとは限らない。そのためにも、これまでの経験や反省を生かし、出会った子供達が、本当に自分を伸ばすことができるような場を作る努力をしていかなければならない。

各種餡子の作り方

～ずんだ餅～

○材 料（4人分程度）

- ・枝豆 500 g ・砂糖、塩適量（好みで醤油を入れるのもよい）

○作り方

- ・枝豆を柔らかくなるまで茹で、薄皮をむく。
- ・すりばちで、砂糖、塩、好みで醤油を加えながらすりつぶす。
- この時、若干枝豆の粒が残るようにするとよい。

～白 餡～

○材 料（4人分程度）

- ・はな豆 500 g ・砂糖、塩適量

○作り方

- ・豆を一晩水につけ、しっかりと水を吸わせる。
- ・柔らかくなるまで煮て、薄皮を取る。
- ・すりばちで、味をととのえながら粒が残らないようにすりつぶす。



第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《本日わたあめ屋さん》

第18回 11月 7日(午後) 参加者数 10名

キャプテン	中澤 典子 (国語専攻2年)	指導教官	滝澤 貞夫
スタッフ	吉永和代 (家4)、武井恵美 (家4)、佐藤宏樹 (社4) 井上真裕子 (理3)、大久保瑞恵 (国2)、宮下真弓 (国2) 中谷弥哲 (数2)		

・講座のねらい

- ・お祭りやバザーでしか縁のないわたあめを電池・モーター・アルミ缶など身近なところで手に入る材料を使って作ってみる。
- ・人と助け合って怪我をしないように工夫し、完成させて欲しい。
- ・溶かしたザラメを入れた空缶を回転させると缶の中からわたあめが出てくる不思議さを味わってもらう。

・講座の展開

活動内容	注意すること・支援・その他	時間
①自己紹介	・スタッフ、子どもの順番で。	10
②作業手順の説明	・グループにわけ、スタッフはどのグループの担当か確認。	10
③作業開始 1. 缶の下5センチにピンで穴をあける。 2. 缶に軸を通し、固定。 3. 軸とモーターをつなぐ。 4. モーターと電池を割り箸に固定する。	・当日、スタッフは作らず、安全面にとくに気をつけてわたあめ製造機を作る。 ・わたあめを作ってたべる時間をきちんと取れるように工作だけに時間をかけない。	45
④わたあめを作る ザラメを缶の中に入れ、カセットコンロで熱し、溶けたらアルミホイルで覆った段ボールの下の方でモーターのスイッチを入れて缶を回し、わたあめを割り箸でからめとる。	・火を使うのでとくに注意する。(バケツに水) ・溶け残ったザラメをきれいに解かしてまた作れるように洗面器にお湯を用意しておく。 ・溶けたザラメは熱いので、段ボールの中以外でモーターを回さないように徹底する。 ・順番に全員作れるように配慮する。	40
⑤後片付け	・全員で行う。	10
⑥修了証を渡す	・今日の成果を認め合う。	5

本日わたあめ屋さん

中澤 典子（国語専攻 2年）

1. 講座を開くにあたって

一年の頃、気軽にスタッフとして参加していたのと違い、学部生として長野に来てからはYOUサタに関わる先輩たちの姿を直接見られることになった。私とたった一つ二つしか年の違わない先輩たちが、本当に子どものことを考え、子どもと共に遊び学ぶ喜びを得ようとしている。いつか私もあんな風になれるだろうか、実習を終えたらいつか私も自分の講座を…と考えていた。それが土井先生の「今度はぜひ講座をやってみてください」という一言によってこんなに早く実現するとは正直思わなかった。

どうせやるならまだ誰もやったことのないものを、と考えてみたものの自分の経験のなさからやはり先輩のやった講座をまねさせて頂くことにした。たとえ内容が同じでも人が違えばその講座の色も変わってくる。わたあめの講座は資料を見ていて私が一番おもしろいと感じたので選ばせてもらった。前半は工作で後半はわたあめを作って食べるというめりはりのある講座の流れができると思ったこと、理科ばなれの進む子どもたちに、溶けたザラメを高速で回転させるとわたあめになる不思議さを味わってもらいたかったことが講座設定の一番の理由である。

2. 教授研究

この講座で作る「わたあめ製造機」は、「普段お祭りなどでしか縁のないわたあめを身近な所で手に入る材料を使ってつくってみよう」という目的のために非常に重要である。そのため、より手に入りやすい材料で、何度も使えるように丈夫なものを目指して教材研究を進めた。基本的な資料は13、14回のを参考にし、後は参考図書として「やってみようなんでも実験」（NHK出版）と、インターネットのホームページを調べた。

わたあめ製造機とは、側面に小さな穴の開いたアルミ缶を針金と虫ゴムでモーターにつなげたものである。缶の中にザラメを入れて溶かし、まわすと、遠心力で缶の穴からザラメが飛び出し、急速に冷えて固まる仕組みになっている。

丈夫なものを作るために14回と違って工夫したところは、缶とモーターのつなぎにアルミのくだではなく、2.6 mmの針金と自転車の虫ゴムを使ったところだ。このどちらもデパート、ホームセンターなどで手に入る。虫ゴムをつかって針金とモーターをつなげると、アルミ缶を火にかけるときにわたあめ機を直角に持つことができ、火の上にずっと手があがる状態にならないため、よいと思った。また、丸ごと一個の缶に直接針金を通すことにしてまわしたときのぶれを防げるようにした。

3. 考察・当日の様子

前日準備までに工夫したことは、スタッフでも割と難しかった、缶に針金を通す穴をあけて針金も曲げておく、という作業を事前にしておいたことである。これは過去13、14回の講座で割と工作だけで慌ただしく講座が終わってしまったことをふまえて、工作だけに時間を取られないようにしようと考えたからだ。しかし、実際当日を迎えてみると、今

度は仕事が早く済んでしまい、わたあめを作って食べる時間があり過ぎたようになってしまった。講座の運営をもっとスタッフと話し合い、中身のある講座内容にすればよかったと思う。

当日は参加者 10 名、スタッフ 7 人という人数で始まった。わたあめ講座を開いてみて一番よかったことは、やはり、今までわたあめが何からできるかわからなかった子も実際に作ってみてその感動を味わえた、ということである。一番問題があったといえばやはり、教材研究が足りなかったことだろう。スタッフだけで作ったときはみんな大人なので、それなりに機転も利くし、道具が足りなかったりしても補い合ったりできたので、私はそれでうまくいったと勘違いしてしまっのがいけなかったと思う。だから当日には、わたあめができる一番肝心なところを、段ボールが高すぎてよく見えない子が出てしまうなどの事態が起ってしまった。本当に子どもの目線にたつことの難しさを痛感させられた。また、講座の運営のことでももっとスタッフと打ち合わせが必要だったと思う。

自分自身が講座に取り組んでみて、始める前とやった後の気持ちの変化を書き留めてみたい。私は以前から、YOUサタは子どもにとにかく楽しんでもらえればそれで十分、と思っていたが次第にそれだけではいけないのではないか、と思うようになった。子どもにこういうことを伝えたい、という思いがあってはじめて講座がうまくいくような気がする。また、子どもからも常に新しいことを学ばせてもらうような謙虚な気持ちで講座に取り組めるようにしたい、という気持ちもわいてきた。反省会ときにはYOUサタのOBで、現在教員をやっておられる先輩からもたくさんのアドバイスや励ましの言葉を頂けたので、この経験を実習などにこれから生かしていきたいと思う。

4. スタッフの感想・意見

- ・わたあめの時、子どもの驚きと笑顔が見れてよかったです。一年生でも一生懸命がんばってやり遂げた時の子どもの様子を見て、やってよかったなと思いました。

吉永 和代(家4)

- ・楽しかったです。キャプテンのかたの準備がしっかりとされていてスムーズに講座が進みました。19回も頑張りたいと思います。

武井 恵美(家4)

- ・準備期間を長くとれなかったせいかあわただしく感じた。色々もっと工夫すべきところはあったろうし、今回は時間がおして係の方が大変だった。

佐藤 宏樹(社4)

- ・時間のことなどあり、どれだけ助けをだしていいのか本人にやらせてあげるべきか迷いました。

中谷 弥哲(数2)

- ・講座の準備が不十分でいけなかったと思う。みんなでやろうDAYSを午前の講座と午後の講座の分と週ごとに時間を取ってもらったら教材研究が重ならなくていいと思った。

宮下 真弓(国2)

- ・火を使うからこんどはもっと広いところでできればよかったと思う。講座の運営は皆で分担するところは分担してもらえればよかった。

井上 真裕子(理3)

- ・教材研究の時にザラメを入れるじょうごを作っておいたり、ザラメの量を適切に子どもに教えられたらよかった。

大久保 瑞恵(国2)

協力して下さった方、本当にありがとうございました。

この場をかりて、感謝の気持ちを伝えます。



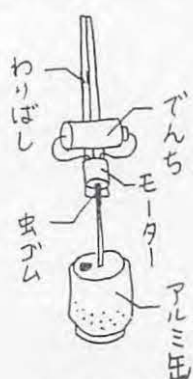
本日わたあめ屋さん

わたあめ製造機をつくろう!



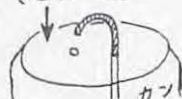
よいするもの

- ・モーター・虫ゴム・くぎ・ピン
- ・でんち・アルミカン・ペンチ
- ・はりかね・ビニルテープ・わりばし



▲わたあめ製造機

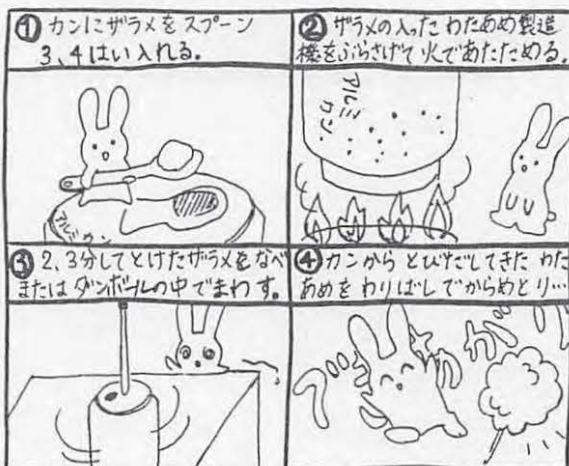
- ①アルミカンの下、 $\frac{1}{2}$ くらいのふぶん（ぶんぶん）にピンをあなをあけよう。
- ②カンのまんなかにあなをあけてはりかねを通そう。
- ③カンをさかさにし、図のようにはりかねの先をペンチでまいてとめよう。



④わりばしにでんちとモーターをビニルテープでとめよう。

⑤はりかねとモーターを虫ゴムでつなごう。

わたあめをつくろう!



注意!!! とけたサラメはあついでなべ、ダンボールの中以外でモーターのスイッチをいれないようにしよう。おとけのこったサラメはお湯でとがすときれいになるよ。
—これできみも今日からわたあめ屋さん—

第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《帰ってきたスライム》

第19回 12月 11日（午前・午後）参加者数 午前 30名 午後 28名

キャプテン	中村 祐介（理科専攻3年） 加藤 豊司（理科専攻3年）	指導教官	癸生川 武次 巽 勇吉
スタッフ	佐藤宏樹（社4）、榊原研太（理3）、那須良寛（実3） 山田理恵（実3）、富山裕子（障1）、比嘉頼子（障1）		

・講座のねらい

砂鉄をスライムの中に入れ、磁石に反応する動くスライムを作り、遊ぶことを通して、スライムが動く楽しさや不思議さ、驚きを体験し、科学への興味を持つきっかけをつくることができる。

・講座の展開

活動内容	子どもの様子	支援・注意すること	時間
1. 自己紹介	・前に座って自己紹介をする。 ・自己紹介が恥ずかしくてなかなか言えない。	・自己紹介がはずかしくて言えない子どもは、がんばって言えるように支える。	15
2. スライムの実演と注意	・スライムができる課程を見る。 ・問いかけに対して答える。 ・スライムを見て驚く。 ・作りたいという気持ちを持つ。	・動くスライムと、普通のスライムの実演をする。 ・作業をしながら、液を入れる順番など注意することを言う。 ・どうなるか問いかけをする。 ・口に入れないなど注意を言う。 ・全員が見えるように配慮する。	10
3. スライムを作り遊ぶ	・子どもは作り方を思い出しながら、スライムを作る。 ・動くスライムを作る子どもは、砂から砂鉄を取る。 ・普通のスライムを作る子どもは、色を混ぜたりして色を決める。 ・スライムができたら、手にとって伸ばしたり、丸めたり、感触を楽しんだり、磁石を近づけたりしながら遊ぶ。 ・友達などに自分が作ったスライムを見せる。 ・いろいろためしてみる。	・最初は、作り方を問いかけ、実演で見せた作り方を子どもが思い出しながらスライムを作れるようにする。 ・砂鉄を砂から取る。そのとき、砂鉄はすべて取るのではなく、あらかじめ用意してあるものに加える。 ・失敗したら支援する。 ・子どもが作りたいスライムを作れるように配慮する。 ・班の子どもは目をはなさない。 ・砂鉄は砂の中にあり、磁石につくことを発見できるようにする。	50
4. 片付け	・かだつける。	・班ごとにかだつけをする。	15
5. 修了証を渡す	・修了証を受け取る。	・がんばったことを誉める。	10

帰ってきたスライム

中村 祐介 (理科専攻 3年)

加藤 豊司 (理科専攻 3年)

1. スライム講座を開くにあたって

教育実習の子どもからの手紙がきっかけで、この講座を開くことにしました。そこには、スライムの作り方を教えてほしいと書かれていたのです。伸びたり縮んだりするあの魅惑なる物体は、子どもの心をつかむのでしょうか。そんなスライムの動く楽しさや不思議さ、驚きを体験し、科学への興味を持つきっかけができてほしい。そんな願いで講座を開くことにしました。

2. 教材研究について

今回は、磁石に反応して動くスライムをメインにしようと考えていました。よって、カイロの中身を入れて作ったのですが、時間が経つと茶色に変色する上に、磁石にあまり反応せず、うまくいきませんでした。そこで、西澤さんに『手づくりスライムの実験』という本とネオジウム磁石を貸していただき、その本を参考にしながら作ってみることにしました。まず、カイロの代わりに砂鉄を入れてみると、ネオジウム磁石を近づけると少し動いたもので、四ホウ酸ナトリウム水溶液とPVAと水の量を変えて、スライムの硬軟を微調整しながら砂鉄の占める割合を見つける教材研究を進めました。目標は、ネオジウム磁石のように強力な磁性体ではなくて、普通の黒いフェライト磁石で反応するスライムを作ることでした。そして、フェライト磁石でなんとか反応するのは、スライムが 30 cm^3 だったとき、その5分の1の砂鉄を入れると良いことになったのです。よって、砂鉄が大量に必要であるという問題が発生したのですが、なんとか集めて作ることにしました。砂鉄は、場所によって純度が違い、公園の砂鉄が一番良かったので、みんなで一生懸命集めました。そして、無事に用意ができ、当日を迎えることができました。教材研究は、キャプテン、スタッフとも助け合いながら取り組むことができたと思います。

3. 当日の様子 (午前)

子どもは、きれいなスライムを作りたい、たくさんスライムを作りたいという思いで講座に参加していました。私たちは、砂鉄のスライムで喜んでもらいたいという思いで講座に望みました。このような気持ちの差が砂鉄スライムを作る場面(遊学プラン参照)で出てきました。これではいけないと思い、きれいな色付きスライムを作りたい子ども、砂鉄スライムを作りたい子どもが共に楽しんでくれるにはどうすればよいかを考え、子どもの気持ちを優先に考えて講座を進めていきました。

4. 当日の様子 (午後)

午後は午前の反省をすぐ活かすことができるため、昼に改善点を話し合いました。そして、普通のスライムから砂鉄のスライムに移るとき、子どもはスライム作りに熱中していて、移行するきっかけをつかむことが難しいことや、作りたいスライムが違うということ

で、最初の実演のときに両方やり、好きなものを自由に作れるようにしました。その結果、午前より、動くスライムを作って遊ぶ子どもが増えました。また、午前の準備不足も解消し、流れはスムーズでした。子どもたちには、思い思いに色を付け、食紅をいろいろ混ぜてみるという好奇心も見られました。また、色を付けずにやってみる子どももいました。

5. 感想と反省

今回、午前・午後の2回、同じ内容の講座を行いました。私自身も初めての試みで、どのような感じになるのか分らなかったのですが、やってみて良かった点、悪かった点について述べようと思います。

まず、良かった点は、午前の反省を午後の講座に生かせたところでした。午前の講座が終わり、昼食を食べながら反省会をして午後の講座に望みました。午前の講座では、子どもとスタッフに気持ちの差があったことを反省し、午後の講座の進め方を、子どもが興味を持っているスライムを作って遊ぶというふうに変えました。子どもたちが何をやりたくてこの講座に参加してきたのかを一番に考える事が大切だと思いました。

次に、悪かった点は、講座準備と後片付けです。いつもの2倍の量の準備・片づけになってしまったので、この講座に参加したスタッフも大変だったと思うし、他の講座のスタッフにも片づけを手伝ってもらったり、全体の反省会に遅れてしまったりと皆に大変迷惑をかけてしまいました。

最後に、私がこの講座を通して学んだことは、講座を行うに当たって、子どもたちが何をしたいのかこの講座に参加しているのかを把握し、講座を進めていくことが大切なんだと思いました。また、いろいろな人の協力を得て、この講座が成り立っているんだな、自分一人じゃ何もできないんだなと思いました。人と触れ合うことで何かを学ぶ、とても素晴らしいことだと思いました。

6. スタッフの感想

・12月ということでもとても寒かったので、水でコップの洗ったりするのがつらかった。教材研究がしっかりできていたと思う。また子どもの数が1班に4～5人で、多すぎず、少なすぎずちょうど良かったと思う。 佐藤 宏樹(社4)

・教育実習を終えてから、久しぶりに子どもたちと遊びたくなった。一日、子どもたちとスライムに戯れながら遊んだら、心地よい疲れを感じた。そして普段の大学生活で失っていた笑顔を取り戻したような気がする。時々、子どもたちから元気を分けてもらおうとこれからも頑張れるだろう。 榊原 研太(理3)

・午前・午後と2回講座を行ったので、スケジュール、準備、片づけがとても大変だった。砂鉄スライムを作って遊ぶ子ども、きれいなスライムを作って遊ぶ子どもがいて、子どもの個性による満足感にたどり着くことができて良かったと思う。 那須 良寛(実3)

・今回は、終日でハードだったが、本当に「楽しい」と思える講座だった。私たちが楽しかったのだから、子どもも同じ気持ちで楽しんでくれたと思う。教材研究がよくできていて、チームワークもキャプテン中心によくまとまっていたので、素晴らしい講座になった。子どもの目的と私たちの考えのずれをどのように理解して進めていくのか、今後の課題だと思った。 山田 理恵(実3)

- ・子どもとたくさん接することができて楽しかった。細かいスケジュールが決まっていなかったのも、子どもは自分のペースでスライムを作っていたし、私も子どもと楽しく遊べた。しかし、私自身、班全体の子どもを見渡すことが難しく、自分の良い面・悪い面を見つめ直す良いきっかけとなり、貴重な1日だった。 富山 裕子(障1)
- ・子どもたちが、完成したスライムで遊ぶより、色を混ぜ合わせたり、スライムを作ること自体にとっても興味を示すとは考えていなかったのが驚きました。砂鉄スライムに興味を示す子どもも予想外に少なく、子どもが興味を持つところって分からないものだと痛感しました。 比嘉 頼子(障1)



帰ってきたスライム

動くスライムを作ろう!

よういするもの

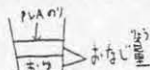
- ・PVAせんたくのり ・四ホウ酸ナトリウム(ほうおし)
- ・ビニールコップ(2つ) ・おろし ・砂鉄 ・おろし ・おろし

～作り方～

- ① ビニールコップに、おろしを入れる。



- ② PVAせんたくのりを、おろしとあなじ量だけ入れる。



- ③ 砂鉄を入れる。よく混ぜよう。



※ 砂鉄の入れ方に、食べにや
えのぐを入れると色のついた
ふつうのスライムが出来ます。

- ④ 別のビニールコップにおろしをはんぶん入れ、

四ホウ酸ナトリウム(ほうおし)をスプーン1杯はいれ、



※ 混ぜるのにきをつけてね。

- ⑤ ③で作った液の中に④の液をればでかき混ぜながら
ゆっくり入れる。



⑥ PVAのりとおろし

- ⑦ ⑥をまた、コップからだしてまねよう。



- ⑧ ⑧をまた、コップからだしてまねよう。

お家のへ

- 作る時はお家のへと一緒に作るようにして下さい。
- 小さいお子さんが口に入れないようにご注意ください。
- スライムを保存する時は、ビニール袋や、冷凍用パック袋に入れて
水分を保てるようにして下さい(袋の口をきつめておくのも、冷凍しても良いです)。
- スライム(耐熱も入れ)を処理する時は、不燃ゴミとして捨て下さい。
おろしが入っていないスライムは可燃ゴミとして捨て下さい。
- 四ホウ酸ナトリウムを購入する場合は、薬局で「ホウ酸」と
頼んで下さい。
- せんたくのりはPVA成分のものを使ってください。

第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《家族でトライ！～燻製屋さんになっちゃおう～》

第19回 11月 7日（午後） 参加者数 5家族17名

キャプテン	森下 房枝（家政教育専修1年）	指導教官	松岡 英子
スタッフ	押澤由記（家4）、尾沼直也（幼4）		

・講座のねらい

家族でウインナーソーセージを作ることを通して、食品を加工することの意味（保存性・嗜好性）を知るとともに、手作りの加工食品と市販されている加工食品との相違に気づき、消費者としてこれからの商品選択に生かして欲しい。

・講座の展開

講座の流れ	支援	時間	使用するもの
1. 身支度を整える 2. 参加家族紹介 3. 調理手順の説明と留意事項 ・燻製の特性について説明（嗜好性、保存性） 4. 調理開始 ①羊腸を15分ほど微温湯に浸し塩抜きし、流水で内部も良く洗う。（当日は準備時に処理する） ②大きなボウルに氷水を入れ、その上に挽肉を入れたすり鉢をのせて、調味料、スパイス、たまねぎ・にんにく・生姜のすりおろしを加え、よく混ぜ合わせてから、冷たい牛乳を加え、ペースト状になるまで良く擦って練り上げる。 ③絞り袋に口金を装着する。羊腸を少しずつ口金の根元にこき上げ、絞り袋に肉を詰め込み空気を出す。 ④羊腸に空気が入らないように注意しながら末端を結びとめ、羊腸の中に肉を押し出し、すべての肉を詰め込む。残った方の端を結びとめ、空気が入っている個所があれば、焼いた針の先でついて空気を抜いておく。 ⑤④を数センチずつ4～5回転させ、鎖状にする。 ⑥中華なべスモーカーを火にかけ、煙が出てきたら⑤をのせ、20～30分燻製にする。 ⑦湯で茹でる。（75℃前後で10～15分くらい） ⑧試食 5. 市販品と比較する。（色・味・値段・手間など） ・亜硝酸ナトリウム（発色剤）の役割について（防腐効果、色素の安定）説明し、商品選択時に生かせるよう提言する。	2. 参加家族担当スタッフも同時に紹介する。 4. 1) 肉の温度が上がらないよう氷水の温度管理。 2) すり鉢は、前日から冷凍して冷やしておく。 3) 中華なべスモーカーは、あらかじめ準備しておく（点火すれば良い状態にしておく）。 5. 1) 反応を解説するための絵・図など。	15 ----- 60 ----- 25 ----- 20	・マジック ・画用紙 ・HOW TO ○羊腸 ○肉（挽肉） ○塩 ○砂糖 ○たまねぎ ○ナツメグ ○牛乳 ○卵 ○にんにく ○生姜 ・氷水 ・ボウル ・すり鉢 ・すりこ木 ・おろし金 ・絞り袋 ・口金 ・針 ・中華なべ ・網 ・なべ ・温度計 ・チップ ・アルミホイル ・修了証 ・アンケート
6. 片付け 7. 修了証			

家族でトライ!!～燻製屋さんになっちゃおう～

森下 房枝（家政教育専修 1年）

1. 要約

この講座は、身近な加工食品（ウインナーソーセージ）を作ることを通して、色・味・香などの面から燻製の特性に気づかせることを目的とした。参加者は家族単位で募り、母親又は父親と兄弟の組み合わせの家族が4家族、父母と兄弟の組み合わせの家族が1家族の、合計5家族が参加した。子どもたちの年齢層は幼稚園児から小学校高学年まで、性別に偏りは見られなかった。講座は、身支度から試食・後片付けまでを2時間で扱った。ウインナーソーセージづくりの手順は単純であるが、温度に注意して加工しなければならないことや、すり鉢で肉を擦る時に大きな力が必要であること、など多少難しいところがある。しかし、参加者達は仕事を分担し、協力して作業を進め、試食では「手前ソーセージ」に舌鼓を打ち、楽しそうに2時間を過ごしていた。

2. ねらいと題材の設定

講座の主なねらいとして、次の2点を挙げる。

食品を加工（燻製）することによって、保存性及び味や香などの嗜好性が高まるということを知って欲しい。

市販品を利用することの多い食品を、自分たちの手で作ることによって、その便利さや、味・香・色などの違いにも気づいて欲しい。

これらを柱にして、食べ物を調理する楽しさや、主体的に商品を選択できる消費者としての意識などもねらいに付加した。このねらいを達成するために、身近な食生活で加工食品として利用され、参加者たちが普段あまり調理したことが無いと考えられるウインナーソーセージを素材として採りあげ、講座を組み立てることにした。

3. 素材の特性と扱い

ウインナーソーセージを簡単に説明すると、挽かれた獣肉に塩やスパイスなどを合わせペースト状になるまでよく擦り混ぜたものを、羊や豚の腸に詰め、広葉樹の木材チップで燻製にしたものである。

肉に塩を加え擦りつぶすことにより、肉の中のたんぱく質（ミオシン）が溶解し、粘りがでる（「あし」という）。さらに、これを加熱することにより、網状構造が形成され軟らかくくずれにくくなる。また、燻製にすることによって、食品の水分量が減少し保存性が高まるだけでなく、煙の中にある様々な成分の作用によって保存性や嗜好性も高まる。煙中のフェノール系化合物、カルボニル系化合物や酸などによって、殺菌・抗菌効果、燻製独特の香・色をつける。手作りのウインナーソーセージは、このような肉の特性や燻製の特性を利用して調理する。細かい化学反応には触れないが、調理しながら素材が変化していく様子に気付くように扱う。

また、市販品のウインナーソーセージは、粘着剤、香料、発色剤などの食品添加物を添加することによって、肉質を変化させ嗜好性を高めていることから、加工食品の学習と合

わせて食品添加物の問題点を問う授業の題材としてよく取り上げられている。学校などでの食品添加物の扱いは、「添加物は化学物質である」「複数の添加物が含まれる食品は安全性が懸念される」というような否定的な側面のみが扱われる傾向にあり、市販のウインナーソーセージへのイメージは決して良いとは言えない。しかし、発色剤として使用されている「亜硝酸ナトリウム」は、より日常的に摂取している漬物や野菜などにも含まれる成分である。そこで、この講座では「市販品より手作りのウインナーソーセージの方が良い」と訴えるために食品添加物を扱うのではなく、市販品と比較することを通して、食品添加物の役割及び成分（漬物などにも含まれていることなどを含めて）について説明し、これからの商品選択に生かせるように扱う。

4. 参加者と題材との出会い

参加者の多くは、ウインナーソーセージを作った経験がなかったが、家族で協力し合って効率よく作業を進めていた。挽肉をすり鉢で擦る場面では、親と子の4つの手ですりこ木を握る姿や、すり鉢が動かないように必死で抑える子どもの姿などがみられた。また、肉を腸に詰める場面では、肉を押し出す側と腸を調節する側とが、タイミングを合わせて肉を詰めていく姿や、時には腸が破れて肉が出てきてしまっただ騒ぎになったりと、ウインナーソーセージづくりのヤマ場を家族で楽しんでいる姿が印象的であった。さらに、燻製にする場面では、色の付き具合を見るためにふたを開けた時に、食い入るように覗き込む子どもたちの姿や、色が付いてきたことに感嘆する声があがっていた。

5. 反省と課題

今回は家族単位での参加であったため、保護者の方が中心となって各班の調理や片づけを進めて下さり、なんとか時間内で講座を修了させることができた。しかし、スタッフ1人につき2グループを担当することに、「多少無理があったのではないかな」押澤 由記（家4）という反省が挙げられた。家族参加であり、常にスタッフが側にいなくても問題無く安全に作業を進めることができると考え、スタッフが3人でも5家族受け入れることにした。しかし、実際には各班の進行状況に差があり、状況に応じて適時に支援していくことが難しかった様である。担当するグループ数を再考する必要があるが、全体を見ながら各班の状況に応じた支援ができるようなスタッフを育成していくことも、今後の課題である。

さらに、「子ども中心というよりは大人中心の講座になってしまったのではないかな」（同）という反省も挙げられた。確かに、講座中も子どもが主体的に活動するのではなく、保護者の方がリードしながら作業を進めていたり、母親の希望で講座に参加した家族がいたり、大人中心の傾向にあったかと思う。しかし、保護者のリーダーシップを発揮したり、保護者の「学びたい」という欲求を満たすことは、今日の教育が目指すところとする生涯学習社会を見据えることにならないだろうか。子どもだけでなく成人にも学ぶ機会を提供することができること、それがこれからの教育者に必要な資質の一つであり、YOUサタに必要な視点ではないだろうか。

反省する点はたくさんあるが、「疲れたけれどその分充実感がある」尾沼 直也（幼4）の感想にみられるように、この講座に関わって、疲れた分だけの充実感を残せたことは、私達スタッフをひとまわり大きく成長させた講座であった証拠であるといえよう。

参考文献

- 1) 遠藤仁子編 「調理学」 中央法規出版 157 1991
- 2) 三俣鮎子著 「手づくり薫製」 西東社 130-155 1994
- 3) 今井克宏著 「薫製/料理と技法」 柴田書店 7-19 1991
- 4) Studio Essence 編集・製作 「薫製工房」 平凡社 94-109 1988
- 5) 家庭科教育研究者連盟編・発行 「月刊家庭科研究」 あゆみ出版 4-13 1993
- 6) 平成 11 年文部省検定済 「小学校わたしたちの家庭科 6」 開隆堂 32-34
- 7) 文部省検定済教科書 技術・家庭科研究会著 「技術・家庭学習指導書実践編 上」 開隆堂 112-114
- 8) 文部省検定済教科書 伊藤セツ他著 「家庭一般」 実教出版 101 1995

6. 付録

1) ウィンナーソーセージの材料

羊腸の塩づけ*	約 3m	塩	7g
豚の肩肉*	250g	さとう	2g
豚のバラ肉*	250g	こしょう	適宜
卵	1 個	ナツメグ	適宜
たまねぎ	1/3 個	生姜	8ml
牛乳	60ml	にんにく	1 個

* 羊腸の塩づけは、アウトドア用品店や東急ハンズなどで安価に購入することができます。

* 豚の肩肉やバラ肉は、精肉店で購入するときに挽いてもらうとよい。

2) 調理手順

遊学プラン参照。



第6期 信大YOU遊サタデー游学プラン

《初めてのインターネット～ホームページで自己紹介～》

第19回 12月 11日（午後） 参加者数 3名

キャプテン	佐藤 正志（技術専攻4年） 河西 祐司（技術専攻4年）	指導教官	森山 潤
スタッフ	町田豊文（技4）、佐野友和（技4）、井上真裕子（理3） 野田耕次郎（技3）、渡辺勝由（技3）、細江真吾（技3）、菊地泰弘（技3）		

・講座のねらい

インターネットにほとんど触れたことのない小学生高学年を中心に、実際にインターネットを体験させ、自分の自己紹介のホームページを作ることができるようになる。

・講座の展開

活動内容	展開	時間
①自己紹介	・キャプテン、スタッフ、子どもの順で自己紹介する。	10
②コンピュータに触れる	○実際にコンピュータに触れ、インターネットの世界を体験する。 ・Yahoo!きつず、学校給食のページ、同年代の子どもが作った自己紹介のページに接続する。	30
③インターネットのマナーを知る	○エチケットについて理解する。 ・テキストを用いインターネットのマナーやエチケット、セキュリティについて知る。	10
④ホームページの製作	○自己紹介のホームページを作成する。 ＜作業順序＞ ・HTML（タグ）について知る。（ソースを表示する） ・ソフトを用い自己紹介ページの作成。 ・FTP ・子どもを中心に製作するがスタッフが適宜支援する。	50
⑤作ったホームページを見せ合う	・作った感想や友達のを見ての感想を話し合う。	15
⑥修了証	・修了証と作ったHPのプリント、FDを手渡す。	5

初めてのインターネット ～ホームページで自己紹介～

佐藤 正志（技術専攻 4年）

河西 祐司（技術専攻 4年）

1. 講座開設の理由

情報化社会のなかで小学校におけるコンピュータの設置台数もますます増加している。また、コンピュータ設置台数の増加に伴いインターネットへの接続率も増加している。そのような中で子どもたちは、次から次へとあふれている情報をうまく活用するための能力が育っているのか疑問である。コンピュータの学習が本格的に行なわれるのは中学校技術家庭科の中の「情報基礎」領域においてである。しかし現状はその学習をする前にコンピュータに触れることが多い。そこでコンピュータに対する正しい理解と、インターネットにおけるマナーを学習するためにこの講座を開設した。

さらに「小学生のための技術教室」と言うことで、技術の実践的な経験の場を提供し技術教育の今後の発展を願ったものでもある。

2. 教材について

ホームページはタグを用いて作られる。しかしながら小学生にとってこのタグの原理を理解することは難しい。そこで今回はホームページ作成ソフトを用いて子ども独自の自己紹介のホームページを作ることにした。限られた時間の中での作成であるのであらかじめ「写真」「プロフィール」「声」「ペイント」の4つに製作内容を限定した。

はじめは様々なホームページを閲覧することで、自分の作りたいホームページの参考にさせる。小学生と関わりのある「学校給食のページ」(<http://www.nikonet.or.jp/kana55go/>)や「Yahooきっず」(<http://kids.yahoo.co.jp/>)「ぷちねっと」(<http://navi.ntt.co.jp/petit/>)などの子ども向け検索ページを使いよりホームページに対し親しみをもてるようにする。そしてスタッフの作ったテキストをもとに順序だてて実際に作成し、必要に応じてスタッフが手を貸すことで小学校高学年の子どもなら十分作成することができる教材を作成した。

3. 当日の様子

参加者は当日参加を含め3名であった。小学生高学年に限定したため、参加者が少なくなることは予想していたが、スタッフの数が9名で逆におおく手のあいてしまうスタッフが出るのではないかと心配した。しかし結果的にお互いを補いながら進めることができ、よかったのではないと思う。またコンピュータの台数も子ども1人につき2台を確保できたことで1台は作成用、もう1台はホームページ閲覧用と贅沢に使用することができた。

ほとんどコンピュータに触れたことのない子どもたちだったが、キーボードの入力にもほとんど手間取ることなく製作することができた。また、ホームページを見るのも初めての子供が多く予定していたよりも多くの時間を取るようになってしまった。参加者の一人は自分で検索ページから占いのページを見つけ出し、スタッフと一緒に楽しんでいた。また、ほかの参加者は自分の学校のホームページを見つけスタッフに紹介していた。

ホームページの製作については全員が始めてであり、いっせいに作業をするほうがやり

やすいと考えていた。しかし、実際にはじめてみるとそれぞれの子どもの進度に差が出てきたのと、スタッフの数が十分にあったため子どもにあったスピードで自由にやらせることにした。そのため参加者の一人について時間が足りず、結果的に閉会式後も作業をすることになってしまった。しかしこれはそれだけ自分の作ったホームページに対してこだわりを持っていたからとも考えられる。

4. この講座を通しての反省

良かった点

- ・限られた内容であったが子どもたちのオリジナリティあふれるホームページができた。
- ・スタッフ全員がすべての子どもたちに何らかの形でかかわることができた。

反省点

- ・小学校高学年と対象が限定されたため広い年齢層の参加を促すことができなかった。
- ・準備が遅くなり、スタッフが十分に講座の内容を理解しきれていなかった。

なお今回の講座の様子は、私の所属する技術教育研究室のホームページで紹介しております。URLは (<http://gikyoku08.shinshu-u.ac.jp>) です。「教育実践」のページよりリンクしていますのでよろしければご覧ください。

5. スタッフの声

- ・「子どもとのコミュニケーションのとり方」に重点をおき活動したが、とてもうまく行っていて満足している。思った以上に子どもが満足していて充実していた。

井上 真裕子 (理3)

- ・講座は終始先輩の手伝いの形だったが、子どもが喜ぶのを見、スタッフの仕事が色々あり充実してよかった。

野田 耕次郎 (技3)

- ・はじめての参加でわからないところなどたくさんあったが、勉強になったことも多かった。これからも参加していきたい。

菊地 泰弘 (技3)

- ・今まで子どもたちと触れ合う機会があまりなかったもので、これからも参加しいろいろなことを学びたい。

渡辺 勝由 (技3)

- ・子どもたちがとても夢中になって取り組んでいる姿を見て参加して良かったと思いました。

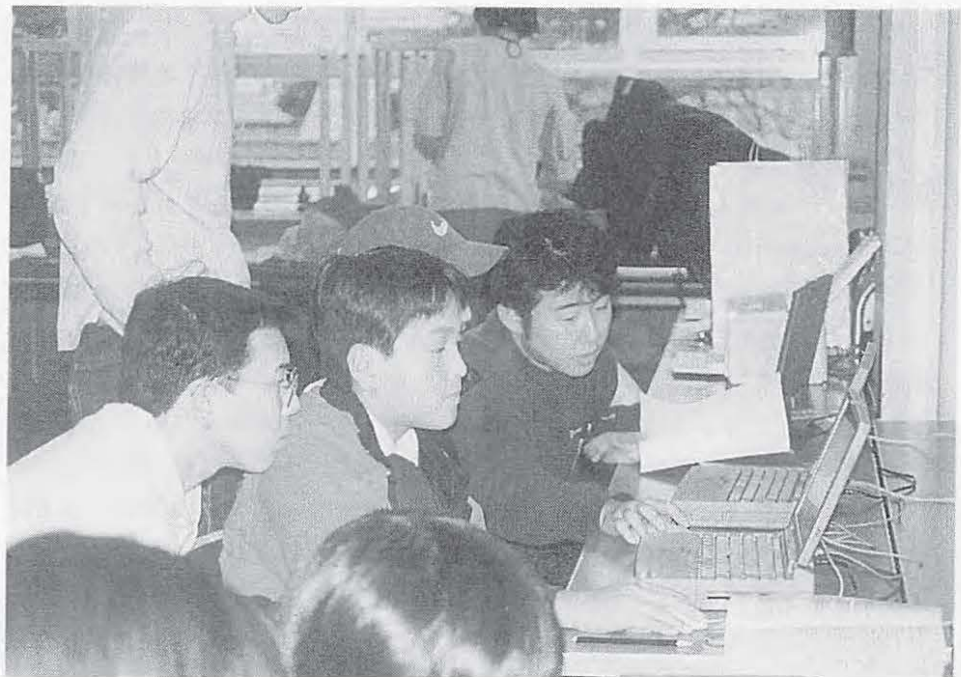
細江 真吾 (技3)

- ・この機会を教職に生かしたい。

町田 豊文 (技4)

- ・今回は忙しく大変つかれた。

佐野 友和 (技4)



第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《パソコン大分解！！》

第19回 12月 7日（午後） 参加者数 7名

キャプテン	田中 崇（社会専攻4年）	指導教官	鵜飼 照喜
スタッフ	長田雅子（実4）、山王隆晃（工学4）、大場浩幸（数2）		

・ 講座のねらい

普段何気なく使っているものの仕組みがどうなっているのか興味を持ち、知ろうとする態度をもってほしい。（比較する姿勢を身につけてほしい）

・ 講座の展開

講座の流れ	参加者の動き	留意点（○スタッフ、△キャプテン）	時間
1. 自己紹介	・ 大きな声で自己紹介する。 ・ 班に分かれる。	○ 参加者に負けないよう、大きな声で自己紹介する。 △ 機械を分解した事があるかを聞く。	5
2. PCの中を想像する	・ 中にどれだけの部品があるか、どんな部品があるか想像する。	△ 「この中に部品がどれくらいあるか」「どんな部品が入っていそうか」質問しイメージをさせる。	8
3. カバーをはずし、予想と同一か確認する	・ 2台のパソコンを比べたり共通点や違いを考えたり、予想との違いを確認する。	△ どちらが古いパソコンか説明する。	12
4. 説明	・ 静かに聞く。	△ キーホルダーの作り方を説明する。	5
5. 分解	・ できるだけバラバラにする。	○ 道具を正しく使えるよう指導する。 ○ 道具を譲り合い作業するよう指導する。	50
6. キーホルダー作り	・ 自分のキーホルダーを作る。	△ 解体できたことを確認して金ノコを渡す。 ○ 線を引いてから切断させる。 ○ キリはダンボールの上で使わせる。	30
7. 片付け	・ 全員で片付けをする。	△ 声掛けを忘れない	10
8. 認定証を渡す	・ 認定証を受け取る		

パソコン大分解！！

田中 崇（社会専攻 4年）

1. 講座設定の理由

現在さまざまな電気製品が、生活をととても便利にしてくれている。買ってきた製品はコンセントにつないだ瞬間から使えるというのが普通だ。しかし、高価な製品だから壊れたら困るし、見ても分かるわけがないという理由で、それらに対して「中身は自分とは関係ない世界」と感じているように思う。子どもは、生まれたときからそれらの電気製品に囲まれて生きているにもかかわらず、製品の中の部品が進歩していることを、外見だけでは知ることができないのが現実である。そこで今回、科学技術の先端というイメージのあるパソコンを分解することで、科学を身近なものに感じてほしいと思いこの講座を開講した。

2. 講座準備

この講座を開くにあたって最も心配だったのは、壊してもよいパソコンが集められるかということだった。しかし、幸いにも新旧2台のパソコンを提供していただくことができた。その2台は、ICだけでできたパソコンと、ハードディスクのついたパソコンというように、部品の違いを見るのにととても適したものであった。そこで、2台のパソコンの中身を見比べながら、分解を進めていくことにした。また、バラバラにして分解したという達成感を持たせるために、金ノコで基盤を切ってICキーホルダーを作ろうと考えた。パソコンは、壊れても部品を他のパソコンに使う事ができる。常識ではそのような事はしないため、基盤まで壊していいのか迷った。しかし、もう一度組み立てるのは小学生には難しく、壊れたパソコンであるから、組み立て直しても動く事はない。そこで、基盤を切断する事を決意した。

対象を小4~としたため、機械に興味のある中学生も参加してくれると思っていたが、中学生の参加はなかったのが残念である。また、参加申し込みは男子だけだった。

3. 参加者の様子

当日は、開会式の段階から自分の認識の甘さを痛感する事になった。開会式会場にパソコンの本体を持っていき、興味を引こうとしたのだが、参加者が「本体はどこ？」という質問をしてきたのだ。小学生にとって、パソコンとは絵を映し出しているディスプレイの事であり、本体はただの四角い箱だったのだ。そのため目の前に本体があるにもかかわらず、「本体がないんだね」と言われてしまった。ディスプレイはガラスが使われており危険でなため、すでに捨ててしまっていた。また、マウスやキーボードも汚れがひどかったため、用意していなかった。そのため質問に対してこれがパソコンの本体だとしか説明できず、実感に欠けるものがあつた。講座の最初に実際に動いている状態で、パソコンの各部の役割について説明した方がよいと思った。また、マウスは直接触る一番身近なものだけに、それがついていないことも不思議なようであつた。

参加者の中に機械を分解した事のある子はいなかったが、講座を希望してくれた子だったからであろう、機械に対する関心はとても高かった。カバーをはずした瞬間から、のぞ

きこむようにして部品の一つひとつを眺めており、パーツをはずそうと一生懸命だった。また、金ノコを使うのが初めてで苦労しながらも、あきらめない姿が印象的だった。それはキリについても同様である。1つの穴をあけるのに20分以上かけても、投げ出そうとしない忍耐強い姿は見ていてうれしくなるものであった。また、フロッピーディスクドライブのカバーをはずし、金具がフロッピーをどのような仕組みで固定しているかを、熱心に解明しようとしている姿もあり、とても有意義な時間になったと思う。2時間でキーホルダー1個というのは時間が余ることになり、10個以上作った参加者もいた。そのため、最後の10分間で、キーホルダー作りにあきて、力任せにパーツを壊し始める参加者もあり、慌てて片付けの時間にするなど、最後は時間に助けられることになった。

4. 考察および反省

この講座の目的は、科学を身近に感じるということであったが、参加者の様子を見ている限り、「パソコンを壊した」という意識を持つよう促す手立ての準備が不十分だったと思う。先ほども書いたが、ディスプレイまで含めて準備しておき、講座の導入にそれぞれの役割を説明しておけば、パソコンを分解するという意識が高まったように思う。また、参加者に教えられるだけの知識をスタッフがもっていなかったため、積極的に部品の説明ができなかった。せっかく新旧2台のパソコンを提供していただいていたが、2台の違いについてほとんど考えさせることができなかった。

道具の使い方についての指導を徹底できなかった事も、反省点としてあげられる。今回は、金ノコとキリとドライバーを使っただけの作業がほとんどであった。しかし、それらの使い方を説明する時間を取らなかったため、金ノコを普通ののこぎりと同じように使うなど、間違った使い方のままで終わってしまう参加者もいた。「怪我をしてもいい」と言うくらい一生懸命作業している参加者に、適切な指導ができず心残りである。しかも、木工用のキリしか用意していなかった事で、基盤に穴をあけていてキリの先が丸くなってしまうなど、それなりの道具を使っていればありえない問題も起こった。用途に見合った工具を使わなかった事を反省したい。

参加者に対する安全の確保ができるスタッフの人数を用意できなかったことも、反省しなければならない。参加者は小学生であるから、キリを使うときなどには細心の注意を払わなければならないにもかかわらず、スタッフの人数不足からそこまで手が回らず、何度もひやりとする場面があった。幸い怪我がなかったから良かったものの、キリを足に刺すなどの事故も十分考えられた。

反省すべきところはたくさんあるが、目を輝かせて作業する姿が見られるなど、パソコンの分解は教材として大変面白いものであると思った。そのため、もっと学ばせたい事を検討すると、実りの多い講座になったと思う。私自身も対象者に合った教材や手立てを用意することの大切さを学ぶ事ができ、勉強になる講座だった。YOU遊サタデーでは、参加者は興味のある講座に自ら申し込みをしてくる。つまり、その時点で教材はその参加者の興味に沿ったものであることが多い。そのため、何を学ばせる事ができるかは、手立てにかかる部分が大きいと思う。教材だけでなく、手立てまで含めてしっかり検討する事が、「楽しい」だけで終わらない講座作りには欠かせないことだと感じた。

5. スタッフアンケートより

- ・穴をあける等危険な作業は、電動ドリルでスタッフがしても良かったのでは。
男子だけの講座であり、彼らの圧倒的なパワーに驚かされた。 長田 雅子(実4)
- ・思った以上に参加者が熱中してくれて良かった。
道具や打ち合わせなどの準備が不足していたように思う。 山王 隆晃(工学4)
- ・斬新で面白い経験ができた。 大場 浩幸(数2)



パソコンのなぞ!!!

パソコンの中身はどうなっているの?



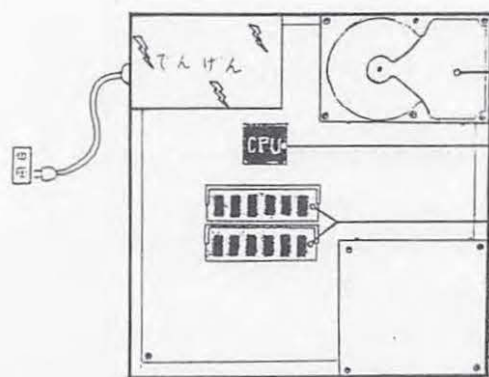
パソコンの中には、むずかしい計算をするためのきかいがたくさん入っています。
でもパソコンは、みんなが宿題をやるのと同じくみでできているのです。

世界初のコンピューター

1946年2月にアメリカで作られたENIAC(エニャック)が、世界で最初のコンピューターです。
重さは30トンありました。



コンピューター
1台で、部屋が
うまっているよ!



ハードディスク

CPUクーラー

メモリ
(RAM)

フロッピーディスク

CD-ROM

コンピュータは、いろいろな部品でできている。この部品は、コンピュータの脳で、いろいろな計算をする。この部品は、コンピュータの記憶装置で、いろいろなデータを記憶する。この部品は、コンピュータの電源で、コンピュータを動かす。この部品は、コンピュータの冷却装置で、コンピュータを冷ます。この部品は、コンピュータのインターフェースで、コンピュータと他の機器をつなぐ。

この部品は、コンピュータの電源で、コンピュータを動かす。この部品は、コンピュータの冷却装置で、コンピュータを冷ます。この部品は、コンピュータのインターフェースで、コンピュータと他の機器をつなぐ。

あなたは、いろいろな部品でできている。この部品は、あなたの脳で、いろいろな計算をする。この部品は、あなたの記憶装置で、いろいろなデータを記憶する。この部品は、あなたの電源で、あなたを動かす。この部品は、あなたの冷却装置で、あなたを冷ます。この部品は、あなたのインターフェースで、あなたと他の機器をつなぐ。

あなたは、いろいろな部品でできている。この部品は、あなたの脳で、いろいろな計算をする。この部品は、あなたの記憶装置で、いろいろなデータを記憶する。この部品は、あなたの電源で、あなたを動かす。この部品は、あなたの冷却装置で、あなたを冷ます。この部品は、あなたのインターフェースで、あなたと他の機器をつなぐ。

あなたは、いろいろな部品でできている。この部品は、あなたの脳で、いろいろな計算をする。この部品は、あなたの記憶装置で、いろいろなデータを記憶する。この部品は、あなたの電源で、あなたを動かす。この部品は、あなたの冷却装置で、あなたを冷ます。この部品は、あなたのインターフェースで、あなたと他の機器をつなぐ。



このほかにも、パソコンの中には「音を出すきかい」「がめん(うづ)したきかい」などが入っています

第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《できるかな ～ハト笛～》

第17回 5月 22日（午後） 参加者数 7名

キャプテン	武末 裕子（美術専攻4年） 那須 良寛（教育実践科学専攻3年）	指導教官	藤田 英樹 下田 好行
スタッフ	榎本直樹（数3）、武田由香利（幼3）、小池悠介（国2）、大木美那子（技2） 阿部貴子（理2）、度会千寿（数2）、池口直子（家2）		

・ 講座のねらい

自分の手で愛着の持てる作品を作って音色を楽しみ、友達の作品の良さを感じ合うことができる。

・ 講座の展開

活動内容	注意すること、支援、その他	時間
1. 移動	・ ブルーシートまで移動する。 （製作は第2講義棟北の広場にてブルーシート使用。）	10
2. 自己紹介	・ スタッフが大きさの違うハト笛を吹いてみせる。 （作る笛の大きさにより音域が違うことをスタッフのハト笛を吹いたりして気付きたい。）	15
3. つくる・ふく	・ 自己紹介を順番に行う。 ・ キャプテンが大まかな作り方を説明し、スタッフがマンツーマンで参加者について教え、作っていく。	90
	・ 構造などで細かいところは模型などを利用して教える ・ 時間に余裕があれば2個目を作ってみよう促す。	5
4. 成果発表・終了証	・ 出来た作品をみんなの前で吹いてみる。 ・ 終了証を渡す。 ・ 後日焼きあがったハト笛を郵送するので、郵送する箱につける宛名書きを書いてもらう。	15
5. 片付け・移動	・ ブルーシートをたたむ。 ・ 手を洗って移動する。	
6. 乾燥	・ 日陰で乾燥させる。	1w
7. 焼く	・ 電気窯で一時間毎に100度ずつ温度を上げていく。800度まで上げ、OFFにして11時間後にふたを開け取り出す。	22h
8. 梱包・郵送	・ 担当した参加者当りのメッセージを同封して、作品を梱包し郵送で作品を届ける。	

出来るかな～はと笛～

武末 裕子 (美術専攻 4年)

那須 良寛 (教育実践科学専攻 3年)

1. ねらいと動機

「一日限りのYOUサタではなく、もっと長い時間をかけたYOUサタも面白いかな。」と考えたのが、この講座を開こうと思った本当のきっかけでした。土を使う講座は乾燥時間が必要なので、時間内には終わらないという問題点があるため、これまで開かれてきませんでしたが、「手を使い直に素材に振れてその感触を楽しみながら、自分だけの音を創り出す面白さも一緒に味わいたい。」と思い、はと笛を作ってみました。

2. 教材研究・準備

この講座の教材研究は、まずスタッフ自身が作り方を覚えることから始まりました。笛の吹き口と空気の逃げる穴とを開ける二本の竹べらを作り、粘土をこねて、形作り、中をくり抜き、へらをつかって吹き口と空気穴をあけるという作業を繰り返し練習しました。笛内部の空洞の作り方、吹き口のあけ方などコツを覚え、互いに作り方を教え合う練習もしていたので、次第に教え方にも自信が持てるようになってきました。

当日参加者は、粘土で笛を形作るところまでしかできないので、後日私たちが作品を乾燥させ、大学の窯で笛を焼いてから梱包して郵送するという工程を予定しました。準備では、実際に窯を使って試作品を焼き上げたり、作品を送る手作りの箱も用意しておきました。

この一連の準備は、二人のキャプテンが片方ずつしか出席できないことが多々あり、苦労しましたが、スタッフが大変積極的で早くから準備を進めることができたので、T&Tとして補い合うことが出来ました。用具作りから、送り届けるまでスタッフみんなで進める事が出来ました。

3. 当日

晴れ上がった松本キャンパスの地べたにダンボール、ブルーシートを敷き詰め、会場を作り本番に臨みました。

講座参加者は7名、小学生とお母さんが一人でした。スタッフと参加者が向き合っの制作となりました。マンツーマンでスタッフがついたこともあり、参加者全員が自分の笛を鳴らすことができました。なかなか鳴らない参加者にどんな助言をし、どの程度まで支援をしていくかが、スタッフの課題でした。

参加者の中には早くコツを覚えて『こうすれば鳴るんだ。』とつぶやきながら二つ目を制作していた男の子もいました。また、最後に鳴ったS君はなかなか自分の笛が鳴らず、粘土を指で飛ばして退屈そうにしていたのですが、スタッフの支援でかすかな音が出たたん明るい表情になり、閉会式に向かう途中では妹に何度も得意げに吹いてみせていました。音が鳴った時の喜びをみんなが味わえた事が何よりの成功であったと思います。

4. 一週間後

一週間後に乾燥させた笛を電気窯で焼き上げ、用意しておいたダンボール箱に担当スタッフのメッセージを添えて梱包し、郵送して参加者にお届けしました。

数日後、子どもの参加者から担当スタッフ宛てに似顔絵が同封された手紙が届き、大人の参加者からは、講座の始めに大きさを違う笛を順番に吹いているスタッフ全員の写真が届きました。一日限りではないYOUサタを、こうしてスタッフみんなで終えることができました。

5. まとめ（スタッフの声）

反省会で出た意見をまとめてみました。今後のもの作り講座に活かせればと思います。
良かった点

- ・早くから全員で準備を進めていたので、やる気もどんどん高まっていった。
- ・青空の下、地べたに座って作ったのが良かった。
- ・作って終わりではなく、送り届けたいという気持ちが後に残るところがいい。
- ・参加者からの手紙が郵送後スタッフ宛に届き、参加者とスタッフのつながりが生れた。

反省点

- ・講座形態をグループにした方が参加者同士の交流もあったかもしれない。
- ・制作の課程に気付きがあったかどうか。音が出る原理に気付きたかった。
- ・うまく鳴らない子の笛に手を出しすぎてしまったかもしれない。
- ・完成してから吹きあう時間が欲しかった。

スタッフの声

- ・自分のときより、子供の音が出たときのほうがうれしかった。 渡会 千寿(数2)
- ・1つ出来るとすぐ次に取り掛かる姿が見られとても嬉しかった。 榎本 直樹(数3)
- ・音が出たときの瞬間がたまらない。この嬉しさ、感動、自分でできた達成感。ものづくりってすばらしい。 大木 美奈子(技2)
- ・きれいに焼けたらいいなと祈ってしまう。喜んでくれたらいいな。 小池 悠介(国2)
- ・鳴ると子供の声が一気に明るくなっているいろんな事をしゃべった。「家で焼きあがったら自慢する。」といってくれた。子供の想像力のすごさを知った。 阿部 貴子(理2)
- ・自分の作ったものから音が出たのがとても感動的でした。子供から手紙をもらい、すてきな出会いがまたひとつ増えました。 武田 由香利(幼3)

最後に、土井先生、はと笛づくりを教えていただいた藤田先生、そして一緒に作ったYOUサタのスタッフにとっても感謝しています。ありがとうございました。

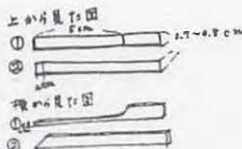


できるかな ハト笛づくり

〈用意するもの〉

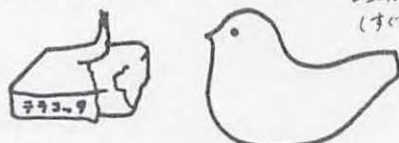
- ・テラコッタ粘土 (画材屋さんで買てね。)
- ・ヘラ (取口も開ける2種類のヘラです。)

竹でつくります。①②
・かき針に用ヘラ。



〈作り方〉

1. テラコッタ粘土で、鳥のかい(口)をつくります。つかね(口)は、粘土はビニール袋に入れておく。(すぐに固まってしまう。)



2. 糸で、鳥を

図のように切ります。



3. 胴体の中身をくりぬきます。

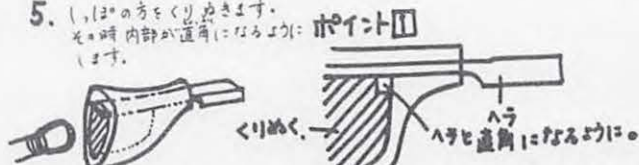
(頭のある方だけ)



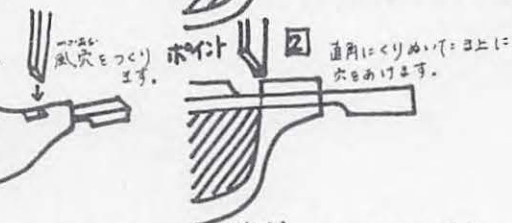
4. ①の口のある方に、図のようにはさみます。



5. ①の口の方をくりぬきます。その時、内部が直角になるように。



6. ②の口で



7. 断面にヘラで「キス」をつけ、ひとつまみの粘土を少しの水で溶かして、胴体をくっつけます。



8. できあがり。



第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《趣味YOU悠 ～一杯の紅茶から広がる世界～》

第17回 5月 22日（午後） 参加者数 8名

キャプテン	伊藤 慶（社会専攻4年）	指導教官	小林 詢
スタッフ	馬場かおり（数3）、伊藤茜（数2）、千野加世子（家2） 池田朋美（家2）松井絵美（理1）、秋山絵美（理1）		

・ 講座のねらい

紅茶を通して、学校では学べない歴史の事情などを学び、興味を深める。また、手軽にいれられるので、今後の他人とのコミュニケーションの手段としての紅茶を学ぶ。

・ 講座の展開

段階	活動
移動・準備	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事前のアンケートには、どんな紅茶が飲みたいか書いておいてもらい、それによってグループを決めておき、そのグループ毎に紅茶をいれるようにする。 ・ 教室は4～5人のグループ毎にまとめておき、スタッフがそれぞれにつく。
講座スタート	<p>（晴れの場合）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ アイスティー、ハーブティー中心に話を進める。 ・ グループ毎にそれぞれ紅茶をいれ、よいと思えるものができたら外の人文学部前広場へ。 <p>（雨の場合）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ミルクティー、ホットティー中心に話を進める。 <p>（晴れの場合、雨の場合この後共通）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 話の内容については、事前のアンケートに質問を書いてもらい、それをもとに話をする。 ・ 立食パーティー形式にする。 ・ グループ毎に紅茶をいれてあるので、他のグループの紅茶も飲んでみよう、とうながす。 ・ スタッフ、キャプテンは参加者の行動に注意しつつ、パーティーに加わる。 ・ 交代で、そのグループのところに来た人に紅茶をいれてあげる。
片付け、終了	<ul style="list-style-type: none"> ・ 残り時間が20分くらいになったところで終了。片付けをして修了証を渡す。

《ティータイム 紅茶時簡》

第18回 11月 7日（午後） 参加者数 13名

キャプテン	伊藤 慶（社会専攻4年）	指導教官	小林 詢
スタッフ	安田亜琴子（家4）、武田由香里（美4）、中村祐介（理3） 桑山知美（家2）、友利紗矢香（言1）、清水雅子（障1） 寺本沙織（社1）		

・講座のねらい

紅茶を通して、学校では学べない歴史の事情などを学び、興味を深める。また、自分なりのティータイムの楽しみ方を見つける。

・講座の展開

段階	活動
1. 自己紹介	<ul style="list-style-type: none"> ・キャプテン、スタッフが自己紹介。参加者の自己紹介は各個に。グループは参加者スタッフあわせて6人くらいで編成。グループ間の移動は自由とする。 ・グループの編成は事前のアンケートによって行う。アンケートの内容は17回の時と同じで、どんな紅茶を飲んでみたいか、と、紅茶についての疑問。
2. クイズ	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ毎にスタッフのいれた紅茶を飲みながら紅茶に関するクイズを楽しむ。問題は10問ほど。17回のものも流用。優勝者には賞品を出す予定。
3. 紅茶を味わい楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・クイズが終わった後、紅茶の成分や効能などのアドバイスをスタッフから聞きながら、参加者でそれぞれ紅茶をいれてみる。 ・この間、スタッフは指導の他、他のグループにも行ってみよう、というふうにながしてやる。 ・グループ分けの内容は、テーマカラー毎で、赤…体が温まる紅茶、緑…リラクゼーション紅茶、オレンジ…元気のでる紅茶、ピンク…肌がきれいになる紅茶、と分け、テーブル毎にかざりつけをそれぞれの色を基調に変えておく。つまり、他のグループに行けば違った紅茶が味わえるわけである。
4. 片付け・終了	<ul style="list-style-type: none"> ・閉会式が始まる20分くらい前には終了して、片付けに入る。 ・時間に関しては、区切りのつけにくい講座なので、あえて決めない。ただ終了の時間はきっちり守り、閉会式に遅れないようにする。

趣味Y O U悠 ～一杯の紅茶から広がる世界～

ティータイム 紅茶時間

伊藤 慶（社会科専攻 4年）

1. 講座を開くにあたって

この講座を開くきっかけとなったのは、ある中学校で“心の教育相談員”をやっている際、紅茶のいれ方がある女の子に教えたところ、親と久しぶりに話ができてとてもよかった、と喜んでくれた経験である。という事から、講座の目的としては、コミュニケーションの手段としての紅茶のいれ方、という点を一番重視しようと考えた。

しかし“コミュニケーション”は、結果としてそうなったものであるのもので、これを前面に押し出す事はためらわれた。そこで講座の目的としては、手軽に、しかもおいしくできる紅茶のいれ方を伝授し、家で周囲の人を巻き込んで楽しんでほしい、という設定とした。

紅茶を選んだきっかけとしては、上記の経験もあるのだが、自分自身が紅茶に幼い頃から親しんでおり、それなりの知識と経験、ある程度の自信がある事、これまで“紅茶”をメインにした講座がない事、また、様々なアレンジやハーブの使用によって、十分興味を引き出す事ができると考えた事からである。

2. 前日までの講座の準備とそれについての考察

講座を開くにあたって、まず考えなければならない事は、使用する紅茶の葉の事である。“おいしい”という点を強調したいのであれば、馴染みのないリーフティーを使用する事になるのだが、趣味Y O U悠の講座の場合には“手軽に”という点を強調した、いわば基本講座であるので、ありきたりのティーバッグを使い、それでもおいしくいれる事ができるという事を伝えるため、ティーバッグを使う事になった。紅茶時間の講座の場合は、スタッフにきっちり技術を伝授しておけば大丈夫と思えたので、リーフティーを使用することにした。しかしこの点が後々問題となるのである。

ハーブとスパイスに関しては、近くで手に入るもの、と考えた結果、池田町のハーブセンターとラベンダーガーデンのものを使用する事にした。

二つの講座の準備段階にあたって、スタッフとの顔合わせを一度しておく必要があり、この際、講座で使う紅茶のいれ方を伝授しておく必要があった。しかしながらその時間がほとんどなく、ごく基本的な事しか伝えられなかった。この事が後の講座の中で問題となってくる（伊藤 茜 数2）、（池田 朋美 家2）。

参加者の質問にスタッフが答えられなかった、という事があったのである。もう少し深い所まで伝えておくべきであった。スタッフの理解度にも差があった。これは二つの講座に共通して言える事である。

趣味Y O U悠の準備の時間に関しては、スタッフの指導の他には特に問題はなかった。

ただ、趣味Y O U悠の講座の場合には、前々日に、クイズの問題を作っておいた方がいい、と他のキャプテン達に指摘され、あわてて作った事もあった。結局指摘されたように必要になったので、もう少し講座の内容を見直していく必要があったように思う。

紅茶時間の場合には、この反省を活かして最初から用意しておいた。

二つの講座に必要な道具類は、いろいろな人から借りる事となりました。この場を借りてお礼を述べさせていただきます。

3. 趣味Y O U悠の講座の流れと考察

当日参加してくれたのは、大人2人と中学生1人、小学生5人の合計8人であった。スタッフは自分を含めて6人という数からすれば、参加者の数が少なかったかもしれないが、講座が進むにつれてちょうどいい人数である事が分かってきた。ほぼマンツーマンでつく事ができ、細かい指導ができるためである。ただしここで問題になったのが、準備の考察で述べたスタッフの知識不足である。

また、講座をはじめる前に、湯を沸かすために電気ポットを用意しておいたのだが、湯を湧かす際に教室のブレーカーがとんでしまった。そこで仕方なく廊下の電源からひっぱってきたわけなのだが、この間をもたせるためにクイズをする事になった。

その後、湯が沸いた所で講座を始めたわけであるが、結論から言うと講座はかなりの盛り上がりを見せた。こちらからほとんど口出しをせず、ティーポットを選ぶ所から紅茶のアレンジに至るまでほとんど参加者の自主性に任せていたためだと思われる。普段家庭では、紅茶の中にいろいろ入れてアレンジする事などないと思われるので、それができる場として盛り上がったのだと思われる。

ただ講座の間、参加者やスタッフのグループとグループとの間の行き来がなかったのが問題となった。グループごとの交流を図る手段が何か必要であったと思われる《馬場 かおり (数3)》。他、これはスタッフの知識不足とも関係してくるのだが、作っていたものがワンパターンになりがちであった《千野 加世子 (家2)》。自分もグループの間をいろいろ巡っていたのだが、グループ間で作った紅茶のアレンジの数の差が目立つように思われた。これはスタッフの知識不足と同時に、参加者の質にもよると思われるので、ある程度のレシピを最初から参加者に提示する必要があったと思う。スタッフからもそういった意見が反省会の時に聞かれた《馬場 かおり (数3)》。それから参加者独自のアレンジを試みてもよかったのではないかと思う。

講座はそのまま終わりまで推移し、そのまま終わりとなった。これはこれでよかったと思う。終了の時間が近づいた時、参加者の何人かから、もう終わりなの？という声が聞かれ、スタッフの間からも時間が思ったより早く経ったという声が聞かれた《馬場 かおり (数3)、伊藤 茜 (数2)、松井 絵美 (理1)、秋山 絵美 (理1)》。つまり時間の経過を忘れるくらいに紅茶に熱中できたのだと思っている。

4. 紅茶時間の講座の流れと考察

当日参加してくれたのは、大人3人、中学生1人、小学生9人の合計13人である。スタッフは自分を含めて8人。松本の時に比べると、スタッフ一人あたりにかかる負担は増えている。更に言えば1年生スタッフに紅茶のいれ方を教える暇がなかったので、学部生スタッフ一人あたりの負担がかなり増えてしまった。しかもこの頃、キャプテンである自分の精神状態が非常に不安定で余裕がなく、しっかり教える必要があった技術面でさえ、しっかり教える事ができていたか、後から考えるとまったく自信がない。教えた時点ではそ

れで充分と思っていた。しかし講座の後で考えると、全く充分ではなかったのである。スタッフからも、講座の流れがはっきり分からなかったという声が聞かれた《安田 亜琴子（家4）》。

講座の流れとしては、クイズの前が少し長くなっていたが、クイズは講座の流れを引き締めるものと考えていた。であるから、少し静かになった所ではじめようと考えていたので、これでいいと思う。ただ、クイズに少し難しい言葉が多かったので、子供たちにはたいへんだった、という意見がスタッフから聞かれた《桑山 知美（家2）、寺本 沙織（社1）》。

ただ今回の講座、参加者の動きが少なかった《武田 由香里（数3）、清水 雅子（障1）》。これにはいくつか原因がある。それは、スタッフが熱意のある人が多かった事と、参加者をうまく動くように仕向けられなかった事。これは講座の流れと準備に問題があり、最初にスタッフがクイズの前に参加者に紅茶をいれたのだが、これによって参加者がスタッフが紅茶をいれてくれる講座だ、と思った事。そしてスタッフの方もこの流れが続くとしてしまった事。それに、ティーポットの数が参加者一人一人に行き渡らなかった事が原因として上げられる。ティーポットが人数分あれば、参加者がそれぞれ自由に、それぞれ独自の紅茶をいれて楽しむ事ができたように思える。趣味YOU悠の講座の場合はそうだった。ティーポットが一人一人にあたる方がいいか、それとも何人かで一つのティーポットを使うようにして、協力して紅茶をいれるか、どちらがいいかという事は考える余地があると思われる。

これによって、参加者が動かない講座になってしまい、スタッフの方に負担がかかる結果となった。これに関する評価は大きく二つに分かれる。子供たちにとっては紅茶を飲んだだけで、心に残るものとなったかどうか疑問が残る《桑山 知美（家2）》という意見と、紅茶を飲みながらリラックスした時間を過ごせて、紅茶のいれ方も勉強できてよかった《中村 祐介（理3）、友利 紗矢香（言1）》という意見がある。キャプテンとしては後者でありたいとは願うが、実状は残念ながら、厳しい評価である前者の方ではないかな、と思われる。

5. 反省のまとめと今後の課題

信大YOU遊サタデーが終了してから、反省会があったわけなのだが、この時に出た反省点は、文中に名前入りで述べた事である。もう一つ反省点があるとすれば、用意したものの量が多すぎた事である。足りなかったのは、ティーポットのみで、あとはアレンジ用の果物にしても電気ポットにしても氷にしても余剰ぎみであった《伊藤 慶（社4）》。

趣味YOU悠の講座で、グループ毎の交流がなかった事に関しては、ちょっとした事情がある。本来の計画では、事前にどんな紅茶が飲みたいかアンケートをとり、それに従ってグループ毎に分け、その後はそれぞれのグループの紅茶を飲み比べに行き、そこで紅茶のレシピを教えてもらい、自分のグループに戻って作ってみる、という講座になるはずであった。

しかしながら、事前のアンケートの配布が十分ではなく、必然的にグループ分けに必要な情報が入ってきてはいなかった。そのため、前記のような講座の形態になったのである。アンケートを配布しきれなかったのであれば、後から電話をして聞けばいいと気づいたの

は、信大YOU遊サタデーが終って数日後の事である。もう少し考える事が必要であった
そして、これは二つの講座に言える事だが、余裕をもって講座に臨む事が必要であった
と思う。余裕がない人が入れた紅茶は、なぜか落着かない味になってしまう。紅茶とはつ
くづく不思議な飲み物である。



紅茶時間

～ティ・タイム～



1. Use Good Quality Tea.

・いい茶葉は、味がいい。品質がいい。味
は、香りがいい。味は、香りがいい。
・いい茶葉は、味がいい。品質がいい。味
は、香りがいい。味は、香りがいい。
・いい茶葉は、味がいい。品質がいい。味
は、香りがいい。味は、香りがいい。

2. Warm the tea pot.

・茶葉の成分は、熱で分解される。これ
は、高温で分解される。これは、高温で
分解される。これは、高温で分解される。
・茶葉の成分は、熱で分解される。これ
は、高温で分解される。これは、高温で
分解される。これは、高温で分解される。



3. Measure Your Tea.

1. Use Good Quality Tea.

(いい茶葉を使いましょう)

2. Warm the tea pot.

(茶葉は、熱で分解される)

3. Measure Your tea.

(茶葉の分量を正確に測りましょう)

4. Use freshly boiling water.

(新しい沸騰した水を使いましょう)

5. Allow time to brew.

(淹め置きをしましょう)

4. Use freshly boiling water.

・新しい沸騰した水を使いましょう。
・新しい沸騰した水を使いましょう。
・新しい沸騰した水を使いましょう。
・新しい沸騰した水を使いましょう。

5. Allow time to brew.

・淹め置きをしましょう。
・淹め置きをしましょう。
・淹め置きをしましょう。
・淹め置きをしましょう。

紅茶時間

～ティ・タイム～

No.2.



～応用・バリエーション編～

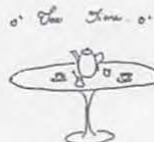
～レモンティーの作り方～

- ・実は、レモンティーは、お茶の味を良くする。
・実は、レモンティーは、お茶の味を良くする。
- ・お茶の味を良くする。
・お茶の味を良くする。
- ・お茶の味を良くする。
・お茶の味を良くする。
- ・お茶の味を良くする。
・お茶の味を良くする。
- ・お茶の味を良くする。
・お茶の味を良くする。

ロイヤル・ミルクティーとミルクティー

- ・ロイヤル・ミルクティーは、お茶の味を良くする。
・ロイヤル・ミルクティーは、お茶の味を良くする。
- ・ロイヤル・ミルクティーは、お茶の味を良くする。
・ロイヤル・ミルクティーは、お茶の味を良くする。
- ・ロイヤル・ミルクティーは、お茶の味を良くする。
・ロイヤル・ミルクティーは、お茶の味を良くする。
- ・ロイヤル・ミルクティーは、お茶の味を良くする。
・ロイヤル・ミルクティーは、お茶の味を良くする。
- ・ロイヤル・ミルクティーは、お茶の味を良くする。
・ロイヤル・ミルクティーは、お茶の味を良くする。

- ・お茶の味を良くする。
・お茶の味を良くする。
- ・お茶の味を良くする。
・お茶の味を良くする。
- ・お茶の味を良くする。
・お茶の味を良くする。
- ・お茶の味を良くする。
・お茶の味を良くする。
- ・お茶の味を良くする。
・お茶の味を良くする。



お茶の淹め置きと淹め置き

- ・淹め置きは、お茶の味を良くする。
・淹め置きは、お茶の味を良くする。
- ・淹め置きは、お茶の味を良くする。
・淹め置きは、お茶の味を良くする。
- ・淹め置きは、お茶の味を良くする。
・淹め置きは、お茶の味を良くする。
- ・淹め置きは、お茶の味を良くする。
・淹め置きは、お茶の味を良くする。
- ・淹め置きは、お茶の味を良くする。
・淹め置きは、お茶の味を良くする。

第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《おかしな和菓子なクリスマスのイモスマスケーキを作ろう》

第19回 11月 7日（午前） 参加者数 11名

キャプテン	池田朋美（家庭専攻2年） 千野加世子（家庭専攻2年）	指導教官	松岡 英子
スタッフ	大久保瑞恵（国2）、増田さなえ（国2）、小畑真里子（社2） 宮崎恭恵（家2）、中田理絵（家2）		

・講座のねらい

サツマイモを使って和菓子を作り、和菓子の作り方や特徴を知る。また、オリジナルのイモスマスケーキでクリスマスのティーパーティーを楽しむ。

・講座の展開

流 れ	内 容	使用するもの
・グループ発表 ・身支度 ・説明・注意	グループにわかれて身支度をし、手を洗う。 作り方や気をつけること、調理室の使用についての説明をする。	エプロン・タオル 三角巾
・調理	・サツマイモをふかす。 ・粉と砂糖を加え、成形して蒸す。 {ケーキの飾りを作る}	蒸し器・ふきん すりこ木・ボール ざる・サツマイモ 上新粉・砂糖
・お茶会	・冷ます。 ・お茶をいれる。 会食を楽しむ。 ※写真をとる。	食器・包丁
・後片付け	持ち帰りの仕度をし、片付けをする。	
・修了証をわたす		
・掃除・点検		

おかしな和菓子なクリスマスのイモスマスケーキを作ろう

池田 朋美 (家庭専攻 2年)

千野 加世子 (家庭専攻 2年)

1. 講座を開くにあたって

この講座は、キャプテンをやってみようと思った後に講座の内容が考えられたものである。キャプテンをやろうと思ったときには、何か風変わりなものをやってみようということくらいしか考えていなかったように思う。そのためか、後になってどのような講座が良いのだろうということにそうとう悩まされてしまった。

けれども、結果的には講座の内容を決めるにあたって、なんだかとてもわかりやすい経緯をたどったように思う。それは、ふたりのアイディアの融合だった。実はこの講座の誕生は偶然さを否めないものなのである。また、講座名がこのようなのも然りである。

いささかの不安を抱きながら、未知なるものへの挑戦という意欲とともにこの講座は始まっていった。

2. 教材研究

子どもたちになじみの少ないと思われる和菓子と、クリスマスやクリスマスケーキという子どもたちがわくわくするものとを絡めてみようという考えだった。イモスマスケーキは、和菓子でありながらケーキである。和菓子とケーキの間にある様々なギャップをいかに小さくするかが最も大きな課題であった。そして、イモスマスケーキを作るたびに新たな課題がおもしろいくらいに次から次へと湧き出てきた。

1 回目のイモスマスケーキは無惨なものであった。いろいろな形を作ることができるということでサツマイモを教材に選んだはずであったのだけれども、このイモスマスケーキは好きな形にできるどころか、形さえなかったのだ。思わず絶句してしまった。しかし、ここでやめるわけにはいかない。なんてやりがいのある講座なのだろうと感じた。

何故、こうなってしまったのかの原因をいくつか考え、2 回目にはサツマイモの種類とサツマイモの蒸し方を変えてみた。すると、今度はちゃんと形のあるイモスマスケーキができあがった。安堵の気持ちでいっぱいだった。

ところが、今度は味が問題になった。まずくはないのだけれどなんだか粉臭い感じがする。ということで3 回目には上新粉と砂糖の分量を調節することにした。改善のためにいくつか別の簡単な製法を検討してみたが、やはり昔ながらの作り方にこだわらなければならなかった。で引き続きそれまでの製法で進めていくことにした。そして、4 回目ではほぼ完成となった。

教材研究において苦労した点としては、サツマイモの切り方、サツマイモの蒸し方、つぶし方、混ぜ方、材料の割合、成形、仕上げの蒸し時間など作り方の工夫があげられる。また、安全に配慮しながら当日の時間のなかでいかにスムーズにすすめていくかについては、イモスマスケーキを作るたびに推敲されていったように思う。

教材研究は教材についての知識を増やすだけではなく、考えを深め、自信をつけることができるものであると感じた。教材研究をやればやるほど講座に愛着がわき、より真剣に取り組んでいけるようになったと思う。

3. 当日の様子

参加者とスタッフとの触れ合い・安全面などを考え、参加者2人にスタッフ1人という班を6班作った。イモスマスケーキは蒸す・つぶす・こねるという簡単な料理方法であり、子どもたちにもやりやすかったらしく、進行もスムーズだった。イモを蒸す時間が15分ぐらいかかり、その間は何もすることがなく子どもたちは飽きるのではないかと心配したがこの時間がコミュニケーションの時間になったことがとてもよかった。

イモをつぶすとき、蒸したばかりのイモは熱く大変だった。しかしつぶしたイモを自分の手でこねる事に喜びを感じ、イモの感触を楽しんでいた。

イモを成形し、再び蒸す間はイモスマスケーキの飾りづくりの時間に当てた。子どもはそれぞれ自分の考えた飾りを一生懸命つくっていた。時間が短く子どもたちには少し物足りなかったように感じられた。スタッフ特製のべっこう飴の飾りが好評だった。

子どもたちはイモスマスケーキの出来に満足している様子でうれしそうに食べていた。参加者の笑顔で帰っていく姿が印象的だった。

4. この講座を通しての反省・改善点

よかった点

- ・少人数班にしたため、参加者とスタッフとの触れ合いはもちろん、子供同士の触れ合いもできた。空き時間はコミュニケーションに活用できたので良かった。
- ・子どもたちはイモスマスケーキを十分楽しみ、とても満足した様子で中には「クリスマスに作ってみよう。」「早く家族に見せたい。」という非常にうれしい声も聞くことができ、参加者・スタッフともにより経験になった。

反省点

- ・午後の講座との打ち合わせが少なく、教室の明け渡しがあいまいになってしまった。もっとタイムスケジュール等確認し、事前に打ち合わせをおこなえばよかったと思う。
- ・会食や飾りづくりの時間は十分確保できたが、全体的には少し忙しく最後の後片付けはあわただしくなってしまった。もう少し余裕のある時間配分をする必要があった。

5. スタッフの声

- ・自分の担当の班があったので、より子どもたちと接しやすかった。とても楽しかったです。大久保 瑞恵 (国2)
- ・子どもたちと触れ合うことがあんなに楽しいとは思いませんでした。久しぶりに自分も小学生になった感じで良かったです。ケーキもおいしかったです。増田 さなえ (国2)
- ・イモスマスケーキもよかったけれどべっこうあめが最高でした。参加してみて良かったです。小畑 真里子 (社2)
- ・ケーキを作るときはもちろんだけど、飾りを作っているときも楽しかったです。子どもとも仲良くなれて、いい一日になりました。中田 理絵 (家2)
- ・同じ班になった子どもとも仲良くなれたし、子供同士も仲良くなれたようだったのでよかった。子どもの参加したい企画も聞けたので参考になった。宮崎 恭恵 (家2)



おかしな和菓子なクリスマスのイモスマスケキをつくろう

材料

さつまいも …… 400g
さとう …… 35g
上新粉 …… 20g

さつまいもの量は
皮をむいたときの分量です。
おさとうは、好みで加減
して下さい。
上新粉の量は、
たくさんすると、もちもち
少なくすると、いもいも
になります。



《作り方》

- ① さつまいもを輪切りにして皮をむく。
- ② やわらかくなるまで、さつまいもをふかす。
- ③ さつまいもをとりだして、ボールにうつし、すりこ木などでつぶす。
さとうと上新粉分をカロエてよくこねる。
- ④ すきな形に さつまいもをまとめる。
(型を抜いたりして、いろんな形をつくろう。)
- ⑤ 蒸し器に、クッキングシートを敷いて
その上に、「イモスマ」をならべ
ふたをして、25～30分蒸す。
- ⑥ 蒸し器からとりだして、
すこしさませば、

できあがり



第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《フリスビろう！？》

第17回 5月 22日（午後） 参加者数 10名

キャプテン	杉山 雅幸（野外活動3年）	指導教官	平野 吉直 古屋 顕一
スタッフ	松井良平（数4）、石垣一訓（技3）、柳沢健（数2）、小松慎（技2） 宮原新（技2）、酒井佳代（障1）、栗田しのぶ（野1） 松下清香（野1）、山盛賢治（言1）、白井順（上教2）		

・講座のねらい

フライングディスクは、とてもマイナーなスポーツである。そのため普段なじみのないもので、ただ投げること以外の遊び方を知らない。そんな人のためにフライングディスクの遊び方を教えると同時に、身近なスポーツとして感じてもらう。

・講座の展開

活動	内容	時間
移動		5
フライングディスクの紹介	・フライングディスクの歴史を紹介。	5
自己紹介	・来てくれた人の名前をみんなで覚えよう！	10
フライングディスクの説明	・現在のフライング事情の説明。 ・投げ方を紹介。	5
ウォーミングアップ練習	・教えてもらった投げ方を実践してみる。	15
ゲーム1： ディスク・ターゲット	・ニュースポーツのペタンクの要領で、二人一組でチームを作り、行なう。	20
（ミニアキュラシー）	・ゴールを立て、何投通過するかを競う。	10
休憩		
ゲーム2： ディスク・ゴルフ	・ある決められたコースに沿って、ゴルフをする。 ・スコアを自分でつける。	40
クールダウン 結果発表	・ゴルフの優秀者発表！ ・終了証を渡す。	10
移動		5

フリスビろう！？

杉山 雅幸（野外活動専攻 3年）

1. 空飛ぶディスク

一年の時から始めたこの活動も、気づかぬ間に‘ベテラン’といわれるくらいになり、悪く言えば「慣れ」てしまいました。そのかわりから見失ってしまったものは多くありました。そのことに気がついたのが、昨年のことです。この講座を開くにあたり、私を駆り立てたのは、‘リベンジ’という一語でしょう。

一つは昨年の自分自身へのリベンジ。昨年は、キャプテンをやることで精一杯で、周りを見る事ができませんでした。というよりも講座を開くということのその先にある大切な事をつかみとれなかった。それをつかむというのがこの講座を開くきっかけとなったのです。

もう一つは、運動講座にリベンジすることです。前回、私は初めて単独で「Jump Beat Rope!」のキャプテンをやりました。しかしこれが何とも自分の中ではうまくいった気がなくて、満足できる講座になりませんでした。それは子どもの顔からもうかがえました。なので再チャレンジということで運動講座「フリスビろう！」で勝負する事にしました。しかしながら念頭にいつも置いていたのは、楽しくやろうということでした。

2. 勝負までの軌跡

講座を開くまでには、苦難の道が待っていました。よりによってYOUサタが開かれるのが松本キャンパス。しかも一年生のスタッフ参加もある。運動講座において一番重要な問題となるのが、それができるかどうか。もちろん自分もそれほどフリスビーができるわけでもない。そのためスタッフのみんなも、そして自分自身も技術を向上しなくてはなりません。そのためには言わずとしれて練習あるのみ。練習は長野ではもちろんのこと、松本に出向き一年生とともに数回行ないました。それは私が一年生の時、スタッフなのに何も理解せず参加して、当日参加してそれでおしまい。「やる気はあるのに何ともかわりが薄いんだろう」と思ったからです。だから私は一年生と松本でしかできない作業と一緒にしました。これからいえば、みんなで作り上げた講座だと言えるでしょう。そしていざ勝負！の前にもうひとつ。どんなことをしたら楽しいだろうか。そこで色々なゲームを参考に独自のゲームをあみだしました。さあ当日、吉と出るか凶と出るか？

3. 決戦は土曜日。

その日は、晴れで日差しの強い日になりました。スタッフ数、11名。参加者は、保護者1名を含む10名で、ほとんど男の子ばかりでしたが1人女の子が来てくれました。スタッフはヘトヘトになりながらも一緒に楽しんでいました。自己紹介から始まり、順調に進み、練習の成果も発揮さて、全員のスタッフが子どもにディスクを投げるコツや技術を教えていました。教えたそばから元気に飛び回り、ディスクを投げては走り、投げては走り練習を重ね、投げれるようになっていきました。新しい技術の指導をすることもありました。

いちばんみんなが楽しめたのが、オリジナルでつくったディスクターゲットというゲー

ムでした。スタッフも参加者と一緒に必死になっていました。自分も参加して子どもの方がうまかったりもしました。最後にはディスクゴルフをしてスコアを競い、手作りの賞状に自分のスコアを書き込み、プレゼントしました。最優秀者にはメダルを贈呈。みんなが羨ましがっていました。笑顔の絶えない講座を作ることができました。やっぱりオリジナルっていいですね。

- ・ 講座は最初の自己紹介の時から最後まで、子どももスタッフも楽しんでいたように思います。 松井 良平 (数4)
- ・ 子供達が望んでいたことと、講座の内容が合っているのだから心配だったけど、楽しそうだったので良かったです。子供と仲良くなれるのは、やっぱりうれしいものだったです。 石垣 一訓 (技3)
- ・ 子供と一緒に楽しくできました。…子供の対応というものは意外と難しいもので、皆違った部分を持ち、違った反応をするものです。 柳沢 健 (数2)
- ・ 始めは、どう子どもと接したらいいのか分からなかったけれども、知らないうちに何でも言える（楽しく接することができる）仲になれて良かった。 小松 慎 (技2)
- ・ 子どもと遊ぶのは初めてだったのでわからないことばかりでした。でも来てくれた子どもたちが楽しそうなのを見て、安心して自分も楽しめました。準備が予想以上につらかったので、終ってみて、自己満足の世界です。 宮原 新 (技2)
- ・ とても疲れたけれど、すごくいい経験になった。先輩方の…すごいなあと感じた。子どもと向かい合ってつきあうのは、やっぱり簡単ではないなあと思った。 酒井 佳代 (障1)
- ・ 初めての参加で今までに子どもといっぱい接する機会がなく、不安に思っていたが、リーダーとかがうまくサポートしてくれたのでよかった。なんか楽しかった。…子どもと遊べて楽しい。 栗田 しのぶ (野1)
- ・ 子どもと一緒に本気で楽しんでしまって、勉強したという印象が全くない。でも信大のYOUサタのスタッフの当日へむけての準備の姿勢、当日の子どもへの細かな心くばりなどは学ぶものがあつた。 白井 順 (上教2)

4. Over the horizon!

私がキャプテンをやってきて思うことは、時間は限られているという事だ。その時間をいかに変化させ、空間を作り出すか。それが私たちのやるべきことだと思う。しかしそれだけで満足してしまったらこんなにも貧しいことはない。そこに何が残るのか、それが問題だ。

「風に舞う ディスク追いかけ 子どもらの 笑顔まぶしき 心のふれあい」

ここに私のひとつの答えがあつた。

ここであえて再度書き記したい。

YOU遊サタデーという‘土地’

キャプテンはそれぞれ違った願いの「種」を持っている。それをYOUサタの「畑」にまき、「芽」が出て、「実」がなり、収穫するまで世話をする。もちろん「種」が違うから、実る物はそれぞれ違う。… 僕たちはYOUサタという‘土地’の一角の「畑」にキ

ヤブテンが異なった種をまき、みんなで育てる。そして収穫して、みんなでいただく。

その作物が大きくなるためには、栄養のある『土』が必要だ。このYOUサタの『土』には、栄養が多く含まれている。それはみんなが子どものことを思いやる気持ち。それがYOUサタの‘土地’の下地にあり、それぞれが違った講座をしていてもYOUサタを成り立たせているものだ。YOUサタの‘土地’は、とても広く、それでいて自由に使える所です。新しい「種」をまくこともできます。

もし『土』がやせてしまったら、みんなで肥料を入れましょう。時に休耕することだって必要かもしれない。…あなたがYOUサタの向こうに見えるものはなんですか？



フリスビーろう!?

【フライングディスクの起源】

フライングディスクは、1940年代後半アメリカの南西部コネチカット州にあるあるパン屋から始まります。

そのパン屋の名前は、フリスビー・ベーカリー

と書いていた。このお店で使っていたパイを焼く

ための焼き皿がいつしかエール大学の学生が

「フリスビー」と叫んで、投げ合っていた。これがフリスビーの始まりです。

その後、WHAM-O社という会社が、これを選びの用具として製品化し、売り出されるようになりました。しかしそれはただのおもちゃとしてしか受け入れられず、なかなか普及しませんでした。そこでその会社の社長は、本格的なスポーツ用品としての性能を高め1965年に改良したフリスビーを売り出しました。これが大人気となり一気に普及していったのです。

1967年には国際フリスビー協会（IFA）が設立され、競技や大会も開催されるようになりました。日本でも1975年に日本フリスビー協会が設立され、その次の年第一回全日本選手権が行な



フリスビーを投げてみよう!

●バックハンド・スロー……投げたい方向に対して斜めに立って、フリスビーのふちを握って投げる。慣れてくると投げたい方向に対して体が横になる。

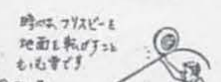
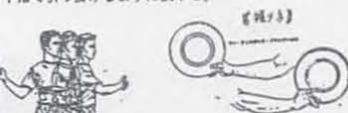


【投げ方】



●サイドアーム・スロー……斜めに立ってフリスビーを裏から人差し指と中指で支え、親指ではさむように持つ。投げるときは、脇をしめて、中指で引っ掛けるように投げる。

【投げ方】



※フリスビーを持って、友達と出掛けよう! 文：おみ

第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《親子でスマッシュバドミントン!》

第17回 5月 22日(午後) 参加者数 18名

キャプテン	増野 隆 (社会専攻4年)	指導教官	愛敬 浩二
スタッフ	寶中菜穂 (幼4)、仲井真梨 (技2)、小林寿英 (実1) 岩村綾子 (言1)、森下佳代 (言1)		

・講座のねらい

- ・バドミントンというスポーツの楽しさを知ってほしい。
- ・休日に親子で一緒に何かをするということで、親子の絆を深めるとともに、2002年からの完全週5日制に向けてのきっかけとなってくれば幸いである。

・講座の展開

活動内容	支援・注意すること等	時間
1. 移動	・講座時間確保の為、スムーズに移動できるよう誘導する。	5
2. 自己紹介	・スタッフ→参加者の順で自己紹介をする。緊張をやわらげるよう努める。ダブルス時のコンビをこの場で決める。 ・鉢巻を配布して、マジック等で描く。	10 25
3. ウォーミングアップ 簡単なゲーム	・怪我のないように、準備体操をしっかりとやる。 ・初心者でもできるように、ラケットの持ち方、シャトルの拾い方、捕らえ方、打ち方、リレー等の基礎的な練習をする。	25
4. 試合で使える技の練習	・レベルに合わせて、3コートくらいに分けて行う。 ・各コートにスタッフを配置する。 ・ハイクリア、ドライブ、ドロップ、ヘアピン、スマッシュ、サービス等	60
5. 試合	・模造紙等を用いてルールを説明する。 ・3コートローテーションゲーム (ダブルスで行う) ・目標達成時にシャトルのシールを貼る模造紙を用意しておく。	15
6. クールダウン 修了証&賞状授与	・整理体操と道具の後片付けをする。 ・キャプテンが評価、感想を述べる。 (講座中、いつでも水分補給ができるよう用意する。)	

親子でスマッシュバドミントン！

増野 隆（社会専攻 4年）

1. 講座を開くにあたって

この講座は、講座名にもあるように保護者の方にも子どもたちと同じように参加してもらった。これにはキャプテンとして二つのねらいがあった。一つは、2002年から実施される学校週5日制に向けて休日に少しでも親子が一緒に何かをするという時間をとって欲しいという願いから、そのきっかけになってくれれば良いというものである。もう一つは、講座の中でスタッフと子どもたちのちょうど間に入っていただき、子どもたちを支援する際に私たちだけでは気づかないようなことを協力していただきたい、というものである。

バドミントンを選んだ理由としては、私自身がバドミントンというスポーツが好きだったということで特別な意味はない。従って、講座の内容は他のスポーツやものづくりでも良かった。ただ“親子で”というところを一番重視したかった。

2. 教材研究

スポーツの講座ということで一番気を使ったのが、その能力差である。特にバドミントンというスポーツはその能力差が顕著になりやすいものである。したがって、あまりにも能力に差のある人同士で一緒にやってもお互いにつまらないものになってしまう。そのことに対応するため、教材研究をすすめていくなかで、次の2つのことを軸に講座を展開していこうと考えた。1つは、当日参加してくれる人たちがどのくらいのレベルなのかを把握することができないため、講座の内容を数パターン用意しておくことである。そうして、当日に状況に応じてどのパターンでいくか決定するという方法である。もう1つは、能力の差が顕著な場合には、数グループに分かれて能力のほぼ同じ人同士でするという方法である。

バドミントンの楽しさに触れてもらいたいということで、シャトルに慣れるという簡単な練習から導入していこうと考えていたが、実際にスタッフと教材研究してみると意外に難しいことなどがわかり、リレーなどのゲーム形式を採り入れことにした。

3. 当日の参加者の様子

当日は、13人の子どもと5人の保護者の方が参加をしてくれた。これにスタッフ6名が参加し合計24名で講座を行った。まず、この参加者を11組のコンビに分け、そのコンビで練習から試合までをしてもらった。その際は、親子でコンビを組むのではなく全員をシャッフルしてくじ引きにより決めた。（この点に関しては、最後まで迷ったがより多くの人と触れ合って欲しかったし、違う親子でコンビを組んだ方が新鮮さがあっておもしろいのではないかと感じたからである。）

参加者は、私の予想に反して殆どの方がバドミントンを経験したことのある人で練習の内容も私が考えていた中では最高のレベルのまでやることができた。ただその一方で、あまりできない子もあり、全体とは分けて、個別にスタッフがマンツーマンでつき練習をしてもらった。試合をした方のグループも、個別に練習した方の子も、自分の目標を設定し

てそれをクリアできたら表にシールのシャトルを貼っていくという方法を採用し、能力が多少違って競うことのできるものとなった。子どもたちは、目標を達成して点数表の自分の欄にシールを貼りたくてとても一生懸命にやっていた。また、一緒に参加していただいた保護者の方もそれ以上に頑張ってくれた。当日は、暑かったため途中で休憩を取りながらすすめたが、とにかく参加者に怪我がなく、笑顔で「楽しかった。またやりたい」と言って帰ってくれたことが本当に良かった。

4. この講座を通しての反省・改善点

まず、スポーツの講座をやるにあたって、2 時間という時間があまりにも短いということを感じ知らされた。特に初めて会ったレベルの違う人たち同士でやってもらう場合はなおさらであった。今回の反省として、また同じ講座をやるとしたら直していきたい点としては、まず参加者のレベルはある程度同じくらいの人を集めるべきだと感じた。(例えば、初心者に限るとか) そういうことをしないと今回の様に途中でできない子を別に分けて行わざるを得なくなってしまった。

良かった点としては、優秀なスタッフに恵まれたことである。特に1年生スタッフについては、最初は心配していたが、まだ入学して1ヶ月半とは思えないくらい子どもへの接し方が良く、講座の展開などもよく理解してくれていて、急な変更にも臨機応変に対応してくれた。学部のスタッフは、子どもへの接し方などはもちろんのこと、教材研究の段階から有益なアドバイスをいただいた。

後日の参加者アンケートに、「今度の休みの日に、またお母さんとやろうと思っています。」という言葉があったのを見たときはとても嬉しくて、この講座を開講してよかったと実感した。

最後に、この講座を一緒に支えて下さったスタッフの皆さん、YOUサタの開催を支えた本部係の皆さん、そして参加して下さいました子どもたちや保護者の方々に深く感謝致します。ありがとうございました。

5. スタッフの声

- ・親子で参加できる講座として、見学するだけでなく、一緒に楽しんで頂けたことが嬉しいです。
寶中 菜穂 (幼4)
- ・組になった子どもが、本当に真剣な顔をしてやっていて、とても嬉しかったです。
仲井 真梨 (技2)
- ・この講座を通して、自分はやっぱり子どもが好きだと改めて実感できてよかったと思います。
岩村 綾子 (言1)
- ・本当にいい出会いをし、いい体験ができたと思う。今は満足感でいっぱいだ。
森下 佳代 (言1)
- ・細かい反省点はあるが、みんな今日はとても楽しんでいたし、技術も上がったと思うので、それだけで十分だと思う。
小林 寿英 (実1)



親子でスマッシュバドミントン!

—バドミントンの基礎・基本(入門編)—

1 ラケットに慣れよう

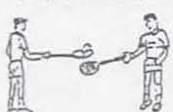
＜ラケットを持つ＞



＜シャトルを拾う＞



＜シャトルの受け渡し＞



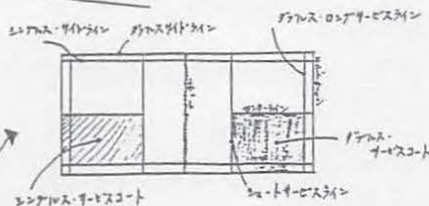
＜ラケットを上下、左右に動かす＞



＜リレー形式で遊ぶ＞



＜コートも覚えよう＞

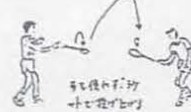


2 シャトルに慣れよう

＜シャトルを素手で捕える＞



＜2人で組んでの練習＞



＜天井に向かって高く打ち上げる＞



＜はずませないでラケットで捕える＞



第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《ゴルフ》

第18回 11月 7日（終日） 参加者数 3名

キャプテン	高橋歩（技術専攻3年）	指導教官	杵渕 恭宏
スタッフ	目崎友子（家4）、根岸昭博（技3）、細江真吾（技3）、林祐介（技3） 尾川正峰（技3）、宮坂有紀（家2）、中田理恵（家2） 古澤万喜美（家2）		

・講座のねらい

父親との会話づくり。工作に慣れ親しむ。

・講座の展開

講座の流れ	活動内容	時間
1. 自己紹介	自己紹介をする	
2. ビデオを見る	プロゴルファー猿のビデオを見て、簡単なゴルフのルールを説明する	
3. クラブの製作とボールの加工	木工室に移動し、クラブの製作をする ヘッドの角度を決め、鋸で切断する 電動ドリルで穴を開けて、シャフトとヘッドを接合する すべり止めとしてグリップにビニールテープを巻く アイアン練習用穴あきボールにビニールテープを巻く 道具の片付けをする グラウンドに移動する	
4. プレイ	周りに人がいない事を確認したうえで打つように指導し、簡単なコツを説明した後で練習し、頃合をみてゲームをする	
5. 片付けと終了証	グラウンドにとんぼをかけて、カップの穴を埋め、修了書を渡す	

ゴルフ

高橋 歩（技術専攻 3年）

1. 動機とねらい

僕は小学校の2年間で群馬県の渋川市で過ごしましたが、そのときの社宅で大流行したのが、このゴルフでした。始めは、プロゴルファー猿（作者：藤子不二夫）の影響で父のゴルフクラブなどで、社宅の前の使っていない野球のグラウンドに、スイートコーンの空き缶を埋めてやっていたのですが、そのうちに、仲間の一人が父親に木製のゴルフクラブを作ってもらい、それ以来、自分達で作るようになりました。そしてゴルフボールは、クラブの耐久性（ボールが重たいため、木製のクラブには負担が大きく壊れやすかった）と危険であるとの理由から、アイアンの練習用の穴明きボールになりました。しかし、穴あきボールはすぐに割れてしまいます。そこで、割れないようにビニールテープを巻いたところ、空気の抵抗が減り、飛距離が伸び、ボールが割れる事もなくなりました。当時は、日曜日になると、学校帰りに拾ってきた棒や木端、親に取っておいてもらったかまぼこの板等と、親の日曜大工セットを持ち寄り、社宅の下芝生で午前中はクラブ製作、午後はプレイでした。親からもらったティーで順番を決め「ワイが先や」等と猿のまねをして遊びました。僕は猿のようなクラブを製作すべく、社宅の近くの木を根まで、ほじくりかえしてみました。やはりあのような木は在るはずもなく、2、3本の木を駄目にしたのを覚えています。自分の子ども時代を思い返して、ある程度の物珍しさがあり、作って遊べるものとなると、このゴルフが一番に思い出され、今回の講座になりました。ねらいとしては、特にありません。

2. 当日の様子

子どもにゴルフのルールをある程度理解させるのと、動機づけのために製作の前に、プロゴルファー猿のビデオを見せました。子どももある程度ルール等理解したようでしたが、スタッフのほうで懐かしさのため喜んでいたように思いました。（笑）製作は、スタッフ全員が事前に二本ほど製作しているので、特に危険もなく、スムーズにすすみました。午後の実際のプレイは、始めは結構下手でしたが、そのうちにうまくなり、楽しんでいた様子でした。とにかく、周りに人がいない事を確認してから打つという事を徹底し事故に気をつけました。

3. 反省

事前の準備がスタッフの方にとって多少大変だったと思います。しかし、それがあからこそ、当日安心していただけるというのも事実です。兼ね合いが難しいと思います。ビデオを見せたのも子どもにルールを理解させるという点で正解でした。製作中、プレイ中を通して怪我がなくて良かったです。

4. スタッフの声

- ・「ゴルフは大人になってからも役に立つので良いと思いました。」 宮坂 有紀 (家2)
僕も社会人でないので分かりませんが、そういう話は良く聞きます。
- ・「準備で自分の分をつくるのがたいへんだった。」 古澤 万喜美 (家2)
その通りだったと思います。おつかれさまでした。
- ・「前回同様、子どもが少なかった。」 根岸 昭博 (技3)
相変わらず、人気がありません。力不足を感じます。
- ・「技術科っていいなと思った。」 尾川 正峰 (技3)
僕もそう思います。
- ・「子どもの上達振りに驚いた。」 林 祐介 (技3)
本当にそうでした。後世恐るべし。
- ・「子ども達も黙々と作業したり、練習したり、魅力のある題材だからこそその姿だと思う。」 目崎 友子 (家4)
僕も、子どもは今も昔も変わらないと感じた一瞬でした。
- ・「子どもは勿論のこと、スタッフである自分達も楽しめて良かった。」 細江 真吾 (技3)
こういった活動は、自分達も楽しくないと、長い目でみて続けていられないと考えていますので、この感想は非常に嬉しいです。
- ・「子どもがボツンとひとりになってしまうことが、プレイの時あったので、声をかけることが大切だと思った。」 中田 理恵 (家2)
すみません。気付きませんでした。今後気をつけたいと思います。

5. 終わりに

作って遊ぶということは、いくつになっても楽しい事です。そういう大人になりたいです。





第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《野菜で紙をつくろう》

第18回 11月 7日(午前) 参加者数 12名

キャプテン	池田 裕美 (家庭専攻4年)	指導教官	大村 道雄
スタッフ	大同由美子 (家4)、井上真裕子 (理3)、加藤豊司 (理3) 杉山雅幸 (野3)、田中直子 (家3)、田中由香 (家3)		

・講座のねらい

普段廃棄されてしまう大根の葉を使って紙を作る中で、友達と協力することや手作りの良さを感じて欲しい。

・講座の展開

活動内容	注意すること・支援	時間
1. 自己紹介する	○キャプテン→スタッフ→参加者の順で。 ・緊張がほぐれるように笑顔で。	10
2. 作り方の説明	○大根の葉がたくさん捨てられていることなどを話した後、実演しながら作り方を説明する。 ・実際に大根の葉を見せながら、一日の廃棄量や農家の方の話をする。 ・作り方の説明をするときは、みんながよく見えるように前に集める。	15
3. 紙づくり	○グループに分かれ、紙づくりをする。 ・2人で作業する場面は、協力しながらできるように支援する。 ・交代に紙すきができるようにする。 ・すき枠は順番に使えるように配慮する。 ・作った紙は、くっつかないように注意しながら新聞紙にはさんで持ち帰るようにする。	70
4. 自分の作った紙をみんなに見せよう	○一人ずつ作った紙を見せながら発表会をする。 ・紙を作ってみての感想・苦労したことなどを含めて発表する。 ・友達作品を見合う。	10
5. 修了証を渡し、片付け	○スタッフがグループの子どもたちに渡す。 ・がんばったことなどを一人一人言葉がけする。 ・家に持ち帰ったあとの乾燥の仕方について説明する。 ・道具を返却し、ゴミを拾ったり、水がこぼれているところをふいたりする。	15

野菜で紙をつくろう

池田 裕美（家庭専攻 4年）

1. 講座を開くにあたって

私は前からいつかYOUサタで「野菜で紙をつくろう」という講座を開きたいと考えていた。以前に図書館で本を見ていたら、普段捨てられがちな大根の葉や、カリフラワーの茎などを用いて紙を作るページがあった。この講座を開くことで、ただ紙を作るのではなく、本当は食べられるのにたくさん廃棄されていることや、それを利用して自分だけのステキな紙が作れる喜びを味わってほしいと思った。

2. 教材研究

①社会勉強

教材研究をしようと、早速八百屋さんに向かった。八百屋さんへ行けば切られた大根の葉があると思ったからである。しかし話を聞くと、「今は農家の方が出荷する時点で切ってくるんだよ。」ということだった。そういえば最近スーパーなどでも葉の付いている大根の方が珍しいくらいである。なんとか手に入らないだろうかと思い、別の八百屋さんを訪れると、11月はちょうど大根の出荷される時期であり、市場に廃棄された葉がたくさんあるので持ってきて下さるということになった。

当日までの教材研究は、スーパーの野菜売り場で出る野菜のくずを利用した。幸いにも店長さんとお話しさせて頂けることになった。実際に話を聞くと、一日に出るくずの量は大きなビニル袋約10～15個分であるという。また、それらのくずというのは食べられるのだけれど、きずついていたたり、いたんでいたりして商品に出来ないものであるという。私は、自分自身勉強になったことを当日子どもたちに話して伝えることで、何か感じとってもらえるのではないかと考えた。

②紙作り

まずは、本に載っている通りに作ってみた。葉をたたいて水分を出し、それをくず粉を用いて固めるというものであった。しかし、「紙」というよりは「海苔」といった感じになってしまい、しかも青臭く、三週間もすると水分が蒸発して約三分の一くらいの大きさにまで縮んでしまった。これではまずいと思い、牛乳パックを混ぜてみた。

すると、葉が模様のようになり、薄い緑色のきれいな紙ができた。何週間か様子を見たが、縮む様子もなかったため、当日は牛乳パックを混ぜることにした。

③名札・修了証作り

今回は紙作りの講座ということもあり、全て手作りにしようと考えた。手作りの物をあげたらきっと喜んでくれると思ったし、また大根の葉以外のものを使って作ると、こんなものが作れるんだという興味をもってほしいとも思った。そこでスタッフと相談して、名札をさつまいもの皮で、修了証をにんじんの皮で作ることにした。名札は和風っぽく落ち着いた感じに、修了証は鮮やかなオレンジ色でかわいらしく仕上がった。そこにスタッフ一人一人が筆を使って書いた名前や文章を貼り付け、世界でたった一つしかない名札と修了証を作り上げることができた。

3. 当日の様子

当日はダンボール一杯に入った大根の葉を見て驚いている様子だった。実際に大根の葉をたたいて絞る作業では、「くさい、くさい」と言いながらも一生懸命で、二人一組のグループに設定したため協力しながら作業を進める姿も見られた。また紙すきの場面では、学校でやったことのある子も、初めてやる子も真剣そのものだった。特にすき枠をはずすときには緊迫感があり、うまく出来た時の笑顔と拍手がひととき大きく感じた。一枚一枚丁寧に作り上げる子、コツをつかんでたくさん作る子など自分のペースに合わせ、みんな時間一杯頑張っていた。

修了証を渡す時には、毎回参加している子から「どうせいつもと同じでしょ。」という声が聞こえた。しかし、手作りの修了証を見て驚き、いつも以上に喜んでくれた。私もみんなの嬉しそうな顔を見て嬉しくなり、また「家でにんじんの皮で作ってみよう。」という声も聞こえ、一層喜びが増した。

4. 考察

今回この講座を開いてみて感じたことは、自分が必要だと思ったら積極的にさまざまな人と関わって、話を聞いたり、情報を得ることが大切であるということである。うまく時間がとれず、実際に大根を栽培している農家の方の話を聞くことができなく、残念だったが、それぞれ違った情報を得ることができ、大変勉強になった。

講座に関しては、今回すき枠を牛乳パックと金網で作ったのだが、ハガキサイズのものだけでなく、ハート型と丸型も作った。これらは大変人気があり、しかも簡単に作れるものなので、自分達でも好きな型を作る時間があればなお良かったと思う。また、今回は大根の葉だけを使用したのだが、他のものも取り入れても楽しかったのではないかなと思う。そして、紅葉や銀杏などの葉や折り紙などを一緒にすく工夫を取り入れれば、一層個性的な作品が仕上がったのではないかと感じた。

最後に、いろいろな話を聞かせて下さった方々、毎回野菜のくずを提供して下さったスーパーの方、大根の葉をこの講座のためにたくさん市場から持ってきて下さった八百屋さん、本当にありがとうございました。そして、一緒に悩んだり、私のわがままに付き合ってくれたスタッフのみなさん、本当にありがとうございました。

5. スタッフの声

- ・一枚一枚違った模様ができ、子どもたちは自分だけの作品の完成に大喜びでした。私自身も発見の連続で楽しかったです。 大同 由美子 (家4)
- ・子どもがうまくできない部分をどこまで手伝っていいのか、戸惑うこともありましたが、とても楽しかったです。 井上 真裕子 (理3)
- ・子どもはすごく楽しそうで、紙を作ろうという意欲が感じられた。 加藤 豊司 (理3)
- ・みんな精一杯の力を出していたと思う。 杉山 雅幸 (野3)
- ・自分で作るのも初めてだった紙づくりを、子どもと一緒にできて、とてもいい経験になりました。 田中 直子 (家3)
- ・くずになってしまう野菜を利用して、かわいい紙ができて感激でした。 田中 由香 (家3)

☆みんなステキな紙が作れたね。ヤッター!! ☆



野菜で紙をつくろう

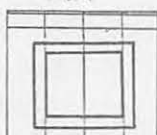


④用意するもの

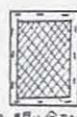
- ・ いろいろな野菜 多量
(大根やかぶの葉など)
 - ・ すり鉢とすりこぎ 1組
(またはかなづち)
 - ・ ミキサー 1
 - ・ ガーゼ (約10×10) 1
 - ・ 牛乳パック (加工済み) 1パック分
 - ・ でんぶんのり 1
 - ・ 洗面器 2
 - ・ 新聞紙 多数
 - ・ スポンジ 1
 - ・ すき棒 最低2
- 注) 牛乳パックは約1日水につけ、表面にはってあるナイロンをはがしたものを。

⑤すき棒の作り方

- ・ 用意するもの
- ・ 牛乳パック
- ・ ハサミ
- ・ あみ
- ・ 金網
- ・ ホチキス



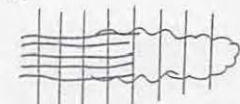
1. 古い紙をハサミで切る



2. 網に金網をはさみ、ホチキスでやる

いろいろな形のすき棒をついてみよう!!

1. 野菜を2-3センチの長さに切りま



2. すりこぎ (かなづち) でたたいて



3. ガーゼに包んで、水分をしぼりま



4. ある程度しぼったら、すり鉢ですり



5. ミキサーに牛乳パックと水を入れ、



6. 5にすりつぶした野菜とでんぶ



7. 6を洗面器にあけ、すき棒ですき、



2枚重ね、おろしのすき棒でよくつぶす

8. 新聞紙にはりつけ、あみの上からス



9. あみをそっとはがし、乾かした



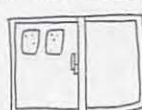
<乾かし方>

1. 新聞紙にはさみ、重い



例) 石、重やガラス板など

2. ガラス戸にはる



3. アイロンでおさえる



第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《2000年のお正月～いぐさでリースづくり～》

第19回 12月 11日(午前) 参加者数 20名

キャプテン	池田 裕美 (家庭専攻4年) 西澤 久恵 (一般)	指導教官	大村 道雄
スタッフ	増野隆 (社4)、田中由香 (家3)、深澤典子 (家3) 中谷弥哲 (数2)		

・講座のねらい

畳の廃棄を利用して、記念すべき2000年のお正月リースを作り、自分だけの作品をつくることに喜びを感じてほしい。

・講座の展開

活動内容	注意すること・支援など	使用するもの	時間
1. 自己紹介	○キャプテン→スタッフ→参加者の順番で。		10
2. 畳について知る	○いぐさの生長と畳ができるまでの段階を紙芝居に見せる。 ・実際にいぐさを見せたり、クイズを出したりしながらいぐさのことについて知ってもらう。 ・畳表は燃やされてしまう事、床は捨てるのにお金がかかる事など、リサイクルの大切さにも触れる。(西澤さんの話を交えて)	紙芝居・畳・畳表・いぐさ	15
3. 製作	○グループ分けをし、材料を準備して、ステキなリースを作る。 ・作り方は各講座のスタッフに任せる。 ・いぐさを束ねる時やよる時は、子どもたちが協力して出来るよう、支援する。 ・飾りに戸惑っている子、うまく形にならない子にアドバイスする。	いぐさ・霧吹き・ハサミ・ボンド・折り紙	70
4. 片付け	○道具の返却、身の回りのゴミ拾いをする。	ゴミ袋	10
5. 発表会	○グループごとに発表をする。 ・それぞれつくったリースを見せ合い、自分の自慢できるところを発表し合う。		10
6. 修了証を渡す	○グループのスタッフに渡してもらう。 ・一人一人言葉がけしながら。		5

2000 年のお正月～いぐさでリースづくり～

池田 裕美（家庭専攻 4 年）

西澤 久恵（一般）

1. 講座を開くにあたって

この講座を開くきっかけとなったのは、9 月に参加した岡谷子どもフェスティバルで西澤さんとお話しをしたことにありました。「いぐさでお正月のリースを作る講座なんて楽しいかもしれない」というお話、「畳屋さんで畳表がたくさん廃棄されているからリサイクルにもなるね」というお話、私はいろいろな話を聞いていぐさでリースを作る講座に魅力を感じました。19 回 Y O U サタが 12 月に開かれるということで時期的にもちょうどよいし、私にとって最後の Y O U サタということで、やりたいことをやっておこうという思いから、10 月 1 日に西澤さんに電話して、お願いしました。

2. 教材研究

話は聞いたもののなかなかイメージがつかめず、西澤さんに学校に来て頂いて実際に指導して頂きました。リースの大きさや編み方、飾りなど、いろいろと想像が膨らみました。

また、私自身いぐさのこと、畳のことについての知識がなく、当日子どもたちに少しでも知ってほしいという願いから、スタッフと共に勉強のため、長野市の畳店と岡谷市の畳店を訪れ、話を聞かせて頂きました。資料を貸して頂いたり、畳表やへりを提供して頂いたり、珍しい緑色の泥を見せて頂いたり、畳一畳を貸して頂いたり、本当に畳店の方の協力があつたからこそ講座を開くことができました。また、見学する中で、畳表にへりをつけたハガキというものを教えて頂き、それをヒントに修了証を作ることにしました。

さらに、飾り付け用のまつぼっくりを拾いに戸隠へ出掛けました。先輩の勤める戸隠小学校を訪れ、そこに通う子どもたちに協力してもらい、約 200 個ほどのまつぼっくりを集めることができました。

当日までにした準備は①いぐさリースの研究②修了証づくり③飾りの準備④畳についての紙芝居づくり⑤開閉会式の寸劇の練習の 5 つです。

3. 今回の講座を通して悩み、考えたこと

前日まで私は参加者みんなが完成させることができるのかを心配して、畳表を子どもたちがほぐすところからやるべきか、それともほぐしておいてリースを作るところからやるべきか悩んでいました。そんな時、土井先生に「大切なのは完成させることじゃない。子どもたちが普段できないことを体験したり、自分で使う道具を準備したり、お兄さん・お姉さんと一緒に作品を作ったり、時間内でできるとこまでやればいい。全部準備して揃えて作るならどこに行ってもできる。Y O U 遊サタデーでしかできないことをしないといけない。」というお話をして頂き、私は大切なことを見失いかけていたと反省するとともに、急に気持ちが楽になった気がしました。

ものづくり講座というのは、どうしても完成ということにとらわれてしまい、本当に子どもたちにとって大切なこと・必要なことを見失いそうになってしまいます。そして、い

つも悩むことはどこまで子どもたちにやらせて、どこまで準備するかということです。今回土井先生のお話のおかげで立ち止まって考えることができました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

4. 当日の様子

当日は、思ったよりも年齢層が低く、参加者数が多いので、グループに分けて全てスタッフに任せることにしました。昼表を一生懸命ほぐす姿、納得のいくまでいぐさをより直す姿、個性あふれる飾りつけ、どの場面をとっても子どもたちは真剣でした。「このリースお家に飾るんだ。」「お母さんがリースを楽しみに待っているんだ。」という声も聞こえました。また、初めて会ったお友達と協力してリースを仕上げる姿も見られました。

完成したリースを見て、満足気な顔をする子、「家に帰ってから、もっともっと飾り付けするんだ。」と言いながら、想像を膨らませる子、早く閉会式でお友達に見せたくて急いで会場に向かう子、「もう終わりなんて早いな。」とつぶやく子、どんな姿も私にとって嬉しくて、本当にこの講座を開いて良かったと思える瞬間でした。

5. 考察

今回、飾りつけは自由にやらしてもらおうと思い、グループに分けずに、材料を前のテーブルの上に置いておきました。しかし、リースを作るのに早く出来上がったグループと、時間がかかったグループとがあり、飾りが早い者勝ちのようになってしまいました。早くできた子は好きな飾りをたくさんつけ、時間のかかった子はつけたかった飾りがないというようになってしまいました。あらかじめグループに分けておくなどの配慮が足りなかったように思います。また、教材研究で飾りの研究が不十分であったように思います。

良かった点としては、昼表で作った修了証です。毎回参加しているお母さんも「いつもと違う。」と驚いていました。子どもたちも手作りの修了証が嬉しかったようで、大切に持ち帰ったり、お母さんに話したりしていました。こんなに喜んでもらえたのも、たくさんの方々の協力があつたからだと思います。快く提供して下さった昼店の方、毎日毎日遅くまで教材研究に付き合ってくれたスタッフのみなさん、本当にありがとうございました。そして最後に、こんなに素晴らしい講座になったのも西澤さんのアイディアと、講座に対する熱い思いがあつたからだと思います。本当にありがとうございました。

6. スタッフの声

- ・参加してくれた子どもたちの飾り付けを見て、その発想の豊かさに驚かされた。自分自身も物作りの楽しさを存分に味わうことができ、本当に素晴らしい講座であった。

増野 隆 (社4)

- ・自分も夢中で作ってしまいました。子どもたちも楽しそうでよかったです。

田中 由香 (家3)

- ・なかなか難しい作業であったにもかかわらず、子どもたちが一生懸命やっている姿に感動した。

深澤 典子 (家3)

- ・廃棄されてしまうものを使って、かわいいリースが作れてよかったです。準備にも参加でき、思い出に残る講座となりました。

中谷 弥哲 (数2)

第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《君もマジシャン ～めざせマジックマスター～》

第18回 11月 7日(午前) 参加者数 31名

キャプテン	両角 孝之 (数学専攻2年)	指導教官	宮崎 樹夫
スタッフ	森下房枝 (家院1)、安田亜琴子 (家4)、島崎真由美 (英4) 佐藤宏樹 (社4)、橋本祥子 (技3)、小松慎 (技2) 宮原新 (技2)、大場浩幸 (数2)、比嘉頼子 (障1)		

・ 講座のねらい

マジックを他人に対しての自己表現の手段となるように教え、個性としての樹立と、人との交流をしていくためのヒントとなるようにしたいと考えました。そして、マジックを通して、物事に対し不思議に思うという中から、探求心、思考力などを育てていけるようにしたいです。

・ 講座の展開

	p l a n	p o i n t	t i m e
準備	キャプテン登場 オープニング	・ まず団長挨拶の後、この講座の主旨、大まかな概要を説明する。 ・ オープニングマジックとして、団長がケーキや柿などを消し、つかみ、導入とする。	10
	スタッフ紹介、説明	・ 簡単なスタッフ紹介と、各ブースのアピールをしてもらう。	5
実践	トランプマジックA トランプマジックB マッチ箱マジックA マッチ箱マジックB ロープマジック	・ 各マジックごとスタッフが2人つき、思い思いの方法で子ども達に指導をする。 ・ 子ども達に、自分がマスターしたいマジックに分かれてもらい、スタッフによる説明、指導と練習を行なう。 ・ 全員がマスターした所で、各マジックごとバラバラになるようにグループわけをし、分かれてもらう。	45
	グループ内発表	・ グループ内で、実演したり、友達のマスターしてきたマジックを見たりする。その間スタッフは各グループで補助的役割をする。	35
終了	誕生日あて	・ 誕生日あての説明をして、教室をめいっぱい使い、子ども同士やスタッフと誕生日当てマジックをしあう。	15
	修了証マジック	・ 皆の欲しい物を聞いていき、なぜか偶然意見の一致した修了証を皆に渡す。	10
	解散		

君もマジシャン～めざせマジックマスター～

両角 孝之（数学専攻 2年）

1. 講座を開くにあたって

子ども達に、人にはできない何か自分だけの物を持ってもらいたい。友達に対して何か一つくらい自慢できる、自分を表現する事のできる手段を持ってもらいたい。そんな単純な願いによって考え出されたのがこの講座でした。自分というものを表に出す事ができない子供たちが最近多いように感じますが、そんなときに、このマジックというものを通し、友達や家族、そして初対面の人なんかとコミュニケーションをとる手段となってくれば良いと思い、この講座を設定しました。

2. 教材研究

一言にマジックといっても様々な種類があります。自分はその中でも、どこの家庭にでもあるもので、簡単にできるマジックを選びました。そして、見せる、習得する、実践するなど、系統の異なったマジックをバランス良く選び、じっくりとマジックについての理解を深めるという事に重点を置く事よりは、この場では多くのマジックを知り、体験してもらいたいと思い、この講座の構成をしました。

最も苦労したのはこの時間構成というものでした。何しろ上記のような願いを伝えるために、盛りだくさんな内容にしたかったため、わかりやすい内容で多くの事ができるように、そして子ども同士や子どもとスタッフとのコミュニケーション等もはかれるようにと、マジックを削ったり並べたり練り直したりしながら思案しました。

今回はスタッフも共に作り上げて行く講座というものを目指し、スタッフ皆がミニキャプテンとなってもらい、随分と各個人に依存するという形を取らせていただきました。そのせいでスタッフは大変な所もあったかと思いますが、真剣に、それでいて楽しみながら教材研究ができたかと思っています。

3. 当日の様子

当日は予想以上の人がおり、ここでマジックを覚えて忘年会や新年会で使おっかな、なんていうお父さんなどいました。子供たちは純粋にマジックに不思議がったり、あーでもない、こーでもないと言ったりして、飽きてしまう事もなく興味深々で取り組んでくれたように感じました。

子ども同士、子どもとスタッフの間でも、お互いにマスターしたマジックを教え合ったり、分からないところを聞いてきたりと、様々なふれあいの姿を見る事ができました。

てんやわんやになってしまったりもしましたが、スタッフ達の素晴らしい協力のお陰で、この二時間を大変に充実したものとする事ができたように思います。

4. この講座を通しての反省・改善点

良かった点

・知る、体験する、実践する、驚く、笑う、話す、様々な事が盛り込まれた、まさに盛り

だくさんの内容となる事ができました。

- ・後の感想で、実際に友達の前でやってみた、家族の前でやってみた、という声が多く見受ける事ができました。
- ・自分一人で作り上げた講座とならずに、スタッフ達と前日までに試行錯誤した結果できあがった講座であり、さらに当日のスタッフ、子ども達、お父さん、お母さん方皆で作りに上げる事ができた講座となった所。

反省点

- ・時間配分や講座の流れなど、キャプテンとスタッフとの意思の徹底ができていない所が見られたので、講座の流れを明確にして、プリントにするなど、もっと分かりやすくすると良いと思われる。
- ・当日の講座運営の方が忙しくて、子どもの反応などを観察したり、注意を払う事ができなかった。これがキャプテンをするのにあたって最も必要な事だと思われるので、次回以降にこの反省をつなげていきたいと思う。
- ・今回小さい子どもが多かったので、マジックによっては理解しづらい物がいくつかあったので、マジックに合わせた募集年齢を設定するか、年齢に合わせたマジックをするべきだったと思う。
- ・マジックという物は教えるだけでなく、スタッフが子どもに上手くみせてなんぼの物なので、もっと綿密なリハーサルを行なっておくべきだったように思います。

5. 講座を終えて

この講座を開く事になって、初めてのキャプテンという事でわからない事も多く、多くの方々に助けをもらいながら、なんとか完成させる所までこぎつけたと思います。実際に開いてみて、反省点もありましたが、他の講座とはまた違った個性という物を存分にらせ、講座が終わっても、これからの生活の中に役立てていく事のできる講座作りをしたい、というキャプテンの願いは、見事に実現できたように感じます。

6. スタッフの声

- ・グループに分かれるときに、良く理解できていないで分かれてしまった子もいたので、もっとじっくり理解できた方が良かった。導入はとても良かったと思う。

森下 房枝 (家院1)

- ・教育学部なのに子どもと触れ合う機会がなかなかないので、子どもと触れ合う良い機会になりました。自分から話しかける事で、積極的に話しかけてくれる事もわかった。

安田 亜琴子 (家4)

- ・グループに分かれて、自分自身が小リーダーになってグループの進行をしていく形だったので、責任をもって講座準備に取り組むことができたように思います。

島崎 真由美 (英4)

- ・準備期間を長く取れなかったせいか、あわただしく感じた。

佐藤 宏樹 (社4)

- ・ロープマジックをやって、自分も一緒に楽しんじゃった。

橋本 祥子 (技3)

・子供の笑顔が見れてよかったです。なつきの良い子は本当によく遊んでくれましたが、難しい子もいました。でも最後には、仲良くなれました。 宮原 新(技2)

・子供は、本当にかわいく、元気だったので、こっちが先に疲れてしまいました。

小松 慎(技2)

・思っていたよりも手品を教えるのに時間がかかってしまい、細かいところまで説明ができなかったのが残念でしたが、真剣にトランプマジックに取り組んでくれていた事が印象に残っています。 大場 浩幸(数2)

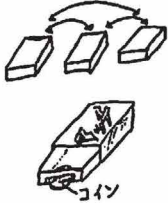
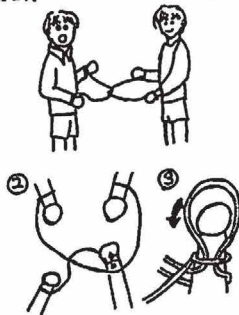
・パーアッとおわってしまって、なごり惜しいともほとんど思えなかった。

比嘉 頼子(障1)

おもマジシャン めざせマジック・マスター！ マジックの演じ方ファイル

ロープからの大脱出！

- ロープでつながっている所から見事抜け出します。
- ①まず、相手の両手首をロープで縛り、もう一本のロープを相手のロープに交差させてから自分の両手首を縛ります。
 - ②相手のロープを自分の手首を結んでいる輪の中へ、自分の体の方から前方の方へと通します。
 - ③相手のロープで結ぶことができるので、そこへ手を通し、相手のロープを引きぬきます。
 - ④そのままだけで手首からはなれば、二人は別々になる事ができます。

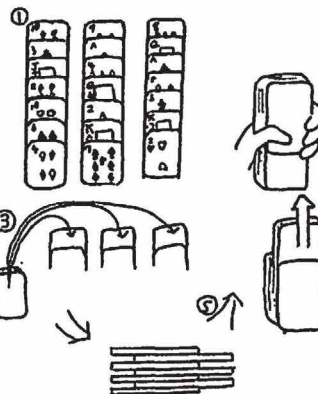


当たらない？マッチ箱の謎

- コインの入った箱がどれか当てようとしても、絶対に当たりません。
- ①左側にコインを入れたマッチ箱を箱ゴムでとめてかくしておき、テーブルに同じ形のマッチ箱を3個並べます。そのうちの一つには切り込みを入れておきます。
 - ②マッチ箱が隠れた事を確認してもらい、切り込みのあるマッチ箱にコインを入れます。それと同時に切り込みからコインを抜き取り、右手に隠し持っています。
 - ③左手で切り込みのある箱を持ってきて、コインが入っているように見せ、右手で覆った空のマッチ箱を指さしてみます。
 - ④マッチ箱を並び替え、マッチが入っている箱を相手に選ばせます。そのときに、相手は選んだ箱は右手で覆り、もう1つの箱をあかしたままマッチが入っているかのように左手で覆ってみます。
 - ⑤③、④を何度か繰り返してみても当たりません。最後に右手にさっきのコインを取り、あたかも箱から出したように見せます。

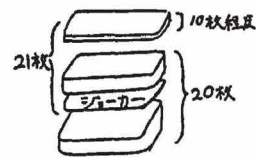
によきによきカード、飛び出てびっくり！！

- 相手の選んだカードがニョッキと出てきます。
- ①横7枚、縦3列の計21枚のカードを並べて、その中から相手に一枚選んでもらって覚えてもらいます。
 - ②選んだカードのある列を隠してもらい、その列を2番目にとるようにカードをまとめて重ねます。
 - ③今度は上の方から縦に3枚ずつ、7列になるように重ねて行き、②と同様の事をする。
 - ④もう1度同様にカードのある列を隠してもらい、それ以外の列を覚えてもらいます。
 - ⑤選んだ列のカードを少しづつずらして交互に重ねます。それを立てて裏で押し、ひっくり返してもう1度相手と選んだカードが見えてきます。



神話！命令を聞くマッチ箱

- 命令をやるだけでマッチ箱が下へ降りたり止まったりします。
- ①マッチの箱の両側に穴をあけて糸を通します。そこに結びつけたマッチ箱を天井に入れ、覆った状態で3分の2くらいの量になるように入れます。
 - ②糸の両端を持って何処か遠くまで、マッチ箱が降り落ちる事を見せます。
 - ③次に「止まれ！」と叫びながら糸を引っ張るとマッチ箱は止まり、「進め！」と叫ぶと両手をゆるめるとまた落ちて行きます。
 - ④これを何度か繰り返しますが、反逆の命令に合わせて箱を落とすとより効果的になります。



欲しい物は何か？

- みんなの欲しい物をばっくと当ててしまいます。
- ①④のような色分けされた12個のボックスを置き、好きなボックスを選んでもらいます。
 - ②選んだ所から左もしくは右の最も近い白ボックスに移動してもらいます。移動できるボックスは一つとは限りません。次に、上もしくは下の最も近い所にある色ボックスに移動してもらいます。
 - ③今度は斜めにある最も近い白ボックスに移動してもらい、最後に左もしくは右の最も近い所にある色ボックスに移動してもらいます。
 - ④相手は一番右の中央のボックスにいるはずですが、⑤ボックスの中に書く物をいろいろ覚えて応用してみると面白くなります。

誕生日がずばり当てられる魔法のカード

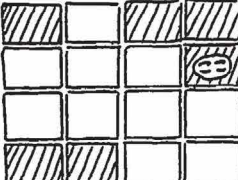
- 相手の誕生日をいとも簡単に当ててしまう事ができます。
- ①相手にまず自分の生まれた月を思ってもらいます。
 - ②次にカードを一枚ずつ見せてこの中に生まれ月と同じ数があるものを、「ある」と答えたカードを分けられます。
 - ③「ある」と答えたカードの○印の数字の値をたします。ただし、10は0として計算します。たして出てきた数で相手の生まれた月になります。
 - ④生まれた日も同じようにすれば当てられます。

23	18	31	3	2	9	16	1
27	21	①	11	20	18	④	24
19	5	29	13	12	3	5	17
17	9	7	25	4	19	6	8

27	13	30	24	22	7	14	5
11	29	⑥	9	13	29	⑤	12
31	14	26	28	29	30	23	21
25	15	10	12	31	20	6	15

27	11	30	6	31	20	22	18
7	23	③	16	24	29	⑧	28
14	3	26	22	30	23	27	19
18	10	19	31	26	17	21	25

これで君も
マジシャン
だね



第6期 信大YOU遊サタデー遊学プラン

《牛乳パック、大変身???》

第19回 12月 11日 (午前) 参加者数 5名

キャプテン	笹崎 典子(数学専攻2年)	指導教官	松岡 樂
スタッフ	坂本啓(社4)、尾川正峰(技3)		

・講座のねらい

牛乳パック、トイレットペーパーの芯、カップラーメンの容器などを使って身近なものでもおもちゃができることを理解することとともに、工作をする事で、指先を使って作業することの“楽しさ”を知ってもらう。

・講座の展開

展開	予想される子どもの動き、留意点	時間
1. 移動	・はぐれないように気を付ける。	5
2. 自己紹介	・スタッフは子どもの名前を必ず覚える。 ・教えてくれるお兄さん、お姉さんはどんな人かなあ。 ・どんな子がいるのかな？仲良くできるかな。	10
3. 作り方の説明	・5つ種類をあげ、好きなものを1-2個作ってもらう。 ・その子の力量を考えて、スタッフは助言を与える。特別な場合以外は手を出さない。	10
4. 製作開始！	・見本通りのものは作れるかな？さあ、がんばるぞー！ ・怪我に注意！スタッフは気を付けて見よう！	75
5. 完成！	・やった！できたよ！ ・発表会をする。 ・どこをがんばったか発表してもらう。	5
6. 遊んでみよう！	・自分の作ったおもちゃで遊んでみよう。 ・こんなに遊び方があるんだね。 ・みんなで仲良く遊べるよう支援する。	10
7. 修了証	・がんばって作ったよ。 ・渡す時に「がんばったね」の一言を忘れない。	5

牛乳パック、大変身???

笹崎 典子(数学専攻 2年)

1. はじめに

この講座を開く前に感じたのは、“キャプテン馴れ”への恐れである。今年私は出張を含め4回やってきたのだが、要領を覚えてしまったせいか、“マンネリ化”が起こってきたのである。他の講座が自分の講座と比べて魅力的にみえて焦ったこともあり、マンネリの恐怖にとっても脅えてしまった。

そこで私は「初心」を持って19回に臨むことにした。また、自分は自分、人は人と割り切り、自分らしさを持った講座内容に出来るよう専念した。

2. 講座開設の動機

私が“牛乳パックで工作すること”に魅力を感じたのは、9月の介護体験に行った時である。介護体験を行った施設で牛乳パックを使って日用品を作っていたのである。牛乳パックが意外なものに変身するのを見るのはとても面白いものだったので、興味を持って牛乳パックに接するようになった。そのことが“牛乳パック、大変身???”講座開設のはじめの動機である。

3. 教材研究の過程

はじめに牛乳パック工作のための資料集めをした。最初は日用品を作ることを目的としていたのだが、資料の中には数多くのおもちゃの作り方があり、それに目をひかれたのでおもちゃ作りの方向も検討した。

その後、作るものをおもちゃに限定したのは、そのおもちゃの特性に意外性を感じたからである。「えっ、こんなこともできるの!？」というものがあったり、牛乳パックとは違いリサイクルできないカップラーメンの容器、ヨーグルトのカップ、トイレットペーパーの芯も楽しいおもちゃに変身するというのはとても面白いものであると感じた。

身近な材料を使っておもちゃを作り、遊んでみるのはとても大切な事であると思う。お店に行けばなんでも買える。だけど“お金に頼って物を手に入れること”に早くから依存させたくはなかった。“身の回りのもので遊ぶものができる”こともあるから、そのことについても少し考えてみてほしかった。そして意外なものがおもちゃに変身するのを体験してもらうことで発想を豊かにしてほしいということもあった。そこで、そのことをいかに伝えられるようにする工夫も考察した。

おもちゃを実際作ってみたとき、牛乳パックは意外に固く、切るのにとても苦労した。下手したらけがをしそうな場面もしばしばあった。このことから、「けがしないように注意を払う」ことを怠らないようにした。

4. 当日の様子

キャプテン1名、スタッフ2名、参加者5名、計8名の少人数で行われた。はじめ参加者の子どもたちは緊張していたが、人数が少なかったせいかすぐに和気あいあいとした雰

困気になった。

子供たちはとても器用で、すいすい作ってあっという間に1つのものを作り上げた。しかしそのおもちゃがうまく機能しなかったため、私はとても焦った。自分の作ったのと同じように作っているのにうまく動かない。私はその子のおもちゃを動かしてみることで原因をつきとめた。その後、動かない原因がわかり、またもとに戻って作り直し、今度はうまく動くようになった。この事より、教材研究の足りなさが身にしみた。失敗しないためのアドバイスを考えておけば良かったと、今更ながら思った。また、失敗した子に付きっきりになってしまったため、1人1人の対応がうまく出来なかったことは反省すべき点である。もっとみんなの様子を見られるくらいの余裕を持っていたら良かったように思う。

その後おもちゃを使ってみんなで遊んでみた。その時の子供達の笑顔はとても生き生きしていた。みんな遊ぶことに夢中で時を忘れていたようだった。遊びの時間が終わるのを告げた時、「もう時間?」と、残念そうな顔をする子もいた。

5. 講座を通しての感想

講座中、子ども達の目はとても輝いていた。はじめ子ども達は「うまく出来るか不安」と言っていたが、作品が完成した時の笑顔は喜びでいっぱいになった。

以前に開いた講座でも同じようなことが言える。いつもみんな一生懸命で、計り知れないチャレンジ精神を持っているのである。1つの段階をクリアしたら新しいものに再び挑戦する。その姿はいつも私に勇気をくれた。私はYOU遊サタデーに参加するたび、子ども達から元気をもらっているのである。

私がキャプテンを務めて思ったことは「協力する人がいないと何事も成り立たない」ということである。キャプテンは教材研究に時間をかけるため、とても大変なことである。キャプテンをやるときは、勉強と教材研究との時間配分を考えなくてはならなかった。だから計画性がないとキャプテンをやっていく上で大変負担がかかる。でも、周りに協力してくれる人がいてくれたからキャプテンを務めていけたのだと思う。忙しすぎて苦しかったときもあったけれども、協力してくれた人達のおかげでここまでやって来れた。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。積極的に参加してくれる人がこれからも増えてくれることを願い、YOU遊サタデーを続けていきたい。

6. スタッフの声

・講座の冒頭で、牛乳パックがどう変身するのか、という紙芝居をやった。恥じらう気持ちを振り捨ててモーモーマンになりきったら子どもたちが笑ってくれた。「こちらが精一杯ぶつかっていけば、子どもはそれに応えてくれる」ということを改めて実感できた。

坂本 啓(社4)

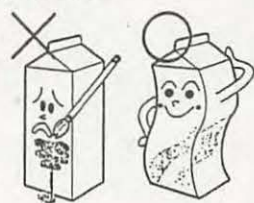
・今回は、いつもの技術科系の講座ではなく、新鮮な気持ちでやれました。3年生の最終のYOU遊サタデーということで、良いものにしたいというプレッシャーもありましたが、自分も子どもたちも楽しく、とても良いものになったと思います。 尾川 正峰(技3)



How to? 牛乳パック変身への道 in You遊サタデー

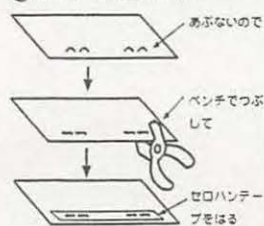
★ にゅう 牛乳パック工作のアドバイス ★

① 色をぬるとき

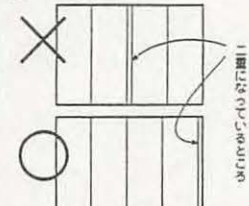


色ぬりは、なかなかむずかしい。できるだけパックの色やがらをそのまま生かして使おう。

③ ホッチキスでとめたとき

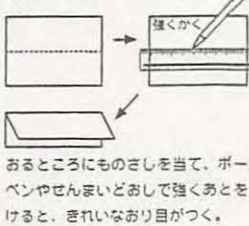


② 切り開くとき



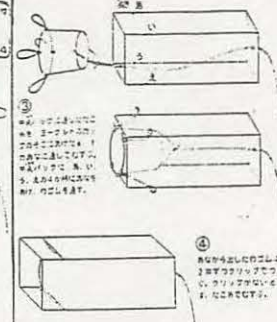
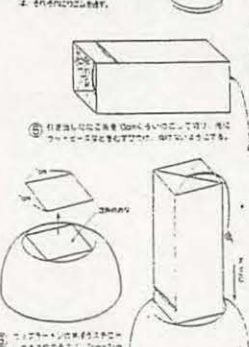
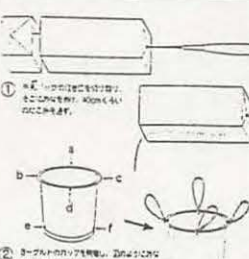
のりしろになっているところは、はじっこにする。こうすればおったり、切ったりがらく。

④ おり目をつけたいとき



ナイス・キャッチ

ピンポン玉を飛ばしたり、キャッチできる、面白いパック工作のアイデアです。



出張YOU遊サタデー



伊那ちゃれん児プラザ21

尾沼 直也(幼児教育専攻 4年)

1. イベントの概要

この「伊那ちゃれん児プラザ21」とは、子どもがたくましく成長するように、遊びや体験を通じて、子どもの創造性やチャレンジ精神を養い、親子のふれあいの場を提供することを目的として、「ちゃれん児プラザ21実行委員会」が主催者となり、平成11年8月11日に長野県伊那文化会館・春日公園で開かれた。

この「伊那ちゃれん児プラザ21」で行なわれる、空飛ぶおもちゃ、水でっぼう、竹とんぼ等を作る「親子創作広場」、火おこしの体験やサラブレッド体験乗馬等が出来る「親子体験広場」等のイベントの一つとして、信州大学YOU遊サタデーは「スライム」「こま? コマ? 独楽?」「アルけまり」の講座を行った。

2. 伊那出張YOUサタの意義

出張YOUサタの意義として、まず一つとして、「出張でしか出来ないような講座が出来る」ということが挙げられる。学部におけるYOU遊サタデーの場合、ある一つの講座の時間が決まっていることや場所がキャンパス内であることで、講座の内容が限られてしまう。しかし今回の出張は、時間の制約がなかったので、講座形式にするのもブース形式にするのも自由であった。また、場所も公園であったので、公園という環境を生かした講座をすることが出来た。

二つとして、長野の以外の地域で、「交流の場」を提供できるということが挙げられる。学部におけるYOU遊サタデーは、学部周辺の子どもだけを対象に交流の場を提供しているわけではないが、学部周辺以外の子どもは距離の関係上、参加しにくいものであった。そのため、主な参加者は学部周辺の子どもになってしまった。そこで今回、伊那地方へ出張に行くということにより、伊那地方にも地域の交流の場を提供することが出来た。以上が出張YOUサタの意義である。

3. 当日の講座の様子

スライム

この講座では、色水に同量のPVA洗濯のりを入れ、四ホウ酸ナトリウム水溶液を少量入れよく混ぜて出来たものを「スライム」と呼び、この「スライム」を作ることを行った。この講座では開講方式を講座制にし、一講座24人(4人×6グループ)の子どもを受け入れ、それを4回行った。また、1講座30分間とし、30分を次の準備にあてた。

受付の方法としては時間を記入した整理券を配り、講座に参加するための待ち時間を違うイベントを見てこられるようにした。

こま? コマ? 独楽?

この講座ではテープゴマとフーフーゴマの2種類のこまを作った。参加者には、2種類のこまのうち、好きな方を作ってもらい、出来上がったら終わりという方法で行った。その

ため、整理券を作る必要がなかったので参加者には整理券を配らなかった。

講座の内容であるが、テープゴマの方は、竹ひごに紙テープを巻いていき、直径2センチ以上巻いて出来上がりである。また、途中でテープの色を変えれば、カラフルなコマが出来る。フーフーゴマの方は、ペットボトルのプラスチックを十字に切りとって、羽に角度をつけ、上から強く息を吹きかけると飛び上がるというコマである。

アルけまり

この講座では、アルミ缶を横に切って、円筒状の物を作り、それを飛ばして遊ぶということと、PPバンドという荷造り用のひもを使い、ボールを作り、それで遊ぶということをした。この講座では、ブース形式を採用し、いつでも誰でも、この講座に入ってくる事が出来るようにした。また、参加人数が集まりすぎてしまった場合のために、整理券の準備もしておいた。スタッフと子どもの割合としては、3人の子どもにスタッフが一人という形をとった。

4. 反省、考察、課題

スライム

子どもたちが熱中して作っていたことは良かったと思った。また、親子で一緒に作っているグループもあり、見せ合っている姿が見られたことは、この講座を開いて良かったと思った。また、どのような参加者が来たのかを考えると小さい子どもだけでなく、中学生の参加もあったことは非常に良かった。

反省点としては参加希望者が多く、整理券がなくなってしまうと、断らざるを得ない子どもがいたということが残念だったことと、一人で何個も作ってしまう子どもがいて、材料がなくなりそうになり、途中から一人2個までとしたが、始めから作る量は決めておくべきであったことが挙げられる。

こま？コマ？独楽？

テープゴマは細かい作業であったので、きつく巻くのが低学年の参加者には難しかった。そのことに関して、ニスを塗って固めるという方法をとれば良かったのであるが、時間がかかりすぎるためその方法は出来なかった。フーフーゴマの方はコツがいるため、なかなか飛ばない参加者もいた。これに関しては、テレホンカードで作った方が良く飛ぶのではないかと思われた。

アルけまり

良い点として、多少作るのが難しい物を作る講座であったが、子どもは一生懸命に作ってくれたことやあまり参加者がいなかったことで、スタッフと子どもの触れ合える時間が増え、長い間一緒になって遊べたことが挙げられる。

今後考えていかなければならないこととして、今回、ブース形式にしたが、講座の進行上、この形式が本当に良かったのかどうかということが挙げられる。

こどもフェスタ in OKAYA

高井 久（教育学研究科技術専修 1年）

1. イベントの概要とそれまでの経過

本年度の出張YOU遊サタデーの一環として、平成11年9月5日に「こどもフェスタ in OKAYA」に参加させていただいた。

きっかけは、平成11年3月に岡谷市教育委員会生涯学習課の立道さんが教育学部に来訪され、同イベントにYOU遊サタデーの協力を依頼された。その時点では、スタッフの移行期であったために、協力は未定にさせていただいたが、第6期のスタッフが正式に参加を決定した。

それからは、5月の松本キャンパスで行った17回YOU遊サタデーに岡谷市教育委員会の方々が見学されたり、逆に7月31日にはこちらから岡谷市総合体育館に会場の下見をしたりと、非常に友好的であった。なお、具体的に出展する講座が決定したのは7月上旬で、それ以降前日までかけて各講座の教材の準備や備品の確認をしていった。

2. 岡谷出張YOUサタの意義

まず挙げられるのは、地域に開かれた大学作りという視点である。長野と松本のキャンパスには遠すぎて来られないという方も、こちらから出向くことによって、地域の方々に貢献できる。また、大学のキャンパスではできないような講座を出張YOU遊サタデーにおいて実現できるという可能性もある。

3. 当日の講座の様子と反省

スーパー弾ける！ミラクルボール

当日は参加者とともに楽しく講座を行えた。ミラクルボールの講座は過去に数回開かれているが、このミラクルボールを使って自分なりの講座を開くのは結構大変なものであった。

ミラクルボールと言えは「臭いが気になる」ということを実践記録に書いてあるのを目にした。しかしこの臭いはクエン酸水溶液を用いることで（ボールは柔らかくなってしまったが）解決した。更に酢やレモン汁を用いたときとは違い、ラテックスがコップの底からきれいにはがれたというよい結果が得られた。

もう少し時間があればもっと工夫することができたが、当日事故もなく行えたので、そのことは良かったと思う。またミラクルボールに接する機会があったら、もっと良い講座にしたいと思っている。

電流いらいら輪を作ろう

この講座は17回YOU遊サタデーで大変好評であったので、こちらのイベントでも同じものをやらせていただいた。詳しいことについては、17回のレポートを参考にさせていただきたい。

今回、この講座を開くにあたって最も注意した点は、机である。一般的な会議室の長机

を使ったので、子どもたちがげんのうなどを使って作業するには高く、更に机の脚がしっかりしていないので不安定であった。そのため道具を使う作業はできるだけ省き、コースを作る作業や実際に遊ぶ時間を多く取るようにした。当日は時間に余裕ができたため、みんなの作った作品を遊ぶことができ、熱心にコースの改良をしている子も見られた。

ずっと使える！自分だけのオリジナルカレンダー

予定していた時間よりも、大幅に時間が延びてしまったのが残念だった。しかし、参加してくれた子供達が、本当に楽しそうにしていたのが何よりだったと思う。時間が過ぎてしまったのに、最後まで作りたいと言った子供達の気持ちは、とても大切なものだと思う。粘土を使った講座だったからだろうか、みんなそれぞれのイメージを実際の形にしようと一生懸命だった。小さい子は本当に面白いものを作っている。宇宙人とか？動物とか。女の子は可愛らしいものを作るのに頑張っている。花やウサギの形とか、カラフルな模様とか。みんながみんな、それぞれの作ろうとしているものを形にしようとして悪戦苦闘していた。また、スタッフ達といろいろな話をして、笑い声も絶えなかった。できたものをスタッフ達の作ったものと交換などもしていた。反省しなければいけない点はたくさんあったと思うけれど、スタッフも参加者も、みんな友達になれた講座だったと思う。

4. 反省、考察、課題など

今回は出張YOU遊サタデーということもあり、会場運営はこちらでは行わなかった。そのため事前の準備としては、講座内容を煮詰めることが主であった。しかし、教員採用試験があったり、大学の夏季休業中であったこともあり、準備をする時間が短くなってしまった。このことについては事前にしっかりと計画を立て、実行していくことが必要である。

その他には、出張YOU遊サタデー全般にいえることではあるが、前日に準備ができないう上、当日も朝は移動のため、本準備する時間が短い。そのため段取りよく教材・教具を並べたりするシミュレーションをする必要があるであろう。

最後に今回、どの講座もけがもなく無事に終えることができたのは、非常に良いことであった。

高遠フェスティバル

山田 理恵 (教育実践科学専攻 3年)

1. イベントの概要

この行事は、国立高遠少年自然の家で毎年行なわれる行事で、この施設ならではの内容が盛りだくさんな、年に一回のお祭り、といった感じのものである。このたくさんの内容の一部分に出店と同じ感覚で枠を設けてもらい、自由に講座を開くのが高遠出張YOU遊サタデーである。内容としてはやりたいことを受け入れてもらうことができ、学部でのYOUサタとあまり変わりなく自由に活動することができるのが特徴である。大きな違いとしては当日受付の為、人数の確定ができないことである。そのため年齢や人数を見て臨機応変に対応していかなければならない。また、YOUサタだけでなく他のイベントも同時に行なわれているため、呼び込みをするなど学部では味わえない体験をすることができる。フェスティバルへの参加者数はかなり多く、県内外から参加しており、年齢も子どもからお年寄りまで幅広いので、地域や異年齢層の人たちとの交流も行なえる場になっている。

2. 高遠フェスティバル出張YOUサタの意義

この出張YOUサタの一番の利点は、学部ではできない「自然」というものを題材した講座を開くことができる点である。子ども達もスタッフも普段ではしたことのないことを体験できるのである。全身で何かを体験するということは、今の子ども達にとってとても楽しく感じられ、そして大切なことだと思う。また自然というものは、こちらが準備したものによりいっそう楽しみや発見を加えてくれ、自然の中にいるという気分からなのか、学部とは違った雰囲気でのびのびと参加者もスタッフも活動することができる。

また、普段行なわれている物作り講座などではどうしても教える立場と教えられる立場になってしまうが、自然体験講座になると一緒に活動するという立場になれることも特徴である。そしていろいろな場面で臨機応変に対応することが必要になる為、決まりきったマニュアルではなく子供のことを考えて、どのように行動したらよいかを一人一人が考える機会を持つことができる。「こんな事やったことない!」「こんな事できるんだ!!」と息を切らしながら笑顔で話す子ども達。このような参加者の声が聞けることが高遠YOUサタの一番の楽しみではないだろうか。

3. 当日の講座の様子

①目指せ! 割り箸マスター

田中 崇 (社会専攻 4年)

井戸 陽子 (家庭専攻 4年)

この講座は「いつものYOUサタ感覚」から脱け出せない私達に喝を与えた。それは講座・スタッフの在り方は一つではないという事である。いつもの感覚とは、スタッフと参加者が共にものを作り遊ぶ、という二人三脚的なものである。私達はブース形式でありながらも、いつもの感覚でこの講座を開いてしまった。その結果、当日100名を超す参加者があり、私達は多くの参加者に満足のいく対応ができず、ただ数の消化になってしまった。

多くの子どもが割りばし鉄砲やシュート棒を自分で作り、自分の手にできた事は何より

も喜ばしいことである。しかし我々スタッフにとっても、もっと満足のいく質の高い講座にできたのではないだろうか。今となっては後の祭りだが、材料がそろい、一人ででも作ることのできる状況にしてあったならば、参加者が求める時はすぐ対応でき、一人のスタッフが大勢を見て、ゆとりある時間になったのであろう。必ずしも、二人三脚が良いものではないことを、この講座は私達に教えてくれた。

②チャレンジ・ザ・クッキング

杉山 雅幸(野外活動専攻 3年)

山田 理恵(教育実践科学専攻 3年)

この講座は、普段作ったことのないお菓子「バームクーヘン」を野外でしかもダイナミックに作ろうというものである。実際の参加者は家族が多く、そこにスタッフが加わりお手伝いをするという形になった。各班大人の方がいたので、作り方や火の番などは問題無く進めることができた。また、事前から心配していた「子供たちの飽き」というのも、こちらの用意したものの作りや講座会場の自然に助けられ子供たちは飽きることなく遊んでいた。一つ感じたことは、キャプテンが2人で良かったというだ。一人が全体を見まわり、もう一人が他のことをしている子どもについていたり、準備をしている間にもう一方がグループ分けをしたりと臨機応変に対応することができた。

見たことのないような大きな出来たてのバームクーヘン。出来上がった時の子どもたちの感動や喜びの姿がやはり一番の成果であったと思う。

③ネイチャーアドベンチャー in 高遠

小池 祐介(教育実践科学専攻 4年)

那須 良寛(教育実践科学専攻 3年)

この講座は、高遠少年自然の家の施設、地の利を生かしたここできちんと作り上げることができないものであったと思う。自然体験系の講座や、教室を開くには、それなりの条件をクリアしなければいけないのだが、ここ高遠は、「山あり、川あり、森あり」の環境が整ったベストプレイスであると言えるだろう。

講座の中では、忘れてしまいがちな自然と人間のかかわりを押し出したり、グループでの人間同士の協力をしたり、様々なものを学ぶことになる。代表的なゲームは、木の切り株の上に、グループ全員で乗り込み、バランスを保つ「日本列島」や、自然の家付近ある硫黄沢という小さな川の流れを利用し、笹舟を作ってレースを行なう「笹舟流し」などである。初めて会った人とゲームを通して自然と心が通じていくことは、この講座での一番の成果だ。こうした場で、自然とともに生きるスタイルを忘れないでいたいものだと思う。

4. 考察、今後の課題

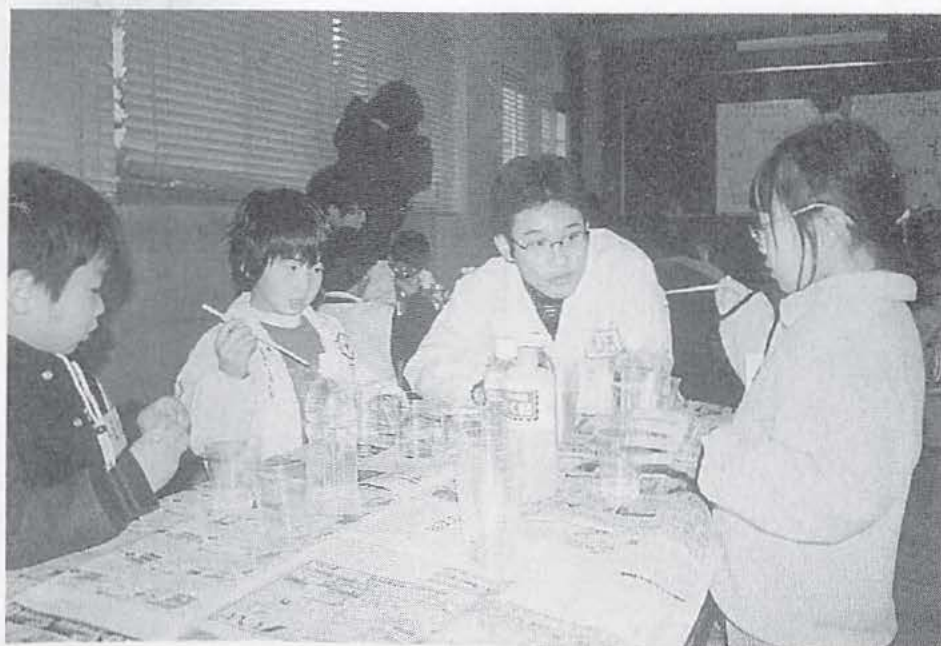
全体として感じたことは、この高遠出張Y・O・U遊サタデーはいつもと違うスタイルで行うことにより、私達に新たな発見を与えてくれる事である。そして子どもたちもいつもと違った楽しさ、感動を味わう事ができると思う。学部での良い点・悪い点が高遠での講座で私達は気付いたりすることができた。ここでの反省や得たものを学部でのY・O・Uサタに生かしていくことができればいいのではないかな。

また今後は内容も深めるという意味で「自然」をもっと生かした講座を開いて欲しいと思う。経験が無くても努力する気持があればどのような講座でも出きると思う。来期も高遠で講座を開くのなら、チャレンジ精神で進めていって欲しいと思う。そして施設の方への感謝の気持ちを大切にしたい。

統計とアンケート



反省の記録



～YOU遊サタデー統計～

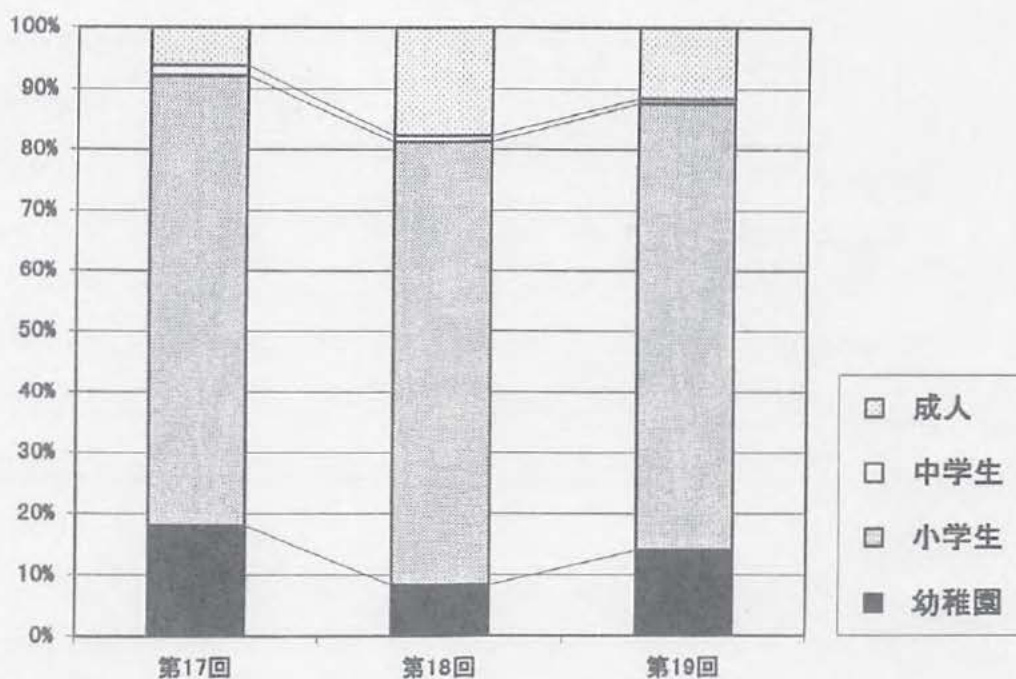
YOU遊サタデー参加者数

	第17回	第18回	第19回
幼稚園	32	16	18
小学生	131	140	95
中学生	3	2	1
成人	11	34	15
合計	177	192	129

参加者総計

498名

YOUサタ参加者割合



～YOU遊サタデーアンケート集計結果～

アンケート回収率

	第17回	第18回	第19回
回収数	29	36	28
回収率	16%	19%	21%

YOUサタを知ったのは？

	第17回	第18回	第19回
新聞	9	14	7
友人・知人	8	7	5
学校の先生	8	6	2
大学関係者	0	2	6
インターネット	0	0	0
ダイレクトメール	4	5	3
その他	0	9	5
合計	29	43	28

YOUサタでした事をもう一度しましたか？

	第17回	第18回	第19回	合計
自分で	7	19	3	29
家族で	9	9	9	27
友達と	4	1	2	7
学校で	3	1	0	4
してない	7	9	14	30
する予定	3	0	0	3

～アンケートより～

《第17回》

できるかな～はと笛～

- ・音が出た時、ほっとしました。
- ・音を出すのは、難しかったです。
- ・焼いた後、音がどうなるか楽しみです。
- ・優しく教えてくれた。

のぞけば不思議！！～万華鏡づくり～

- ・とてもきれいで、驚きました。
- ・一生懸命作れて楽しかったです。
- ・また作りたいです。
- ・万華鏡の仕組みがわかり、勉強になりました。
- ・自分で作って、自分だけの万華鏡ができてうれしかったです。

フリスビろう！？

- ・楽しかった。またやりたい。

趣味YOU悠

- ・いろんな紅茶が飲めておいしかったです。

カンカンアイスクリーム

- ・おいしかったです。
- ・優しいスタッフに遊んでもらって、うれしかったです。
- ・アイスクリームができてうれしかったです。
- ・身の回りにある材料、道具であんなに簡単にアイスクリームができるなんて感激した。

親子でスマッシュパドミントン！

- ・小さな子どもにも分かりやすく教えて頂き、参加者全員が楽しめた事が良かった。
- ・わからない事や、困っている事など、親切に教えて頂いて心強かったです。ありがとうございます。
- ・色々学ぶ事ができた。
- ・試合で勝ててうれしかったです。
- ・良い思い出になりました。
- ・また楽しみたいです。
- ・親子で良い汗を流せました。

みんなで作ろう探偵物語

- ・チェックポイントからチェックポイントに行くのが難しかった。
- ・犯人を捕まえられて良かった。

ペットボトルの車で遊ぼう

- ・車がすごい走って楽しかった。
- ・今でも改良したりして毎日遊んでいます。
- ・いろんな学年の子ども達がいって楽しかったです。
- ・作る楽しさと、遊ぶ楽しさの両方あってとても良い体験だったと思う。

切り絵をつくろう！

- ・おもしろく作る事ができた。

昔の楽器「うなり木」

- ・お兄さんからうなり木をもらえてうれしかった。
- ・すごい音が出て驚いた。

電流イライラ輪を作ろう

- ・とても楽しかったです。ありがとうございました。

《第18回》

パラシュート部隊、出動！

- ・穴開けのとき手伝ってくれたので、いいものができました。
- ・パラシュートを飛ばしたり作ったりで楽しかった。

野菜で紙をつくろう

- ・野菜で紙を作るのが不思議で、とても楽しかった。

君もコスモポリタン

- ・歌を歌ったり、ゲームをしたりと、とても楽しかった。

紅茶時間(ティータイム)

- ・レモンを入れたりしておいしかったです。
- ・クイズが楽しかったです。

ほら見てできたよ！自分だけのおべんとう

- ・思ったよりもおいしいお弁当ができました。
- ・優しく接してくれ、とてもうれしかった。
- ・楽しくお弁当を作れてよかったです。
- ・嫌いだったハンバーグが、自分で作ったことで食べられるようになってうれしい。

君もマジシャン！めざせマジックマスター！

- ・スタッフの人がわかるまで教えてくれて、うれしかった。
 - ・もっと違うマジックに挑戦してみたかった。
- ペットボトルのレコードに自分の声を入れよう
- ・優しく教えてくれてうれしかった。

君だけのミラクルスープを作ろう！

- ・子どもたちだけの料理という事で、子どもたちはワクワクドキドキで楽しそうでした。

本日わたあめ屋さん

- ・わたあめの機械は難しそうだったけど意外に簡単だった。
- ・スタッフの人がとても優しくかった。

めざせ工作名人！親子で下駄作り

- ・下駄の裏に作った日と名前を書いて大切にしています。
- ・スタッフの方達は親切で楽しかったです。
- ・安全に対する配慮がとてもなされていました。
- ・手仕事で物を作るのは年齢にかかわらず楽しい事だと知った。
- ・下駄作りは難しいところがあった。

ゴルフ

- ・優しく教えてくれてうれしかった。
- ・よく飛んでうれしかった。

みんなで作ろう！ダンボール家具

- ・椅子の足を作るのが大変だったけど、キャブテンが親切に教えてくれたのでよかった。

一春にきれいな花を咲かせよう！

- ・春になってまた訪れるのがとても楽しみになり立て札を立てて頂いて、何だか誇らしい気持ちになりました。

《第19回》

牛乳パック大変身

- ・牛乳パックであんな面白いものができてよかった。また家や学校でもできるのやってみたいです。

イモスマスケーキ

- ・ケーキがとってもおいしくできて嬉しかったです。友達にも見せてあげたくなりました。

かえってきたスライム

- ・小学校でなくてもできる講座があつてよかったです。お兄ちゃん達と違グループになりましたが、楽しくできました。
- ・磁石で動いてびっくりした。グチョッとしたけどおもしろかった。
- ・こうてつスライムは動くから大好きです。

色砂ミレニアムカレンダーを作ろう

- ・思ったよりきれいにできてよかったです。良い記念になりました。
- ・筆で字を書くのが難しかった。

2000年のお正月 いぐさでリース

- ・タタミであんなのが作れてびっくりしました。知らない人もいて緊張したけど、飾り付けが楽しかった。
- ・修了証も良い物がもらえてよかった。

薫製屋さんになちやおう

- ・豚肉を混ぜるのがすごくきつかったけど上手くできてよかった。

はじめてのインターネット

- ・はじめてだったがわかりやすく教えてもらってうれしかった。

パソコン大分解

- ・今回、一生に一度しかできないくらい珍しい経験ができて楽しかった。

ころころもちもち

- ・お姉さん・お兄さんに遊んでもらって楽しかったです。

反省会にて

第17回 YOU 遊サタデー反省会(1999年5月24日)

(△反省点 ○改善点)

前日まで △準備期間が短い。

当日 △受付時間が短い。
 △参加者の多い講座は受付場所が狭い。
 △参加者にわかりやすい案内が必要である。(張り紙・地図等)
 △誘導係の人数配分がうまくいっていない。
 △各講座での備品管理が徹底されていない。
 ○仕事の分散化が必要である。
 ○執行部とスタッフ間の意見交換をする。
 ○キャプテン・執行部用の定例会を設けるべきだ。
 ○教材研究はみんなでやろう Day's 以前からやった方がよい。

第18回 YOU 遊サタデー反省会(1999年11月19日)

前日まで ○講座の目玉を知らせてほしい。
 ○1年生スタッフとの連絡を徹底する。

当日 △駐車場で遊んでしまう子がいた。
 △開閉会式が長く、けじめがない。
 △名札の「ちゃん」「くん」の間違いで傷ついた子がいた。
 △備品への意識が低くなっている。
 △子どもたちの見送りがいい加減だった。
 △全体的に参加者をあたたかく迎える雰囲気があってよかった。
 ○隔りはやらなくてもよいのではないか。
 ○受付の誘導係を多くする方がよい。
 ○午前・午後の受付を間違えてきてしまう人の対応。
 ○YOU ゆうカードの工夫。

第19回 YOU 遊サタデー反省会(1999年12月17日)

一人一講座について

- 《講座》 △準備がゆとりをもってできた。
- △講座に集中できてよかった。
- △客観的に講座が見れる。
- △子どもとの直接の触れ合いが少なくなった。
- 《係》 △計画が曖昧だった。
- △係の人数が減ってしまう。
- △案内の標識がわかりにくい。

開閉会式について

- △アトラクションがなくて式に集中でき、けじめがついた。
- △講座ごと、ゲームなどできてその後の講座の雰囲気作りに役立った。
- △参加者をひきつける何かがほしい。

係について

- △受付時間(15分)が短い。
- △スタッフマニュアルの数が足りない。
- 早く到着してしまった子どもへの対応。(交通機関との兼ね合い)
- 参加者用にスケジュール等のパンフレットがあった方がよい。
- スタッフマニュアル内容を吟味。

1年を通して

- △YOU サタ開催の回数が多すぎた。(出張を含めて)
- △回数を重ねる毎によくなっていった。
- △話し合いの場が少なかった。
- △執行部とスタッフ達の意識・考えの違いが解消できなかった。
- 締め切りを守る。
- コンピュータ系の検討・改善
- 皆が講座だけでなく、話し合い反省会等に参加すべきである。

キャプテン・スタッフ名簿



キャプテン・スタッフ名簿

◎：キャプテン > ○：スタッフ > ☆：本部

番号	氏名	ふりがな	学年	専攻	17回	伊那	岡谷	高遠	18回	19回
1	高井 久	たかい ひさし	院	大学院	◎		◎		○	☆
2	森下 房枝	もりした ふさえ	院	大学院	☆				○	◎
3	赤穂 瑞恵	あこう みづえ	4	家庭	○			○	○	
4	池田 裕美	いけだ ひろみ	4	家庭	◎	○	○	○	◎	◎
5	井戸 陽子	いど ようこ	4	家庭	◎			○	◎	◎
6	伊藤 慶	いとう けい	4	社会	◎			○	◎	
7	岩本 幸恵	いわもと ゆきえ	4	国語						○
8	長田 雅子	おさだ まさこ	4	教育実践	○		○		○	○
9	押澤 由記	おしざわ ゆき	4	家庭	◎	◎	○	○	◎	○
10	尾沼 直也	おぬま なおや	4	幼児教育	○	◎	○	○	○	○
11	河西 祐司	かさい ゆうじ	4	技術	○					◎
12	岸本 香里	きしもと かおり	4	家庭	○					
13	小池 祐介	こいけ ゆうすけ	4	教育実践			○	◎	◎	
14	紺野 理奈	こんの りな	4	家庭	☆					
15	坂口 明実	さかぐち あけみ	4	家庭	○			○	○	
16	坂本 啓	さかもと けい	4	社会			○			○
17	佐藤 宏樹	さとう ひろき	4	社会	◎	○		○	○	○
18	佐藤 正志	さとう まさし	4	技術	○		○		○	◎
19	佐野 友和	さの ともかず	4	技術	○		○		◎	○
20	山王 隆晃	さんのう たかあき	4	工学部	◎	○	○	○	◎	○
21	品川 憲一	しながわ けんいち	4	技術	○		○		○	
22	島崎 真由美	しまざき まゆみ	4	英語	○			○	○	☆
23	白井 敬	しらい たかし	4	国語	☆			○	☆	☆
24	末久 友貴	すえひさ ともたか	4	国語	☆				☆	☆
25	巢山 有美子	すやま ゆみこ	4	国語						○
26	大同 由美子	だいどう ゆみこ	4	家庭			○		○	
27	武井 恵美	たけい えみ	4	家庭		○	○	○	○	○
28	武末 裕子	たけすえ ひろこ	4	美術	◎	○	○	○	○	
29	竹野 万希子	たけの まきこ	4	美術			○			
30	田中 崇	たなか たかし	4	社会	◎	◎	○	○	☆	◎
31	中澤 博子	なかざわ ひろこ	4	国語						○
32	原 津子	はら じゅんこ	4	心理臨床						○
33	寶中 菜穂	ほうちゅう なほ	4	幼児教育	○					○
34	増野 隆	ましの たかし	4	社会	◎	○	○	○	○	○
35	増沢 るみ	ますざわ るみ	4	国語						◎
36	町田 豊文	まちだ とよふみ	4	技術	○		○		◎	○
37	松井 良平	まつい りょうへい	4	数学	○					
38	目崎 友子	めざき ともこ	4	家庭	○			○	○	○
39	本山 貴雅	もとやま たかまさ	4	社会	○	○			◎	
40	森藤 香奈子	もりとう かなこ	4	幼児教育	○				○	
41	矢澤 恵美子	やざわ えみこ	4	国際理解	○				○	
42	安田 亜琴子	やすだ あきこ	4	家庭	○				○	
43	吉永 和代	よしなが かずよ	4	家庭	○			○	○	
44	石垣 一訓	いしがき かずのり	3	技術	○					
45	井上 真裕子	いのうえ まゆこ	3	理科					○	○
46	内田 亜矢子	うちだ あやこ	3	家庭						○
47	榎本 直樹	えのもと なおき	3	数学	○					
48	尾川 正峰	おがわ まさみね	3	技術	○			○	○	○
49	加藤 豊司	かとう あつし	3	理科	○	○		○	○	◎
50	菊池 泰弘	きくち やすひろ	3	技術						○
51	貴舟 良子	きぶね よしこ	3	国語						○
52	小林 真紀	こばやし まき	3	障害児	○					
53	榊原 研太	さかきばら けんた	3	理科						○
54	佐田 公子	さだ きみこ	3	美術					○	
55	静居 芳	しずい かおり	3	美術				○		

キャプテン・スタッフ名簿

◎:キャプテン > ○:スタッフ > ☆:本部

番号	氏名	ふりがな	学年	専攻	17回	伊那	岡谷	高遠	18回	19回
56	杉山 雅幸	すぎやま まさゆき	3	野外活動	◎			◎	○	○
57	高橋 歩	たかはし あゆむ	3	技術	◎			○	◎	
58	武田 由香利	たけだ ゆかり	3	幼児教育	○				○	
59	田中 直子	たなか なおこ	3	家庭					○	
60	田中 由香	たなか ゆか	3	家庭					○	○
61	常田 和宏	ときだ かずひろ	3	理科	○					
62	中村 祐介	なかむら ゆうすけ	3	理科	○	○			○	◎
63	那須 良寛	なす よしひろ	3	教育実践	◎			◎		○
64	西山 裕	にしやま ひろし	3	国語						○
65	根岸 昭博	ねぎし あきひろ	3	技術	○				○	
66	野田 耕次郎	のだ こうじろう	3	技術						○
67	橋本 祥子	はしもと さちこ	3	技術					○	
68	馬場 かおり	ばば かおり	3	数学	○					
69	林 裕介	はやし ゆうすけ	3	技術	○				○	
70	深澤 典子	ふかざわ のりこ	3	家庭						○
71	細江 真吾	ほそえ しんご	3	技術	○			○	○	○
72	山崎 美佐子	やまざき みさこ	3	家庭						○
73	山田 理恵	やまだ りえ	3	教育実践	○			◎	○	○
74	渡辺 勝由	わたなべ かつよし	3	技術						○
75	阿部 貴子	あべ たかこ	2	理科	○					
76	池口 直子	いけぐち なおこ	2	家庭	○					
77	池田 朋美	いけだ とみみ	2	家庭	○	○		○	○	◎
78	伊藤 茜	いとう あかね	2	数学	○					
79	伊藤 由未	いとう ゆみ	2	特殊						○
80	大木 美那子	おおき みなこ	2	技術	○				○	
81	大久保 瑞恵	おおくぼ みずえ	2	国語					○	○
82	大場 浩幸	おおば ひろゆき	2	数学					○	○
83	岸田 修一	きしだ しゅういち	2	社会					○	
84	北原 理江	きたはら りえ	2	家庭					○	○
85	熊谷 憲	くまがい あきら	2	国語						○
86	胡桃沢 宣光	くるみざわ のりみつ	2	国語						○
87	桑山 知美	くわやま とみみ	2	家庭	○			○	○	○
88	小池 悠介	こいけ ゆうすけ	2	国語	○	○	◎	○	◎	◎
89	小畑 真里子	こばた まりこ	2	社会						○
90	小松 慎	こまつ まこと	2	技術	○			○	○	
91	佐久間 恵	さくま めぐみ	2	国語						○
92	笹崎 典子	ささざき のりこ	2	数学	◎	○	◎	○	◎	◎
93	千野 加世子	ちの かよこ	2	家庭	○	○	○	○	○	◎
94	塚田 周	つかだ しゅう	2	教育実践						
95	寺島 友香里	てらしま ゆかり	2	理科	○					
96	戸谷 裕美子	とや ゆみこ	2	英語		○			○	
97	仲井 真梨	なかい まり	2	技術	○				○	
98	中澤 典子	なかざわ のりこ	2	国語	○	○	○	○	◎	
99	中田 理絵	なかた りえ	2	家庭	○			○	○	○
100	中谷 弥哲	なかや みさと	2	数学	○	○	○		○	○
101	林 一真	はやし かずま	2	家庭	○	○		○	○	
102	福田 干奈	ふくだ かな	2	国語						○
103	古澤 万喜美	ふるさわ まきみ	2	家庭	○			○	○	
104	増田 さなえ	ますだ さなえ	2	国語						○
105	宮坂 有紀	みやさか ゆき	2	家庭	○			○	○	○
106	宮崎 恭恵	みやざき やすえ	2	家庭	○			○	○	○
107	宮下 真弓	みやした まゆみ	2	国語					○	
108	宮原 新	みやはら あらた	2	技術				○	○	
109	両角 孝之	もろずみ たかゆき	2	数学	○	○		○	◎	
110	柳沢 健	やなぎさわ たけし	2	数学	○					

キャプテン・スタッフ名簿

◎：キャプテン > ○：スタッフ > ☆：本部

番号	氏名	ふりがな	学年	専攻	17回	伊那	岡谷	高遠	18回	19回
111	吉澤 万喜美	ふるさわ まきみ	2	家庭	○					
112	度会 千寿	わたらい ちひろ	2	数学	○		○			
113	寺本 沙織	てらもと さおり	1	社会科学					○	
114	平賀 倫子	ひらが みちこ	1	障害児	○				○	
115	北條 亜岐	ほうじょう あき	1	言語教育	○				○	
116	野口 亮一	のぐち りょういち	1	理数科学	○				○	
117	小黒 あかり	おぐろ あかり	1	教育実践					○	
118	西川 美幸	にしかわ みゆき	1	言語教育	○				○	
119	岩村 綾子	いわむら あやこ	1	言語教育	○				○	
120	工藤 佳代	くどう かよ	1	芸術教育	○				○	
121	木下 恵	きのした めぐみ	1	言語教育	○				○	
122	岡部 圭子	おかべ けいこ	1	教育実践	○					
123	清水 雅子	しみず まさこ	1	障害児					○	
124	友利 紗矢香	ともり さやか	1	言語教育					○	
125	近藤 綾乃	こんどう あやの	1	生活科学					○	
126	富山 裕子	とやま ゆうこ	1	障害児						○
127	比嘉 頼子	ひが よりこ	1	障害児						○
128	居澤結美	いざわ ゆみ	1	社会科学	○					
129	安藤由美子	あんどう ゆみこ	1	言語教育	○					
130	夏井一智	なつい かずさと	1	野外教育	○					
131	青木貴子	あおき たかこ	1	生活科学	○					
132	西澤俊輔	にしざわ しゅんすけ	1	理数科学	○					
133	酒井佳代	さかい かよ	1	障害児	○					
134	山盛賢治	やまもり けんじ	1	言語教育	○					
135	松下清香	まつした さやか	1	野外教育	○					
136	栗田しのぶ	くりた しのぶ	1	野外教育	○					
137	松井絵美	まつい えみ	1	理数科学	○					
138	上田暁子	うえだ あきこ	1	芸術教育	○					
139	秋山絵美	あきやま えみ	1	理数科学	○					
140	児山尚子	こやま なおこ	1	社会科学	○					
141	田中佐知	たなか さち	1	言語教育	○					
142	佐藤麻美	さとう あさみ	1	言語教育	○					
143	広瀬あや	ひろせ あや	1	社会科学	○					
144	北條牧絵	ほうじょう まきえ	1	理数科学	○					
145	小林久美子	こばやし くみこ	1	社会科学	○					
146	松本美弥子	まつもと みやこ	1	社会科学	○					
147	木林寿英	こばやし としひで	1	教育実践	○					
148	梅田亜紀子	うめだ あきこ	1	社会科学	○					
149	森下佳代	もりした かよ	1	言語教育	○					
150	宮田明子	みやた あきこ	1	理数科学	○					
151	泊 宗之	とまり むねゆき	1	社会科学	○					
152	渡辺寛教	わたなべ ひろのり	1	理数科学	○					
153	鈴木智哉	すずき ともや	1	理数科学	○					
154	三浦詩帆	みうら しほ	1	理数科学	○					
155	楠本満穂	くすもと みつほ	1	芸術教育	○					
156	土屋文弥	つちや ふみ	1	芸術教育	○					
157	花岡望	はなおか のぞみ	1	言語教育	○					
158	嵐雄亮	あらし ゆうすけ	1	生活科学	○					
159	平塚恵理	ひらつか えり	1	言語教育	○					
160	関あゆみ	せき あゆみ	1	言語教育	○					
161	井上将宏	いのうえ まさひろ	1	生活科学	○					
162	角直子	かど なおこ	1	教育実践	○					

あとがき

『第六期「信大 YOU 遊サタデー」の実践』をフレンドシップ事業報告書の（その3）として発行することができましたのは、信州大学本部の温かいご支援のおかげであり、ここに厚く御礼申し上げます。また、松本キャンパスで開催した第17回「信大 YOU 遊サタデー」は長野県テクノハイランド開発機構の共催とご支援により実現することができました。ここに記して深く感謝申し上げます。

さて、第六期の YOU 遊サタデーを担った4年生は、1年次に松本キャンパスで始まった「教育参加」の第一期生であり、2年次に長野キャンパスで始まった「コンピュータ利用教育」の第一期生です。そして、3年次に4週間の「基礎教育実習」を行い、4年次に2週間の「応用教育実習」を行うという新しい積み上げ方式による教育実習を体験した第一期生でもあります。まさに信州大学教育学部において進められている教育改革の真っ只中を歩んできた人たちといえます。学生の手による本報告書の随所に、フレンドシップ事業の授業科目である「教育参加」の成果や「コンピュータ利用教育」の偉力が発揮されていることに、私たちは大きな喜びを感じています。第7期も学生の皆さんと二人三脚で、大前進していきたい願っています。今後とも皆様からの温かいご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成12年2月13日

編集委員 東原義訓・土井進（附属教育実践総合センター）

【編集後記】

今回の実践記録では、YOU 遊サタデーに携わった多くの学生の声を掲載したいと考え、執行部やキャプテンだけでなくスタッフの学生の声もできるだけ紹介することに務めました。皆様のご協力により無事編集作業を終えることができましたことに、心から感謝申し上げます。

編集委員長 加藤豊司

<編集委員>

◎加藤豊司（理科3）○山田理恵（実践3）○中村祐介（理科3）井上真裕子（理科3）
那須良寛（実践3） 杉山雅幸（野外3） 中澤典子（国語2）小池悠介（国語2）
笹崎典子（数学2） 中谷弥哲（数学2） 両角孝之（数学2）千野加世子（家庭2）
池田朋美（家庭2） 林 一真（家庭2） 東原義訓（教官） 土井 進（教官）

平成11年度

第六期「信大 YOU 遊サタデー」の実践
—体験的学習の指導による実践的力の形成—

平成12年3月14日 発行

発行 信州大学教育学部
附属教育実践総合センター

〒380-8544 長野市西長野6-10

TEL/FAX 026-238-4245

TEL/FAX 026-238-4246

HomePage : <http://cert.shinshu-u.ac.jp/st/you/index.html>

E-Mail : doisusm@gipnc.shinshu-u.ac.jp

higashi@gipnc.shinshu-u.ac.jp



信大YOU遊サタデー Homepage

<http://cert.shinshu-u.ac.jp/st/you/index.html>

是非ご覧ください。